

学位論文

修辞理解のメカニズムに関する基礎的研究
－ 転義現象の分析を中心に －

指導教員 山梨正明 教授

平成 24 年 1 月 20 日

京都大学大学院人間・環境学研究科
修士課程 共生人間学専攻

小松原 哲太

要旨

共生人間学専攻 小松原哲太

本論文の目的は、多様な修辞現象を認知過程の観点から記述し、その相互関係の一部を明らかにすることである。研究方法は、基本的に認知文法のアプローチを採用する。研究対象は修辞学で分類されてきた多様な修辞現象であり、言語データとしては、主に日本文学の古典的テキストから採集した修辞表現を用いた。

本論文の内容は、以下のように要約される。第1章では、研究の問題意識と本論文の構成について述べた。第2章では、これまでの比喩研究の中から数十をとりあげ、比喩の性質を考察した。また、比喩の認知過程をもとに、転義現象の一般的な修辞過程について述べ、修辞作用モデルとして提示した。第3章では、本論文の理論的背景となる認知文法の理論を概説し、スキーマの定義をおこなった。また、修辞現象を適切に規定していくために、修辞作用のスキーマと、カテゴリーの地形モデルを提案した。第4章では、修辞作用モデルにしたがって修辞性を分類した。つづいて、隠喩、直喩、比喩くびき、異義兼用、異義反復、類音語接近、かすり、誇張、緩叙、対比、対義結合、換喩、提喩、転喩、省略、黙説、転換、意味構文、破格くびき、代換、限定語反転、交差呼応、転移修飾という23の修辞をとりあげ、百数十の具体事例とともに、その認知的なスキーマを記述し、相互関係をネットワークのかたちで明示した。第5章では、比喩表現の理解と身体経験的基盤について、いくつかの複合的な修辞現象の具体事例をもとに、考察をおこなった。6章では本論文の結論と、研究の展望について述べた。

前書

以下は、本論文の表記法に関する凡例である。

- 例文中の下線は、修辞理解の焦点をあらわす。
- 実際にテキスト上に含まれる言語表現は鉤括弧であらわす。(例:「顔を出した」) これにたいし、コンテキストとしておぎなわれる意味をあらわす表現は角括弧であらわす。(例: [昇ってきた])
- 本稿で例文として引用したテキストは、原則として旧漢字・旧仮名遣いを改めた他、言語学的分析に大きな影響を与えないと考えられる範囲で改変した箇所がある。また、(…)は引用を省略した箇所をあらわす。
- 本稿でとりあげた修辞学用語は、主に佐藤他 (2006) に依った。修辞の分類名称は、修辞学や言語学で定着しているものをできるだけ採用したが、分類の便宜上、新しい名称を与えた修辞もある。導入箇所では、日本語名に対応する英語名、フランス語名、あるいはラテン語名を付記した。(例: 隠喩 (metaphor)、交差呼応 (chassé croisé[仏]) 限定語反転 (sicilia amissa[羅]))
- 引用における出版年のスラッシュ以下は、初出をあらわす。(例: Aristotle (1992/330BC-abt), Black (1962/1954))

本論文の執筆に際しては、指導教官をはじめ、多くの方々に御世話になった。記して御礼申し上げます。特に、山梨正明教授の御指導によって、本論文の言語分析の基盤が練成された。また、言語フォーラムを中心に山梨研究室の院生・OB諸氏とおこなう議論は、常に研究の刺激となった。最後に、いつも筆者の突発的なアイデアを真剣に聞いてくれる友人たちと、研究生活を支えてくれる家族に感謝したい。

目次

第1章	序論	13
第2章	修辞の認知過程	15
2.1	比喩理論の変遷	15
2.1.1	偏差と比喩	17
2.1.2	転義と比喩	20
2.1.3	相互作用と比喩	23
2.2	転義現象の一般的修辞過程	27
2.2.1	修辞作用モデル	27
2.2.2	修辞過程の分析例	30
第3章	修辞表現の記述理論	33
3.1	修辞理解のスキーマ	33
3.1.1	スキーマと言語理解	34
3.1.2	スキーマの定義	36
3.1.3	スキーマの表記法	39
3.2	修辞分類のカテゴリーモデル	42
3.2.1	ネットワークモデル	43
3.2.2	地形モデル	45
第4章	修辞のネットワーク	49
4.1	修辞性の分類	49
4.1.1	逸脱の修辞性	50
4.1.2	転義の修辞性	51
4.1.3	効果の修辞性	52
4.2	見立ての修辞	57
4.2.1	隠喩	57
4.2.2	直喩	60
4.2.3	比喩くびき	64
4.2.4	比喩性と多義性	65
4.3	言葉遊びの修辞	67
4.3.1	異義兼用	67

4.3.2	異義反復	69
4.3.3	類音語接近	71
4.3.4	かすり	73
4.3.5	音の前景化と言語レベル二重性	75
4.4	程度性の修辞	77
4.4.1	誇張	77
4.4.2	緩叙	82
4.4.3	程度判断の焦点化と図地反転	85
4.5	二極性の修辞	87
4.5.1	対比	87
4.5.2	対義結合	91
4.5.3	創造的矛盾	94
4.6	関係の修辞	97
4.6.1	換喩	98
4.6.2	提喩	101
4.6.3	転喩	103
4.6.4	関係表現と際立ちの多層性	106
4.7	省略の修辞	107
4.7.1	省略	107
4.7.2	黙説	112
4.7.3	欠落の修辞性	114
4.8	文法範疇の修辞	117
4.8.1	転換	117
4.8.2	意味構文	121
4.8.3	破格くびき	123
4.8.4	文法的逸脱と類像性	124
4.9	統語構造の修辞	127
4.9.1	代換	127
4.9.2	限定語反転	130
4.9.3	交差呼応	132
4.9.4	転移修飾	133
4.9.5	統語的配置と視点の転換	135
4.10	修辞の地図	137
第5章	修辞の創発	139
5.1	修辞の形成	139
5.1.1	換喩の形成	140

5.1.2 隠喩の形成	142
5.1.3 修辞の共存	144
5.2 修辞理解と身体性	146
5.2.1 身体的経験と意味の発掘	146
5.2.2 対話の比喩的基盤	148
第6章 結語と展望	151
引用例出典	153
参考文献	155
修辞名索引	160

略語一覽

ABT	about (およそ)	MOD	modification (修飾)
ADJ	adjective (形容詞)	MTNY	metonymy (換喩)
AM	action marker (作用表現)	MTNYC	metonymic (換喩的)
AMB	ambiguous (多義的)	MTPR	metaphor (隱喩)
ANTCLA	antanaclasis (異義反復)	MTPRC	metaphoric (隱喩的)
ANTE	antecedent (前件)	N	noun (名詞)
ANTI	antithesis (對比)	NP	noun phrase (名詞句)
ANTIM	antimeria (品詞轉換)	NEG	negation (否定)
ANTIP	antiptosis (格轉換)	NOM	nominal (名詞的)
ANTO	anonym (對義語)	NP	noun phrase (名詞句)
APEU	à-peu-près[仏] (かすり)	OXYM	oxymoron (對義結合)
APOSIO	aposiopesis (默說)	P	phonological pole (音韻極)
ATLG	attelage (比喻くびき)	PARONM	paronomasia (類音語接近)
C	case (格)	PRED	predicate (動詞的)
CC	chassé croisé[仏] (交差呼応)	PRED-FOCUS	predicate focused (動詞焦點的)
CONSE	consequence (後件)	S	semantic pole (意味極)
CONST	construction (構文)	SA	sicilia amissa[羅] (限定語反轉)
CONTR	contrastive (對照的)	SIM	simile (直喩)
COP	copulative (コピュラの)	SOLE	solecistic (破格的)
COUP	couplet (對句)	SPEC	species (種)
CTG	category (カテゴリー)	SYLP	syllepsis (異義兼用)
DECRP	description (描写)	SYNES	synesis (意味構文)
DM	double meaning (兩義的)	SYNEC	synecdoche (提喩)
ELLIP	ellipsis (省略)	TAUPH	taughtophony (同音反復)
ENLAGE	enallage (轉換)	TE	transferred epithet (轉移修飾)
EXP	explicit (明示的)	TOP	topic (トピック)
FEAT	feature (特徵)	TR	transitive (他動的)
HYPB	hyperbole (誇張)	V	verb (動詞)
HYPL	hypallage (代換)	VP	verb phrase (動詞句)
INT	integrate (複合的)	W	word (語)
LITO	litotes (緩叙)	WP	wordplay (言葉遊び)
MEIO	meiosis (過小誇張)	ZGMA	zeugma (くびき)
METLP	metalepsis (轉喩)		

第1章 序論

本論文の目的は、転義現象を中心とした修辞表現の認知的意味の記述と、修辞カテゴリーの相互関係の明示化である。転義とは広く、意味がずれるということである。日常のコミュニケーションにおいて、意味のずれは大きな障害でもあり、大きな楽しみでもある。いずれにしても、転義の仕組みを知ることは、コミュニケーションの技術に直結する問題となる。

研究背景の第一がコミュニケーション研究とすれば、第二は文法研究である。本研究は、認知文法の立場から、修辞現象の記述をおこなっていく。修辞現象は、言語分析にとって中心的な研究対象のひとつであるといえるが、逸脱的例外としてたいてい周辺に追い込まれている。しかし、文法的逸脱の研究は、文法の研究の裏返しであると思う。ラネカーは、*Foundations of Cognitive Grammar: Volume I Theoretical Prerequisites*の最初のページで、次のように述べている。

修辞表現 (figurative language) は、現在の言語理論の中では等閑視されており、せいぜいアドホックな記述説明がみられる程度である。しかし、言語にこれほど浸透し、基礎となっているものは他にはなく、私に言わせれば、文法構造の領域ですら例外ではない。もし修辞表現を、我々のもつデータベースからまったく削除してしまえば、残るものなどはごくわずかである。したがって、修辞表現を例外として処理するのではなく、ふつうの現象として予測するような文法構造を考え、記述していく方法が必要となる。言語分析のための適切な概念フレームワークは、修辞現象が難問としておかれるものではなく、解明されるべきものの一部として取り込まれるものでなければならない。

(Langacker 1987: 1)

修辞が認知の問題とされてからしばらく経ったが、修辞を体系的に論じたものはみられない。隠喩や換喩を中心に、個々のレトリックが別個に扱われるものが大半で、修辞の体系となると旧修辞学に頼るほかない、というのが現状であろう。本論文では、修辞の体系を視野に入れ、分析をおこなった。十分とはいえないが、できるだけ多くの修辞について、認知的な意味での相互関係を記述した。

本論文の構成は次のとおりである。第2章では、修辞研究の主要な先行研究を概観し、修辞に関する本研究の理論的立場を明かにする。第3章では、本研究の修辞現象の記述の仕方について述べ、いくつか定義をおこなう。第4章では、具体的な修辞表現の認知的意味を記述していくことを通して、修辞理解の認知的メカニズムを図解していく。また、修辞カテゴ

リーのネットワーク的相互関係の記述をおこなう。この章の各節は独立しており、目的に応じて個別に読むことができる。第5章では、いくつかの応用的事項をとりあげる。第6章は、結語と展望である。

第2章 修辞の認知過程

修辞を理解できるというのは、驚くべきことである。言語は社会的なものであって、他人に通用しなくてはならない。したがって、慣習的でなくてはならない。しかし、修辞的表現は慣習から逸脱している。それにも関わらず、人は修辞を理解できる。修辞理解の認知プロセスを研究することは、人間の言語理解能力がどれほど強力であるかを探求する研究である。

修辞研究の中心は、常に転義的比喩 (trope) であった。転義的比喩という語は多義語であり、転義的比喩に含まれる修辞は、二種類程度から数十種類まで、定義によりさまざまである。しかし、この中に必ず入っている修辞があって、それは隠喩と換喩である¹。よって、転義的比喩といえば、隠喩と換喩を中心とするいくつかの修辞を指すと思ってよい。本章では、以下転義的比喩を単に比喩とよぶ。比喩研究はぼう大であって、混沌としている。しかし、少なくとも、次の三つの側面のいずれを焦点とするのかに関して、傾向の偏りがみられる。第一は、比喩は平常の意味と比喩的意味に差があるということ。第二は、比喩は平常の意味から比喩的意味へと、意味が転義するということ。第三は、比喩は平常の意味と比喩的意味が影響しあうこと。2.1節では、この三つの側面に着目して、比喩理論の変遷をみる。

比喩研究は、基本的に転義的比喩だけに限定された理論である。しかし、一部の比喩研究では、一般化に耐える枠組みが提案されている。第一の側面では、グループ μ による偏差の概念が、第二の側面では、ヤーコブソンによる隠喩極と換喩極の概念が、第三の側面では、リチャーズによる相互作用の概念が、それぞれ一般的な修辞理解のモデルへの足がかりとなる。2.2節では、これまでの比喩研究にみられる、修辞理解全般に通用する概念を手がかりとして、広義の転義現象に包括的に適用できるような、一般性をもつ修辞理解の認知モデルとして、修辞作用モデルを提案する。修辞作用モデルでは、第一の側面は、修辞の条件として、第二の側面は、修辞作用として、第三の側面は、修辞的な効果として定式化される。本研究では、修辞表現の記述にあたり、修辞作用モデルから基本的に分析をおこなっていく。

2.1 比喩理論の変遷

比喩の研究は、二千年以上の歴史をもつ。それにともなって、先行研究は多い。本節の目的は、比喩理論の変遷の一部を整理して、本研究がその中でどのように位置づけられるかを明らかにすることである。本研究では、修辞理解のメカニズムを、修辞の認知過程という観

¹隠喩 (metaphor) とは、類似性にもとづく比喩で、たとえば、男と狼だ、というタイプのものである。隠喩については、4.2節を参照。換喩 (metonymy) とは、近接性にもとづく比喩で、たとえば、漱石を読む、というタイプのものである。換喩については、4.6節を参照。

点から分析していく。比喩の認知過程は、少なくとも、表現の逸脱性に気づき、これを修正し、理解に至るというプロセスを経ると考えられる。ここでは、比喩の認知過程の全体のうち、どのような側面を焦点としているかという観点から、これまでの研究の整理を試みた²。

比喩表現の意味は、平常の意味と差がある³。本節では、この二つの意味の差と比喩をめぐって、どのような側面が強調されるかによって、大きく三つを区別する。図 2.1 は、比喩の三つの側面をあらわすイメージ図である。(a) は、比喩理解のイメージである。円は平常の意味を、四角形は比喩的意味を、二つの図形をつなぐ矢印は転義のプロセスを、これらを囲む長方形は比喩理解のプロセス全体をあらわす。比喩理解は、平常の意味を手がかりとして、比喩的意味を見つけるプロセスとしてモデル化することができる。2.1.1 節では、平常の意味と比喩的意味の差を強調する研究について述べる。これは図 2.1(b) に対応する。ここでは形状の差が意味の差に対応する。2.1.2 節では、転義のプロセス、言い換えると、平常の意味から比喩的意味に、意味が移るプロセスを強調する研究について述べる。これは図 2.1(c) に対応する。2.1.3 節では、比喩理解の総体として、どのような認知的あるいは心理的効果が生じるのかに関する側面を強調する研究について述べる。これは図 2.1(d) に対応する。

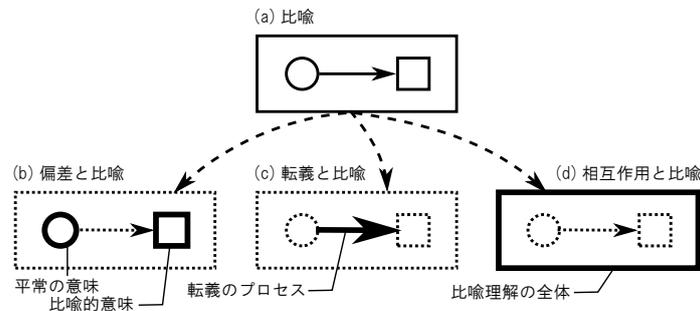


図 2.1: 比喩の諸相

このように、比喩には三つの側面があるとみる観点からは、多くの研究は相対立するものではなく、むしろ比喩の認知過程の異なる側面に光をあてているもののように思われる。したがって、本節の目的は、どの理論がもっとも妥当であるかを決定するものであるというよりは、三つの側面の詳細を明らかにすることである。

本節では、ある理論が、次の例文をどのように分析し得るかという観点から、諸理論の共通点と差異を明かにしていく。例文は隠喩表現であるが、比喩研究で隠喩をとりあげていないものはほとんどないので、当面の目的は達すると考えられる。

(1) 月が温泉の山の^ゆ後^{うしろ}からのつと顔を出した。

²主に歴史的観点からの修辞研究をまとめた、日本語となっている文献にはたとえば、Barthes (1979/1970), 波多野 (1973: 79–158), 原 (1994), 速水 (1995) などがある。

³Gibbs (1994: 80–119) は、修辞表現の意味と平常の意味には、読解速度の点で有意な差がみられないことから、字義通りの表現の理解と比喩表現の理解とは同一のプロセスであるという。これにたいし、Giora (1997, 1999) では、認知的な際立ち (salience) の観点から、慣習的な修辞表現では二つの意味が同時に活性化されるが、慣習的ではない修辞表現では平常の意味がまず活性化されるという。本研究の分析対象は、慣習的な修辞表現よりは、修辞性が高く非慣習的な修辞表現が中心となる。ギオラに従うならば、この点で、比喩的意味と平常の意味の差をみとめることは妥当と考えられる。

(1) では、下線部は擬人的な隠喩表現とみられる。素朴な修辞理解として、「顔を出した」は、ここでは[昇ってきた]の意味であるといえる。言い換えると、文字どおりには、月の顔が出てきたということであるが、比喩理解としては、月が昇ってきたということである。前者を平常の意味、後者を比喩的意味とするならば、比喩理解では、平常の意味と比喩的意味の差が問題となる。

2.1.1 偏差と比喩

平常の意味と比喩的意味の偏差を強調する研究の中でも、本節では、次の二つを主にとりあげる。第一は、アリストテレスに代表される古代ギリシャの比喩研究であり、第二は、構造意味論の流れに位置づけられるグループ μ の一般偏差理論、またこれと関連してグライスの会話の公理をとりあげる。三者の研究をとおして、本研究の偏差にたいする見方を整理し、比喩の認知過程における偏差の重要性について述べる。

古代ギリシャの比喩研究

古代ギリシャは、修辞学の源流である。特に、Plato (1967/390BC-abt,/), Aristotle (1992/330BC-abt, 1997/330BC-abt), Cicero (2000/54BC, 1999/55BC), Quintilianus (2005/95-abt, 2009/95-abt) は、その後の修辞学に大きな影響を残した。中でも、アリストテレスの『詩学』と『弁論術』は修辞理論の創始ともいえる。「(プラトンを除けば) 修辞学全体がアリストテレス的なのではなかろうか。多分、そうだろう。古典的教科書の教授内容はすべてアリストテレスに発している。」(Barthes 1979/1970: 23) バルトの要約によれば、プラトンは修辞学を「愛の対話」とみた点で独特であるが、修辞の理論はアリストテレスに集約される。キケロは、アリストテレスの修辞理論の実践者として、クィンティリアヌスは、アリストテレスの修辞理論の教授者として、位置づけられる (*ibid.*, 19-25)。

では、アリストテレスは、どのように比喩をとらえていたのだろうか。これは、少なくとも次の三点が挙げられる。

- (a-1) 比喩は語の転用である。
- (a-2) 比喩は類似性にもとづく。
- (a-3) 比喩は直喩を含む

[a-1] Aristotle (1997/330BC-abt: 78-83) では、オノマのひとつとして、比喩があげられている。オノマ (onoma) とは、内容語に対応するもので、次の8種類からなる。「(1) 日常語 (2) 稀語 (3) 比喩 (転用語) (4) 修飾語 (5) 新造語 (6) 延長語 (7) 短縮語 (8) 変形語」そして、比喩は次のように定義される。

比喩（転用語）とは、（あることを言いあらわすさい）本来別のことをあらわす語を転用することをいう。すなわち、(a) 類をあらわす語を、その類に属する種に転用すること、(b) 種をあらわす語を、類に転用すること、(c) 種をあらわす語を、別の種に転用すること、(d) 比例関係によって転用すること、のいずれかである。(ibid., 79)

つまり、アリストテレスにとって比喩 (metaphora) とは、語の分類のひとつである。言い換えると、比喩は、語のレベルで定義されるものである。(1) では、動詞「顔を出した」は、本来人の動きをあらわす語であるのにここでは転用されている、と説明されることになる。

[a-2] Aristotle (1992/330BC-abt: 346–352) では、比喩の効用として「両者に共通の特質を通して、われわれに理解と認識を可能にしてくれる」(ibid., 346–347) ことが指摘される。言い換えると、比喩は類似性にもとづく。(1) を用いれば、顔を出すことと昇ることは、ある種の運動の類似性にもとづくものである、ということになる。

[a-3] 直喩は比喩の一種であり、直喩は隠喩より長々と述べられる。両者の違いは基本的に「ただ述べ方が違っているだけである。」(ibid., 347) (1) では、月が顔を出すように昇ってきたといえば直喩になるということになる。

偏差の一般理論

構造主義言語学には、多くの洗練された比喩研究がみられる。たとえば、Jakobson (1981/1956), Ullmann (1957), Barthes (1971/1964, 1979/1970), le groupe μ (1981/1970) などがそれである。ウルマンとバルトの見方は、ヤーコブソンが元である。ヤーコブソンは、隠喩と換喩は言語の基本的な二極対立としてとらえた。この種のアプローチについては、次節で述べる。これにたいし、グループ μ の『一般修辞学』は、修辞表現一般を対象としているという点で、構造主義的な比喩研究の中でも特別な位置を占める。

グループ μ では、比喩を含め、一般の修辞の分析に耐えるような、詳細な理論的道具を提案している。中でも、次の点が少なくとも、特徴として挙げられる。

(a-4) 比喩はゼロ・レベルからの偏差の集合によって定義される。

(a-5) 比喩は語義変換の操作である。

[a-4] ここでアリストテレスをもう一度振り返るならば、比喩は語レベルで定義された転用である。そして、転用ということばには、比喩の意味は、日常語の意味から離れたものであるという含みがある。日常語とは「わたしたちがみな使っている語のことである。」(Aristotle 1997/330BC-abt: 78) この点では、日常用いる用法が、語の意味の標準と仮定されているといえる。これにたいし、グループ μ は、意味の標準は「我々に与えられているような言語の内には含まれていない」(le groupe μ 1981/1970: 53) ものと仮定する。具体的には、弁別特徴と意味素によって、比喩理解に関するゼロ・レベル (=標準) を定義している。修辞は、不可知の標準からの偏差が蓄積し、感知されるにいたったものとみなされる。「要するに修辞とは自己訂正を伴う偏差の集合である。」(ibid., 72) (1) では、顔を出すという動詞の意味のゼロ・

レベルは、「それを削除すると、同時に当の言述がまるで意味をなさなくなるような」(ibid., 53) 本質的な意味素として、たとえば運動に関わる意味素 MOTION が含まれる。また、側面的な意味素としては、身体部分に関わる意味素 BODY-PART などが含まれる。この隠喩は、側面的な意味素に関するゼロ・レベルからの偏差によって定義されることになる。

[a-5] 「語義変換 (métasémème) はある語義を他の語義に入れ換える文彩である。つまりゼロ・レベルの意味素のまとまりに改変をほどこすものである。」(ibid., 50) そして、語義変換は「特にすべての修辞法の中心的文彩である隠喩を含めて、伝統的に「転義的比喩 (trope)」と呼ばれているものにほぼ相当する。」(ibid., 179) (1) では、顔を出すという語は、意味素 MOTION や BODY-PART を含むが、この隠喩では、少なくとも身体部分に関わる BODY-PART が削除され、かわりに天体運動に関わる意味素 CELESTIAL が付加されるような変換がなされる、ということになる。

Ricoeur (1998/1975: 63-146) は、グループ μ にとっては比喩が「語に適用される意味の転用」(ibid., 64) であるという点で、アリストテレスの理論範囲内であるという。「語の意味論の限定された真理は、文または言表の意味論という、もっと広い枠の中に含まれねばならないのである。」(ibid., 65) リクールの見方からすると、本節でとりあげた、比喩的意味と平常の意味の偏差という観点は、比喩の認知過程の一部だけを切り出して焦点化したものといえる。しかし、偏差という観点は、比喩の認知過程にとって本質的な一側面であるということも可能である。グループ μ は、この偏差という概念を、比喩だけでなく、修辞表現一般に適用可能な概念として詳細に定義した。この意味で、グループ μ の立場を、「偏差の一般理論」(ibid., 98) とよぶこともできよう。

グループ μ は、意味論のゼロ・レベル、つまり語の意味の標準を仮定した⁴。これにたいし、Grice (1975), 安井 (1978) などの、語用論的な標準を仮定する一連の研究がある。グライスは、この語用論的標準を会話の公理 (conversational maxims) とよんだ。グライスの比喩に対する立場は、少なくとも次のような特徴をもつ。

(a-6) 比喩は会話の公理からの偏差である。

[a-6] グライスは、日常の会話において、話し手が「特別な事情がないかぎり遵守するものと期待される大まかな一般原理を定式化することができるだろう」という (Grice 1975: 45)。この一般原理との関連で提案されるのが会話の公理である。比喩の理解には、質の公理が関係する。質の公理は次の二点である。「(1) 偽だと思ふことを言うてはならない。(2) 十分な証拠のないことを言うてはならない。」(ibid., 46) 比喩表現は、一見すると、この質の公理を破るように思われる。言い換えるならば、会話の標準から偏差があるように思われる。しかし、やはり話し手は質の公理にしたがっているとすれば、比喩的意味で解釈せざるを得ないということになる。(1) では、月が身体部分として顔を持っていないことは自明である。しかし、これが理解可能な意味をもつとすれば、「類似性をなすような何らかの特徴を帰属さ

⁴意味論的標準を設けて、隠喩は標準からの逸脱であるとする見方には、Chomsky (1965: 149) が含まれるといえる。チョムスキーはこの種の逸脱を、選択制限の違反といった。

せようとしている」(ibid., 53)と考えられ、その含意として比喩的意味を得る、ということになる。

アリストテレスとグループ μ 、グライスに共通することは、平常の意味を規定する際に、何らかの標準を設けており、比喩表現の理解においては、この標準からの偏差が認知されるとする点である。偏差の認知は、比喩の認知過程の第一段階としての役割を担うと考えられる。グループ μ は、偏差の概念を、修辞現象一般に適用すべきものとして定義していた。このことは、次のことを示唆する。

(A) 修辞理解の認知過程は、偏差の認知によって始動される。

修辞の認知過程のもつ性質(A)は、次節で、修辞の条件として定式化される。

2.1.2 転義と比喩

本節では、平常の意味から比喩的意味の転義関係、すなわち意味が移るという側面を強調する研究について述べる。その中でも、次の二つの研究を主にとりあげる。第一は、ヤーコブソンの隠喩と換喩の二極理論である。第二は、認知言語学の諸研究のうち、もっとも代表的な研究のひとつである、レイコフの概念メタファー理論である。

二極理論

Jakobson (1981/1956) の隠喩と換喩の二極対立は、精神分析をはじめとした関連分野に大きなインパクトを与えた⁵。ここでは、ヤーコブソンの理論をみたのち、これを洗練したかたちで提示した Barthes (1971/1964) について述べる。

ヤーコブソンは、比喩に隠喩と換喩の基本的対立をみとめ、次の点を指摘する。

(b-1) 隠喩と換喩は、言語使用の様式の二極である。

(b-2) 隠喩は類似性にもとづき、換喩は近接性にもとづく。

[b-1] 言語使用は、言語単位を選択し、結合していくことによって成り立つ。「選択(selection)はコードにおいて連合するが、メッセージにおいては連合しないものを扱い、結合(combination)は両方で連合するか、あるいはメッセージにおいてのみ連合するものを扱う。」(Jakobson 1981/1956: 61)。選択と結合は、ソシユールのいう連合(association)と連辞(syntagm)に由来する(ibid., 60)。連合はコード上の潜在的な項関係であり、連辞はメッセージ上の顕在的な項関係である。潜在的な連合関係は、「類義語と対義語のあいだで揺れ動くさまざまな程度の類似性(similarity)によってむすばれて」(ibid., 61)おり、顕在的な連辞関係は、一方で、「コンテキストの構成要素として近接性(contiguity)をもつ。」(ibid.) ヤーコブソンは、この類似性

⁵たとえば精神分析への応用はLacan (1977/1957)がよく知られている。また、和歌を中心とした日本の修辞研究への応用では、ニヶ崎(1988: 152-176)、山中(1998: 155-182)などがあり、Barthes (1972/1967)では衣服の記号学への応用がみられる。

と近接性の対を媒介として、連合／連辞という言語の二側面を、隠喩／換喩という二極にむすびつける。言語使用の様式には、類似性によるものと、近接性によるものがあり、前者を隠喩的方法 (metaphoric way)、後者を換喩的方法 (metonymic way) とよぶ。この理由は、「これらの方法のそれぞれ最も凝縮した表現は、隠喩と換喩にみられるからである。」(ibid., 76) (1) では、昇っていくという動詞と顔を出すという慣用表現の類似性にもとづいて、顔を出すという表現を選択したということになる。

[b-2] 隠喩的方法の極は隠喩であり、換喩的方法の極は換喩である。言い換えるならば、類似性にもとづく言語使用の極が隠喩であり、近接性にもとづく言語使用の極が換喩である。

表 2.1: Jakobson (1981/1956: 76-77) を要約した表

	(M _s) 意味の類似性	(M _c) 意味の近接性
(P _s) 選択	小屋 <i>hut</i> , 小屋 <i>cabin</i> , 宮殿 <i>palace</i> , ほら穴 <i>den</i>	寝わら <i>litter</i> , 貧乏 <i>poverty</i>
(P _c) 結合	粗末な小さい家だ <i>is poor little house</i>	燃えちゃった <i>burnt out</i>

表 2.1 は、隠喩的方法と換喩的方法の全体における、隠喩と換喩の位置付けをあらわすものである。各セルに書かれた語は、「子供がある名詞を聞いたとき、最初に頭に思い浮かんだことばをいう」(ibid.) という心理テストの結果である。ここでは、刺激語として小屋 (*hut*) という名詞が与えられている。この結果は、表のように整理することができる。P_s 行は、与えられた語を代置する反応であり、選択 (連合) 関係にある。P_c 行は、与えられた語を補って文を作る反応であり、結合 (連辞) 関係にある。M_s 列は意味の類似性にもとづく方法を、M_c 列は意味の近接性にもとづく方法をあらわす。隠喩的方法は、選択によるもの (P_s 行) と結合によるもの (P_c 行) がある。選択による隠喩的方法 (M_s-P_s) では、小屋 *hut* に対して、それぞれ同語 *hut*、類義語 *cabin*、対義語 *palace*、隠喩 *den* の関係にあるものが選択される⁶。つまり、先に定義した意味での、類似性をもつものが選択されている。これにたいし、結合による隠喩的方法 (M_s-P_c) では、意味的に考えれば類似性の関係にあり、いずれか一方が選択されるはずである小屋 *hut* と粗末な小さい家 *poor little house* が、結合されている。この点で、語の意味からは一見類似性をもつ二語が、連辞に顕在化されて、近接性をもっている点で「二重の連関がある。」(ibid., 77) 換喩的方法に関しても同様に、選択によるものと結合によるものがある。結合による換喩的方法 (M_c-P_c) では、純粋にコンテクスト的であり、慣習的に近接性をもつ動詞句 *burnt out* が結合されている。これにたいし、選択による換喩的方法では、意味的に考えれば「小屋の寝わら」のように近接性の関係にあるはずの寝わら *litter* や貧乏 *poverty* が、統語的な資格の同等性から、選択関係におかれるとみられる。この種の反応は「換喩的である。」(ibid.) (1) では、昇っていくという動詞と顔を出すという慣用表現とは (M_s-P_s) の関係にあるといえる。

表 2.1 において、(M_s-P_c) では、本来選択関係にあるものが結合され、(M_c-P_s) では、本来

⁶*hut* と *den* は、隠喩の関係であると説明されている。

結合されるべきものが選択関係におかれる。前者は隠喩の典型であり、後者は換喩の典型である⁷。

バルトは、ヤーコブソンの理論から、次のように隠喩と換喩を特徴づけている。

(b-3) 隠喩は本来連合関係をもつものの連辞化であり、換喩は本来連辞関係をもつものの連合化である。

[b-3] バルトは、連辞と連合（結合と選択）はことばの二つの面であるが、「ひとつの面が他の面にはみ出してしまう」Barthes (1971/1964: 191) 場合、すなわち「連辞と連合の通常の配分からの逸脱がある」(ibid., 192) 場合があるという。言葉遊びや押韻などの創造的現象はこの逸脱のまわりであり、隠喩と換喩はその代表としてとりあげられる。

修辞学全体がこれらの創造的逸脱の領域であろう。前にふれたヤーコブソンの区別で言えば、隠喩の系列はすべて連辞化された連合関係であり、換喩はすべて、凝結した連合に吸収された連辞であることが理解されよう。隠喩では選択が近接となり、換喩では近接が選択の場となる。かくして、創造の舞台となるのはつねにこの二つの面の境界だと思われるのである。(ibid., 193-194; 一部用語法を修正)

認知言語学の比喩研究

認知言語学では、比喩研究は主要な研究対象のひとつとなっており、Lakoff and Johnson (1980) を皮切りとして、Lakoff and Turner (1989), Lakoff (1993), Langacker (1993), Kövecses and Radden (1998), Kövecses (2000) のほか、国内でも山梨 (1982, 1992, 2004, 2007), 瀬戸 (1997), 鍋島 (2002), 森 (2002b) など、非常に多くの研究がみられる。その中でも、隠喩と換喩を対照的にとりあげる研究としては、Lakoff (1987), Taylor (1989), 山梨 (1988, 1995), 谷口 (2003) などがある。近年では、Barcelona (2000), Radden (2000) など、隠喩と換喩の相互関係に関する研究も盛んにおこなわれている。

このように、ヤーコブソンが隠喩と換喩を特権化し、浮き彫りにしたというとするならば、認知言語学では、隠喩と換喩が具体的な言語事例とともに分析され、深められたといえる。ここでは、認知言語学の比喩研究を代表するひとりであるレイコフの概念メタファー理論について述べる。

レイコフの比喩理論には、少なくとも次の特徴がみられる。

(b-4) 隠喩は概念領域間の写像である。

(b-5) 比喩は身体的経験的な基盤をもつ。

[b-4] レイコフによれば、比喩表現は、単に言語表現上の問題ではない。なぜならば「もし比喩が単なる言語表現なのであれば、異なる言語表現は異なる比喩だと思うはずである」

⁷ *den* が *hut* の隠喩となる典型例は、*the hut is den* のようにコンピュータで結合された場合である。男は狼だ、という使い古された例文からも分かる。

(Lakoff 1993: 209) が、実際には、「君の主張は守りようがない」という比喩と「彼は私の議論の弱点をことごとく攻撃した」という比喩には、共通する概念領域の構造的関係がみられる。この点で、レイコフは、隠喩は概念領域 (conceptual domain) のあいだの写像 (mapping) であるという。「この写像は慣習化されている、言い換えると、概念体系の一部として固定されている。」(ibid., 208) そして、この概念構造の写像関係が存在することによって「新奇で想像的な比喩表現でも、すぐに理解することができる」(ibid., 210) という。(1) では、自然物は人であるという概念領域間の写像関係によって隠喩が理解されるということになる。

[b-5] 隠喩の理解で重要となるのは、具体的な概念領域と抽象的な概念領域との写像関係である。具体的な概念領域の構造が、抽象的なそれへと写像されることで、抽象概念を理解できるようになる。しかし、理解のもととなる具体的な概念領域は、直接理解されている必要があり、それを可能にするのは身体的経験である。「写像は恣意的ではなく、身体的あるいは日常経験的基盤をもつ。」(ibid., 245) (1) では、顔を出すという比喩表現の理解は、身体動作に関わる経験的基盤を有するもの、ということになる。

ヤーコブソンでは、比喩の基盤となるものは言語の体系と逸脱である。類似性と近接性の概念は、言語的に規定されている。これにたいし、レイコフは、比喩の基盤となる類似性や近接性は身体的経験にもとづくといった。これによって、単に心理学的反応として捉えられた隠喩的方法と換喩的方法は、思考や推論にかかわる認知プロセスとしてとらえられることになる。ヤーコブソンとレイコフに共通するのは、隠喩と換喩を、単なる語彙レベルの問題としてではなく、言語の構造や人間の認知プロセスに関わるものとして規定する点である。これによって、転義のプロセスが、比喩の認知過程において、重要な役割を担うことが強調される。

バルトに特にはっきりとあらわれているように、隠喩と換喩は、連合と連辞にむすびつくことにより、修辞現象の根幹をなすものと考えられる。このことから、次の点が示唆される。

(B) 修辞現象における転義のプロセスは、隠喩的転義と換喩的転義の複合的認知構造からなる。

修辞の認知過程のもつ性質 (B) は、次節で、修辞作用として定式化される。

2.1.3 相互作用と比喩

本節では、平常の意味と比喩的意味の相互作用によって、どのような効果を生じるのかを強調する研究の中でも、主に次の二つをとりあげる。第一は、リチャーズ、ブラックを中心とした、相互作用理論とよばれるものである。第二は、日本の比喩研究であり、中でも特に佐藤信夫の比喩研究について述べる。

相互作用理論

いわば古典的な修辞学に終止符を打ち、その後の比喩研究の流れを大きく変えるのは、Richards (1936) にはじまり、Black (1962/1954), Beardsley (1958) とつづく相互作用理論である。ここから Ricoeur (1998/1975), Levin (1979) などの解釈学的研究が出る。

リチャーズは、この後につづく比喩理論の方向を決定づけるものといえる。その特色として、少なくとも次の点が挙げられる。

(c-1) 比喩の意味は、媒体と趣意の相互作用によって定まる。

[c-1] リチャーズは、比喩表現の文字通りの意味を媒体 (vehicle)、比喩的意味を趣意 (tenor) とよんだ。そして、「媒体と趣意が相互作用 (interaction) することなしには生じえないような意味」(Richards 1936: 100) が比喩表現の意味であるという。この点からは、比喩は媒体あるいは趣意の一方を指すのではなく、媒体と趣意の相互作用によって規定される一つの全体である。(1) では、「顔を出した」が媒体、[昇ってきた] が趣意となる。比喩表現の意味は、単に[昇ってきた]ということではなく、媒体のもつ人間の動作という意味と、趣意の月の運動という意味が、相互に影響しあうことによって理解されるものということになる。

ブラックは、リチャーズの相互作用理論を発展的に継承する。ブラックの比喩理論の特徴は、少なくとも次の点が挙げられる。

(c-2) 比喩表現の焦点は、フレームによって意味の拡張を強いられる。

(c-3) 比喩の趣意は、媒体から連想された通念の体系を通して理解される。

[c-2] ブラックは、比喩的意味を担う語を焦点 (focus)、それ以外の語をフレーム (frame) とよんだ。比喩表現となる文全体をとりあげたとしても「我々の注意はすぐに唯一つの語に絞り込まれ」(Black 1962/1954: 27)、これが比喩表現の焦点となる。(1) では、文全体のうち「顔を出した」が焦点となり、残りの部分はフレームとなる。フレームをコンテキストとして与えられた時、「その新しいコンテキストは焦点となる語に意味の拡張 (extension of meaning) を強いる。」(ibid., 39) そして「比喩が作用するためには、読者は意味の拡張を意識し、新旧二つの意味をともに意識していなくてはならない。」(ibid.) (1) では、「月」を含むフレームに焦点「顔を出した」が位置づけられることで、平常の意味となる顔をある領域から外へ出す、という意味から、あるものの背後の領域から昇る、という意味への拡張が要求されるということになる。こうして、比喩的意味が理解されるときには、「顔を出した」と[昇ってきた]の意味はともに注意が向けられる。

[c-3] ブラックは、語の相互作用よりも、語から想起される体系の相互作用という側面を強調する。ブラックは「比喩をフィルターとして考える」(ibid.) ことで、この側面を説明する。

あるライン部分だけが透明な、濃い曇りガラス越しに夜空を見るとしよう。すると、私が見ることのできる星々は、スクリーンのライン部分に位置づけられるものだけとなるだろう。そして、私が見る星々は、あたかもスクリーンの構造によって組

織された (organized) ものであるかのように見えるだろう。我々は比喩を、このようなスクリーンとライン部分とみることができる。このとき、焦点となる語から連想された通念 (associated commonplaces) の体系が、このスクリーン上のライン部分となると考えられる。我々は、趣意 (principal subject) は比喩表現を「通して見られる (seen through)」ということができる。(ibid., 41)

媒体から連想されるフィルターを通して趣意が見られることにより、「他の媒体によっては決して見えなかったと思われる側面を見せる」(ibid., 42) ののである。(1) では、「顔を出した」という語句から連想される通念の体系、つまり、人間や動物の動きに関する体系が連想され、これをとおして、月の運動の構造が組織されるということになる。

日本の比喩研究

日本では、比喩を中心とした修辞の概念が西洋から輸入されたのは、明治期である⁸。西洋的修辞学の研究には菊池 (1879), 高田 (1889), 五十嵐 (1909) などがあり、坪内 (1927/1893), 島村 (1902), 夏目 (2007/1905) などで、美学あるいは文学と合流する。しかし、大正以降では、修辞研究は衰退し、この後数十年は基本的に大きな動きはみられない。佐藤信夫の一連の研究 (佐藤 1978, 1981, 1986, 1987, 1996, 佐藤他 2006) は、この流れを変えるものとして位置づけることができる。

佐藤信夫の比喩研究の特色は、少なくとも次の点が挙げられる。

(c-4) 比喩は発見的認識の表出である。

[c-4] 比喩表現はことばのあやであるとする一般的な見方にたいし、佐藤は、比喩は言語主体の認識の問題であるとする。比喩は「もともと比較されるような類似性が期待されていないところに予想外の類似性を見い出す認識である。」佐藤 (1978: 77) そして、佐藤は「かくれている類似性、埋もれている類似性を発掘する」(ibid., 110-111) はたらきを発見的認識とよぶ。(1) では、月が昇ってきたというのは平常の見方であるが、この月の運動に人間の動きとの類似性を発見的に認識し、これを表出したものが「顔を出した」という比喩表現である、ということになる。

比喩の意味は趣意ではなく、媒体と趣意の相互作用であるとしたリチャーズの指摘にたいし、ブラックと佐藤は、その相互作用の内実の一端を明かにするものとして位置づけることができる。ブラックは主に解釈の観点から、媒体の連想体系が比喩理解に影響するといった。佐藤は主に表現の観点から、類似性の発見的認識が媒体の選択に影響するといった。ブラックと佐藤に共通するのは、比喩表現の媒体は単なる修辞の標識ではなく、比喩の意味の一部を組織するという点である。この指摘は、レイコフの主張とも整合する。

特に佐藤信夫は、ことばのあや全体で、この種の認識的側面がみられるということを目指

⁸ 西洋的修辞学にたいし、和歌の研究を中心とした日本の修辞学は長い伝統をもつものである。西洋的修辞学の中心が比喩であるのにたいし、日本の修辞学の中心は掛詞と縁語であるといえる。佐藤を中心とする西洋的修辞学研究にたいし、近年の日本の修辞学研究としては、外山 (1968/1961), 尼ヶ崎 (1988) などが代表的である。

する。このことから、次の点が示唆される。

(C) 媒体と趣意の相互作用により、修辞理解の過程は特有の認知的効果を生じる。

修辞の認知過程のもつ性質 (C) は、次節で、修辞的な効果として定式化される。

2.2 転義現象の一般的修辞過程

修辞理解の認知過程は、多様である。しかし、逸脱にきづき、意味解釈を柔軟にずらしていくことによって、修辞表現を理解するプロセスは、多くの修辞に共通する。本節では、転義的比喩を中心として、一般の修辞過程のメカニズムを、モデル化する。2.2.1節では、本研究の修辞分析のモデルとなる、修辞作用モデルを提示する。2.2.1節では、修辞作用モデルにもとづいた、いくつかの修辞の分析例を示す。

2.2.1 修辞作用モデル

本節では、本研究の修辞分析のモデルとなる、修辞作用モデルについて述べる。前節では、これまでの比喩研究の一部から、修辞理解の認知プロセスに関して次のような示唆が得られた。

- (A) 修辞理解の認知過程は、偏差の認知によって始動される。
- (B) 修辞現象における転義のプロセスは、隠喩的転義と換喩的転義の複合的認知構造からなる。
- (C) 媒体と趣意の相互作用により、修辞理解の過程は特有の認知的効果を生じる。

言い換えると、転義現象の修辞理解は、偏差の認知、文字通りの意味から修辞的意味への転義、転義から生じる認知的効果という、三つの側面をもつといえる。これを反映して、本研究では、転義現象の一般的修辞過程のモデルとして、**修辞作用モデル**を提案する。修辞作用モデルは、次の三つの側面からなる。

- (I) 修辞の条件
- (II) 修辞作用
- (III) 修辞的な効果

(I) **修辞の条件** (rhetorical conditions) とは、平常の文法からの偏差を認知することである。これによって、修辞理解の焦点が定まる。修辞理解の焦点を修辞的焦点とよぶ。

(II) **修辞作用** (rhetorical action) とは、文字通りの意味から修辞的な意味への転義の認知プロセスである。修辞作用は、潜在化にかかわる隠喩的作用と、顕在化にかかわる換喩的作用からなる。

(III) **修辞的な効果** (rhetorical effects) とは、転義のプロセスによって生じる認知的効果である。修辞的な効果は、転義の媒体と趣意とが相互作用することによって生じる。

以下で三側面のそれぞれについて詳細を説明していく。その際、前節と同様次の例を用いる。

- (2) 月が温泉の山の^ゆ後^{うしろ}からのと顔を出した。

(夏目漱石「坊っちゃん」: 137)

修辞の条件

修辞の条件は、言語表現が、文字通りではなく修辞的であることに気づくことである。言い換えると、平常の文法から何らかの逸脱性を認めることである。修辞の条件は、少なくとも次の特徴をもつ。

(I-1) 修辞の条件は、音韻論的逸脱、統語論的逸脱、意味論的逸脱の三種類が区別される。

(I-2) 修辞の条件によって、修辞的焦点が定まる。

[I-1] 修辞表現は、何らかの点で平常の文法から逸脱している。ここでいう文法は、音韻論、統語論、意味論を包含する広義の文法である。たとえば(6)では、顔を出すという動詞句は、平常の意味論では動物や人間を主語にとる。この点からは、この表現では意味論的な逸脱が認知され、これが修辞の条件となって、修辞過程が始動される。修辞の条件は平常の文法からの偏差であり、逆に言えば、これまでの文法研究の成果がすべて逸脱の基準となる。音韻論では、たとえば音素連続に関する制約となるトルンカの法則 (Trnka's law)(Trnka 1982/1936)、意味論では、語の結合に関する制約となる選択制限 (selection rules)(Chomsky 1965: 149) などがある。統語論では、動詞項構造や修飾構造、格等の形態論的構造をはじめ、多くの研究成果がそのまま制約となる。しかし、解釈主体がこれらの文法的制約をすべて明確に認識しているということではない。文法的標準は、修辞の条件の帰結として得られるものである。言い換えると、解釈主体は文法からの逸脱を認知することで、自分が何らかの文法的標準を仮定していることを知るのである。この点からは、文法は、言語主体の自由な表現を制約するものという側面よりも、言語主体にとって違和感が少ないという認知的事実によって規定されるという側面が強調される。つまり、修辞過程の観点からは、文法は、実際の言語使用者の認知プロセスの実態から帰納的に規定されるものとなる。

[I-2] 修辞的焦点 (rhetorical focus) とは、修辞理解において、逸脱性の点で際立つ表現をいう。言い換えると、修辞的焦点は、平常の文法に関して何らかの点で逸脱的といえる表現である。(6)では、意味論的な逸脱性を修辞の条件として、「顔を出した」が修辞的焦点となる。修辞的焦点がひとたび定まると、残りの部分は相対的に背景化され、修辞理解のコンテキストとなる。この点からは、修辞的焦点の決定は、修辞的焦点を図として、残りの部分を地とする、図地分化の能力にもとづくといえる。

修辞作用

修辞作用とは、媒体から趣意への転義の認知プロセスである。ここでは転義という用語は、意味論的な内容の変化だけに限定された狭義の用法よりも、広い意味で用いる。修辞作用はすくなくとも、次のような特徴をもつ。

(II-1) 修辞作用は、媒体から趣意への広義の転義の認知プロセスである。

(II-2) 修辞作用は、隠喩的作用と換喩的作用からなる。

[II-1] 修辞作用の始点を**媒体** (vehicle) とよび、修辞作用の終点を**趣意** (tenor) とよぶ。また、媒体によって喚起されるコンテキストを**媒体のドメイン** (domain of vehicle) とよび、趣意によって喚起されるコンテキストを**趣意のドメイン** (domain of tenor) とよぶ。たとえば(6)では、「顔を出した」が修辞作用の媒体であり、[昇ってきた]が趣意となる。また、月が人間のよう顔を出す擬人的なコンテキストが媒体のドメインとなり、月が時間と共に昇ってくるコンテキストが趣意のドメインとなる。修辞的焦点は修辞作用の媒体を含む。多くの場合、修辞的焦点がそのまま媒体となるが、修辞的焦点の一部が媒体となる場合もある。(6)では、修辞的焦点がそのまま媒体となっている。修辞作用によって、修辞の条件が解消され、修辞表現を理解することが可能となる。(6)では、月が「顔を出した」といえば意味カテゴリーの点で逸脱的であるが、月が[昇ってきた]という趣意へと転義すると、その逸脱性は解消される。

[II-2] 修辞作用は、**連合関係** (associative relation) にかかわるプロセスであるか、**連辞関係** (syntagmatic relation) にかかわるプロセスであるかによって、二つが区別される。**隠喩的作用** (metaphoric action) は、連合関係にかかわるプロセスである。隠喩的作用には、次の二つが区別される。第一は、連辞関係にある二項を連合関係として対比的に認知するプロセス。第二は、ある項がそれと連合関係にある他の項と代置されるプロセスである。第一の例は、たとえば、男は狼だ、というタイプのものであり、コンピュータによって連辞関係をもつ「男」と「狼」とは、乱暴さという類似性を介して、隠喩的な連合関係として理解される。第二の例は、たとえば(6)であり、運動の類似性を介して連合関係にある「顔を出した」と[昇ってきた]が代置され、結果として「顔を出した」と[昇ってきた]とは顕在的な項と潜在的な項の地位関係が交替する。二つの型に共通するのは、言語化され顕在的な項を、連合関係として潜在化するという点である。**換喩的作用** (metonymic action) は、連辞関係にかかわるプロセスである。換喩的作用には、次の二つが区別される。第一は、連合関係にある二項を連辞関係として結合するプロセス。第二は、ある項を手がかりとして潜在的に連辞関係にある項がコンテキストとして顕在化されるプロセスである。第一の例は、たとえば、漱石を読む、というタイプのものである。「漱石」とその作品とは、近接関係と介して連合関係にあるが、[漱石の作品]というように、連辞関係として理解される。第二の例は、たとえば、掛けてください、というタイプのもので、たとえば椅子の前にいるという状況を想定すれば、[椅子にかけてください]というように、潜在的に連辞関係をもつ[椅子]が、コンテキストとして顕在化されて理解される。二つの型に共通するのは、言語化されていない潜在的な項を、連辞関係として顕在化するという点である。

修辞的な効果

修辞的な効果は、修辞作用の媒体と趣意との相互作用によって生じる認知的効果である。修辞的な効果は、それぞれの修辞によって、あるいは個々の修辞表現によって、非常に多彩である。この効果こそが、修辞の本来の目的となる部分であるといえる。しかし、逆にいえば、一般化は難しいといえる。しかし、それぞれの修辞で、修辞的效果の独特の傾向が見られたた

め、これを4.1.3節でまとめた。個別の修辭的な効果については、4章の具体事例の分析で詳述する。

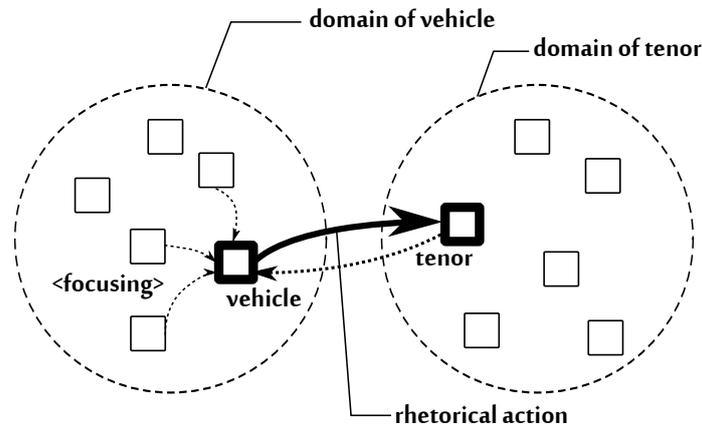


図 2.2: 修辭作用

図 2.2 は、修辭作用のイメージ図である。左の破線円は媒体のドメインをあらわし、右の破線円は趣意のドメインをあらわす。四角形は概念化される要素である。媒体のドメインにおける破線の矢印は、修辭的焦点の焦点化をあらわし、実線の楕円は修辭的焦点となる表現をあらわす。修辭的焦点の中で、修辭作用の媒体が選択され、修辭的焦点とならなかった残りの部分をコンテキストとして、媒体から趣意へと修辭作用がはたらく。修辭作用は一方向的ではなく、相互作用性であることが、趣意から媒体への点線の矢印であらわされている。また、この相互作用性により、媒体と趣意のドメインで修辭的な効果が生じる。

2.2.2 修辭過程の分析例

以下で、いくつかの修辭について、修辭過程の例を述べる。

隠喩の修辭過程

まずはじめに、(6)と同じく、擬人的な隠喩 (metaphor) を用いて、前節の内容を整理してみよう。

- (3) 秋風に吹き起されると、落葉どもは一斉に立ち上って走り出し、ひとところに集まったと思ううちに、旋風につれて舞い上った。

(川端康成「落葉」: 267)

(3) の修辭過程は、次の三側面をもつ。(I) 修辭の条件は、「落葉ども」が主語となるコンテキストでは、下線部「立ち上って走り出し」は意味論的に逸脱的であることを認知することである。下線部が修辭的焦点となり、残りの部分は修辭理解のコンテキストとなる。言い換えると、下線部が媒体のドメインを喚起し、残りの部分が趣意のドメインを喚起する。(II) 修辭作

用は、「立ち上がって走り出し」が、これと類似性を介して連合関係にある[吹き飛び]と代置される隠喩的作用のプロセスである。(III) 修辭的な効果として、人の動きのイメージが、落葉の動きのイメージに重ねあわせられ、その動きの類似性が焦点化され、人が立ち上がって走るイメージが、落葉の運動に具体性を与えている。隠喩の詳細な分析は、4.2.1節を参照。

換喩の修辭過程

換喩 (metonymy) は、あるものを、それに関係する他のものであらわす、修辭である。

(4) 君釣りに行きませんかと 赤シャツ がおれに聞いた。

(夏目漱石「坊っちゃん」: 46)

(4) の修辭過程は、修辭作用モデルの観点からは、次のように分析される。(I) 「聞いた」という動詞の主語は、典型的には人となり、下線部「赤シャツ」は文字どおりには衣服なので、意味論的な不整合性がある。これを修辭の条件として、下線部が修辭的焦点となる。(II) 修辭的焦点となった「赤シャツ」は、換喩的作用の媒体となり、男の意味へ転義する。このプロセスは、近接性を介して連合関係にある「赤シャツ」と[男]を、[赤シャツの男]のように連辭関係として顕在化させるプロセスである。換喩的作用により、修辭の条件となっていた意味的不整合性が解消される。(III) 換喩表現は、ものごとの一部分だけが際立つ。「おれ」に聞いた男は、単なる男ではなく、赤シャツを着た男である、ということが強調される。換喩の詳細な分析については、4.6.1節を参照。

類音語接近の修辭過程

類音語接近 (paronomasia) は、音韻的には類似する語を接近して用いることで、意味の落差が生じる修辭である。

(5) かっぱかっぱらった
かっぱらっぱかっぱらった
とってちってた

(谷川俊太郎「かっぱ」: 36)

(5) の修辭過程は、次のように分析される。(I) 下線部「かっぱかっぱらった」というのは、かっぱが盗んだ、という文字通りの意味の他に、「かっぱ」という音の類似がある。「かっぱ」という音が、ここまで接近して用いられるというのは、音韻形式の慣習的な標準から逸脱するものである。この音意的な類似性の認知を修辭の条件として、下線部の二語が修辭的焦点となる。(II) 「かっぱ」と「かっぱらった」とは主語と述語として、連辭関係にある。ここでは、音韻的な類似性を介して、二語を一時的な連合関係におく隠喩的作用のプロセスがはたらく。(III) 類音語接近の理解では、一方で、類音性が認知され、他方では、平常の意味が認知

される。このように、類音語接近には、修辭的な効果のひとつとして、音素・モーラレベルと語レベルのように、異なる言語レベルにおける二重性がある。類音語接近については、4.3.3節を参照。

転移修飾の修辭過程

転移修飾 (transferred epithet) は、形容詞が本来修飾すべき語をはなれ、別の語を修飾する修辭である。

- (6) 和服に外套の駅長は寒い立話を切り上げたいらしく、もう後姿を見せながら
「それじゃまあ大事にいらっしやい。」

(川端康成「雪国」：60)

(6) の修辭過程は、次のように分析される。(I) 「寒い」という形容詞は感覚をあらわすものであり、平常は「駅長」を修飾すべきものとみられる。「寒い」は統語的には「立話」を修飾しているとみられることから、統語位置に関して逸脱的である。これを修辭の条件として、下線部の名詞句が修辭的焦点となる。(II) 「寒い」という形容詞は換喩的作用の媒体となり、潜在的な修飾関係をもつ「駅長」を趣意としてコンテキスト上に顕在化させるプロセスがはたらく。(III) 意味的な被修飾語は「駅長」となるにもかかわらず、統語的には「立話」が名詞句の主要部として際立ちを得ている。このことから、ここでは「立話」という行為が前景化され、「駅長」という行為主体が相対的に背景化されているものとみられる。この点からは、修辭的な効果のひとつとして、叙述の視点切り替えがおこなわれるとみられる。転移修飾については、4.9.4節を参照。

以上のいくつかの例のよって、修辭作用モデルによって、さまざまな修辭現象の認知プロセスが統一の見地から分析されることが分かる。本研究では、修辭作用モデルを用いて、転義現象を中心とした修辭現象を分析していく。具体的な修辭の分析は第4章を参照。

第3章 修辞表現の記述理論

修辞の研究は、詩的な印象で語られる傾向がある。修辞理解で、もっとも際立つのは、修辞的な効果である。しかし、なぜそのような修辞的效果が生じたのかについては、言語学的内省が必要である。前章では、本研究の修辞分析の理論的背景について述べた。これにたいし、本章では、修辞現象の記述理論について述べる。本研究では、修辞理解の認知過程の観点から、修辞表現の分析をおこなう。以下では、認知文法の理論を基礎とした、本研究における修辞現象の記述方法について述べる。

本研究の目的は次の二点にまとめられる。第一は、具体的な修辞現象にもとづいて修辞の認知過程を明らかにすること、第二は、修辞のカテゴリーを認知的観点からとらえなおすことである。研究方法は、次のような手順となる。

- (i) 個々の修辞表現の認知プロセスを分析する。
- (ii) 個々の修辞表現に共通する認知プロセスを、スキーマとして記述する。
- (ii) スキーマの相互関係を分析し、ネットワークとして記述する。

(i) これまでの修辞研究でなされてきた分類にもとづき、具体的な修辞表現を分析していく。
(ii) 個々の修辞表現に共通する認知プロセスの構造を分析し、ある修辞が認知的にどのように特徴づけられるかを、修辞のスキーマのかたちで明示していく。(iii) スキーマの相互関係を、カテゴリー化の認知プロセスの観点から相対的に規定していく。また、これをとおして、旧来の修辞カテゴリーの相互関係の一部を明かにしていく。

3.1節では、主に手順(ii)に関係する、スキーマの記述理論について述べる。3.2節では、主に手順(iii)に関係する、カテゴリーのネットワークモデルと地形モデルについて述べる。

3.1 修辞理解のスキーマ

話し手や読み手といった解釈主体の立場では、言語理解の認知プロセスは、形式が手がかりとなり、意味が目標となる¹。しかし、すべての意味を所与の形式から創り出すわけではない。解釈主体は、解釈過程に入る前から、理解の鋳型となる言語知識を持っている。これをスキーマ(schema)とよぶ。本節では、スキーマと修辞理解の関係について述べ、修辞の認知過程の構造を明示していくための修辞のスキーマの記述方法を規定していく。3.1.1節では、言

¹ラネカーは、1987年時点では、基本的に話し手の立場から言語使用を議論している。「私は一般に話し手の立場から言語使用について議論していくが、思考主体や聞き手をも含むように、容易に調整できる。」(Langacker 1987: 65) 本研究では、この「調整」をおこなうことで、解釈過程の観点から、修辞理解の記述をめざす。

語理解とスキーマについて述べ、文法的理解と修辭的理解の関係について述べる。3.1.2節では、スキーマをいくつか定義する。3.1.3節では、認知文法における標準的記法と、本研究における記法の共通点と差異について述べる。

3.1.1 スキーマと言語理解

図3.1は、認知文法の基本的な言語モデルである。認知文法では、「人間の認知機構に関する主要な二側面として、意味空間 (semantic space) と音韻空間 (phonological space) を仮定する。」(Langacker 1987: 76)

- 意味空間：思考や概念化がおこなわれる多面的な領域。
- 音韻空間：言語音をはじめとする言語形式を扱う領域。

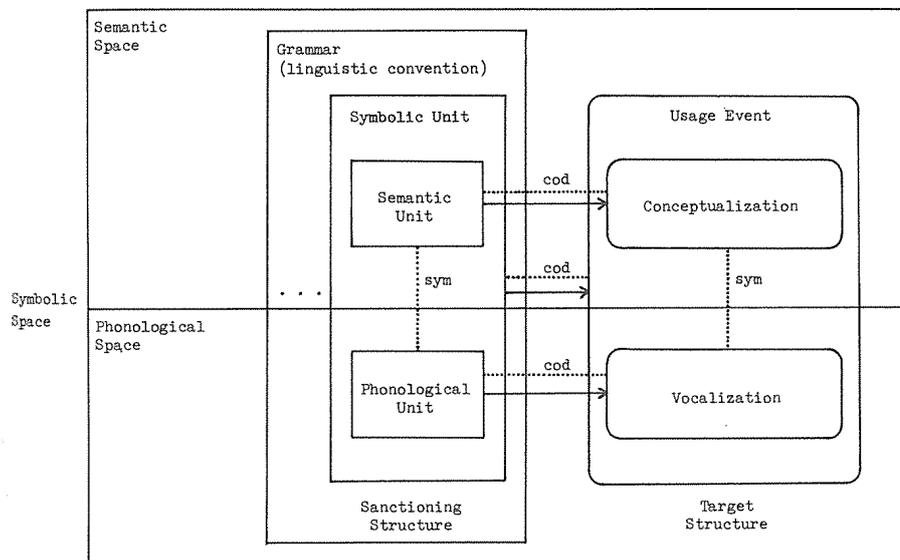


図 3.1: Langacker (1987: 77)

意味空間と音韻空間を組み合わせることで、記号空間が得られる。記号の意味極はたいてい意味空間に属し、音韻極は音韻空間に属する²。記号空間は、大きく文法 (grammar) と使用イベント (usage event) が区別される。文法は、「構造化された慣習的な言語ユニットの目録」(ibid.: 57) として特徴づけられる。一方、使用イベントは、「特定の状況において特定の目的のために伝達主体によって形成された記号表現」(ibid.: 66) として特徴づけられる。

文法も使用イベントも、記号関係 (sym) によって特徴づけられる。記号関係は、意味空間と音韻空間をまたぐ関係である。ある記号構造は二極的 (bipolar) であり、意味極 (semantic pole) と音韻極 (phonological pole)、そしてその記号関係からなる。文法では、意味極である意味ユニット (semantic unit) と音韻極である音韻ユニット (phonological unit) とのあいだに記号関係

²意味極が音韻空間に属する場合もある。たとえば、擬音語、擬態語といったオノマトペ表現の意味極は、音声イメージであるから、音韻空間に属するものといえる (Langacker 1987: 79)。

がある³。使用イベントでは、意味極である概念化 (conceptualization) と音韻極である音声化 (vocalization) とのあいだに記号関係がある。使用イベントでは、記号関係はユニットとして定着していないが、文法では、記号ユニット (symbolic unit) として定着している点で、相違がある。

スキーマが問題となるのは、**コード化の関係** (cod) である。コード化の関係は、文法と使用イベントをまたぐ関係であり、コード化 (coding) とは次のことを意味する。「ある許容範囲内でユニットに適合する、適切なターゲット構造 (target structure)⁴ を見つける」(*ibid.*: 493) こと、つまり、文法的な言語知識を、実際の言語使用にあてはめる関係が、コード化の関係であると言い換えられる。意味ユニットは概念化をコード化し、音韻ユニットは音声化をコード化し、記号ユニットは使用イベントをコード化する。この三つのコード化がすべてうまくいくことは、表現がすんなり理解されることと対応する。当然、この容認度判断は、慣習性の差によって、言語主体ごとに大きなゆれがある。

コード化の関係は、**カテゴリー化の関係** (categorization) をともなう。図 3.1 の実線の矢印は、カテゴリー化の関係をあらわす。「慣習的な言語ユニットはカテゴリーを定義する。」(*ibid.*: 68) コード化の関係は、使用イベントが、ユニットによって定義されるカテゴリーのメンバーであると判断されることで可能となる。コード化とカテゴリー化の同時性を考えるために、簡単な例を挙げよう。たとえば、道に生えている一本の木を見て、これは木である、と発話すれば、視界に入った木を、木という語彙でコード化したといえる。このコード化は、発話者が視界に入った物体を、植物に関する知識と照らし合わせて、木のカテゴリーのメンバーとみなすことによって可能となる。

さて、認知文法では、カテゴリー化の関係によってスキーマを定義しており、このカテゴリー化の関係において、矢印の根元にくるものをスキーマとよぶ。つまり、慣習的な言語ユニットであり、実際の使用イベントを理解可能とするものが、スキーマであるといえる。

文法に関しては、ラネカーのモデルでよい。修辞に関してはどうであろうか。慣習的である記号ユニットには次の二種類がある。

- (i) 特定性の高い記号ユニット (形態素、語彙項目、慣用表現)
- (ii) スキーマ性の高い記号ユニット (単純なものから複雑なものを合成する慣習的なパターン)

(*ibid.*: 66)

修辞表現は、一見すると、規則がないとも思えるほど多様であり、慣習化された言語ユニットなど無いように思われる。少なくとも、(i) については、修辞理解のスキーマを特定するのは困難であるといえる。本研究で記述の対象となるのは、(ii) に関するスキーマである。語彙の意味はさておいて、語をどのように組み合わせることで逸脱が生じ、これをどのようにずらしていくことで、理解可能な意味構造とするのかに関しては、慣習的なパターンがあるよ

³ユニット (unit) とは、定着しており、特別な注意を払うこともなく用いられる認知構造である (Langacker 1987: 494)。

⁴コード化問題におけるひとつの解を、ターゲット構造とよぶ (Langacker 1987: 493)。

うに思われる。たとえば、男は狼だ、という隠喩表現は、リチャードは獅子だ、君の瞳は宝石だ、という隠喩表現と共通する理解過程を経るといえる。[NP₁はNP₂だ]というタイプの隠喩表現には、修辞理解のスキーマとなる記号過程のユニットが存在すると考えられる。図3.1に即して述べるならば、このような修辞のスキーマは、慣習化したユニットであり、実際の言語使用を理解可能とする「文法」である。比喩的にいうならば、本研究の分析対象は、修辞の文法であるといえる。

本研究は、このような修辞理解のスキーマの記述を目的とする。認知文法にしたがい、図によって視覚的にスキーマの構造を明示していく。修辞表現の構造は基本的に複雑であり、これを体系的に記述していくためには、より基本的な認知的単位のスキーマが定義されている必要がある。以下では、修辞のスキーマの記述方法に関して、理論的準備をおこなう。

3.1.2 スキーマの定義

本節では、第4章で用いるスキーマの基本単位を定義する。まず、言語理解の基礎となるいくつかのスキーマを定義し、その後で基本的な文法カテゴリーのスキーマと、修辞作用のスキーマを定義する。

言語理解のスキーマ

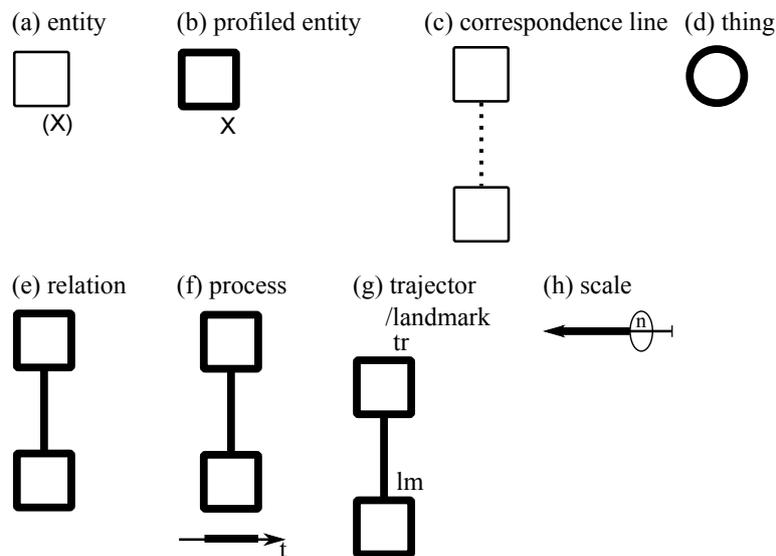


図 3.2: 言語理解の基礎的スキーマ

図3.2は、認知文法の基礎概念とそのスキーマである。以下で、それぞれについて説明する。

(a) 四角形は**存在 (entity)**をあらわす。存在は、スキーマの**要素**とも呼ぶこととする。記号は意味極と音韻極とからなるが、特に明示しないかぎり、図形で表示される要素は記号の意味極をあらわす。右下の添え字(X)は、その意味極に対応する音韻極をあらわす。要素は、分析の目的上必要となるもっとも抽象的なスキーマである。図3.3は、認知文法の理論概念の階層関

係をあらわす図である。ラネカーは、*entity*を「便利な包括的用語として用いる」(Langacker 1987: 198)という。四角形は他のスキーマの一般形といえる。

(b) 太線の要素は、**プロフィール(profile)**された要素をあらわす。細線の要素は、**ベース(base)**の要素とよぶ。ベースとなる要素は、プロフィールされた要素の理解の背景となるコンテキストであり、言語化されない。プロフィールされた要素は「意味構造の中で指示された (designated) 要素」であり、コンテキストとなるベースの中に位置づけられる。たとえば、「弧」という語は [円] をベースとしてある曲線領域をプロフィールする。ここで、カギ括弧「X」はプロフィールされた要素を指示する音韻極をあらわし、角括弧 [X] はベースとなる要素に対応する音韻極をあらわす。

(c) 点線は**対応線 (correspondence line)**をあらわす。対応線は、二つの要素が対応関係にあり、同一とみなされることを示す

(d) 円は**もの (thing)**をあらわす。ここで言う「もの」とは認知文法独自の用法であり、「意味構造においてものをプロフィールする記号構造は、名詞としてカテゴリー化される。」(ibid.,183) 言い換えるならば、名詞はものをプロフィールする。

(e) 実線は**関係 (relation)**をあらわす。関係は、二つの要素の相互連結 (interconnection) をあらわす。「認知された要素が相互連結されるとは、概念を構成するイベントが、高次イベントの構成要素として位置づけられることをいう。」(ibid.,198) たとえば、「近い」という語は一方が他方に近いことをあらわす。言い換えると、二つのものの相互連結をあらわしており、個別のものの認知を、関係の中に位置づける相互連結操作をとともなう。非プロセス関係 (non-processual relation) は、関係と同じスキーマで表示する。

(f) tでラベルされた矢印は、**プロセス関係 (process)**をあらわす。プロセス関係とは、時間のプロフィールをとともなう関係である。言い換えると、時間によって二つの要素の関係が変化していくような動的關係である。一般に、動詞はプロセス関係をプロフィールする。

(g) trは関係の**トラジェクター**をあらわし、lmは関係の**ランドマーク**をあらわす。**トラジェクター (trajector)**とは、関係によってプロフィールされる要素のうち、第一に際立つ要素をいう。文の主語はしばしばプロセス関係のトラジェクターとなる。**ランドマーク (landmark)**とは、関係する要素のうち、第二に際立つ要素をいう。ランドマークは「トラジェクターを位置づけるための参照点を提供する。」(ibid.,217) たとえば「入る」という語のプロフィールするプロセス関係においては、トラジェクターは主語となる行為主体であり、ランドマークは目的語となる到達領域である。

(h) nであらわされた**基準 (norm)**をとともなう矢印は、**スケール**をあらわす。スケールは、あるものや関係を位置づけるためのドメインである。たとえば、「速い」という語は、速さのスケールの正方向の領域に、プロセス関係を位置づける。

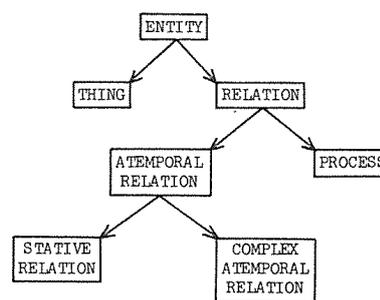


図 3.3: Langacker (1987: 249)

基本文法カテゴリーのスキーマ

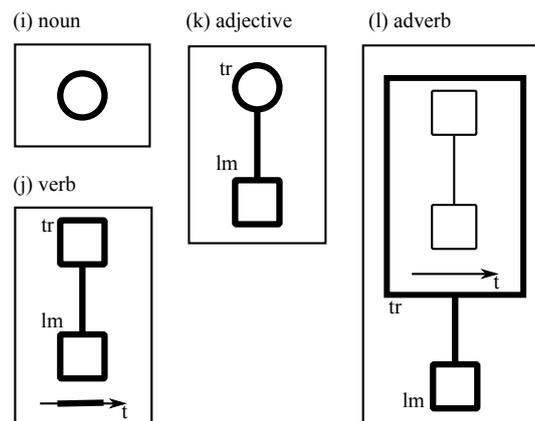


図 3.4: 基本的な品詞のスキーマ

図 3.4 は、認知文法によって規定される、基本的な文法カテゴリーのスキーマである。

(i) 名詞 (noun) は、あるベースにおいてプロファイルされたものとして規定される。細線の四角形は、ベースの範囲を定めるものであり、太線の円は、プロファイルされたものをあらわす。

(j) 動詞 (verb) は、あるベースにおいてプロファイルされたプロセス関係として規定される。表示されたスキーマは二項動詞をあらわすものである。このとき、主語はトラジェクターとして、直接目的語はランドマークとして規定される。

(k) 形容詞 (adjective) は、あるベースにおいてプロファイルされた非プロセス関係として規定される。形容詞は、ものをトラジェクターとして位置づける。「大きい」や「速い」などの程度性にかかわる形容詞では、ランドマークがスケールとなる。

(l) 副詞 (adverb) は、あるベースにおいてプロファイルされた非プロセス関係として規定される。副詞は、プロセスをトラジェクターとして位置づける。「大きく」や「速く」などの程度性にかかわる副詞では、ランドマークがスケールとなる。

修辞作用のスキーマ

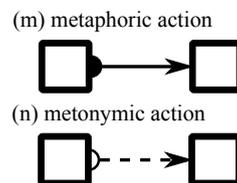


図 3.5: 修辞作用のスキーマ

図 3.5 は、本研究で導入する、修辞作用のスキーマである。

(m) 塗りつぶされた半円を起点とする実線の矢印は、**隠喩的作用** (metaphoric action) をあらわす。隠喩的作用は、連辞関係にある二項を連合関係として潜在化させるプロセス、あるいは、ある項をそれと連合関係にある他の項と代置するプロセスをあらわす。

(n) 塗りつぶされていない半円を起点とする破線の矢印は、**換喩的作用** (metonymic action) をあらわす。換喩的作用は、連合関係にある二項を連辞関係として顕在化させるプロセス、あるいは、ある項と潜在的に連辞関係にある項をコンテキストとして顕在化させるプロセスをあらわす。

3.1.3 スキーマの表記法

本研究では、前節で定義した基本的なスキーマの組み合わせにより、修辞理解の認知プロセスを明示的に表現していく。認知文法による文法の説明では、詳細なスキーマから粗いスキーマまで、さまざまな精度の図が用いられる。これにたいし、本研究では修辞現象を広範にとりあげるために、詳細なスキーマよりも、抽象的で簡素化されたスキーマが主に用いられる。

スキーマの粒度を決めるのは、現象の差異である。緻密な文法研究においては、比較対象となる言語現象の差異はわずかであり、これを明示的に説明するために、スキーマの構造は詳細に記述される必要がある。一方、修辞の体系化の研究においては、言語現象の差異は非常に大きく、この相互関係を説明するために、スキーマの詳述性は相対的に低くなる。このような事情から、本研究では、認知文法で定義されたスキーマの一部しか、記述には用いないことになる。また、修辞作用の観点から、スキーマを二種類追加している。このように、スキーマの一部をとらず、一部を追加することで、認知文法の標準と比較して、表記上の相違が目立つ。

表記法の対応関係

本節の目的は、認知文法の標準的な記法と、本研究における記法を比較し、差異と共通点を明かにすることである。その際、次の例を用いることにする。

(1) 月が温泉の山の^ゆ後^{うしろ}からのと顔を出した。

(夏目漱石「坊っちゃん」: 137)

図 3.6 は、(1) のある程度詳細な文法構造をあらわすスキーマである。太線の四角形 [A] は、修辞過程の中心となる、修辞的焦点をあらわすものであり、(1) の下線部を文字通りの意味から比喩的意味へと転義するプロセスをあらわす。

「顔を出した」の文字通りの意味構造をあらわしたのが、隠喩的作用の媒体となるプロセス関係である。Mn とラベルされた人に模した「月」がトラジェクターとなり、その「顔」がランドマークとなる。これは「月」が主語であり、「顔」が目的語であることと対応する。そして、動詞「出す」は、ランドマークとなる「顔」が時間とともにベースとなる空間領域の外へ出るプロセス関係をプロファイルする。ここでは、完了あるいは過去をあらわす「た」に

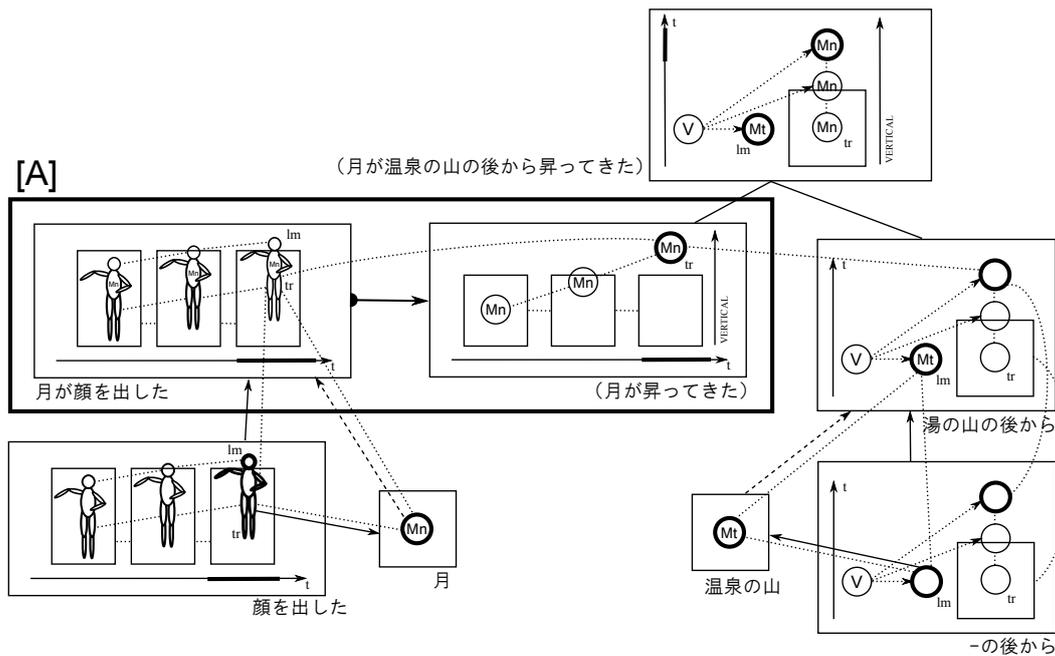


図 3.6: (1) の詳細な認知図式

対応して、時間軸の中で、ランドマークが空間領域から出た部分だけがプロファイルされている。これにたいし、隠喩的作用の趣意となるプロセス関係では、平常の意味での「月」が[昇ってきた]ことがあらわされている。「顔を出した」と[昇ってきた]は、運動形態の類似性によって連合関係にあり、隠喩的作用によりこの二項が代置される。

(1) の修辞理解の核となるのは、「顔を出した」という擬人表現が、[昇ってきた]のように比喩的に理解されることである。その他の構造は、平常の文法知識で処理できる部分であり、修辞理解の観点からは相対的に背景化される。本研究の記述においては、図 3.6-[A] のような、修辞的焦点となる構造だけに注目して、分析をすすめていく。一般に、[A] は図 3.7-[B] のように、さらに簡略的な記法を用いて表現される。

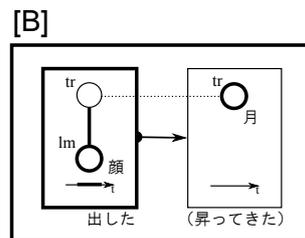


図 3.7: (1) の概略的な認知図式

[A] と [B] とは、基礎的な構造に関しては等価なスキーマである。ただし、[B] は [A] よりも抽象度が高く、[A] では詳細な構造が書き込まれているのにたいし、[B] では中核的な構造のみが描かれている。本研究では、たいていの場合 [B] と同程度の精度で記述をすすめていく。個々の修辞表現は、一見すると、全くばらばらの認知構造をもつように見えるほど多様であ

る。しかし、抽象度の高いスキーマを用いることで、修辞の核となる認知構造を表現することができ、これにより修辞間のネットワーク関係が明示できるようになる。

図 3.6-[A] と図 3.7-[B] との相違は次のようにまとめられる。

- (i) 修辞的焦点に直接関わらない文法構造は省略する。
- (ii) プロセス関係などの複雑な関係では、代表して唯一つの関係だけを表記する。
- (iii) 合成構造による表現は、もっとも高次の合成構造のみを記述する。

(i) 先に述べたように、修辞的焦点となる構造（たとえば [A]）に直接関わらない文法構造は、記述を省略する。(1) では、「月」「顔を出した」が記述に直接関わる表現となる。(ii) [A] と [B] の比較によって分かるように、変化をとまなうような複雑な関係では、その代表となる構造の一つを表示し、後は省略する。(iii) 認知文法ではふつう、それぞれの語の構造が別々に表示される。対応関係とカテゴリー化の関係（次節で定義する）、あるいは、図 3.6 の最上部の実線であらわされるような統合 (integration) の関係によって、それぞれの語の構造が合成され、合成構造 (composite structure) となる。たとえば、図 3.6 において、成分構造となる「月」と「顔を出した」にたいして、「月が顔を出した」は合成構造となる。

修辞作用でむすばれた二つの要素「月が顔を出した」と [月が昇ってきた] は、これ以上合成されない。修辞作用の媒体と趣意は、それぞれ独自の意味をもっており、修辞作用と参加者の対応関係によって関係づけられているものである。[B] において明示されるように、プロファイルのされ方は、媒体と趣意で非対称的である。媒体と趣意の両方のドメインにおける参加者となる「月」は、趣意のドメインでプロファイルされ、媒体のドメインではベースとなっている。これは次のことをあらわす。プロファイルは基本的に指示関係である。「月」が実際に動いているのは趣意のドメイン (= 実際の空間) であるから、趣意のドメインでは「月」はプロファイルされた要素となる。これにたいし、媒体のドメインは月が人間に模して運動する文脈であり、「月」は擬人的な行為主体として修辞理解のコンテキストとなるにすぎない。一方、「顔」は、月が顔をもつような擬人的な文脈である媒体のドメインでのみプロファイルされ、趣意のドメインでは概念化されない。プロセス関係のベースとなるボックスも、媒体のドメインでのみプロファイルされ、趣意のドメインでは、隠喩的作用によっておぎなわれた [昇ってきた] と代置されて、概念化されていない。

修辞作用と参照点関係

本研究では、認知文法で規定されるスキーマの他に、修辞作用として二つのスキーマを導入した。これらのスキーマは、認知文法における参照点 (reference-point) 関係とかかわる。

図 3.8 は、参照点関係モデルによって表示された、修辞作用の認知プロセスである。図 3.8 は図 3.7 と、基本的に等価である。隠喩的作用の媒体となるものが第一の参照点 R_1 となり、ターゲットの候補の集合であるドミニオン D_1 を起動する。これによって、比喩理解の趣意がターゲット T_1 が選ばれる。修辞作用は基本的に相互作用的であり、媒体から趣意へ影響をおよぼすだけでなく、趣意から媒体への影響も考えられる。これをあらわすのが、趣意を参照点

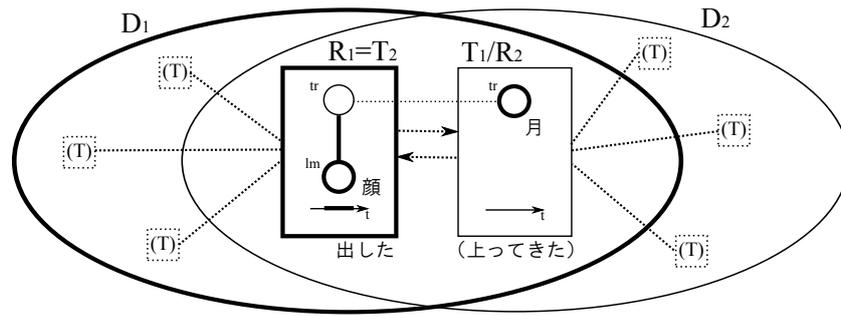


図 3.8: 修辞作用と参照点関係

R_2 とし、ドミニオン D_2 の中に媒体をターゲット T_2 として選ぶ参照点関係である。ここで、二つの参照点関係のドミニオン D_1, D_2 は交差した領域をもつ。この領域は隠喩的作用でむすばれた二つのプロセス関係（ここでは「顔を出した」と[昇ってきた]）の類似性をあらわす。換喩的作用では、媒体と趣意の動機づけは近接性であるので、参照点関係ではドミニオン D_1 と D_2 の一致として表現される。

このように、修辞作用は転義のスキーマであり、基本的に意味の「移動」のイメージを喚起する。この点では、媒体と趣意の関係は、参照点関係とみることも可能である⁵。ただし、参照点関係が基本的に焦点シフトの認知プロセスであるのにたいし、修辞作用は参照点とターゲットの相互作用をとともなう点がことなる。

3.2 修辞分類のカテゴリーモデル

本研究の目的の第一は、修辞の認知過程を明かにすることである。研究の途上で、現象の基本的な分類などは修辞学に多くを負っている。修辞学は、長らく修辞の分類学であった。修辞学のもっとも大きな結果のひとつは、ことばのあやの詳細なカテゴリー化であるといえる。修辞現象の観察の段階で、本研究は修辞のカテゴリーの問題と常に向き合う必要があった。修辞学の修辞分類は、一見すると非常に精緻で、体系的にみえる。しかし、数百を越える目録は冗長であるともいえ、瑣末なことにこだわりすぎているという感もある。本研究では、修辞の認知過程の観点から、修辞のカテゴリーを体系的に分析することを、第二の目的とする。

本節では、修辞のカテゴリーを規定していくための二つのモデルについて述べる。3.2.1節では、ラネカーのネットワークモデルについて述べる。3.2.2節では、本研究で提案する地形モデルについて述べる。この二つのモデルは矛盾するものではなく、本研究ではこの二つのモデルを統合したかたちで、修辞のカテゴリーを分析していく。

⁵Langacker (1993) では、換喩現象が参照点関係として分析されている。

3.2.1 ネットワークモデル

本研究では、修辞のカテゴリーをトップダウン的に規定していく還元主義的アプローチ (reductionist approach) ではなく、具体的な修辞現象からボトムアップ的にカテゴリーを規定していく用法基盤 (usage-based) 的アプローチをとる。その中でも、ラネカーの提示するネットワークモデル (network model) にしたがって、修辞のスキーマのカテゴリー構造を明示的に記述していく。

プロトタイプモデルとスキーマ性モデル

スキーマネットワークモデルは、次の二つのモデルを統合したモデルである (Langacker 1987: 371)。

- (i) プロトタイプモデル
- (ii) スキーマ性モデル

(i) プロトタイプ (prototype) とは「あるカテゴリーの典型的な事例であり、他の要素はプロトタイプとの類似性 (similarity) にもとづいてカテゴリーに取り込まれる。カテゴリーの成員であるかどうかは、類似性の程度によって段階的である。」(ibid.) **プロトタイプモデル (prototype model)** とは、プロトタイプを中心として、類似する他の要素を取り込んでいくというカテゴリーモデルである。たとえば、鳥のカテゴリーでは、「スズメ」はプロトタイプの地位にあるといえ、「カラス」は「スズメ」との類似性が高いため、鳥のカテゴリーの中心的成員とみなされる。これにたいし、たとえば「ペンギン」は「スズメ」との類似性が相対的に低いため、鳥のカテゴリーの周辺事例とみなされる。

(ii) スキーマ (schema) とは「そのスキーマが定義するカテゴリーの成員全てに完全に適合するような、抽象的な特徴づけである。」(ibid.) したがって、スキーマを基準としたカテゴリー判断は段階的とはならない。ここで、スキーマは、より詳細な事例によって精緻化 (elaborate) される「メンバーの共通性を具体化した統合的な構造である。」(ibid.) スキーマ性 (schematicity) とは、スキーマのもつ性質の抽象度の段階性をいう。「階層関係の中で、スキーマ性のあるレベルが定まると、たいていの場合、さまざまな具体事例の性質が相互に対比される。」(ibid., 133) たとえば、生物カテゴリーでのスキーマ性の比較的高いレベルでは、たとえば「動物」「植物」の対比が問題となるのにたいし、スキーマ性が相対的に低いレベルでは、たとえば「カラス」「スズメ」の対比が問題となる。**スキーマ性モデル (model based on schematicity)** では、スキーマ性のレベルによって多層的となるカテゴリー関係がみとめられる。

これらの二つのモデルは本質的に矛盾するものではなく、「ネットワークという概念によって統合されるひとつの現象の、特別なケース」(ibid., 371) とみなすことができる。

もしプロトタイプからの拡張を「水平な (horizontal)」関係とみなし、スキーマ性を「垂直な (vertical)」関係とみなすならば、プロトタイプからの拡張によるネットワークの「外への (outward)」成長は、スキーマの抽出によるネットワークの「上への (upward)」

成長をとまなう。(ibid., 373)

このように、ネットワークモデル (network model) は、観察される言語事例にしたがい、スキーマの抽出とプロトタイプからの拡張によって成長していくカテゴリーモデルとして特徴づけられる⁶。

ネットワークモデルの認知的基盤

カテゴリー化は、比較の認知プロセスにもとづく。比較のターゲット (target) を T、比較の基準 (standard) を S、基準とターゲットの不一致 (discrepancy) の大きさを V とすると、比較の認知プロセスは、S と T を比較して V を得るプロセスであるといえる。比較のプロセスによって、S がスキーマとなるかプロトタイプとなるかが規定される。

- (i) S は T によって完全に特徴づけられ、V はゼロとなるとき、S をスキーマ (schema) という。スキーマとなる S から T へのカテゴリー化の関係を、事例化 (instantiation) の関係という。このとき、T は S よりも詳細に特徴づけられており、T は S の具体事例となる。
- (ii) S と T とのあいだに不整合性があり、V が非ゼロとなるとき、S をプロトタイプ (prototype) という。プロトタイプとなる S から T へのカテゴリー化の関係を、拡張 (extension) の関係という。このとき、T のもつ性質は部分的に S のもつ性質と共通しており、T は S の拡張事例となる。

S から T への拡張の関係は、たいていスキーマ化 (schematization) の関係をとまなう。ターゲットをカテゴリーの拡張例として取り込むために、認知主体 (conceptualizer) は S と T の「差異を大目に見る (overlook) 傾向がある。」(ibid., 372) したがって、拡張の関係はプロトタイプと拡張例にくわえ、認知された類似性をあらわすものの三項がかかわる。「この第三番目の要素はスキーマに相当する。」(ibid.) 拡張にとまなう生じるスキーマは「必ずしも認知主体の注意を引き付けるわけではない。」(ibid., 373)

図 3.9 は、事例化、拡張、スキーマ化のカテゴリー化関係をあらわす図である。Prototype と Extension から Schema へのびる点線の矢印⁷ は、スキーマ化の関係をあらわす。Schema から、Prototype と Extension へのびる実線の矢印は、事例化の関係をあらわす。この Schema を介して、Prototype と Extension は拡張の関係となる。言い換えると、二項の類似性に着目することによってスキーマ

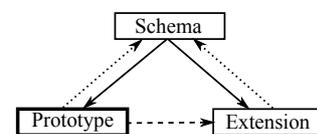


図 3.9: Langacker (1993: 2) を山梨 (2000: 181) にもとづいて一部修正

⁶レイコフの放射状モデル (radial model) と、ネットワークモデルは基本的に等価である (Langacker 1993: 2)。

⁷Langacker (1993: 2) では、図 3.9 のプロトタイプと拡張事例からスキーマにのびる矢印とプロトタイプから拡張事例にのびる矢印は、いずれも破線の矢印が使われている。本研究では、山梨に従い、「これらの二つの認知プロセスの関係を区別するため、プロトタイプと拡張事例からスキーマに延びる矢印は、点線の矢印に修正している。」(山梨 2000: 240)

マを構成し、二項がともにスキーマに事例化されることを通して、二項は拡張関係となる。

以上のプロセスを、次のような例で確かめることができる。たとえば、「スズメ」を比較の基準Sとし、「ペンギン」を比較のターゲットTとしたときには、二項の不一致をあらわすVは非ゼロである（たとえば「スズメ」は飛べるが「ペンギン」は飛べないという差異がある。）したがって、「スズメ」はプロトタイプとなり「ペンギン」は拡張例となる。この拡張のプロセスが可能となるためには、類似性の認知が必要である。「スズメ」と「ペンギン」の類似性はたとえば「鳥」であることである。ここで、Sを「鳥」Tを「スズメ」とすると、スズメは鳥であるから、Vはゼロであり、定義から「鳥」は「スズメ」のスキーマとなる。同じく、「鳥」は「ペンギン」のスキーマとなる。このようにして、「鳥」が両者の類似性であることが確かめられ、「スズメ」と「ペンギン」よりスキーマ「鳥」がスキーマ化によって構成される。また逆に、「鳥」は「スズメ」と「ペンギン」を事例化する。このように、水平の拡張と、垂直のスキーマ化・事例化は並列しておこなわれる認知プロセスである。

このように、スキーマと事例の関係は、カテゴリー化の認知プロセスによって規定され、スキーマ性や拡張性は、具体的に比較される二項によって相対的に決まる。

本研究では、修辞のネットワーク具体的な修辞現象から構成されるさまざまな修辞のスキーマを記述し、ネットワークモデルのアプローチにしたがい、スキーマ化、事例化、拡張の関係からなるスキーマのネットワークとして、修辞のカテゴリーを規定していく。

3.2.2 地形モデル

ネットワークモデルにより、それぞれの修辞の相互関係を、カテゴリー化の関係として明示的に記述していくことができる。これによって得られる修辞のネットワークは、具体的な修辞現象からボトムアップ的に構成されるものである。その一方で、修辞学では、あるカテゴリーの定義に基づいて修辞の分類がなされるという点で、修辞のカテゴリーをトップダウン的に規定するものといえる。

修辞学的分類は、基本的な修辞に関しては、現在の修辞研究においても踏襲されており、本研究も例外ではない。そのため、旧来の修辞学的分類が、修辞のネットワーク上でどのように位置づけられるのかがしばしば問題となる。本節では、これを明示するためのモデルとなる、地形モデル (topography model) を提案する⁸。

地形モデルとネットワークモデル

事例化の関係は、抽象的なスキーマと具体的な事例の関係である。したがって、スキーマが事例化されると、具体性が増すことになる。「一般に、ある特定の方法でスキーマを事例化

⁸Langacker (2006: 146-148) では、カテゴリーの山脈モデル (mountain range model) が提案されている。ネットワークモデルでは、表示法として原理的に、ノードとなるスキーマの離散性が強調される。山脈モデルはこの欠点をおぎなうものであり、プロトタイプを山頂に見立て、異なるカテゴリー間の連続性を可視化するものである。地形モデルとラネカーのいう山脈モデルは、基本的に等価である。

することによって、事例化が起こらなければ予測できず、スキーマ性の高い段階では問題にならなかったようなドメイン (domain) (あるいは潜在的な領域 (realm of potential value)) が導入される。」(Langacker 1987: 133) ここで、スキーマの事例化によって導入されるドメインのうち、認知的際立ちの高いものを**カテゴリー領域 (category domain)**とよぶ。**地形モデル (topography model)**は、ネットワークモデルにカテゴリー領域の表示を加えたものである。

図 3.10 は、動物カテゴリーに関する、地形モデルのイメージ図である。図の上部では、スキーマのネットワークとカテゴリー領域の分布が描かれている。B_P は鳥のプロトタイプ (たとえば「スズメ」)、B_E は鳥の拡張事例 (たとえば「ペンギン」)、B_S は鳥のスキーマをあらわす。また、H_S は馬のスキーマを、A_S は動物のスキーマをあらわす。

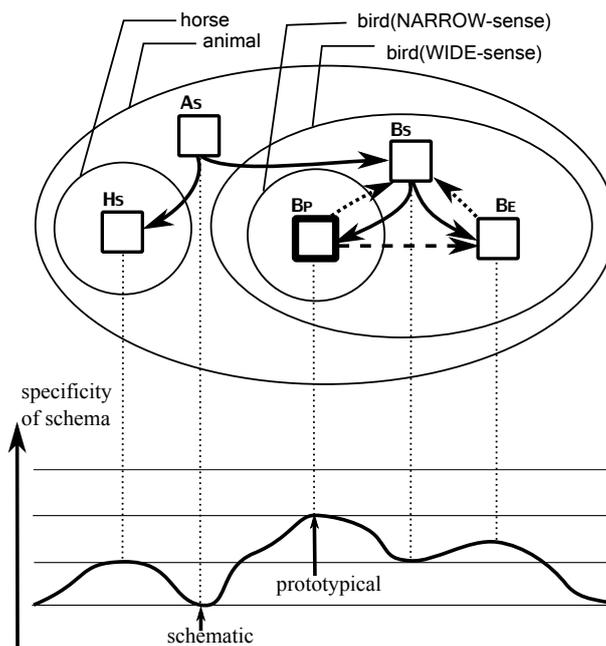


図 3.10: 地形モデル

ここでは、動物のスキーマ A_S が、馬のスキーマ H_S と鳥のスキーマ H_S に事例化され、それぞれカテゴリー領域を生じるということは、動物の一般的カテゴリーの中で、それぞれ特有の性質をもった下位カテゴリーを認知するということをあらわす。たとえば、A_S が B_S に事例化されることにより導入されたドメイン (たとえば鳥類のドメイン) が十分際立ちをもち、広義の鳥のカテゴリー領域をなす。このカテゴリー領域は、B_S がさらに事例化されて生じる B_P と B_E でも活性化されており、これらのスキーマは広義の鳥のカテゴリー領域に包含されている。

地形モデルの認知的基盤

図 3.10 の下部は、カテゴリー領域を等高線に見立てた時の、地形のイメージをあらわしている。高さの尺度は、スキーマの具体性 (specificity) である。事例化の関係の下位にあればあ

るほど、スキーマの具体性は増す。このことから、地形の谷となる部分は抽象的なスキーマをあらわし、山となる部分は具体的なスキーマをあらわす。山となる部分は、認知的な構造が詳細に含まれているという点で、あるカテゴリー領域のプロトタイプに対応するといえる。縦軸の目盛りは、カテゴリー領域が生じるためのしきい値の幅をあらわしている。 B_E は B_S と比較して、具体性のしきい値が目盛を越えておらず、これは B_E のまわりにカテゴリー領域が生じていないことと対応する。このようにして可視化された、カテゴリーの「地形」は、ネットワークのノードとなるスキーマが連続的に分布していることをあらわす。具体性の高さの目盛り幅は、認知主体の注意によって変化するものであり、図 3.10 ではカテゴリー領域となっていない部分が顕在化する可能性もある。

図 3.10 では、さらなる事例化によって、鳥類というカテゴリー領域が背景化された場合には、新たに生じるカテゴリー領域は、上位のカテゴリー領域の入れ子とならず、独立に形成される場合もある。たとえば、ペットにしている千代という名前のスズメがいたとする。千代はスズメのスキーマと事例化の関係にあるが、飼い主のカテゴリーネットワーク上では、千代は鳥類であるという事例化の関係は側面的な情報にすぎず、ペットに関するカテゴリー領域が優先されると考えられる。

したがって、地形モデルは、事例化にともなうカテゴリーの厳密な階層関係を仮定しているわけではない。図 3.10 では、すべてのカテゴリー領域が入れ子関係となっている。この入れ子関係は、階層関係にあるドメインをズーム・インの認知プロセスによってしぼりこんでいくことと対応するといえる。その意味で、複雑なカテゴリー構造の一側面をあらわすものにすぎない。しかし、この種の階層的關係は、日常的なカテゴリー判断にとって際立ちの高い構造であることも、一方では確かである。地形モデルは、認知主体にとって活性化される階層的カテゴリーを可視化するものといえる。修辞現象の詳細なカテゴリー構造では、具体性の尺度がさまざまであることに対応して、階層的なカテゴリーが多層的に重ね合わせられるものになると考えられる。この点で、図 3.10 は、カテゴリーに関する認知主体の複合的視点のうちの一側面を焦点化したものに対応するといえる。図 3.11 は、階層カテゴリーの多層性のイメージ図である。

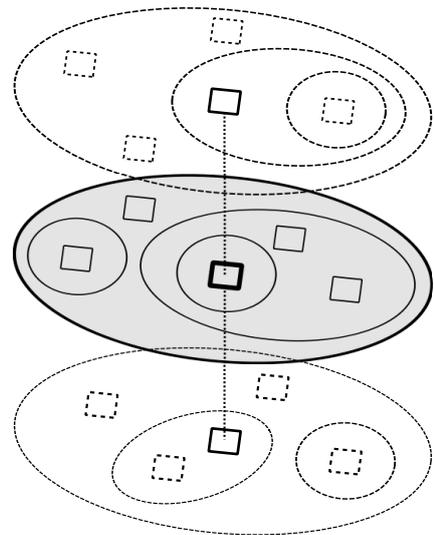


図 3.11: 階層的カテゴリーの多層性

第4章 修辞のネットワーク

修辞現象は多彩である。これまでの修辞研究では、隠喩や換喩といった限定された修辞現象のみが、集中的に研究されてきた。本章では、これまであまり注目されてこなかった修辞や、個別には研究されてきたものの体系的な研究はなされてこなかった修辞も含め、できるだけ多くの修辞をとりあげた。とはいうものの、本章でとりあげる修辞現象は、修辞学の対象となってきた言語現象のうちのごく一部にすぎない。本章の目的は、修辞現象の多様性を示し、それぞれの修辞の相互関係、あるいは修辞と文法とのかかわりを記述していくことをとおして、修辞理解の認知機構の一部を明かにしていくことである。

本章は、各節ごとに個別に読むことができる。4.1節では、各節で得られた結果をもとに修辞性の分類をおこなっている。逆に言えば、各節へのイントロダクションとなっており、具体的な例文とともに、本章ではどのような修辞現象をあつかうのかを概略的に示す節となっている。4.2節から4.9節では、日本の文学作品を中心とした具体的な言語事例とともに、それぞれの修辞の認知プロセスのスキーマを記述していく。各節のおわりには、スキーマの相互関係をあらわすネットワーク図を示している。4.10節では、各節で得られたネットワークを総合した俯瞰的ネットワークを示し、個別の修辞スキーマの、修辞現象全体の中での位置づけ、いわば修辞の地図を部分的に記述した。

4.1 修辞性の分類

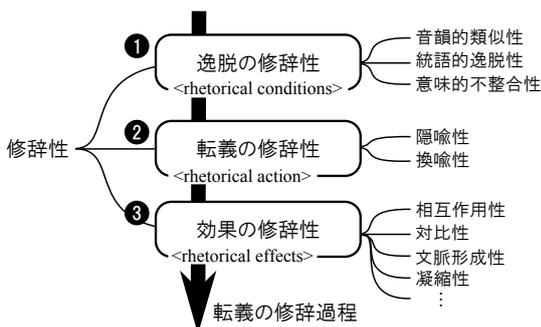


図 4.1: 修辞性の分類

本節で示す修辞性の分類は網羅的なものではない。特に、効果の修辞性については、多くの修辞性を区別することが可能と思われる。ここでは、次節以降でおこなわれる修辞の分析から得られた結果の一部を整理するにとどめる。本節の目的は、次節以降で得られた結果をまとめ、具体的な修辞表現の例を合わせて示すことによって、本章の全体像を総覧することである。

修辞性ということばは、修辞のさまざまな側面について用いられる語であるが、一般に、平常の言語使用にはみられない特異性を指す語であるように思われる。本節では、2.2節で提案した修辞作用モデルにしたがい、修辞過程の三側面によって、修辞性を分類していく。修辞過程の三側面とは、概略以下のようなものである。第一に、通常の表現からの偏差を認知し、平常の文法からは逸脱している部分を焦点化

する側面である。これを修辞の条件 (rhetorical condtions) という。第二は、修辞的焦点となった意味内容が転義される側面である。転義にともなう媒体から趣意への認知プロセスを、修辞作用 (rhetorical action) という。第三は、転義の媒体と趣意との相互作用によって、修辞表現の詩的効果、弁論的効果を認知する側面である。これを、修辞的な効果 (rhetorical effects) という。この三側面のそれぞれについて、修辞性が考えられる。修辞の条件に関する修辞性を、逸脱の修辞性とよび、修辞作用に関する修辞性を、転義の修辞性、修辞的な効果に関する修辞性を、効果の修辞性とよぶ。それぞれについて、以下で示すような下位区分が可能である。図 4.1 は、修辞作用モデルと修辞性の分類のイメージ図である。この図からは、修辞性が階層的となっているようにみられるが、実際にはそれぞれの修辞性は排他的ではなく、ある修辞理解のプロセスは、いくつかの修辞性を同時に含んでいるものが大半である。

4.1.1 節では、逸脱の修辞性について、4.1.2 節では、転義の修辞性について、4.1.3 節では、効果の修辞性について、それぞれいくつかの例とともに修辞性の分類をおこなう。

4.1.1 逸脱の修辞性

修辞表現を理解する際には、平常の文法から何らかの偏差が認知される。そして、この偏差の認知は修辞の条件であり、これにかかわる修辞性を、逸脱の修辞性とよぶ。偏差が認知されるということは、逆に言えば、文法の標準について何らかの基準をもっていることになる。音韻論、統語論、意味論を包括する広義の文法は、言語理解の認知プロセスの安定した側面をあらわすものであり、偏差の標準となるものといえる。逸脱の修辞性は、音韻論、統語論、意味論に対応して、音韻的類似性、統語的逸脱性、意味的不整合性を区別することができる。

音韻的類似性

音韻的類似性のもっとも極端なかたちは、反復である。類似した言語音が接近して使用されると、音韻論の標準に反して、逸脱的となる。次の例は、同語が別の意味で反復される、異義反復 (antanaclasis)[→ 4.3.2 節] である。

- (1) 骨が細く、体が細く、顔は特ことさら更細く出来あがつたうへに、取る年は争れぬ雨と風と苦
労とを吹き付けて、辛い浮世に、辛いも取り留めた心さへ細くなる 許 である。

(夏目漱石「虞美人草」: 199)

(1) では、辛いという語が同文内で反復されている。第一は [世知辛い] の意味で、第二では [やっとのことで] という慣用表現の部分として、それぞれ理解される。音韻的類似性が修辞の条件となるものには、他に、類音語接近 (paronomasia)[→ 4.3.3 節]、かすり (à-peu-près[仏])[→ 4.3.4 節] などがある。

統語的逸脱性

統語論・形態論の諸法則は、そのまま修辞性の基準となる。動詞の項構造や、修飾-被修飾の関係の制約、格助詞の用法などが逸脱的であれば、これに関する修辞性が認知される。次の例は、修飾語の位置が転移する、転移修飾 (transferred epithet)[→ 4.9.4 節] である。

(2) 和服に外套の駅長は寒い立話を切り上げたいらしく、もう後姿を見せながら

(川端康成「雪国」: 60)

(2) では、本来「駅長」の前に来るべき修飾語「寒い」が「立話」の前へ転移することで、平常の修飾-被修飾の関係から逸脱的となっている。統語的逸脱性が修辞の条件となるものには、他に、省略 (ellipsis)[→ 4.7.1 節]、転換 (enallage)[→ 4.8.1 節]、意味構文 (synesis)[→ 4.8.2 節]、代換 (hypallage)[→ 4.9.1 節] などがある。

意味的不整合性

意味的不整合性は、修辞の条件として、もっとも広範にみられる修辞性である。特に、意味カテゴリーに関する逸脱は、非常に注目されてきた修辞性である。次の例は、類で種をあらわす提喩 (synecdoche)[→ 4.6.2 節] である。

(3) ただ、お寒うござります、お寒うござります、悪いものが降りましてお寒うござりますると言うて

(幸田露伴「風流微塵蔵」: 47)

(3) では、「悪いもの」は文脈上、雪の意味となる。「悪いもの」は平常の意味論では悪いもの全般を指す語であるが、ここではそのプロトタイプのみが問題となっている点で逸脱的である。意味的不整合性が修辞の条件となるものには、他に、隠喩 (metaphor)[→ 4.2.1 節]、比喩くびき (attelage)[→ 4.2.3 節]、誇張 (hyperbole)[→ 4.4.1 節]、緩叙 (litotes)[→ 4.4.2 節]、対義結合 (oxymoron)[→ 4.5.2 節]、換喩 (metonymy)[→ 4.6.1 節] などがある。

4.1.2 転義の修辞性

逸脱的表現が理解可能となるためには、平常の文法からの偏差を埋め合わせなければならない。この偏差の修正のプロセスを、修辞作用とよぶ。修辞作用に関わる修辞性を、転義の修辞性とよぶ。修辞作用の様式には、次の二種類がある。第一は、潜在性にかかわる認知プロセスであり、隠喩的作用とよぶ。第二は、顕在性にかかわる認知プロセスであり、換喩的作用とよぶ。どちらの修辞作用によって、修辞の条件が解消されるかによって、隠喩性と換喩性が区別される。修辞作用については 2.2 節を参照。

隠喩性

連辞関係にあるものを連合関係へと潜在化させる、あるいは、連合関係にある二つのものを代置する隠喩的作用のプロセスにかかわる修辞性を、隠喩性とよぶ。隠喩性は、効果の修辞性である対比性や凝縮性の基盤となる。次の例は、見立てが明示される修辞である、直喩(simile)[→ 4.2.2 節]である。

- (4) 立ち上がる時に向うを見ると、路から左の方にバケツを伏せたような峰が^{そび}聳えている。
(夏目漱石「草枕」: 9)

(4)では、「バケツ」と「峰」が見立ての関係にあることが理解される。すなわち、この二語は単に連辞的に結合しているだけではなく、類似性の観点から比較される関係と理解される。言い換えると、連辞関係にある二語が、連合関係として理解される。隠喩的作用がはたらく修辞は、隠喩性にかかわる。4.2節の見立ての修辞、4.3節の言葉遊びの修辞、4.4節の程度性の修辞、4.5節の二極性の修辞、4.8節の文法範疇の修辞は、主に隠喩性にかかわる修辞であると考えられる。

換喩性

連合関係にあるものを連辞関係に顕在化させる、あるいは、潜在的なコンテクストを顕在化させる換喩的作用のプロセスにかかわる修辞性を、換喩性とよぶ。次の例は、あるものでそれと関係する他のものをあらわす、換喩(metonymy)[→ 4.6.1 節]である。

- (5) 君釣りに行きませんかと赤シャツがおれに聞いた。
(夏目漱石「坊っちゃん」: 46)

(5)では、「赤シャツ」は赤シャツの男の意味で理解される。つまり、実際には言語化されていない[男]がコンテクストとしておぎなわれる。言い換えると、赤シャツと男は慣習化によってあるいは文脈によって連合しているが、修辞理解のプロセスでは、連辞関係として理解されるといえる。換喩的作用がはたらく修辞は、換喩性にかかわる。4.6節の関係の修辞、4.7節の省略の修辞、4.9節の統語構造の修辞は、主に換喩性にかかわる修辞であると考えられる。

4.1.3 効果の修辞性

修辞理解は、単に転義の趣意となる意味内容を理解するというのではない。転義の媒体と趣意とは相互作用し、独特の修辞的效果を生じる。修辞的な効果に関する修辞性を、効果の修辞性とよぶ。逸脱の修辞性、転義の修辞性については、従来の言語学の知見から、ある程度汎用な分類が可能である。しかし、効果の修辞性については、分類の一般化はむずかしい。どの程度の精度で分類をおこない、どの程度の種類が存在し得るかについては明らかではなく、今後の修辞研究によって徐々に確立されていくべきものと思う。以下では、本章で得られた結果による、部分的な分類を示す。

相互作用性

修辞作用は、媒体から趣意への転義のプロセスである。一般に、修辞作用によって、媒体と趣意のあいだには相互作用がはたらく。修辞作用によって生じる、媒体と趣意の相互影響にかかわる修辞性を、相互作用性とよぶ。次の例は、ある文法範疇の語が本来の機能を果たさない、転換(enallage)[→ 4.8.1 節]である。

- (6) また一人の友だちは、二十代の恋人のせいで、夫にたいしても急に若返ったが、若い男に遠ざかると、夫にも冷やかひやかになってしまって、かえって疑われたから、またよりをもどして、夫にそそぐ愛を、よその泉からくんで来ている。

(川端康成「舞姫」: 74)

(6) では、平常ではたいてい到達点をあらわす格助詞「に」が、移動の起点をあらわす格助詞[から]の機能を帯びていると考えられる。一見すると、この修辞理解のプロセスは、媒体「に」を趣意[から]に代置するプロセスと思われる。しかし、実際には、二つの格助詞のイメージは緊張関係にある。趣意の文脈上では、「若い男」から離れていくイメージが生じるが、その一方で、格助詞「に」の想起する媒体の文脈上では、「若い男」への接近のイメージも生じるとみることも可能である。媒体と趣意の相互作用性は、修辞作用の一般的特徴と考えられ、広く転義現象一般にみられるものである。

対比性

隠喩的作用は、連辞関係に顕在化された二項を、連合関係としてみることにより、二項に対比的認識を生む。隠喩的作用にかかわる修辞性を、対比性とよぶ。次の例は、意味的に対立する語を結合する、対義結合(oxymoron)[→ 4.5.2 節]である。

- (7) 過去を語ることが、愛情を語ることにもなった。波子の身の上相談も、愛の訴えに聞こえた。それだけの年月が、二人のあいだに流れていた。この年月は、二人のつながりでもあり、へだてでもあった。

(川端康成「舞姫」: 20)

(7) では、「年月」が「つながり」であり「へだて」であるというのは、一見すると矛盾である。ここで、「つながり」と「へだて」は隠喩的作用によって、連辞関係が連合関係へと潜在化され、対比的に理解される。ここでは、二語の関係は対比的であり、緊密な関係を保持して理解される。対比性は、隠喩的作用が関わる修辞現象一般にみられるものであるが、特に顕著なものは4.2 節の見立ての修辞と、4.5 節の二極性の修辞である。

文脈形成性

換喩的作用は、連合関係に潜在する二項を、あるいは潜在的なコンテキストを連辞関係として顕在化させることにより、言語化された一方からコンテキストとして他方をおぎなう。換

喩的作用にかかわる修辞性を、文脈形成性とよぶ。次の例は、暗黙に理解されることを言わずにおく、省略 (ellipsis)[→ 4.7.1 節] である。

(8) みんな 掛けないか。立ってると草^{くたびれ}臥るぜ。

(夏目漱石「虞美人草」: 306)

(8) では、立っていきたくびれるので掛けるものといえば椅子であり、「掛けないか」の理解される文脈として [椅子] が換喩的作用によりおぎなわれる。文脈形成性は、換喩的作用の関わる修辞に一般的にみられる修辞性であるが、その中でも特に顕著なものは、4.6 節の関係の修辞と、4.7 節の省略の修辞である。

凝縮性

凝縮性は、隠喩的作用のはたらく一部の修辞にみられる修辞性である。隠喩的作用の関わる修辞では、媒体をとおして趣意を理解する際に、媒体の特定の内容だけが焦点化されるものが多く見られる。これにともなって、ことばの意味が限定せられ、意図にそう意味だけを残して凝縮していくという修辞性が生じる。これを、凝縮性とよぶ。次の例は、あるものを別のものによって見立てる、隠喩 (metaphor)[→ 4.2.1 節] である。

(9) 嘘は河豚汁である。その場限りで祟^{たたり}がなければこれほど旨いものはない。

(夏目漱石「虞美人草」: 174)

(9) では、媒体「河豚汁」と趣意「嘘」は、見立ての関係として理解される。修辞理解としては、見立ての根拠となる「その場限りで祟がなければこれほど旨いものはない」という性質が焦点化される。言い換えると、二項の類似性が凝縮的に理解される。凝縮性は、見立ての理解に関わる修辞性であり、他に、直喩 (simile)[→ 4.2.2 節]、比喩くびき (attelage)[→ 4.2.3 節]、誇張 (hyperbole)[→ 4.4.1 節] などにみられる。

焦点多層性

焦点多層性は、換喩的作用のはたらく一部の修辞みられる修辞性である。換喩的作用は、部分的な手がかりから、潜在的な要素を顕在化する。これによって、文字通りには媒体がプロファイルされ、際立ちを得ていたのにたいし、修辞理解としては趣意が焦点化され、際立つ。これにともない、換喩的作用の前後で、際立ちの分布の組み換えが起こり、焦点分布が多層的となる。次の例は、平常の限定-被限定の関係が反転する、限定語反転 (sicilia amissa[羅])[→ 4.9.3 節] である。

(10) 山山の初夏を見て来た自分の眼のせいかと、島村は疑ったほどだった。

(川端康成「雪国」: 19)

(10) では、平常の文法では見るの目的語となるのは「山山」であり、修飾部と被修飾部の位置が反転しているとみられる。ここで、文字通りには、「山山」は名詞句の被修飾部として、名詞句内では「初夏」に比べて相対的に背景化されている。しかし、修辞理解としては「山山」は「見て来た」の目的語として換喩的に顕在化され、「初夏」よりも前景化される。この点からは、名詞句「山山の初夏」の焦点分布は、換喩的作用の媒体と趣意に関して多層的となる。焦点多層性は、換喩的作用にともなう統語関係の変化によって生じる修辞性と考えられ、他には、換喩 (metonymy)[→ 4.6.1 節]、提喩 (synecdoche)[→ 4.6.2 節]、転喩 (metalepsis)[→ 4.6.3 節]、代換 (hypallage)[→ 4.9.1 節]、転移修飾 (transferred epithet)[→ 4.9.4 節] などで見られる。

言語レベル二重性

言語レベル二重性は、言語レベル間で多層的な解釈がなされることによる修辞性である。本研究でとりあげた修辞現象の中では、4.3 節の言葉遊びの修辞において、音素・モーラレベルと語レベルの間、あるいは語レベルと句レベルの間の多層性が観察された。次の例は、類似音の語を接近して用いる類音語接近 (paronomasia)[→ 4.3.3 節] である。

- (11) かっぱかっぱらった
かっぱらっぱかっぱらった
とってちってた

(谷川俊太郎「かっぱ」: 36)

(11) では、音は類似するが意味は全く異なる「かっぱ」と「かっぱらった」が接近して並置されることにより、類音性が際立ち、語の意味が相対的に背景化される。言い換えると、音素・モーラレベルの対応関係が前景化され、語レベルの解釈が背景化される。その一方で、意味が全く失われているわけではなく、語レベルの解釈も並列的におこなわれると考えられる。結果として、ある語の中で、音韻単位の結合としての構成的解釈と、一語の意味としての全体的解釈が二重的になる。言語レベル二重性は、音韻類似性と関わるものと考えられ、他に、異義反復 (antanaclasis)[→ 4.3.2 節]、かすり (à-peu-près[仏])[→ 4.3.4 節] などで見られる。

類像性

類像性は、修辞的な逸脱の形式自体が、何らかの意味をあらわすことに関する修辞性である¹。本研究でとりあげた修辞性の中では、4.8 節の文法範疇の修辞において、類像性に関わる修辞現象が観察された。次の例は、一語が結合された二語に係るときそのうち一方にしか適合しない、破格くびき (zeugma solecistic)[→ 4.8.3 節] である。

- (12) 「いつまでねまきのままでいるつもりだ。服に着替えろ。手伝ってほしいことがある」
「はい」おれはあわててねまきを脱ぎ、ズボンとセーターを着た。

¹類像性 (iconicity) は、音韻形式によって意味が動機づけられていることをあらわす一般的な用語である。本節でいう類像性は、この用語法にしたがうものである。

(11)では、「ズボン」はふつう[履く]ものであるという観点からは、「ズボン」と「セーター」の両方に係る動詞「着た」は「セーター」にしか適合しない。文法的に適格な文となるためにはたとえば[ズボンを履き、セーターを着た]のようにしなければならないが、ここでは両者がひとつの動詞でまとめられていることにより、「あわてて」衣服を身につける様が類像的にあらわされているとみることも可能である。類像性は、破格的な修辞表現と関連していると考えられ、他には、意味構文(synesis)[→4.8.2節]などでみられる。

冒頭でも述べたように、以上の修辞性の分類は網羅的なものではなく、次節以降の分析から得られた結果を概略的にまとめたにすぎない。しかし、このように修辞表現の多様性を示すことで、修辞の全体像を明らかにするための手がかりにはなると考えられる。次節以降では、具体的な言語事例から、以上の結果を帰納的に示していく。

4.2 見立ての修辞

隠喩は、あるものの一側面をあらわすのに、別のものに喩えていう修辞である。見立て関係は、隠喩の主要な特徴であるといえる。媒体（＝たとえるもの）となる表現は、趣意（＝たとえられるもの）の見立てとなり、趣意は媒体の概念を通じて理解される。この見立てを理解するプロセスに関する修辞性を、比喩性とよぶ。

比喩性は、隠喩にかぎらない。具体的な媒体で抽象的な趣意を見立てる修辞には、少なくとも、直喩や比喩くびきがある。これらの修辞は、比喩性という点では共通しているが、その一方で、それぞれ独特の修辞過程をもつ。特に、直喩は、隠喩から二次的に派生されるものと思われる傾向があるが、実際には、特有の認知機構が存在する。本節では、比喩性にかかわる修辞の、共通点と差異を観察していくことを通して、そのネットワーク関係の一部を明らかにしていく。具体的には、4.2.1節で隠喩、4.2.2節で直喩、4.2.3節では比喩くびきの分析をおこない、4.2.4節ではその相互関係のネットワークと、修辞性の特色について述べる。

4.2.1 隠喩

隠喩 (metaphor) は、あるものごとを、別のものごとによって見立てる、修辞である。隠喩の理解には、二つのコンテキストを対照的に認知することが必要となる。ひとつは、見立てるもののコンテキスト、すなわち媒体のドメインであり、もうひとつは見立てられるもののコンテキスト、すなわち趣意のドメインである。たとえば、男は狼だという隠喩の理解では、人間と動物のコンテキスト、言い換えると、人間のドメインと動物のドメインとが対照的に認知される必要がある。

ここで男と狼は、ソシユールのいう連合関係にあるといえる。なぜならば、男は乱暴だ、狼は乱暴だ、はともに文法的に適格な文であるからである。連合関係 (associative relation) は潜在的な関係であり、項の代置にかかわる比較によって生じる関係である。男は狼だのように、隠喩では、潜在的な連合関係にあるものが、連辞関係 (syntagmatic relation) として顕在化されることになる。隠喩的表現では、共存できない二つのコンテキストが一度に起動されることで意味論的不整合性が生じる。隠喩の媒体と趣意は、通常の使用では、共存できない、本来潜在的な連合関係にあるものであり、これを連辞関係として顕在化することによって、修辞が形成されるといえる。本研究では、ある文脈の下での連辞関係において、デフォルト的には連合関係として認知される二つの項の相関を、類似性 (similarity) とよぶ。その点では、隠喩は、類似性にもとづく修辞であるといえる。

本節では、連辞的隠喩、動詞的隠喩、名詞的隠喩の三つを区別してとりあげる。隠喩の媒体と趣意は、ともに明示される場合もあれば、媒体だけが明示される場合もある。ともに明示されるものを、連辞的隠喩とよぶ。媒体だけが明示されるものについては、媒体の統語的役割に応じて、名詞が媒体となるものと動詞が媒体となるものが区別される。前者を名詞的

隠喩、後者を動詞的隠喩とよぶ²。

連辞的隠喩

連辞的隠喩は、媒体と趣意が、ともに明示される隠喩である。男は狼だが代表となる、これまでもっともよく分析されてきた隠喩の形式は、[AはBである]というコピュラ文である。

(1) 嘘は河豚汁である。その場限りで祟がなければこれほど旨いものはない。

(夏目漱石「虞美人草」:174)

(1)では、「河豚汁」が「嘘」の見立てとなっている。河豚汁という概念を通して、嘘のもつ特定の側面が焦点化される。ここでは、隠喩の理解によって、祟りがあるが大変旨い、という性質が際立ちを得る。見立ての理解を支える、類似性の明示的表現を根拠(ground)という。「その場限りで祟がなければこれほど旨いものはない」という表現は、嘘と河豚汁との共通点を明示することで類似性を保証するものであり、見立ての根拠となるものである³。

次の例では、[AのB]という広義の所有表現(possessive expression)によって、媒体と趣意が連結されている。

(2) 胡麻塩の頬髯が一握ほど垂れている。

(森鷗外「大発見」:14)

(2)では、「胡麻塩」は「頬髯」を喩えており、胡麻塩が白黒でまだらであるという性質に焦点が当てられ、これを介して頬髯の状態が理解される。(1)と異なり、根拠は明示されていない。所有表現による隠喩では、たとえばもみじの手、氷の心のように、たいてい根拠は省略される。その点では、所有表現による連辞的隠喩が可能となるためには、ある程度隠喩が慣習化されている必要があると考えられる。たとえば、(1)では、河豚汁の嘘という、修辞理解はむずかしくなる。

図4.2は、(1)(2)のタイプの連辞的隠喩の修辞理解に関するスキーマ **MTPR-cop** である。隠喩的作用でむすばれたランドマーク(たとえば「河豚汁」とトラジェクター(たとえば「嘘」)は見立ての関係となる。この二つの要素をむすぶ関係は、コピュラや所有表現によるものである。左の関係が見立ての関係であるのにたいし、右の関係は修辞理解のコンテキストである。隠喩的作用の媒体(「河豚汁」)から右の関係のランドマークへとのびる換喩的作用は、媒体のある性質(たとえば

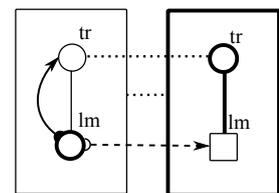


図 4.2: 連辞的隠喩 (MTPR-cop)

²本節の隠喩の分類については、山梨(1988: 15-20)も参照。

³ここで、第二文は媒体と趣意の連合関係を保証しているともいえる。[Xはその場限りで祟りがなければこれほど旨いものはない]という文脈においては、「嘘」と「河豚汁」はともにXとして代置可能であり、一時的な連合関係が与えられているといえる。いわば、項として同等の地位が与えられており、これによって「河豚汁」が「嘘」と対等であり、見立てであることが理解されることが考えられる。

[崇りがあるが大変旨い) だけを焦点化するプロセスをあらわす⁴。連辞的隠喩では、このように、見立ての関係を把握する隠喩的プロセスと、媒体と趣意の類似性を焦点化する換喩的プロセスが複合的に関わっていると考えられる。

動詞的隠喩

動詞的隠喩は、動詞句を媒体とする隠喩である。

- (3) 日頃からなる^{ひさし} 廂^{さえ} に遮^{おし}ぎられて、菜の花を 染め出す 春の強き日を受けぬ^{だけ} 広き額^{だけ} 丈は目立^{あおしろ}って蒼^{あおしろ}白い。

(夏目漱石「虞美人草」: 4)

動詞的隠喩では、動詞とその項との意味論的な逸脱が、修辞の条件となる。(3)では、「染め出す」は慣習的に意志をもつものを行為主体にとるので、「日」が行為主体となるのは意味論的に逸脱的といえる。ここから、日に当たって菜の花が咲く様子を「染め出す」といって喩えていることが理解される。

上述の例からも分かるように、動詞的隠喩は、擬人表現 (personification) と結びつきやすい。擬人表現とは、物を人に喩える隠喩である。

- (4) 月が温泉の山の^ゆ 後^{うしろ} からの^つと 顔を出した。

(夏目漱石「坊っちゃん」: 137)

- (5) 秋風に吹き^{おこ}起されると、落葉どもは一斉に 立ち上って走り出し、ひとところに集まったと思ううちに、旋風につれて舞い上った。

(川端康成「落葉」: 267)

(4)では、「月」は字義通りの顔を持っていない点では逸脱といえる。ここでは、「顔を出す」という表現によって、月の出る様子が人の顔の動きに喩えられている。(5)でも、「落葉」は足を持っていない点で逸脱的であるが、「立ち上って走り出し」は落葉の吹き飛ぶ様子を喩えていると理解される。

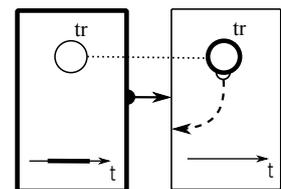


図 4.3: 動詞的隠喩 (MTPR-pred)

図 4.3 は、動詞的隠喩の修辞スキーマ **MTPR-pred** である。隠喩的作用でむすばれた二つの関係 (たとえば媒体「染め出す」と趣意 [咲かせる]) は、動詞句の見立て関係をあらわす。この見立て関係が理解されるためには、トラジェクターのつくる文脈が必要となる。たとえば(4)では、「月」は [上る] ものであるという慣習的な文脈によって、隠喩の理解が可能となる。換喩的作用は、この種

⁴連辞的隠喩では、媒体のもつ特定の性質のみが際立つ。これは、「河豚汁」のもつ多くの性質のうち、[崇りがあるが大変うまい] という性質のみが際立つ表現であるという点で、提喩的といえる。提喩については 4.6.2 節を参照。

の慣習的な文脈形成のプロセスをあらわす。動詞的隠喩では、連辞的隠喩と異なり、見立ての関係は明示されない。この種の暗示的な見立ての関係の理解が可能となるためには、隠喩的作用でむすばれるプロセス関係だけが問題となるのではなく、動詞の項となる名詞句のつくる換喩的文脈が必要となる。

名詞的隠喩

名詞的隠喩は、名詞句を媒体とする隠喩である。

- (6) ^{しもきょう}下京の町を離れて、加茂川を横ぎった頃からは、あたりがひっそりとして、ただ ^{へさき}舳に割かれる水の ささやき を聞くのみである。

(森鷗外「高瀬舟」：351)

- (7) ^{ごう}轟と音がして、白く光る鉄路の上を、文明の ^{ちようだ のたくつ}長蛇が蜿蜒て来る。文明の 長蛇 は口から ^{けむり}黒い煙を吐く。

(夏目漱石「草枕」：174)

(6)では、水は口をきかないから、「ささやき」は水の音を見立てる表現であると理解される。(7)では、一見すると、明らかな意味論的逸脱があるわけではない。「文明の」「黒い煙」「吐く」という語句と、第一文のなすコンテキストから、鉄道のドメインが形成され、この文脈が隠喩の趣意のドメインとなって、「長蛇」は[列車]であるという見立てが理解される。(7)からよく分かるように、名詞的隠喩の見立て関係を理解するためには、主語と述語の間の意味論的逸脱だけが問題となるのではなく、前後の表現から換喩的に連想されるコンテキストが広く問題となることが分かる。

図 4.4 は、名詞的隠喩の修辞スキーマ **MTPR-nom** である。ふたつのもの（たとえば媒体「ささやき」と趣意[音]）をつなぐ隠喩的作用は、名詞句の見立て関係をあらわす。動詞的隠喩の趣意のドメインは、トラジェクターとなるものが中心となって換喩的に形成するのにたいし、名詞的隠喩の趣意のドメインは、動詞句や他の名詞句がより詳細なコンテキストをつくることによって、修辞理解が可能となる。スキーマでは、その代表として動詞句のつくる文脈形成のプロセスが反映されている。右のプロセス関係（たとえば「聞く」）から隠喩的作用の趣意（たとえば[音]）へとのびる換喩的作用は、慣習的な連辞関係にもとづく文脈形成のプロセスをあらわす。

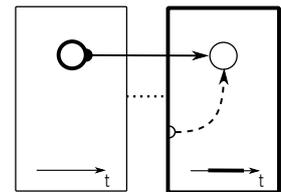


図 4.4: 名詞的隠喩 (MTPR-nom)

4.2.2 直喩

直喩 (simile) とは、比喩であることを明示する表現をともなう修辞である。「ように」「如く」といった直喩の標識のように、修辞作用をプロファイルする表現を **作用表現 (action marker)** と

よぶ。直喩の標識は、作用表現のひとつとなる。

直喩を、媒体の形式によって分類するならば、隠喩と同様に、名詞的直喩、動詞的直喩が区別される。また、直喩ではそれに加えて、ぱっと花が咲いたように彼女は嬉しい顔をする、といったように、節が媒体となる節的直喩も存在する⁵。本節では、名詞的直喩をとりあげる。基本的な名詞的直喩は、媒体と趣意とがプロファイルされることで、名詞句の見立てに焦点があてられる。この種の直喩を描写の直喩とよぶ。これにたいし、ふたつの名詞句を統合する動詞の多義性に焦点があてられるタイプもあり、これを多義解消の直喩とよぶ。

描写の直喩

描写の直喩は、ものの類似性にもとづく見立て関係を明示することで、趣意となる性質を焦点化する、名詞的直喩である。

- (8) されば「さんた・るちや」の前に居並んだ 奉教人衆は、風に吹かれる穂麦のように、誰からともなく頭を垂れて、^{ことごとく}「ろおれんぞ」のまわりに ^{ひざまず}跪いた。

(芥川龍之介「奉教人の死」：262)

- (9) 立ち上がる時に向うを見ると、路から左の方に バケツを伏せたような 峰が ^{そび}聳えている。

(夏目漱石「草枕」：9)

(8)では、「風に吹かれる穂麦」で「奉教人衆」をたとえていることが作用表現である「ように」によって明示されている。(9)では、「ような」によって「バケツ」と「峰」の見立ての関係が明示されている。

作用表現は、見立ての解釈を強力に誘引する。次の例では、語句のレベルにおける、媒体と趣意が内面的にもつ類似性にもとづくというよりは、作用表現によって、媒体と趣意との見立ての関係が発見的に形成される⁶。

- (10) フン先生は地震のときの肉屋の店先のコンニャクのように震えだした。

(井上ひさし「ブンとフン」：11)

- (11) 彼は ^{しょう}性の悪い ^{かき}牡蠣の如く ^{むか}書齋に吸い付いて、かつて外界に向って口を開いた事がない。

(夏目漱石「吾輩は猫である」：27)

(10)では、そもそも「地震のときの肉屋の店先のコンニャク」というのは、見た経験がある人の方が少ないと思われるが、作用表現「ように」の存在によって、プルプルとしたコンニャクの動きが「フン先生」と「コンニャク」の類似性とみなさざるを得なくなる。(12)では、「牡

⁵作用表現のない隠喩的なものに関しては、節を媒体とした比喩は諷喩がこれにあたるものといえる。諷喩(allegory)とは、明白な見立て関係を利用して、隠喩を連続するものをいう。たとえば、猿も木から落ちるといった諺表現には、諷喩が多く見られる。

⁶直喩による発見的に認識については、佐藤(1978: 48-78)も参照。

蠣」が「性の悪い」という修飾表現によって擬人的にあらわされている。ここでは、「彼」と「性の悪い牡蠣」の間には、慣習的には類似性は存在しないが、作用表現「如く」によって、見立ての解釈が誘引される。

さらに、次の例では、媒体に内在することが必ずしも明らかでない性質が、見立ての根拠となる。

(12) いくら人間が卑怯だって、こんなに卑怯に出来るものじゃない。まるで豚だ。

(夏目漱石「坊っちゃん」: 43)

(12)では、「豚」が卑怯であることが前提されているが、そもそも豚は卑怯の代名詞たるものか。しかし、豚で人間を見立てる関係が[まるでXだ]によって明示され、なおかつ根拠が明示されているため、「豚」は卑怯なものとして解釈せざるをえない。このように直喩の修辞過程は、単に隠喩に標識をつけたものとして済ますことのできない、特有の理解メカニズムがはたらいているといえる。

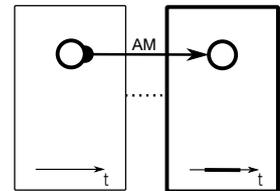


図 4.5: 描写の直喩 (SIM-decrp)

図 4.5 は、描写の直喩のスキーマ **SIM-decrp** である。作用表現 AM (たとえば「如く」) にプロファイルされた隠喩的作用でむすばれた二つのプロファイルされたもの (たとえば媒体「性の悪い牡蠣」と趣意「彼」) は、直喩の見立て関係に対応する。見立て関係は AM の誘引する隠喩的作用が支配的であり、動詞的隠喩のように、動詞からの換喩的コンテキストは相対的に背景化される。(10)(11)(12) のような例では、作用表現の存在によって隠喩的作用が生じていることをみた。

多義解消の直喩

多義解消の直喩は、見立ての関係よりも、述語の多義性に修辞的焦点が置かれる、名詞的直喩である。

(13) 浅草は^{あつら}詠えた股引のごとく、ぼくの体に^{よく}馴染み出していた。

(井上ひさし「モッキンポット師の後始末」: 32)

(14) (…)あのプロを見い、^{こごうし}巡查が^{おちぶれ}護衛しちよるわと言わせし者が、籠の中のきりぎりす同様、^{こごうし}小格子につかまる^{おちぶれ}まで零落ては(…)

(幸田露伴「一刹那」: 6)

(13)では、文字通りには、「浅草」が「詠えた股引」によってたとえられているといえる。しかしさらに、[浅草に馴染む]ことが[詠えた股引に馴染む]ことでたとえられていると見ることも可能である。ここで[馴染む]という語は、肌に馴染むことと住み慣れることという、異なるニュアンスで二重に読み込まれているといえる。さらに言えば、「浅草」と「詠えた股引」のあいだには、特に解釈上類似性は明確ではなく、はっきりした見立て関係はみられない。そ

の点からは、作用表現「ごとく」のプロファイルする隠喩的作用は、ここでは述語の多義性にいわば解消されているといえる。(14)でも、人間がきりぎりすに類似しているということよりは、[人間が小格子につかまる]ことが[きりぎりすが小格子のつかまる]ことでたとえられていると見ることができる。ここでは「つかまる」は、文字通りにつかまることと逮捕されるという比喩的意味とを二重に読み込まれる。直喩による見立て関係が、「つかまる」の多義性にもとづく比喩に対応していると考えられる。

図 4.6 は、多義解消の直喩の修辞のスキーマ **SIM-pred-focus** である。作用表現 AM (たとえば「ごとく」) でプロファイルされた隠喩的作用によってむすばれる二つのもの (たとえば「浅草」と「詭えた股引」) は、文字通りの見立て関係をあらわす。これにたいし、プロセス関係をむすぶ隠喩的作用は、動詞の多義性を利用した見立て関係をあらわす。描写の直喩 **SIM-decrp** との相違は、一つの動詞 V_1 が異なるプロセス関係を二度プロファイルしている (たとえば [股引が馴染む] と [浅草に馴染む]) ことである。これは、多義解消の直喩において、動詞が異なるニュアンスで二度読まれていることをあらわす。

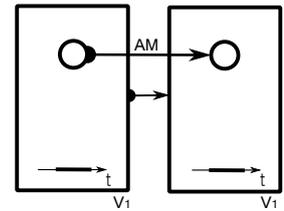


図 4.6: 多義解消の直喩 (**SIM-pred-focus**)

このように、名詞的隠喩から多義解消の直喩までを連続的に提示すると、次のことが明らかになる。すなわち、名詞の見立て関係と、動詞の多義性は段階的であるということである。隠喩的作用は二つのドメインを形成する。それは媒体のドメインと趣意のドメインである。この二つの関係が、見立てとして理解されるか、動詞の多義性として理解されるかによって、異なる修辞的効果が得られる点は興味深い。

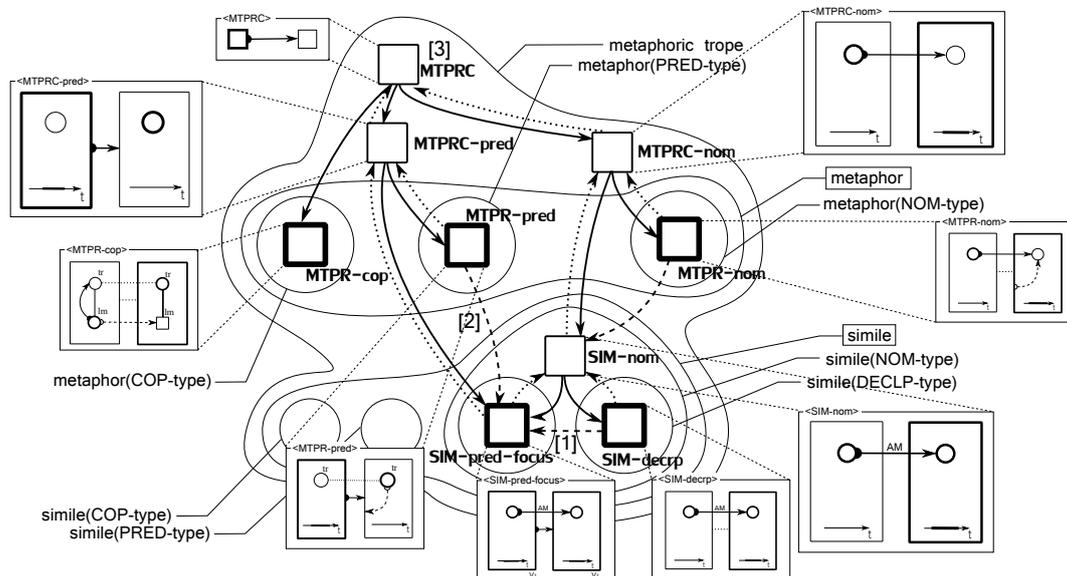


図 4.7: 隠喩と直喩のネットワーク

図 4.7 は、隠喩と直喩の修辞ネットワークである。[1] **SIM-nom** は、名詞的直喩のスキーマである。描写の直喩 **SIM-decrp** と多義解消の直喩 **SIM-pred-focus** の差異は、プロセス関

係が対応関係にあるか隠喩的作用でむすばれるかであり、共通点は、名詞句のあらわすものが隠喩的作用でむすばれることである。また、本節では名詞的直喩だけをとりあげたが、形式的には、動詞的直喩 (simile(PRED-type))、連辞的直喩 (simile(COP-type)) が区別され、それぞれ修辞の 카테고리をなすといえる。[2] **MTPRC-pred** は動詞媒体の見立ての修辞のスキーマであり、これを介して多義解消の直喩 **SIM-pred-focus** と動詞的隠喩 **MTPR-pred** は拡張の関係となる。[3] **MTPRC** は見立ての修辞 (metaphoric trope) のスキーマである。このスキーマは、本節で扱ったすべてのスキーマを事例化する。隠喩、直喩は見立ての修辞という点で共通するが、下位修辞となる具体性の高いスキーマは、それぞれ特有の構造をもつことを具体例とともにみた。

4.2.3 比喩くびき

比喩くびき (attelage) ⁷ とは、抽象的な名詞句と具体的な名詞句とをひとつの動詞句によって結合する修辞である⁸

- (15) この生徒は耳と耳の間が風を通す^{ほらあな}洞穴^{ほらあな}になっていて、風と一緒に先生の言葉も通過させてしまう。

(坂口安吾「勉強記」: 104)

- (16) さては此人のなさけに^{ぶし}附子の^{ぶし}毒の廻らぬうち、指を切ってはなされしだけにて、命はとりとめたりと思うに、あり^{がた}難^{すきま}さは透間もる山下しの風と共に身にしみて

(幸田露伴「一刹那」: 15)

(15) では、字義通りには、耳の穴を「風」と「言葉」が「一緒に」通過するということである。しかし、耳の穴を風が通過するというのは、誇張的な意味論的な逸脱がある。これを修辞の条件として、ここでは「言葉」と「風」とは見立ての関係として理解され、風のもつ性質のうち、[素通りするもの] という性質が焦点化される。また、風の通過は文字通りの通過であるが、言葉の通過は、聞き流すという意味となる。その点では、「通過させてしまう」の多義性が、この見立て関係を成立させる根拠になっているとみることも可能である。(16) では、字義通りには、「あり難さ」と「風」が「共に」身にしみるということである。しかし、風の話は文脈上あまり関与的ではないといえる。この不整合性を修辞の条件として、比喩的な

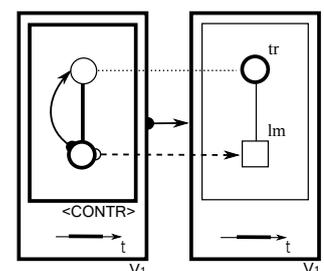


図 4.8: 比喩くびき (ATLG)

⁷ *attelage* は le groupe μ (1981/1970) などが論じているフランス語の修辞学用語である。日本語では、「異質連立」ともよばれる (佐藤他 2006: 565-568)。

⁸ 一般に、二つの語句を一つの語句によって結合する表現はくびき (zeugma) とよばれ、隠喩、直喩を含む見立ての表現にも広範にみられる。zeugma という用語は多義的であり、少なくとも、狭義のくびき (4.7.1 節)、比喩くびき、破格くびき (4.8.3 節)、異義兼用 (4.3.1 節) のいずれの意味でも用いられる。本稿では、zeugma という用語を狭義のくびきにのみ用いる。

解釈が誘引されるといえる。これは[あり難さが身にしみる]ことが、[風の冷たさが身にしみる]ことで喩えられているという、動詞の見立て関係とみる解釈も可能である。このように、比喩くびきには大きく二つのプロセスが複合的に関わっている。第一は、「と」や「と共に」で連結された二つの名詞句を、見立て関係としてみるプロセスであり、第二は、述語の多義性を、見立て関係としてみるプロセスである。

図 4.8 は、比喩くびきの修辞スキーマ **ATLG** である。プロセス関係の成分構造となる関係のスキーマは、連辞的隠喩のスキーマ **MTPR-cop** とほとんど同一である。比喩くびきでは、コピュラや所有表現にかわって、並列表現 **CONTR** (たとえば「と共に」) によって、二つのものの関係が成立している。**MTPR-cop** とはことなり、左の関係と右の関係は対応関係にはない。連辞的隠喩では、ともに広義のコピュラ関係であるが、比喩くびきでは、左は並列関係であるのにたいして右はコピュラ関係となる。並列関係の対称性から、左の関係にはトラジェクター／ランドマークの別はない。換喩的作用でむすばれた二つの要素 (たとえば媒体「風」と趣意[素通りするもの]) は、隠喩的作用の媒体となるものの性質の焦点化をあらわす。また、[風の冷たさが身にしみる] ように、[あり難さが身にしみる] というように、動詞の見立て関係もみられる。プロセス関係の隠喩的作用はこれをあらわす。この見立ては動詞の多義性を利用したものであり、 V_1 (「身にしみて」) は、二つのプロセス関係が同じ音韻形式をもつことをあらわす。

4.2.4 比喩性と多義性

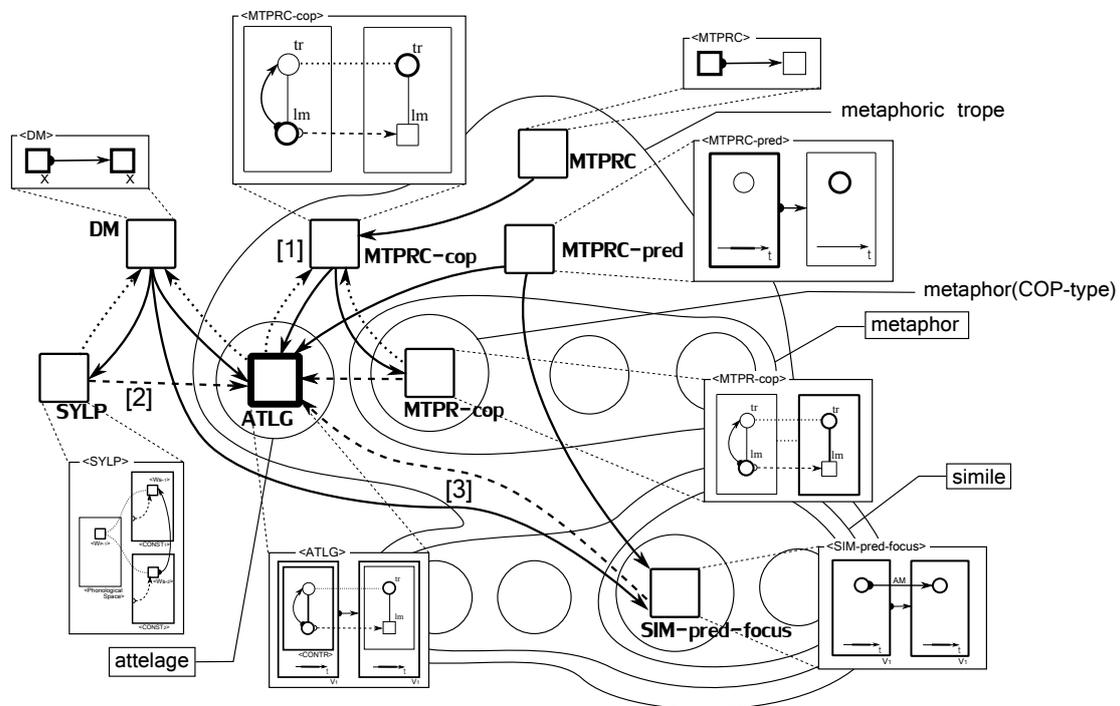


図 4.9: 見立ての修辞のネットワーク

図 4.9 は、見立ての修辞のネットワークである。[1] **MTPRC-cop** は連辞関係による見立ての修辞のスキーマであり、これを介して比喻くびき **ATLG** は連辞的隠喩 **MTPR-cop** の拡張とみることができる。この点からは、比喻くびきは並列表現による連辞的隠喩とみられることも可能である。比喻くびきは、隠喩と直喩の両方と拡張関係をもつという点で、この境界にあたる修辞とみられることもできる。[2] **SYLP** は異義兼用のスキーマである。異義兼用は一語が二つの意味を担う修辞であり、4.3.1 節で詳説する。**DM** は、**ATLG** と **SYLP** からのスキーマ化として得られる、二重読み (double meaning) のスキーマである。比喻くびきの動詞句は二重の読みがなされる。この点で、言葉遊びと関わる異義兼用と共通する構造をもつといえる。[3] **DM** は多義解消の直喩 **SIM-pred-focus** も事例化する。これを介して、比喻くびきと多義解消の直喩も拡張の関係とみることができる。

比喻性は、一見すると、語句のレベルの問題と思われる。確かに、見立て関係を生じるのは語句のレベルであるといえる。しかし、隠喩のスキーマから分かるとおり、隠喩的作用による見立て関係は、換喩的な文脈が決定的な役割を果たす。連辞的隠喩では、媒体の性質を換喩的に焦点化するプロセスが、動詞的隠喩では、主語が趣意の文脈を換喩的に限定するプロセスが、名詞的隠喩では、動詞句やその補部が趣意の文脈を限定するプロセスが、見立て関係の理解を可能とする。逆に直喩では、作用表現によって隠喩的作用がプロファイルされ、また趣意が明示されることから、前後文脈の役割は小さくなる。それどころか、多義解消の直喩では、趣意の文脈を形成するはずの動詞句は、その仕事をやめて、見立て関係の形成に加担し、文全体が見立て関係に近づいていくことをみた。このような解釈が可能となるためには、動詞句が多義的である必要がある。多義性によって、動詞句は媒体のドメインと趣意のドメインの双方に属することができるようになるわけである。比喻くびきは、この見立て関係の解釈と、多義解消の解釈がせめぎあう修辞といえる。比喻くびきのような混合的な修辞過程が、ひとつの修辞カテゴリーとなっていることは、修辞学の見立て関係に対する関心の高さをうかがわせるものである。

4.3 言葉遊びの修辞

ギローによれば、言葉遊び (wordplay) とは「言葉の音の類似が濫用されているすべての文を指す分類名」である (Guiraud 1979/1976: 7)。言葉遊びは、日常の言語コミュニケーションが朗らかとなるだけでなく、言語の創造性にかかわる修辞現象でもある。言語音の類似は、一見すると強引とも思われる連想関係を築く。狭義の文法では不合理とも思われる一方で、音的類似はことばを強く結びつける。このことから生じる音と意味との剥離、二重性は、言葉遊びに共通する修辞性といえる。

本節では、4.3.1 節で異義兼用、4.3.2 節で異義反復、4.3.3 節で類音語接近、4.3.4 節でかすりを分析していく。ギローは、ヤーコブソンを援用して、言葉遊びを隠喩性と換喩性によって分類している。図 4.10 は、ギローによる言葉遊びの分類軸に関わる表である。これによると、本節でとりあげる四つの修辞は、すべて代入 (substitution) の言葉遊びである。代入の言葉遊びとは、連辞関係において、「与えられた位置において交換可能な」(ibid., 8) 語によって成り立つ言葉遊びであり、隠喩 (métaphore) と関わる。本節でとりあげるのは、代入の列の、主に音声的、語彙的な側面に関わる修辞現象である。

	連 鎖 <i>enchaînement</i>	代 入 <i>substitution</i>	挿 入 <i>inclusion</i>
音 声 的	連結 <i>concaténation</i>	語る合わせ <i>homonymie</i>	アナグラム <i>anagramme</i>
	連鎖韻 <i>rimes enchaînées</i>	掛け言葉 <i>équivoque</i> 地 口 <i>calembour</i>	換字地口 <i>contrepèteries</i>
語 彙 的	連結 <i>concaténation</i>	語いかけ <i>synonymie</i>	折 句 <i>acrostiche</i>
	妙なる死体 <i>cadavre exquis</i>	地 口 <i>calembour</i> なぞ遊び <i>charade</i>	紀年文字 <i>chronogrammes</i>
語 彙 的	自動記述 <i>écriture automatique</i>		語順転換 <i>métabole</i> 分節詩 <i>rimes brisées</i>
絵 文 字	判じ絵 <i>rébus</i>	判じ絵 <i>rébus</i>	カリグラム <i>calligramme</i>
	連辞軸 <i>axe syntagmatique</i>	範列軸 <i>axe paradigmatic</i>	連辞軸 <i>axe syntagmatique</i>
	隣接性 <i>contiguïté</i>	類似性 <i>similarité</i>	移 動 <i>déplacement</i>
	換 喩 <i>métonymie</i>	比 喩 <i>métaphore</i>	音位転換 <i>métathèse</i>

図 4.10: Guiraud (1979/1976: 9-10)

この種の修辞表現を理解するためには、音韻形式の類似にもとづく二語の連合関係を認知する必要がある。本節では、音声・文字を含む記号の形式を、広く音あるいは音韻形式などと呼ぶこととする。異義兼用は、音韻形式の完全な一致によって、二語の意味が一つの音韻形式によってあらわされる。異義反復は、音韻形式は完全に一致することもあれば、活用の語幹のみが一致することもある。いずれにしろ、二語が同語であることが修辞理解に必要となる。類音語接近は、部分的に共通音を含む語の並置であり、共通音は語の音韻形式の一部である。かすりでは、一方の語の言語音を変容させることで、一時的に類音性をつくりだす、もじりという操作がともなう。

4.3.1 異義兼用

異義兼用 (syllepsis) とは、一つの語句が二つの異なる意味をもつ修辞である⁹。

⁹ 異義兼用は、文法的な定義としては、^{かけことば}掛詞と等価である。掛詞という用語は、日本語の修辞の文脈で主に用いられる。本節であつかった異義兼用は、どちらかといえば遊びというニュアンスであるが、掛詞は、「趣向を凝らした美文には欠かせぬ言葉のあや」(尼ヶ崎 1988: 127) というニュアンスを含む用語法である。

- (1) 橋の上から見ると、川は垂鉛板のように、白く日を反射して、時々、通りすぎる川蒸気がその上に眩しい横波の鍍金をかけている。

(芥川龍之介「ひよつとこ」：129-130)

(1) では、動詞「かけている」が、[横波を VP] と [鍍金を VP] という、二つの構文に同時に位置づけられることにより、二つの意味を兼用している。鍍金をかけるというのは、波をかけるように、面に液体を拡げる運動ではないが、音韻形式の一致から二語の意味の連合関係を生じている。ここでは、動詞の多義性を利用した修辭的効果が主に問題となるといえる。動詞の多義的解釈の要因としては、「川は垂鉛板のように」という直喩が、水と金属との見立て関係を形成していることが考えられる。

(1) では、動詞の多義性によって、一つの動詞が二つの異なる意味をもつ、異義兼用をなしている。これにたいし、次の例では、一つの名詞が二つの異なる意味をもつ。

- (2) 梵語とかバリー語はなるほど大変難物だ。仏蘭西語は動詞が九十幾つにも変化するということだが、そんなもの梵語の方では朝めし前の茶漬けにもならないという話なのである。

(坂口安吾「勉強記」：106)

- (3) 突然、頭上でカラカラと高笑いの声がしたので、目から出た火の明りをたよりに見上げてみたが

(織田作之助「ニコ狎先生」：134)

(2) では、「朝飯前」が [そんなものは X だ] と [X の茶漬け] という二つの構文にまたがって位置づけられることにより、二つの意味を兼用している。前者は慣用表現としての意味であり、後者は字義通りの意味といえる。(3) では、「火」が [目から出た N] と [N の明り] にまたがって同時に位置づけられることで、二つの意味を兼用している。ここでも、前者は慣用表現としての意味であり、後者は字義通りの意味となっている点で、異義兼用をなしている。

異義兼用では、ひとつの形式に対して、二つの意味が結合している。たいていの文のように素朴に一対一対応と解釈される記号と比較すると、異義兼用する記号では、二つ分の記号が音韻極においてショートし、結合する。この結果唯一つの音韻形式に、二つの意味が結合する。この二つの記号の音韻極が融合する要因のひとつは、文脈となる二つの構文の対比的区別であると考えられる。

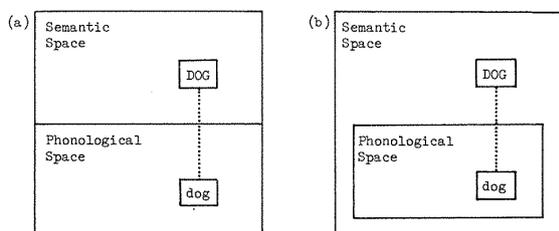


図 4.11: Langacker (1987: 80)

異義兼用のスキーマについて述べる前に、記号の音韻形式の解釈について補足しておこう。図 4.11 は、認知文法における、記号の音韻

形式と意味の関係についての、二つの観点をあらかず図である。3.1.1節で述べたように、音韻空間とは、人間の認知機構において音をあつかう領域であり、意味空間とは、思考や概念化をあつかう領域である。(a)は、素朴な記号観をあらわす図であり、記号 *dog* の意味極は意味空間に、音韻極は音韻空間に位置づけられる。(b)では、音韻空間が意味空間に包含され、音韻極は広い意味では意味空間に位置づけられる。音は、厳密には、知覚的な存在である。言語音の知識は多面的であり、少なくとも、聴覚イメージの観点、調音的な観点、発声の運動感覚的な観点、その聴覚フィードバックの観点からの、言語音に関する知識をもっている。この点からは「音は、少なくとも多くの言語学的目的に関しては、概念である。」(Langacker 1987: 78) 記号の音韻形式をあつかうことは、その音を概念として認知することであるという点で、広く意味空間における概念化であるといえ、より厳密には「言語記号は広い意味での意味空間における二つの構造の対応関係として定義される」(ibid., 79)。

音韻形式は、平常の言語的認知プロセスでは、意味解釈の媒体として背景化されている。しかし、一度平常の記号関係が崩れ、一対一対応が自明ではなくなると、音韻形式自体が概念化の対象となる場合があり、異義兼用はその一例である。

図 4.12 は、異義兼用の修辞スキーマ **SYLP** である。隠喩的作用で結ばれた二つの要素 W_{S-1} と W_{S-2} は、兼用語(たとえば「朝飯前」)の二つの意味である。この意味は、ひとつの音韻形式 W_{P-1} と対応関係をもつ。音韻形式は、音韻空間において解釈される対象となること、コンテキスト Phonological Space によってあらわされる。二つの意味極 W_{S-1} と W_{S-2} は、異なる二つの構文(たとえば[そんなものは X だ]と[X の茶漬け])の中に、それぞれ位置づけられることにより、 W_{P-1} は多義性をおびる。このことが $CONST_1$ 、 $CONST_2$ からの換喩的作用であらわされる。この換喩的作用は、たとえば[そんなものは X だ]という構文において X を「朝飯前」として位置づけることで、「朝飯前」の慣用表現としての意味を顕在化させることをあらわす¹⁰。異義兼用では、ある語に潜在する多義のうち、二つが同時に顕在化される点で、平常の文法からは逸脱的である。 W_{S-1} と W_{S-2} とのあいだにはたらく隠喩的作用は、二つの意味を対比的関係として理解するプロセスをあらわす。ここでは W_{S-2} から W_{S-1} へと矢印が向いているが、厳密には二つの意味は相互作用的なものであり、修辞的效果の点で単純な焦点シフトのプロセスとは異なる。

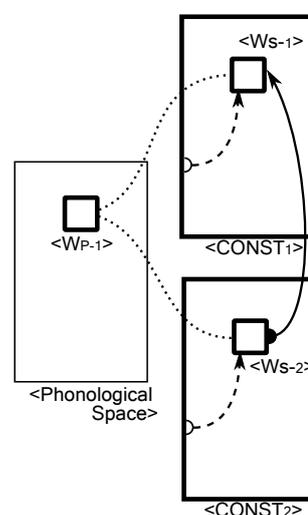


図 4.12: 異義兼用 (SYLP)

4.3.2 異義反復

異義反復 (antnaclesis) とは、同じ語を異なる意味で反復する修辞である。

(4) だが、なにひとつ手がかりはつかめなかった。 つかんだのは川底の泥ぐらいなもので

¹⁰この換喩的作用のプロセスは、カテゴリー化の観点からは、スキーマの事例化のプロセスを対応すると考えられる。たとえば構文スキーマ [そんなものは X だ] と [そんなものは朝飯前だ] は事例化の関係をもつ。

ある。

(井上ひさし「ブンとフン」: 38)

- (5) あの瀬戸物はどこで出来るんだと博物の教師に聞いたら、あれは瀬戸物じゃありません、伊万里ですといった。

(夏目漱石「坊っちゃん」: 105)

(4) では、動詞[つかむ]が異なる意味で反復されている。それぞれ、行為の対象となる「手がかり」「川底の泥」のつくる文脈によって、第一文では、[みつける]という比喩的意味で、第二文では、字義通りの意味で用いられており、異義反復と理解される。(5) では、名詞「瀬戸物」が、異義反復されている。第一文では、産地を聞いていることから、陶器一般の意味で「瀬戸物」が用いられている。一方、第二文では、伊万里との対比から、瀬戸の陶器という語源的意味で用いられている。

異義反復では、二つの語が二つの異なる文脈で反復されることで、意味の差異が明確になる。(4) では、字義通りの意味と比喩的な意味、(5) では、語源的意味と俗語的な意味が問題となる。次の例では、慣用表現としての意味と字義通りの意味の差異が問題となる。

- (6) 骨が細く、体が細く、顔は特^{ことさら}更細く出来あがったうえに、取る年は争^{あらしわ}れぬ雨と風と苦勞とを吹き付けて、辛^{から}い浮世に、辛^{から}くも取り留めた心さえ細くなる許^{ばかり}である。

(夏目漱石「虞美人草」: 199)

- (7) 恋いにし人を、慕いし人を、その思^{おもい}のおもいもかけず、其^{その}夢のゆめにも知らず

(幸田露伴「一刹那」: 16)

(6) では、「辛い浮世」では、世知辛い世の中の意味で用いられている。一方、同じ語が、「辛くも」では、やっとのことだという意味の慣用表現の部分となる語として用いられている。(7) では、「思」は気持ちの意味で用いられている。同じおもいという音の語が、「おもいもかけず」では、全く予想もしないという意味の慣用表現の部分として位置づけられている。

異義反復の理解が可能となるには、広義の構文がつくる文脈の差異を認知することで、二つの異なる文脈を理解する必要がある。たとえば(4)では、[てがかりをV][川底の泥をV]という二つの構文のつくる文脈の差異によって、それぞれ精緻化される[つかむ]が異なる意味となる。この点は、異義兼用とも共通している。

図 4.13 は、(4)–(7)のタイプの異義反復に関するスキーマ **ANTCLA** である。Phonological Space は、音韻的解釈のドメインをあらわす。その成分構造となる要素 W_{P-1} は、修辭的焦点となる語 (たとえば[つかむ]) の音韻極である。二つの要素 W_{P-1} をつなぐ対応線は、同語の反復をあらわす。

W_{P-1} の成分構造となるのは、動詞の語幹（たとえば、つかむの [つか]）のような、より小さい音韻単位の連続である。実線であらわされた要素間の関係は、語や語幹を形成している音素・モーラの連結性の認知（たとえば「つかんだ」における /tsu/ と /ka/ の連結）をあらわす。音連続の長さは可変的であり、スキーマでは二つの要素だけが全体を代表して表示されている。この成分構造の対応関係によって、二語の音韻論的差異は、異形態としての差異とみなされ（たとえば「つかめ」と「つかん」はつかむの異形態）、結果的に二つ W_{P-1} をつなぐ語レベルの対応関係が認知される。異義反復では、異なる意味をもつ同じ語を接近して用いており、音韻的な逸脱がある。この二つの意味 W_{S-2} と W_{S-1} とのあいだにはたらく隠喩的作用はこれを連合関係として潜在化し、対比的に理解する認知プロセスをあらわす。二語の意味の差異に気づくのは、構文的な環境の差異を認知するからであると考えられる。これをあらわすのが、 $CONST_1$ と $CONST_2$ から語へとはたらく換喩的作用である。この換喩的作用は、 W_{P-1} が潜在的に連合関係をもつさまざまな多義的意味のうち、ひとつだけ（たとえば、つかむの [みつける] という比喩的意味）を顕在化させ、意味を限定する認知プロセスをあらわす。

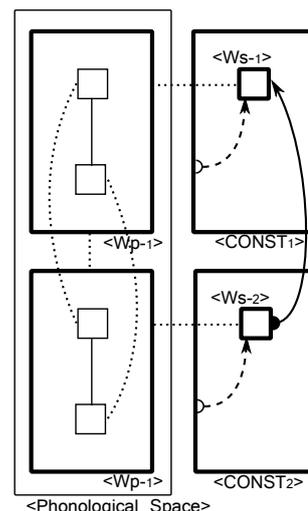


図 4.13: 異義反復 (ANTCLA)

異義反復では、一見すると語レベルの多義性だけが問題となる。しかし実際には、語レベルを越えて、特有の修辭的効果がみられる。(4) では、手がかりを見つけることと、川底の泥をつかむことが節のレベルで対比され、成功と失敗の対比が含意される。(5) では、陶器に関する漠然とした質問と、それに対する知識的な答え、言い換えると、知識の有無が、(6) では、世知辛いこと世の中と、その中でやっとのことで生きることが、(7) では、強い気持ちと、それに全く気付かないということが、対比的に理解されるといえる。

4.3.3 類音語接近

類音語接近 (paronomasia) とは、意味の差異が大きく、音が類似する語を近くに並置する修辭である。

- (8) かっぱかっぱらった
 かっぱらっぱかっぱらった
 とってちってた¹¹

(谷川俊太郎「かっぱ」: 36)

(8) の下線部では、「かっぱ」と「かっぱらった」が並置されることで、本来意味上のつながりは無い二語が、音韻的な類似を接点として連合される。ここでは、下線部だけでなく、/appa/ という音連続の反復によって、第一行と第二行の全体が類音語接近をなしているといえる。

¹¹佐藤他 (2006: 160) が言葉遊びの例文として挙げている。

類音語接近で特にはっきりと分かるように、同じ音が繰り返される時、音が前景化され、意味は相対的に背景化される。「言葉の表面的な音に注意が集まり、深く意味を探ろうとしない傾向が生まれる」のである(尼ヶ崎 1988: 138)。類音語接近では、異義反復と異なり、音の反復と意味の対比が並行的ではない。異義反復は、語レベルの反復である。語は意味を担う言語単位であり、多くの場合、語の反復は意味の対比をとまなう。一方、類音語接近では、語の反復は問題となっておらず、音の類似が焦点化される。その結果、音韻形式の解釈と意味の解釈とが対応せず、二重的になっているといえる。

次の例では、あからさまに類似音の二語が接近しているわけではない。

- (9) しかし踊子たちが傍にゐなくなると、却つて私の空想は解き放たれたやうに生き生きと踊り始めた。

(川端康成「伊豆の踊子」: 298)

(9) では、「踊子」と「踊り始めた」は一見平常の文脈にあるかのようであるが、後者のトピックが「踊子」ではなく「空想」にずらされることにより、二者の文脈のずれが強調され、類音語接近をなしているといえる。

比喩の媒体は色々可能であつて、「踊り始めた」という媒体が選択されているところに、類音性にかかわる作為が感じられる。「踊子」と類似音をもつ述語を選んでいることによって、二語が接近しているかのような感覚を与えると考えられる。このように、類音性の認知は、音声や文字の物理的な接近が大きな要因となる他にも、文脈によって、わりあい離れた二語も類音の印象を与え得ることがわかる。

さて、次の例では、類音語接近と異義反復の連続性が示唆される。

- (10) 渋茶をすすりながら渋いカオをして、フン先生は考えた。

(井上ひさし「ブンとフン」: 49)

- (11) うそつききつき きはつつかない
うそをつきつき つきつつく

(谷川俊太郎「うそつききつき」: 36)

(10) では、「渋茶」と「渋い」は別語であり類音語接近をなしている。しかし、「渋茶」とは渋い茶のことであるとみれば、異義反復的ともいえる。この場合には、渋い茶は字義通りの意味であり、渋いカオは慣用表現の意味となる同語の反復と解釈される。(11)の下線部では、つくの連用形「つき」と名詞「つき」とが類音語接近をなしている。動詞[つく]と名詞[つき]は同語ではない。しかし、同一の音韻極をもつ語であるという点では、同音異義的ともいえる。このように、同語であるという認識は、意味カテゴリーの慣習的体系にもとづくものであつて、音にもとづくものではない。一見別語とみられるものを、比喩的拡張や語源的歴史などから広く同音異義語とするような場合には、類音語接近と異義反復とは接近していくと考えられる。

図 4.14 は、類音語接近の修辞スキーマ **PARONM** である。隠喩的作用で結ばれた二つの要素 W_{S-1} 、 W_{S-2} は、類音の二語（たとえば「かっぱ」「かっぱらった」）の意味極である。二つの意味極が、Phonological Space の二つの音韻極 W_{P-1} 、 W_{P-2} と対応関係をもつ。異義反復と異なり、語レベルの音韻形式である W_{P-1} と W_{P-2} は対応関係をもたない。さらに、類音語接近では、語の音韻極の成分構造もプロファイルされている。これは、類音性の認知に関して、語レベルよりも音素・モーラレベルが焦点化されることをあらわす。また、二語の類音性は意味とは独立に認知されており、意味極における、構文からの換喩的な文脈限定の作用はみられない。

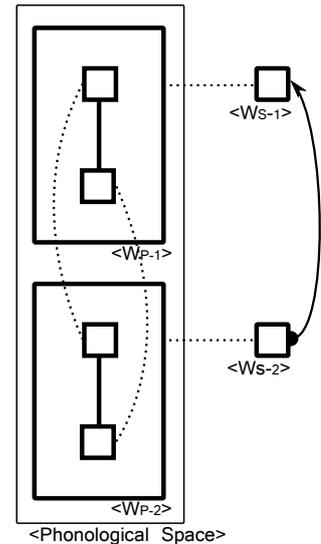


図 4.14: 類音語接近 (PARONM)

類音語接近はユーモアとしての洒落と結びつく。意味的には関連のない二語を、音の類似だけで関連させた場合、駄洒落の感覚が生じる¹²。

- (12) (…)ありていに申せば、ニコ狛先生の顔は狛^{チン}に似ている。狛に似ているから珍妙である—などと、私は洒落^{しゃれ}で言っておるのではない。

(織田作之助「ニコ狛先生」: 131)

(12) では、「狛」と「珍妙」が類音語接近をなしている。しかし、話し手の意図は、文脈上、まじめに言ったらたまたま駄洒落的になってしまったということであり、これを後続表現で「私は洒落で言っておるのではない」と明示することによって、駄洒落の白けた雰囲気キャンセルしている。洒落のもつ面白さ、あるいは駄洒落の白けた雰囲気は、語用論的含意として生じているものであり、言語表現上でキャンセル可能であることが分かる。逆に言えば、否定表現を通じて、洒落となることが明確に理解されるともいえる。また (12) では、否定を通じた肯定という点で、緩叙とも関連がみられる。

4.3.4 かすり

かすり (à-peu-près[仏]) とは、もじりによって類音性を生む修辞である。

- (13) (…)その日は朝はやくからゴール前の棧敷^{さじき}にでんと腰をすえ、魔法びんにつめたスコッチウイスキーを、すこっちずつやりながら、ボートが見えてくるのを待っていた。

(井上ひさし「ブンとフン」: 36)

(13) では、「すこっちずつ」というのは語彙としては存在せず、ここで「スコッチウイスキー」との類音性をつくるためだけに、もじりによって創案されている語である。しかし、[Xやりながら]という文脈においては、この語が[すこしずつ]の意味であることは容易に理解される。

¹²駄洒落の認知的研究に関しては、Kawahara and Shinohara (2009), Kawahara (2009) も参照。

類音語接近と異なり、もじりは類音性を生じるための意図を感じさせる。類音語接近では、駄洒落の感は含意として生じており、キャンセル可能であったのにたいし、かすりでは、駄洒落の感覚をキャンセルすることは不可能である。スコッチをすこっちずつ、いやこれは洒落ではないのだが、といったところで、白けた雰囲気はキャンセルできないといえる。

次の例では、表記法の工夫によって、類音性の認知が誘引されている。

- (14) 「(…)面会においでになった方々を、ただホットケーというのでは申しわけございません。そこで、ホットケーキをさしあげることになっておりますので」

(井上ひさし「ブンとフン」: 187)

(14)では、もじった語が先に提示されている。「ホットケー」というのは、「ホットケーキ」とかすりをなすために、もじられている。ここでは、片仮名表記によって、ホットケーキに関するもじりであることが強調されており、文字表記という特性を利用したかすりといえる。

かすりでは、音韻形式の変容によって、類音性を生じる。このことからくる、類音性の際立ちちは、類音語接近と比較しても高くなり、物理的距離が大きい場合でも、類音性が認知される。たとえば(14)は、二文にまたがって類音語の対比がなされている例である。

図4.15は、かすりの修辞スキーマである。かすりでは、音韻空間において、もじられた語(たとえば「すこっちずつ」の音韻極)から元の語([すこしずつ]の音韻極)を復元するプロセスがはたらく。この復元は、もじりによって生じた音韻的変容を隠し、潜在化するかたちでおこなわれる。これをあらわすのが、 W_{P-2} から W_{P-3} への隠喩的作用である。 W_{P-3} は元の音韻形式をあらわす。かすりでは、プロファイルされた W_{P-2} ではなく、隠喩的作用の趣意となる W_{P-3} が意味極と対応関係をもつ。つまり、かすりでは、音と意味との記号化の関係は間接的なものとなっているといえる。もじられた語の意味極 W_{S-2} は、構文的な文脈によって復元されるものであり、換喩的作用はこのプロセスをあらわす。

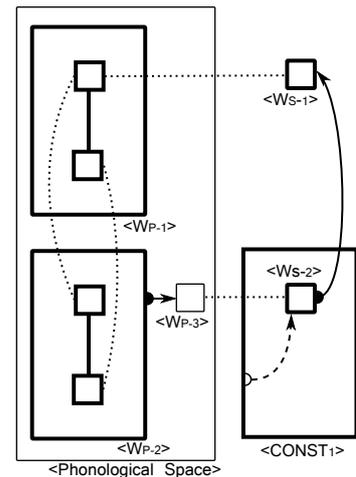


図 4.15: かすり (APEU)

かすりは、基本的に元の語からのもじりによって成り立つ修辞表現である。言い換えると、もじられた語から元の語にあたるものが復元されることが、かすりの理解には必要となる。これにたいし、次の例では、「もじられた」語は新語であり、元の語との対比によってかすりと類似の修辞的效果がみられる。

- (15) もはやここまで来れば、先生の所業は乱暴を乗り越して、狂気の沙汰である。いわばオステリである。女ならヒステリというところだが、男だからオステリというのである。

(織田作之助「ニコ狆先生」: 135)

(15)では、「オステリ」は、提示される第二文の時点では、その意味が分からない。しかし、続く第三文によって、かすりの根拠が明示され、また「ヒステリ」からのもじりとして「オス

テリ」という語を創出していることが理解される。また、この例では、形態素分割にかかわる修辞性もみられる。ここでは、男のヒステリの意味で「オステリ」というわけであるが、「オス」は男を暗示する接頭辞である。これにたいし「ヒス」は特に女を暗示するわけではない。ヒステリは本来複合語ではないわけで、ここではかすりによって、形態素が分断され、「ヒステリ」に関する疑似的な接頭辞的解釈を誘引しているものと考えられる。

4.3.5 音の前景化と言語レベル二重性

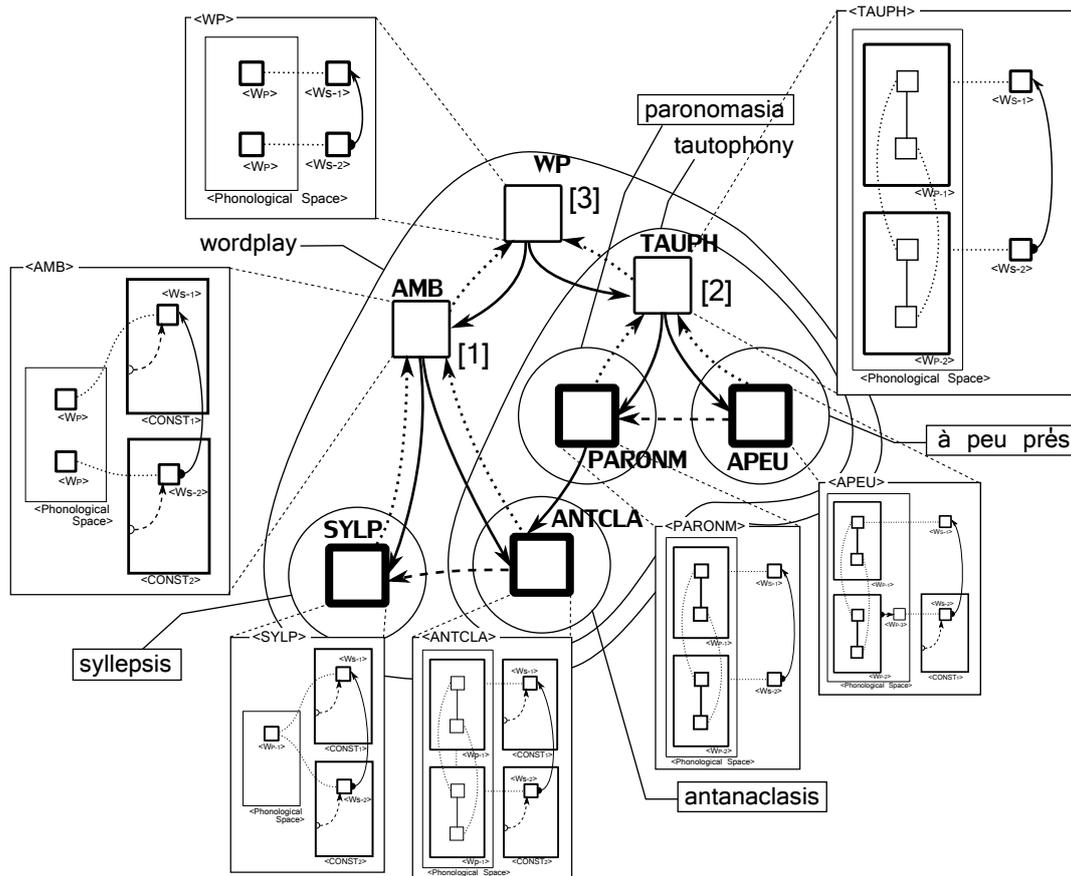


図 4.16: 言葉遊びのネットワーク

図 4.16 は、言葉遊びの修辞のネットワークである。[1] **AMB** は多義的解釈のスキーマである。異義兼用 **SYLP** と異義反復 **ANTCLA** に共通するのは、意味の多義性を利用した修辞表現であるという点である。多義性の認知には、二つの要因がある。第一に、音韻的類似性あるいは同一性の認知、第二に、構文的な対比文脈の認知である。[2] **TAUPH** は同音反復 (tautophony) のスキーマである。異義反復 **ANTCLA**・類音語接近 **PARONM**・かすり **APEU** に共通するのは、モーラあるいは音素の対応関係の認知である。類音性は意味の対比を生じることが、隠喩的作用によりあらわされる。[3] **WP** は言葉遊びのスキーマである。本節でとりあげた言葉遊びのレトリックは、次の二点に特徴づけられる。第一に、Phonological Space がコンテキストとして認知されること。第二に、類音性を通じて二語が対比されることである。

言葉遊びの遊びといわれる所以は、音の前景化にあるといえる。遊びのない言葉遣いでは、音は単に意味を運ぶ媒体として、理解の過程では背景化されている。しかし、音韻的な類似性は、音韻形式の透明度を下げ、音あるいは文字そのものの性質を浮き彫りにする。佐藤信夫は、言葉遊びに関して、「ことばを一種異物として感じる、ことばを一種自己目的的な存在物として感じる」言語感覚という(佐藤 1986: 54)。言葉遊びの修辞表現において、音は意味を介する道具として人間に従属することをやめ、自律的な存在感をとりもどす、という比喻も可能であろう。

ヤーコブソンは「言語の詩的機能は、等価の原理を選択の軸から結合の軸へ投影する」といった(Jakobson 1960: 358)。選択(selection)と結合(combination)は、連合関係と連辞関係に対応する。詩的機能は、連合関係において類似性をもつ二つのものを、連辞関係へ投射する。たとえば隠喩では、男は狼だ、といえ、連合関係をもつはずの男と狼が連辞関係をもつ。脚韻(rhyme)では、音韻的な連合関係をもつ二語が、詩行の行末に関する連辞関係をもつ。本節でとりあげた類音語接近では、たとえば「かっぱかっぱらった」といえ、音的類似によって連合関係をもつ「かっぱ」と「かっぱらった」とが、連辞関係をもつ。隠喩が意味的類似による詩的機能とすると、脚韻や頭韻(alliteration)などの押韻や、類音語接近やかすりをはじめとする言葉遊びは、音韻的類似による詩的機能である。ヤーコブソンはまた、「詩的機能とは、メッセージ(message)そのものへの指向、メッセージそれ自体の焦点化である」という(Jakobson 1960: 356)。言葉遊びは、言語表現に顕在化された二項の音的類似性のみが問題となる点で、まさに詩的機能をもつものといえる。

異義兼用では、音韻形式は一つであり、音韻的類似性は最大といえる。このとき、二つの意味は多義となる。異義反復では、音韻形式は二つあるが、音韻的類似性は非常に高い。二つの音韻形式のゆらぎは、異形態として理解される範囲内にとどまる。類音語接近では、音韻的類似性の高い別語が並置される。ここで、音の類似は意味の類似を離れる。多義は、何らかの意味的接点をもつのにたいし、単なる音の類似は、意味的接点をもつ必要は無いのである。かすりでは、音韻的類似性は、作為によって生じる。音韻形式の変容は、解釈主体の音への注意を引き付け、音と意味はますます遠ざかっていく。

このように、音韻的類似性を生じる原因が、意図的であればあるほど、意味と音とは剥離していく。言葉遊びの修辞的表現では、音韻的解釈と意味的解釈は、独立的におこなわれるといえる。ここでとりあげた修辞では、語のレベルと音素・モーラのレベルが、並列的に多層的となる。語は意味を担う言語単位であり、音素は語を識別する言語単位である。言語音の差異を認知することが弁別であるとすれば、言語音の類似を認知することは混同であろう。音の類似の濫用は、別語の混同を誘引する。別語を混同すれば、意味は破綻する。語の弁別が言語音の仕事であるとすれば、語の混同が言語音の遊びであるというギローの定義は、言い得て妙である。音の類似性に注意が引き付けられてしまって、言語音は平常結合する意味から、一時的に解放されるのである。

4.4 程度性の修辞

程度性に関わる修辞である誇張や緩叙は、一見すると、文脈上での意味的な不整合性が問題となる点で、隠喩や換喩などの比喩表現と類似するように思われる。しかし、隠喩や換喩が意味カテゴリーに関する逸脱性が問題となるのにたいし、誇張や緩叙では程度判断の逸脱性が問題となり、意味カテゴリーの明白な違反があるわけではない。程度性に関わる修辞では、程度判断のスケールにおいて、基準から大きな距離があることが、修辞の条件となる。

誇張がおおげさの修辞であるとするならば、緩叙はひかえめの修辞である。この点からは、誇張と緩叙は単に相補的な修辞の対と思われる。しかし、実際の具体事例を観察していくと、誇張と緩叙は特有の修辞過程の構造をそれぞれもっており、非対称的となっている。本節では、4.4.1節で誇張を、4.4.2節で緩叙の具体事例を詳細に観察、記述していく。4.4.3節では、修辞スキーマのネットワークを示し、その認知的特徴について述べる。

4.4.1 誇張

誇張 (hyperbole) とは、ものごとを実際よりもおおげさな表現である。ある表現が誇張的であるかどうかは、解釈主体がどのような基準をもうけているかによって規定され、語用論的な基準によって定まるといえる¹³。次の例では、誇張であるか否かに関する、基準の相対性は明らかである。

- (1) 吾輩は猫ながら時々考える事がある。教師というものは実に楽なものだ。人間と^{うま}生れたら教師となるに限る。こんなに寝ていて勤まるものなら猫にでも出来ぬ事はないと。

(夏目漱石「吾輩は猫である」:10)

(1)の下線部の表現は、ふつう誇張的となる。しかし、話し手は猫であり、その基準からは誇張ではなく、文字通りの表現ともみられる。

これまでの誇張研究の多くに共通しているのは、現実的な状況と言語表現とのずれとして、言い換えるならば、認識論的あるいは語用論的な問題として、誇張を分析しているということである¹⁴。その一方で、誇張は、言語形式の点でも多彩であり、誇張がどのような形式をとるかによって、誇張の修辞過程も多様となる。本節では、主に言語形式の解釈の観点から誇張を分析し、他の修辞形式とのかかわりから分類を試みる。具体的には、隠喩的誇張、直喩的誇張、緩叙的誇張の三つをとりあげる。隠喩的誇張は、隠喩と類似の形式をもつ誇張であり、直喩的誇張は、直喩と類似した誇張である。また、緩叙的誇張は、修辞的效果の点で緩叙と共通点をもつ誇張である。

¹³誇張分析に関する語用論的アプローチとしては、Leech (1969: 167-171)、Leech (1983: 145-149)、平井 (2001) などがある。

¹⁴事態の異常性と誇張的認識については、佐藤 (1978: 176-202) も参照。

隠喩的誇張

隠喩的誇張は、誇張の媒体のみが明示され、趣意は暗黙に理解される、誇張である。誇張が暗黙に理解されるためには、その逸脱が明白でなければならない。次の例は、量に関して明白な逸脱を含む隠喩的誇張表現である。

- (2) うちだって、もう何十本、何万本で針をなくしてるでしょう。それでも誰も怪我しやしないんですもの。

(川端康成「針と硝子と霧」：160)

- (3) 昨夜などは、首を吊って死のうかと思いましたわ。一分間に二度はそう思いました。

(井上ひさし「ブンとフン」：191-192)

(2)では、修辭的焦点となる「何万本で」という修飾表現は、文字通りには一万本以上の針をなくしていることをあらわす。ここでは、「何万本」といえるほど[多くの]針をなくしている、というように量に関する誇張表現として理解される。ここでは、誇張の趣意となる[多くの]という修飾表現は明示されていない。(3)では、「一分間に二度」は文字通りには、三十秒に一回「首を吊って死のうか」と思ったという意味になる。しかし、その頻度で死のうと思うのは、ふつう大げさにとられる。その点からは、「一分間に二度」といえるほど[頻繁に]思った、というように、量に関する誇張として理解される。

次の例では、ある程度慣習化された誇張であることから、誇張の趣意が暗黙に理解される。

- (4) 額は汗ばみ、頬は燃えていた。

(三島由紀夫「潮騒」：9)

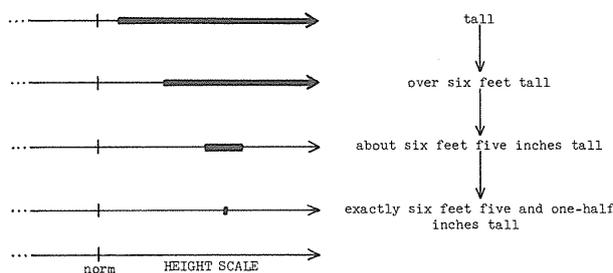


図 4.17: Langacker (1987: 133)

(4)では、「燃えていた」というのは、頬の状態に関する隠喩としても理解できる。その点からは、熱さ、赤さなどが趣意として理解される。ここで、隠喩の趣意となるのは、スケール性をもつ概念である。たとえば、赤さのスケールを前景化して考えると、「燃えていた」というのは、赤さに関する誇張ともみられる。(4)のような誇張や、「目を皿にして」「血を吐く思い」と

いったような、ある程度慣習化された隠喩的誇張では、隠喩の修辭過程を経ることによって、結果的に誇張が理解されると考えられる。

誇張を理解するためには、程度判断の慣習にたいし、描写が大げさであることに気づかねばならない。大げさであることに気づくことは、スケールのな程度判断において、著しく基準と距離があることを認知することといえる。程度判断において、スケールのな尺度のうち、どの部分がプロファイルされるかは、厳密には判断ごとに異なるといえる。図 4.17 は、程度判断をあらわす表現が、スケールの様々な部分をプロファイルすることを示す図である。ある基準 (norm) からの高さのスケール (HEIGHT SCALE) に関して、*tall* から *exactly six feet five and one-half inches tall* と具体性が増すに従って、プロファイルされるスケールの領域が小さくなっていく。誇張表現では、これにたいし、常識から逸脱したものを引き合いに出すことで、スケールの正方向端点のみをプロファイルするといえる。これがおおげさであることの認知に対応する。

図 4.18 は、隠喩的誇張の修辞スキーマ **HYPB-mtpr** である。隠喩的作用でむすばれた二つの関係は、誇張的な見立て関係 (たとえば媒体「何万本で」で趣意 [多くの]) をあらわす。左の関係では、スケールの尺度をあらわす矢印の正方向端点だけがプロファイルされている。これは、*n* で示される基準からの距離が大きい、つまり大げさであることをあらわす。この基準は、関係のトラジェクターとなる被修飾部 (たとえば「針」) の慣習的標準によって規定される。換喩的作用は、叙述対象から程度判断の標準を顕在化させるプロセスをあらわす。右の関係 (たとえば [多くの針]) は、誇張の趣意のドメインであり、ここでは、スケールの正方向全体がプロファイルされている。この程度判断のスケールの尺度が同じであることが、基準をむすぶ対応関係によって示されている。

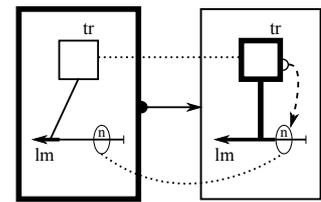


図 4.18: 隠喩的誇張 (HYPB-mtpr)

誇張の媒体は、スケールの端部のみをプロファイルする。図 4.17 との比較から分かることは、誇張表現は、平常表現よりも具体的であるということである。一見すると、誇張表現は、おおげさな表現を媒介することで、間接的にのみ程度判断をあらわすようにみられる。しかし、プロファイルされるスケールの尺度の領域の大きさから分かるように、誇張表現は趣意よりもむしろ媒体のほうが詳細な描写であるといえる。

直喩的誇張

直喩的誇張は、比較の表現をともなつて、媒体と趣意がともに明示される誇張である。

(5) しかし、不幸なことに、その娘の器量はこの世のものとも思われぬほど不出来だった。

(井上ひさし「モッキンポット師の後始末」: 76)

(5) では、確かに生きている「娘」についての叙述としては、「この世のものとも思われぬ」という表現は大げさであり、これが修辞作用の媒体となる。趣意は、媒体のおおげさなイメージが重ね合わされ、非常に「不出来だ」ということが理解される。このような誇張の理解は、

[A ほど B] という比較表現によって可能となっている。この点からは、「ほど」は誇張の見立て関係の理解のプロセスである、隠喩的作用をプロファイルする作用表現であるといえる¹⁵。

次の例は、無理誇張 (adynaton) の例ともみられる。無理誇張とは、現実にはありえないことに見立てる誇張である。

- (6) 算盤が上下を着ているように頭が切れる、と評判のこの浜島庄兵衛に、算盤玉の弾き方を講釈しようとは見上げた度胸じゃ。

(井上ひさし「腹鼓記」: 11)

(6) では、「算盤が上下を着ている」という表現はおおげさという度を越えて、非合理的である。そのため、一見すると、何についての程度判断であるのかが明確ではない。しかし、作用表現「ように」をともなって、「頭が切れる」という誇張の趣意が明示されていることから、修辞理解が容易となっている。このように、無理誇張のような、かなり強引な誇張の見立て関係が理解可能となる要因のひとつとしては、作用表現によって誇張の解釈が強く誘引されることがあげられる。

図 4.19 は、直喩的誇張の修辞理解のスキーマ **HYPB-sim** である。作用表現 AM (たとえば「ほど」) によってプロファイルされた隠喩的作用は、誇張的な見立て関係の理解のプロセスをあらわす。隠喩的作用によってむすばれた二つの関係は、たとえば (5) では、媒体「この世のものとは思われない」と趣意「不出来だった」である。隠喩的誇張と異なり、媒体となるおおげさな表現だけでなく、趣意となる程度表現も明示されており、これが隠喩的作用の媒体と趣意がともにプロファイルされることであらわされている。

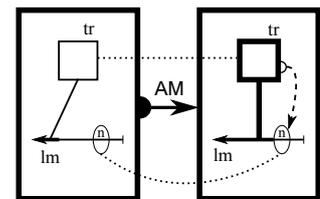


図 4.19: 直喩的誇張 (HYPB-sim)

誇張は、虚偽と関連するのにくわえ、フィクションとも関連すると考えられる。フィクションとは、話し手と聞き手がともに了解した、虚偽である。伝達主体にはだます意図はなく、解釈主体も虚偽をすぐに見抜くことができるものが誇張である。大げさであるかどうかあいまいな程度表現は、誇張としては効果的ではない。この誇張の相互了解性あるいはフィクション性から、ある種の劇性が修辞的な効果として伴うと考えられる¹⁶。誇張理解では、フィクション的な媒体をとおして、現実的な趣意を理解する。このとき、媒体のフィクション性は、趣意にも一部転写される。たとえば、「一分間に二度」は首を吊ろうと思う女の例では、一分に二度、死を思い悩むことを達成するために、悩むことに忙しい姿のイメージが喚起され、笑いをさそう。このように、誇張のもつ滑稽さに関するメカニズムの一部には、誇張のフィクション性に関わると考えられる。

¹⁵直喩的誇張は、直喩と類似する性質をもつ。直喩は、基本的に次の二つの性質をもつ修辞である。(i) 媒体と趣意がともにプロファイルされる。(ii) 隠喩的作用をプロファイルする作用表現 (action marker) を伴う。直喩の基本的な分析については、4.2.2 節を参照。

¹⁶誇張の劇性については、加島 (1961) も参照。

緩叙的誇張

緩叙的誇張は、修辭的効果の点で、緩叙と類似する、誇張である。誇張の作用表現は、誇張的見立てを誘引する。そのため、媒体のおおげさがあまり判明でない場合にも、誇張的な解釈がとられる場合がある。

- (7) 物すごい美人—とはいえないが、そのへんのテレビ局の廊下をうろちよろしているタレント志願の女の子たちより、数倍美しく、その千倍は感じのよさそうな女の子が、ブン先生に、しとやかに、かつ、上品に頭を下げた。

(井上ひさし「ブンとフン」：185)

(7)では、たとえばタレントの女の子との比較ならば、通常の誇張である。しかし、「数倍美しく」という比較表現は、誇張の解釈を誘引する。これによって、比較の基準となる対象（ここでは「そのへんのテレビ局の廊下をうろちよろしているタレント志願の女の子たち」）は非常に美しいことが含意される。しかし実際には、この種の女の子は典型的に美しいとはいえない。誘引された誇張的解釈と、語彙としての基準が引きあっていないため、その基準の落差が際立つ表現といえる。この基準の混在によって、基本的な直喩的誇張とは異なり、[美しくなくはない]というほどの、緩叙に似た修辭的効果が生じると考えられる。

図4.20は、(7)のタイプの緩叙的誇張のスキーマ **HYPB-lito** である。誇張的な見立て関係をあらかず隠喩的作用が、作用表現 AM によってプロファイルされている点を含め、スキーマの基本構造は直喩的誇張と類似するが、次の二点に関しては異なる。(i) 媒体と趣意とで、程度判断の基準が異なる。隠喩的作用の媒体では、スケールの正方向端部がプロファイルされている。これは、誇張的な判断がなされていることをあらわす。しかし、この判断基準は叙述対象（たとえば「女の子」）が換喩的に提供するのではなく、誇張の媒体（たとえば「そのへんのテレビ局の廊下をうろちよろしているタレント

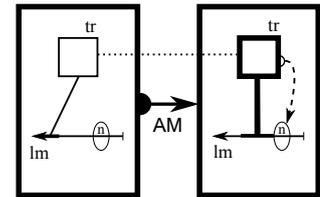


図 4.20: 緩叙的誇張 (HYPB-lito)

志願の女の子たち」）が提供するものである。趣意の基準は、他の誇張と同様に、叙述対象によって換喩的に限定される。(ii) 趣意の程度判断は、プラス方向の端部以外がプロファイルされる。趣意の判断基準（「女の子」の標準的美しさ）は、媒体の基準（「そのへんのテレビ局の廊下をうろちよろしているタレント志願の女の子たち」の美しさ）と異なる。具体的には、趣意の基準の方が媒体の基準よりも正方向に高くなるといえ、つまり、判断基準が厳しくなることになる。基準の引き上げにともなって、媒体では正方向端部であったプロファイルが、趣意の基準のもとでは正方向の基準付近へと低下する。結果的に、スケール正方向の際立ちの分布は、端部と端部以外が図地反転することとなる。このスケール尺度における図地反転のプロセスは、次節で述べる緩叙にもみられるものである。

4.4.2 緩叙

緩叙 (litotes) は、ものごとの実際よりも、ひかえめに叙述をおこなう、修辞である。緩叙は、おおげさとひかえめの対比において、誇張と対をなす。共通点は、どちらも、スケール的な程度判断の、ずれを誘引することである。緩叙は、否定語の有無による区別が可能である。否定語を含む緩叙は、否定のタイプによって二種類に分けられる。ひとつは、対義語の否定による対義否定的緩叙であり、もうひとつは、二重否定による二重否定的緩叙である。一方で、否定語を含まない緩叙は、実際の状況との比較によって、修辞性が理解される。この種の緩叙を、ひかえめであることを強調しているという点で、過小誇張的緩叙とよぶ。

対義否定的緩叙

対義否定的緩叙は、対義語の否定による換所である。

- (8) 学校で逢った時はやに横風な失敬な奴だと思ったが、こんなに色々世話をしてくれる所を見ると、わるい男でもなさそうだ。

(夏目漱石「坊っちゃん」: 26)

- (9) その方がつくっている飛沫模様の浴衣地だが、あれははなはだよろしくない。

(井上ひさし「腹鼓記」: 9)

対義否定的緩叙は、叙述のスケール性が明らかな場合に、ふつう用いられる。

(8) では、「わるい男ではなさそうだ」というのは、いい男であろうということを意味する。ここでは、肯定的な評価を、対義語の否定によって緩叙的に表現しているといえる。(9) では、逆に、否定的な評価を、「よろしく」ないということでは表わしている。

緩叙表現は、迂言的な言表とみることもできる。たとえば(8)では、「横風な失敬な」男と断定していたのをすぐに反転させて、肯定的な評価を直接的に表現するわけにもいかず、直接性を避ける手段として緩叙しているとみることもできる。また(9)では、会話では直接言語化しにくい、相手の否定評価を直接表現することをさけるために、緩叙しているとみることもできる。この種の緩叙の迂言性は、語用論的な観点からは、ポライトネス (politeness) に関わるものと考えられる。

次の例では、文脈によって、一時的な対義性が付与されることによる対義否定的緩叙といえる。

- (10) 独りで極めて一人で喋舌るから、こっちは困まって顔を赤くした。それも一度や二度ではない。

(夏目漱石「坊っちゃん」: 16)

(10) では、「一度や二度ではない」ことは、多数回であることを意味する。「一度や二度」と[多数回]との対義性は、文脈上臨時に与えられているものといえる。また、(10) の場合では、この種の緩叙が、慣用化されていることも関わると考えられる。

否定は、存在をとおした非存在への言及である。図 4.21 は、ラネカーによる否定のスキーマである。ラネカーは「存在 (existence) とは常に、ある場所 (location) における存在であり、このことから、非存在 (non-existence) とは常に、ある場所における非存在であるといえる」という (Langacker 1991: 132)。M はメンタルスペースとしての、否定のコンテキストとなる非存在の場所をあらわす。そして、「否定 (negation) の機能は、そのような場所における不在をあらわすことである。」 (ibid., 133)

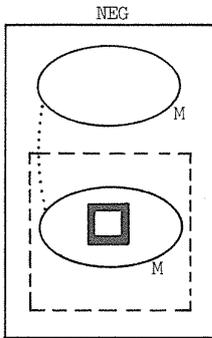


図 4.21: Langacker (1991: 134)

M におけるある存在の不在を認知するためには、一見するとスキーマの上部 (要素の入っていない領域 M) だけに関わると思われる。しかし、上部だけのスキーマは、メンタルスペース M そのもの、言い換えると場所自体の認知を規定するものであって、否定は要素が不在である上部のメンタルスペースと要素が存在している下部の仮

定的なメンタルスペースの対として認知される。

たとえば、ピエールがいない、といえ、ピエールがいるはずの場所 (下部の仮定的なメンタルスペース) を探すプロセスを介して、ピエールが実際 (上部の現実的なメンタルスペース) には不在であることが理解される。言い換えると、いるはずの場所を介して、その期待が裏切られることによって、実際にいない場所が認知され、これによってピエールの不在が特徴づけられる。破線の四角形は、想定される場所のような、理解の背景となる概念領域をあらわす。否定は、実際 (上部の M) には非存在であるけれども、想定される場所 (下部の M) においては存在するものをプロファイルする。

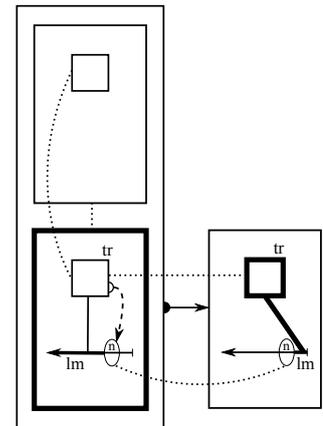


図 4.22: 対義否定的緩叙 (LITO-anto)

図 4.22 は、対義否定的緩叙の修辞スキーマ **LITO-anto** である。隠喩的作用の媒体となる上部の関係と下部の関係からなる大きな関係は、緩叙的否定 (たとえば「よろしくない」) をあらわす。上部の関係は、叙述対象にたいして、スケールの尺度との関係が不在である

ことをあらわしている。このスケールの非存在は、下部の関係 ([よろしい]) をとおして認知される。隠喩的作用の趣意となる関係では、スケール尺度のプロファイルされる領域が、基準に対して負方向である。これが緩叙による評価の反転をあらわす。このように、対義否定的緩叙の修辞過程は、否定を介した、スケールに関する図地反転によって特徴づけられるといえる。

二重否定的緩叙

二重否定的緩叙は、二重否定による緩叙である。

- (11) 日本橋の越後屋呉服店といえ、このわしも江戸の御屋敷に詰めていたことがあるゆえ 知らないではない、『現金掛け値なしの大安売り』でその名を ^{とどろ}轟かせておる。

(井上ひさし「腹鼓記」: 11)

(11) では、緩叙の修辭的焦点となる「知らないではない」は、よく知っているの意味として理解されるといえる。[知っている]の対義語は、知らないというほかなく、つまり日本語では語彙としてコード化されていないと考えられる。二重否定の形式をとる要因のひとつとして、対義表現がないので対義否定的緩叙に還元することができないということがあげられる。

二重否定的緩叙では、形式的には、否定語は二つある。しかし、二つの否定は同等の重要度ではないように思われる。つまり、「知らないではない」の二つの「ない」のうち、「知らない」の「ない」は、否定のプロセスが相対的に背景化されているといえる。「知らない」という否定表現は、この種の文脈においては、知っているの対義語とみなされるとも考えられる。この点からは、対義否定的緩叙と二重否定的緩叙とは、類似の修辭過程といえる。

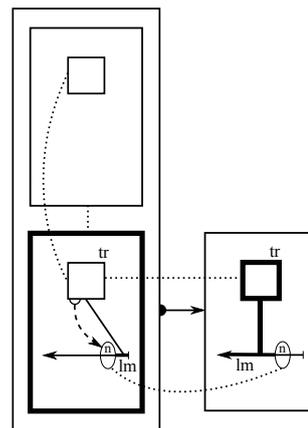


図 4.23: 二重否定的緩叙 (LITO-double)

図 4.23 は、二重否定的緩叙の修辭スキーマ **LITO-double** である。対義否定的緩叙 **LITO-anto** との差異は、スケール尺度のプロファイルされる領域がことなる点である。たとえば「知らない」は知っているの否定語として、どの程度知っているかに関する程度表現の機能を担うと考えられる。スケールの負方向のプロファイルは、否定的な程度判断をあらわす。趣意では、スケールの正方向がプロファイルされ、肯定表現と等価な構造となる。しかし、二重否定によるスケールの反転のプロセスを経ることによって、直接的な肯定表現とは異なる修辭的效果が生じると考えられる。

過小誇張的緩叙

過小誇張的緩叙は、実際の状況との比較によってひかえめな表現であることが理解される、緩叙である¹⁷。

- (12) 「ちよいとは使えそうじゃな」
^{しろひげおしょう}白髯和尚は内心では驚いていた。

(井上ひさし「腹鼓記」: 56)

¹⁷過小誇張的緩叙は、修辭学では、誇張と分類される場合、過小誇張 (meiosis) とよばれ、緩叙と分類される場合、ひかえめの緩叙とよばれる。より詳細な分類においては、過小誇張とひかえめの緩叙を、厳密に区別する立場もあるが、本研究では、ともに過小誇張的緩叙として、緩叙の一種とみなす。

- (13) おれはそうですなあと少し進まない返事をしたら、君釣^{つり}をした事がありますかと失敬な事を聞く。あんまりないが、子供の時、小梅^{こうめ}の釣堀^{つりぼり}で鮒^{ふな}を三匹釣った事がある。

(夏目漱石「坊っちゃん」：46)

(12)では、「ちょいとは」使えそうどころではなく、非常に使えそうだということを意味する。ここでは「驚いていた」という表現によって、「和尚」の実際の評価が暴露されていることから、緩叙的解釈が誘引される。(13)では、釣り経験があるというにはあまりに少ないという実情を踏まえると、「あんまりない」は、まったくないという意味として、緩叙的に理解されるといえる。

図4.24は、過小誇張的緩叙の修辞過程のスキーマ **LITO-meio** である。隠喩的作用の媒体となる関係において、スケール尺度の基準付近だけがプロファイルされていることは、表現がひかえめであることをあらわす。また趣意となる関係では、スケール正方向の端部のみがプロファイルされ、むしろ程度判断が強調されていることをあらわす。緩叙の修辞過程は、スケール尺度上の図地反転に特徴づけられる。過小誇張的緩叙では、否定語をともしないため、基準の正負での図地反転はおこらないが、実際の状況との比較によって、それと類似した修辞過程が生じると考えられる。スケールの正方向の内部領域における、隠喩的作用の前後での図地反転のプロセスは、この種の緩叙的プロセスをあらわす。

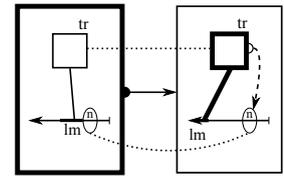


図 4.24: 過小誇張的緩叙 (LITO-meiosis)

4.4.3 程度判断の焦点化と図地反転

図4.25は、誇張と緩叙の修辞ネットワークである。[1] **EXP** は、見立ての関係が明示される修辞のスキーマである。隠喩的作用を作用表現がプロファイルするという共通点からは、名詞的直喩 **SIM-nom** と直喩的誇張 **HYPB-sim** とを拡張関係としてみるができる。**SIM-nom** については、4.2.2節を参照。[2] **HYPB** は誇張のスキーマである。誇張の修辞に共通する構造は、隠喩的作用の媒体となる関係において、スケール尺度の正方向端部のみがプロファイルされることである。[3] スキーマ **HYPB** を介して、緩叙的誇張 **HYPB-lito** と直喩的誇張 **HYPB-sim** は拡張関係とみることができる。緩叙的誇張は、修辞的効果の点で緩叙にちかく、誇張としてプロトタイプ的ではないが、媒体の構造は誇張と共通している点で、誇張の拡張例とみることができる。[4] 緩叙的誇張 **HYPB-lito** と過小誇張的緩叙 **LITO-meio** とは、スケール尺度のプロファイルされる領域に関して、図地反転の関係にあるという点で、拡張関係にあるとみられる。[5] 対義否定的緩叙 **LITO-anto** と二重否定的緩叙 **LITO-double** とは、スケール尺度のプロファイルされる領域に関して、図地反転の関係にある。この点からは、否定的緩叙のスキーマ **LITO-neg** を介して、拡張関係とみることが可能である。

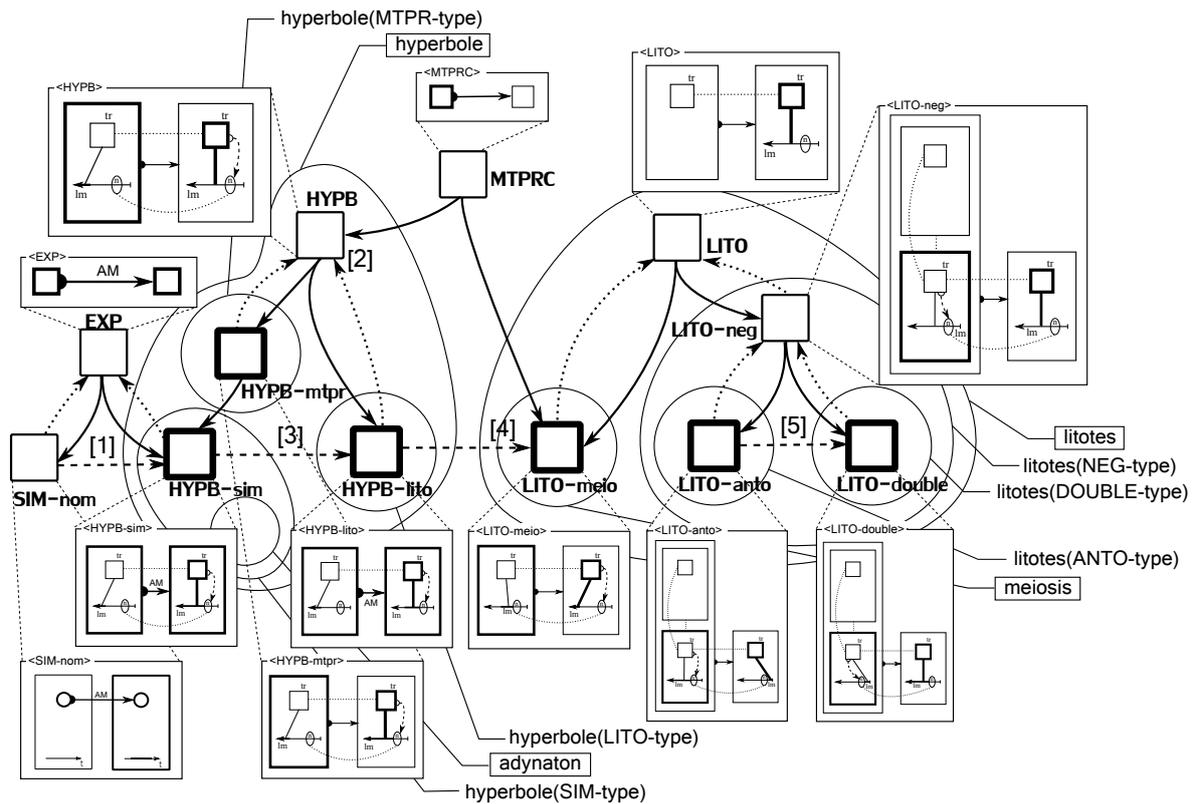


図 4.25: 誇張・緩叙のネットワーク

誇張と緩叙とは、おおげさの修辞とひかえめの修辞として、これまで対照的な対として多く分析されてきた。本節の分析によれば、誇張と緩叙は、スケール尺度に関して、どのような認知プロセスがはたらくかに関しては非対称的である。誇張は、基本的に、スケール尺度の焦点化によって特徴づけられる。おおげさである、ということは、認知的には、スケール尺度の正方向端点のみがプロファイルされることを意味する。プロファイルされる領域が小さいということは、表現が具体的であるということであり、誇張は、基本的に具体性に関わると思われる。また、緩叙は基本的に、スケールに関する図地反転によって特徴づけられる。緩叙は、否定の機能とも関わりをもつ。否定は、認知的にいったん存在の肯定を介するという点で間接的であり、緩叙は、基本的に間接性に関わると思われる。

4.5 二極性の修辭

言語には二極的な対立があらゆる側面に潜在している。その中でも、対義語は、語彙に関する二極対立の代表である。ある語の顕在化は、潜在的に対義語の連合をともなう。たとえば、恋はうれしい、といえ、恋はかなしいのではないことが暗示される。しかし、対義語に限らず、ある語に潜在的に連合される語は無限に多様である。うれしいに対して、辛い、苦しい、たのしい他、さまざまな連合関係を読み込むことができる。

対比と対義結合は、ともに対立的な連合関係の顕在化にかかわる修辭である。ある二語の対が明示されると、他の連合関係は背景化され、この対だけが相対的に際立つ。たとえば、恋はうれしくかなしくはない、といえ、[うれしい／かなしい]の二極的対立が相対的に際立つといえる。この種の対立の明示が修辭に用いられる場合、特有の修辭的効果が生じる。本節では、二極的対立が顕在化することによる修辭性という観点から、4.5.1節で対比、4.5.2節で対義結合の具体事例を観察、記述していく。4.5.3節では、修辭のスキーマネットワークを示し、修辭性の特色について述べる。

4.5.1 対比

対比 (antithesis) は、二つの語句や節の、差異や共通性を明確にする修辭である。対比は、よく知られた修辭のひとつである。たとえば、くじらは魚類ではなく哺乳類だ、といえ、暗に魚類と哺乳類が対比される。また、砂漠では昼は猛暑で夜は極寒だ、といった時には、昼と夜、猛暑と極寒が対比される。よく知られているというよりは、ありふれていて、上述の例では修辭の感覚はほとんどないともいえる。特に、言語の語彙のレベルに内在している対比性を、対比の形式で取沙汰するのは、修辭の濫用ともいえる。

これに対して、修辭性のある対比表現も存在する。佐藤信夫は、対比の本質は、「対比関係に置かれることば (あるいは概念) 自体の性格よりも、むしろ、ふたつのものを対比的に提示するコンテキストの枠組みのほうにある」といった (佐藤 1981: 117)。たいてい人が意識しないような対照性を浮かび上がらせるコンテキストを用いた対比が、修辭としての対比となる。

対比は非常に多様であるが、少なくとも、次の二種類を区別することができる。ひとつは、二つのものの対比であり、名詞的対比とよぶ。もうひとつは、二つのイベントの対比であり、対句的対比とよぶ。

名詞的対比

名詞的対比は、二つのものの対比である。形式的には、二つのものを比較する構文によって、対比性が明確になる。

- (1) 僕の ^{かんがえ}考では人間が絶対の域に入るには、ただ二つの道があるばかりで、その二つの道とは 芸術と恋だ。夫婦の愛はその一つを代表するものだから、人間は是非結婚をし

て、この幸福を^{まっ}完うしなければ天意に^{そむ}背く訳だと思ふんだ。

(夏目漱石「吾輩は猫である」：448)

(2) 主人の服装には^{しわす}師走も正月もない。

(夏目漱石「吾輩は猫である」：30)

(1) では、「二つの道」が「は」によって取り立てられ、これに関する叙述として、「芸術と恋」が対比されている。ここでは、[NP₁はNP₂とNP₃だ]という構文によって、NP₂とNP₃に関して対比の認識が生まれる。ここでは、たとえば、芸術と宗教を対比するならば、平凡である。これにたいし、恋が道であるとは、奇抜である。ここでは、後続の文からも分かる通り、芸術と恋が対比されることによって、道とは恋である、という内容が顕在化する。つまり、恋が芸術に比肩するものとして叙述されることによって、「恋」の内容が明確になる。言い換えると、対比性を明示することで、意味解釈の文脈を限定しているといえる。(2) では、「主人の服装」にトピック標識「は」がつき、これに関して「師走」と「正月」が対比されている。ここでは、[NP₁はNP₂もNP₃もない]という構文によって、(1)とは反対に、本来区別されるべきNP₂とNP₃との区別が失われて、トピックである「主人の服装」の変化の少なさが強調されている。

次の例では、対比によって比喩的な認識が生じる。

(3) 君は人間の古物とヴァイオリンの古物と同一視しているんだろう。人間の古物でも金田某の如きものは今だに流行している位だから、ヴァイオリンに至っては古いほどがいいのさ。

(夏目漱石「吾輩は猫である」：442)

(3) では、「君」が「は」によって取り立てられ、その価値観に関して、「人間」と「ヴァイオリン」が対比的に並置されている。ここでは[NP₁はNP₂の古物とNP₃の古物と同一視している]という構文によって、NP₂とNP₃が対比される。ヴァイオリンに関する見方が、人間に関する見方と対比させて叙述されることにより、後続する「ヴァイオリンに至っては古いほどがいい」という内容を正当化している。これは、ヴァイオリンを人間のように見る、という比喩的な見立てを形成しているとみることも可能である。この点では、対比は直喩や隠喩にも関わるといえる。

対比される二項は、連辞関係として顕在化される。通常、連辞関係にある二項は、対比の関係とはならない。柿は甘い、たとえば、[柿／甘い]は叙述関係であって、対比性はない。しかし、甘いのは柿と梨だ、たとえば、[柿／梨]の対比が明確に認知される。柿と梨は、甘いものに関する語彙として、連合関係をもつ。柿は、ぶどう、チョコレート、砂糖など、他にも多くの連合関係をもつ。しかし、柿と梨が対比の文脈におかれた場合では、柿と梨の連合関係は、他の語彙との連合関係に比べて活性化されているといえる。言い換えると、対比の文脈

による連辞関係をもつことによって、連合関係が活性化されることが、対比のプロセスを生じるといえる。名詞的対比では、比較表現をとまなうの構文的環境が、このような対比的認識を可能とするコンテキストとなっていると考えられる。

図 4.26 は、名詞的対比のスキーマ **ANTI-nom** である。成分構造となる関係 CONTR (たとえば「と」) のトラジェクターとランドマークをむすぶ隠喩的作用は、二つのものの対比的認識のプロセスをあらわす。比較表現 CONTR による関係は、より大きな構文的環境 CONST (たとえば [NP は X だ]) のランドマークとして位置づけられる。このとき、トラジェクターはトピック標識「は」によってトピックとなるもの (たとえば「二つの道は」) である。トピックから関係への換喩的作用は、トピックとなった名詞句から文脈を展開するプロセスをあらわす。

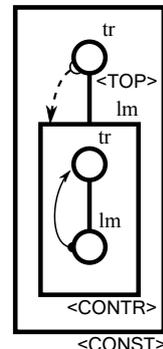


図 4.26: 名詞的対比 (ANTI-nom)

対比される二項は、並列の関係表現「と」などでむすばれているが、二項の際立ちちは均質ではない場合が多い。対比では、多くの場合、叙述の主眼といえるものが存在すると考えられる。(1) では、「恋」が叙述の主眼であり、(3) では、「ヴァイオリン」が叙述の主眼となっている。比較の対象となるものは、叙述の主眼となるものよりも、相対的に背景化される。言い換えると、対比される二項の関係においては、叙述の主眼がトラジェクターであり、比較されるものがランドマークとなっている。これによって叙述のスコープが明確となり、トラジェクターとなる叙述の主眼の内容が鮮明になるという修辭的効果が生じると考えられる。

対句的対比

対句的対比は、二つのイベントの対比である¹⁸。典型的には、ある構文を反復することで、同等の統語位置にあらわれる二つの語句の対照性を明らかにする。

- (4) 夜、お瀧は母に背を向けて寝た。 母はその背に顔を向けて寝た。

(川端康成「温泉宿」: 12)

- (5) だからその温泉宿でも、いろいろな男が、本気ともじょうだんともなく言い寄った。 それを彼女は本気ともなくじょうだんともなく、鮮やかに受け流した。

(川端康成「温泉宿」: 37)

(4) では、「お瀧」と「母」の行動をあらわす、二つの文が対比されている。ここでは、[NP₁ は NP₂ に NP₃ を向けて寝た] という構文が、二度繰り返されることによって、お瀧が母に背を向けることと、母がその背に顔を向けることとの対比が認知される。また、(5) では、「い

¹⁸対句は、対句的対比のうち、語句の意味が、語彙のレベルで対となっているものをいう用語法が一般的である。この点では、対句的対比よりは、限定的と考えることができる。また、以下の修辭は、対句的対比と関連する。並行 (parallelism) は、広く同じ形式の反復をいう。同型節反復 (isocolon) は、並行の下位修辭で、長さが等しい、類似構造の反復をいう。形式のみ着目したばあいは、同型節反復と対句的対比は同等となる。

ろんな男」と「彼女」の行動が、対比されている。この対比をなすコンテキストは、[NP 本気ともじょうだんともなく VP]という構文の反復である。これにより、男が「言い寄った」ことと、彼女が「鮮やかに受け流した」ことが対比的に認知される。

名詞的対比と同じく、対句的対比でも、比較対象となるイベントと、描写の主眼となるイベントが区別される。たとえば(5)では、言い寄る男が比較対象となり、彼女の受け流すさまが叙述の主眼となっている。言い換えるならば、[言い寄る]の対比として[受け流す]の意味が規定され、意味内容がより鮮明になっているといえる。

対比は、比較によってもものごとの一面だけに焦点をあてる。この修辞性から、格言に用いられる場合もある¹⁹。

- (6) 「生れる時には誰も熟考して生れるものはありませんが、死ぬ時には誰も苦にすると見えますね」と寒月君がよそよそしい格言を述べる。

(夏目漱石「吾輩は猫である」：486)

(6)では、[V時には誰もVP]という構文の反復によって、生まれる時と死ぬ時とが対比され、後者が叙述の主眼として鮮明に描写される。ここでは、「生れる時には誰も熟考して生れるものは」ないということは、誰も認める内容である。「死ぬ時には誰も苦にする」がこれと対比的に認識されることにより、前者のもつ[誰もが認めるべき]という性質が、後者にも転写されると考えられる。この種の対比的認識は、(3)と同様に、比喩の見立て関係に類似する認知プロセスとみることも可能である。

構文の反復が、なぜ連辞関係におかれた二項を連合化し、対比を生じるのであろうか。そもそも、連合関係とは基本的に、同じ統語位置で代置される項同士の関係をいう。形式的には、対句的対比で対比される語句の対は、まさに連合関係の定義にしたがうものとみることができる。というのは、対比される二つの語句は、構文において、同じ統語位置を占めるからである。比喩的にいうならば、構文の反復によって、連合関係を示すための代置テストが実施されているとみなすことも可能である。構文の反復が連合関係を生じる要因としては、少なくともこの点が寄与すると考えられる。

図4.27は、対句的対比のスキーマ **ANTI-coup** である。隠喩的作用でむすばれ二つのプロセス関係は、二つのイベント（たとえば「言い寄った」と「受け流した」）の対比的認識のプロセスをあらわす。プロセス関係のコンテキストとなる構文的環境 $CONST_1$ のあいだの対応線は、対比性を誘引する構文の反復（たとえば[NP本気ともじょうだんともなくVP]の反復）をあらわす。隠喩的作用の趣意は、対比による叙述の主眼をあらわす。本節でみた例文からは、叙述の主眼となるプロセス関係のトラジェクターは、トピック標識をとまなうことがわかる。名詞的対比とは異なり、対句的対比では、対比される二つのイベントは同等のもの

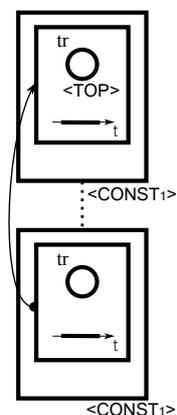


図 4.27: 対句的対比 (ANTI-coup)

¹⁹格言 (maxim) とは、推論の大前提となる命題をあらわす、修辞である。

みられる。スキーマでは、隠喩的作用の矢印は一方から他方へ伸びているもののみが表示されているが、実際には相互に影響を及ぼし合っている。

4.5.2 対義結合

対義結合 (oxymoron) とは、意味的に両立しえない二つの表現を、統語的に連結する修辞である。意味的に両立しえない表現のうち、最たるものは、論理的矛盾である。論理的矛盾とは、Aと非Aがともに成り立つとすることをいう。夢だけど夢じゃなかった、といえ、矛盾である。しかし、解釈は可能である。修辞理解のプロセスでは、論理的には受け入れられない表現も、解釈可能となる場合がある。近くて遠いゴール、といえ、近い-遠いという対義語の組み合わせで修飾句がつくられているから、意味論的には逸脱的である。しかしたとえば、山頂は目前に見えているが思いのほか距離がある、といった文脈では理解可能である。

これまでの対義結合の研究では、カテゴリー論からの分析が多くみられる。たとえば、大森 (1994) では、認知言語学のプロトタイプ理論から分析がなされている。より一般に、対義結合の特徴としてしばしば注目されてきたのは、カテゴリー判断にかかわる、矛盾の概念である。対義結合のこれまでの主要研究では、「矛盾」ということばがキーワードとなっているといえる。矛盾に関わる、他の修辞との比較研究も多い。たとえば、逆説との比較 (佐藤 1981, Leech 1969) や、トートロジーとの比較 (森 2002a, 有井 1989) などがある²⁰。たとえば、リーチは、対義結合は、現実には指示物が存在しないという意味での矛盾であり、逆説は、ある命題が明らかに偽であるという意味での矛盾であるとして、両者を区別する。多くの研究では、対義結合がどのような点で矛盾であるのか、ということが議論の中心となっているといえる。つまり、対義結合が修辭的にどのように逸脱しているかが、主要な分析対象となっているといえる。

これに対し、本節では、対義結合の修辞過程に重点をおく。対義結合の修辞理解に関する認知プロセスを分析することは、矛盾がいかに解消され、どのような修辭的效果を生じるのかを明かにする手がかりとなる。対義結合は、意味的な対立を認知する過程によって、次の二つが少なくとも区別される。第一は、二つの叙述内容が意味的に対立することを認知するもので、これを対比的対義結合とよぶ。第二は、叙述対象のもつ典型的な性質と叙述内容とが意味的に対立することを認知するもので、これを提喩的対義結合とよぶ。

対比的対義結合

対比的対義結合は、並列される叙述のあいだに、意味の対立がみとめられる、対義結合である。

- (7) 「(…) あの時代の、ぼくの若さでは、いったん結婚した女の幸福は、その結婚のなかでもとめるしかない、信じさせられていて……。」

²⁰逆説 (paradox) とは、広義には、一般には受け入れがたい内容を断言する、修辞である。また、トートロジー (tautology) とは、説明内容に、説明対象となる語句を用いる修辞である。

「今だって、そうですね。」
「そうですが、そうでもない。」

(川端康成「舞姫」：21)

- (8) 過去を語ることが、愛情を語ることにもなった。波子の身の上相談も、愛の訴えに聞こえた。それだけの年月が、二人のあいだに流れていた。この年月は、二人のつながりでもあり、へだてでもあった²¹。

(川端康成「舞姫」：20)

(7)のように、「そう」であり、かつ「そう」でないというのは、論理的矛盾である。(8)では、「つながり」と「へだて」は意味的に対立するにもかかわらず、「年月」の述語として、並列して叙述されている。

対義結合は、一見すると、ひとつの対象に、対義的な二つの叙述を結びつけている。しかし、その修辞理解においては、二つの対義的叙述は、ひとつの対象の、微妙に異なる二つの側面を形容しているものとみられる。(7)では、ある面では「そう」であり、またある面では「そう」でないといえる。人間は単純ではないということから、矛盾が許容され、理解可能となる。(8)では、二人の関係の蓄積としてみれば「つながり」であり、過去と現在の断絶という点では「へだて」といえる。対義結合では、二つの相反する叙述が、二つの対比的コンテキストで、それぞれ理解される。

対比的対義結合の修辞過程に関して、次の三つの側面を区別できる。(i) 並置された語句 (たとえば「つながり」と「へだて」) の対比性、あるいは対立性を認知し、矛盾を認めるという面。これが、対義結合の修辞過程における、修辞の条件となる。(ii) 叙述対象となるものに関する、二つの文脈を想起するという面。たとえば、(8)では、[年月の蓄積性]という点では「つながり」といえ、[年月の断絶性]という点では「へだて」といえる。二つの対立する叙述が許容されるためには、叙述対象のある特定の性質だけに、焦点をあて、二つの異なる文脈の中で、叙述を解釈する必要がある。(iii) 二つの文脈を対比するという面。二つの対立する叙述は唯一つの対象 (たとえば「年月」) とむすびつけられる。この共通の叙述対象を接点として、対義結合の理解のコンテキストとなる二つの文脈が、対比的に抱合される。

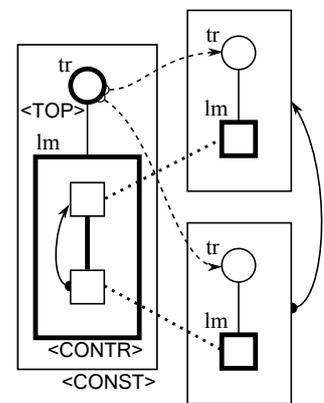


図 4.28: 対比的対義結合 (OXYM-anti)

図 4.28 は、対比的対義結合のスキーマ **OXYM-anti** である。一見するとスキーマは複雑な構造をもつが、左の関係は名詞的対比 **ANTI-nom** の構造と類似し、右に二つ並んだ関係は対句的対比 **ANTI-coup** の構造と類似する。左の関係の成分構造にみられる隠喩的作用のむすぶ二つの要素は、並置され二つの述語 (たとえば「つながり」と「へだて」) との対立関係を

²¹佐藤 (1981: 134) の挙げた、対義結合の例文である。

あらかず。この対立関係 CONTR は、構文的環境 CONST におけるラジェクターでありトピックとなる叙述対象（たとえば「年月」）とむすびつけられる。これは上述の三つの側面のうち、(i) と対応する。また、トピックとなるものからのびる二つの換喩的作用は、対義結合が理解可能となるための、二つの文脈形成のプロセスをあらわす。たとえば (8) では、「年月」が媒体となって、[年月の蓄積性] と [年月の断絶性] という二つの文脈が形成される。このプロセスは [NP₁ の NP₂] という近接性にもとづく、換喩のプロセスといえる。換喩については、4.6.1 節を参照。これは三つの側面のうち、(ii) と対応する。最後に、隠喩的作用によってむすばれ右の二つの関係は、二つの文脈における叙述の対比的認知をあらわす。たとえば、[年月の蓄積性はつながりである] と [年月の断絶性はへだてである] という二つのコピュラの叙述が、対比的に認識される。

提喩的対義結合

提喩的対義結合は、叙述対象と叙述内容のあいだに、意味の対立が間接的に認知される、対義結合である。

- (9) その上に横たわった^{したい}屍体の頭部に、米兵が何か挿すのが見えた。ライターが光った。すると意外にもその屍体が軽く頭をもたげた。細い煙がゆるやかに日光の中に立ち上った。煙草であった。その屍体は生きていた²²。

(大岡昇平「野火」: 89)

(13) では、平常の文脈では「屍体」は死んでいるものを意味する。そして、「屍体」をこの慣習的な意味として読み換えると、[その死んでいるものは生きていた] となって、論理的矛盾を生じる。このように、提喩的対義結合の修辞過程では、ある名詞からその典型的性質が喚起されることで、文脈上矛盾を生じる。ここで、「屍体」を種、[死んでいるもの] を類というならば、この種のプロセスは、種で類をあらわす提喩の修辞過程といえる。提喩については、4.6.2 節を参照。

- (10) 新入りの気の弱い凶悪犯をおどして、朝飯のタクアンをかつあげるなど朝飯前。

(井上ひさし「ブンとフン」: 131)

(10) では、[凶悪犯は気が強いものである] というコンテクストを読み込んだ場合、言い換えると、「凶悪犯」を種、[気が強いもの] を類とする提喩的認識によって、「気の弱い」と [気の強い] との矛盾が生じる。しかし、実際には、気の弱い凶悪犯も存在してよいわけで、字義通りの矛盾はない。(13) では、死んでいない屍体はふつう存在しないので、これと比較すると、矛盾性は相対的に弱いといえる。矛盾が、連辞関係に直接的にあらわれている対比的対義結合とことなり、提喩的対義結合では、叙述対象のある側面を、提喩的に連合関係に顕在化さ

²²丸谷 (1977: 220) が、対義結合の例として挙げている。

せることで、矛盾が生じる。つまり、この提喩的認識の強さによって、矛盾性の強さは異なるといえる。

次の例では、矛盾性の認知はさらに間接的であり、提喩のプロセスによって矛盾を生じるというよりは、潜在的な対比の文脈によって、提喩的解釈が誘引されるものである。

- (11) 夜の落葉であった。
目に見えない落葉であった。

(川端康成「落葉」：265)

- (12) 黒く沈んだ森と赤くよどんだ夕やけとのあいだに、あざやかな切れ目を描いて、その細い青空は遠くに見え、静かに澄んで、かなしいようであった。

(川端康成「舞姫」：15)

(11) では、「目に見えない」という修飾部により、通常では[落葉は目に見えるものである]という提喩的解釈が誘引される。それによって、「目に見えない落葉」という表現に矛盾性が生じる。その結果、修辭的効果として、通常の状態と比較して「夜」であるという現在の状況の特異性が強調される。(12) では、「細い」が「青空」を修飾することで、[青空は広いものである]という面が際立つ。これによって、語彙のレベルでは対立的とはいえないが、細い／広いという対立が認知される。その対立の認知による修辭的効果として、森と夕やけのあいだに、細く残った青空という、特異な状況が際立つと考えられる。

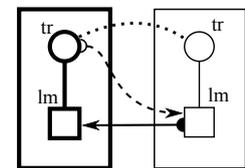


図 4.29: 提喩的対義結合 (OXYM-synec)

図 4.29 は、提喩的対義結合のスキーマ **OXYM-synec** である。左の関係のトラジェクターからのびる換喩的作用は、叙述対象となるもの（たとえば「屍体」）の典型的性質（たとえば[死んでいるもの]）を提喩的に認知するプロセスをあらわす。右の関係は、矛盾を生じるコンテキストとなる叙述（たとえば[屍体は死んでいるものである]）をあらわす。二つの関係におけるランドマークをむすぶ隠喩的作用は、言語化されている述語と、提喩的におぎなわれる述語に生じる対立関係の認知をあらわす。

4.5.3 創造的矛盾

図 4.30 は、対比・対義結合の修辭ネットワークである。[1] **ANTI-contr** は、並列あるいは比較の表現による対比のスキーマである。これを介して、対比的対義結合 **OXYM-anti** の左部分の構造は、名詞的対比 **ANTI-nom** からの拡張とみることができる。[2] **ANTI-relation** は、二つの叙述文脈の対比のスキーマである。これを介して、**OXYM-anti** の右部分の構造は、対句的対比 **ANTI-coup** からの拡張とみることができる。[3] **ANTI** は対比のスキーマである。隠喩的作用でむすばれた二つの要素は、連合関係として対比される二項をあらわす。見立ての修辭のスキーマ **MTPRC** は、対比のスキーマと事例化の関係にある。見立ての修辭で

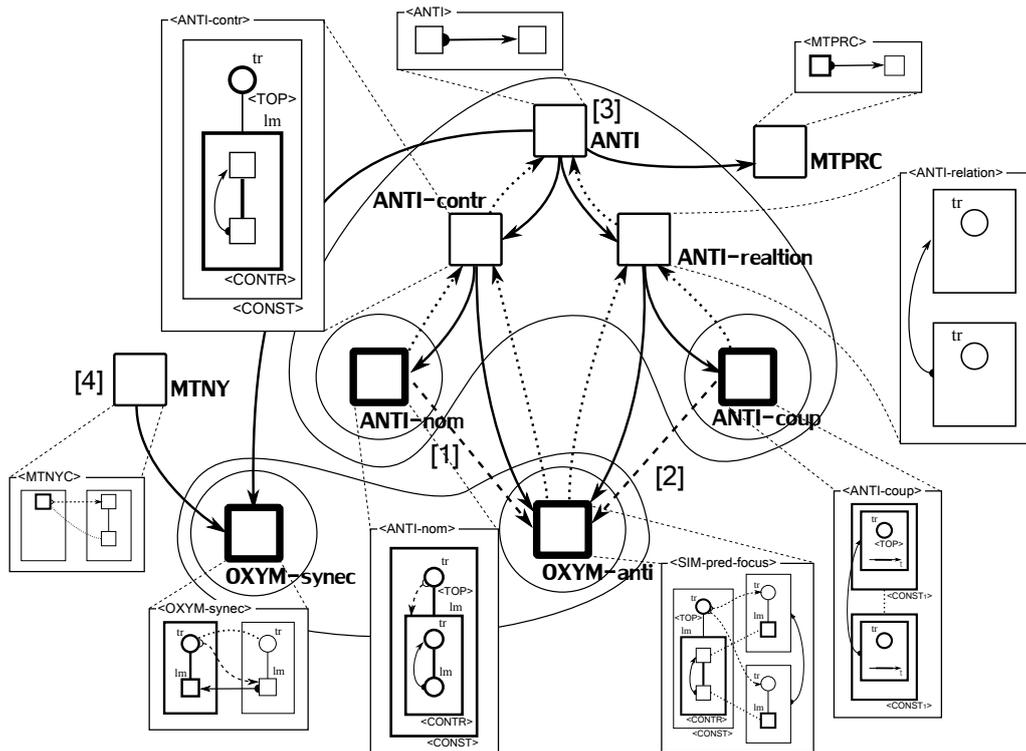


図 4.30: 対比・対義結合の修辞ネットワーク

は、媒体と趣意の潜在的な対比関係がかかわる。また、このスキーマは、対比と対義結合のスキーマ全体を特徴づけるものであり、きわめて基本的な修辞過程のスキーマといえる。[4] 提喩的対義結合 **OXYM-synec** は、換喩類の一般的スキーマ **MTNYC** と事例化の関係にある。間接的な矛盾を生じる提喩的対義結合では、換喩的な修辞過程がかかわるといえる。

対比は、ものごとの新たな一面に、光を当てる。ことばの意味は、ふつう、慣習的な文脈の中で意味をもつ。逆に言えば、特別な文脈によって、慣習的でない意味をもつ場合がある。対比は、文脈による非慣習的な意味の付与に用いられる、主要な手段となる。たとえば、恋といえば、ふつう感情にかかわる。しかし、(1) では、恋が芸術と対比されることで、「恋」という語が特殊な意味をもつ。かつて Bain (1887: 24-27) がいったように、対比は、対照性を明示することで、潜在する意味を引き出すことに、本意がある。対比とは、ものごとに潜在する性質を把握する認知プロセスであり、平常では光のあたらない、ことばの創造的な意味をひきだすものといえる。

対義結合は、対比を経て、固定観念の崩壊を生じる。対義語の対は、一番自明な対比であって、慣習的な文脈の中では、ある語の肯定は、対義語の否定を含意する。対義結合は、対立する語句を、一つの叙述について並置するものであり、字義通りには理解不能である。その点では、矛盾がある。矛盾といっても、単に不合理としておかれるものと、矛盾を介して意味を創造するものがある。

悪い矛盾が平面的相殺の論理であるとするなら、価値のある矛盾は止揚された立体

的統合である。平面的矛盾のように反発し合うものをただ中和させてしまうのではなく、立体的矛盾は、対立するものを掛け合わせて、思いもかけない大きな相乗的可能性をつくり上げる。矛盾の中には、こういう創造的矛盾ともいべきものがあることを、とくにわれわれは、忘れないようにしておかなくてはならない。

(外山 1976/1965: 100-101)

(8) では、年月がつながりであり、へだてでもあった、と言われる。ともに年月に関する叙述で、つながりは、年月の蓄積の側面を照らし、へだては年月の断絶の側面を照らす。この二つの文脈は、それぞれ理解可能である。しかし、一方をとれば、他方はとれず、この二極的側面は、通常同時に思い浮かべることはできない。ここでは、年月に関するそうした固定観念が打ち崩され、二人にとっての「年月」ということばの意味が、慣習的意味をはなれ、創造的に引き出されている。

矛盾による意味の創造性は、哲学における言述でもみられる。

(13) 愛は人格的でなければならぬ。人格的統一と考えられるものは、私に於いて^お汝^{なんじ}を見、汝に於いて私を見るということではなければならぬ。非連続の連続として人格的統一というものが成立するのである。

(西田幾多郎「無の自覚的限定序」: 7)

「非連続の連続」は、一見すると不合理と思われる。「非連続」と「連続」とを単に対立語ととれば、これを理解することはできない。その意味では、対義結合による表現は、固定観念を打ち崩すための衝撃をあたえる材料ともなっているといえる。修辞表現は、場合によっては、伝達主体にとっての哲学観の表現手段ともなり、解釈主体にとっての認識の転換の契機ともなり得るものである。

4.6 関係の修辞

あるもので、それと近接関係をもつ他のものをあらかず修辞表現は、古代から、修辞学の主要な研究対象のひとつであった。この種の修辞は、広く換喩とよばれる。修辞学の起源といえる Aristotle (1992/330BC-abt) でも、換喩は比喩のひとつとして挙げられている。換喩とは近接性にもとづく修辞である。例えば、漱石を読む、といえ、作家で作品をあらわすことができる。修辞学では、近接性の種類によって、換喩の下位修辞として、狭義の換喩、提喩、転喩が区別されるが、用語法は統一されていない。本節では、三つの修辞を区別するが、この三つはすべて近接性にもとづく点では共通するので、まとめて換喩類とよぶ²³。

換喩類の研究では、媒体と趣意が近接性にもとづいて、理解される。換喩類の修辞表現の分布を明かにしていくためには、近接性の分類を行う必要がある。しかし、近接性とは何か、問題である。認知意味論の研究では、たいてい経験的な関係を近接性とよぶ (Lakoff and Johnson 1980, Taylor 1989, Kövecses and Radden 1998, 山梨 1988, 谷口 2003)。たとえば、「容器-中身」「主体-手段」「地名-産物」などである。一升瓶を飲む、といえ、一升瓶の中にはいった酒を飲むことを意味するし、ボルドーを飲む、といえ、ボルドーのワインを飲むことを意味する (山梨 1988: 93-103)。日常の経験に基づいた直感的な分類で、分かりやすいが、分類項目の相互関係を分析することが困難である²⁴。

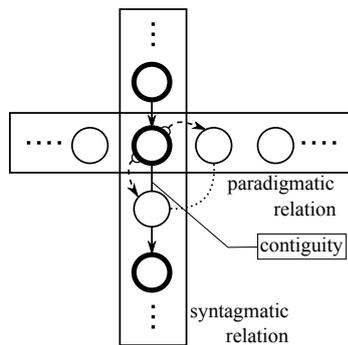


図 4.31: 連辞／連合関係と近接性

その一方で、換喩類の修辞と文法との関連が指摘されている (Ruwet 1986/1975, Langacker 1993, 1999/1995, 2009a,b, 西村 2004, 2002, 山梨 2004)。「文法は、慣習的な方法によって明示される情報自体が、言語使用において話し手と聞き手の理解する正確なつながりを確立するわけではないという点で、基本的に換喩的である。」 (Langacker 2009a: 46) 本研究では、認知主体の文法的解釈の観点から、文法的関係にもとづいて分類を行う。認知文法では、関係は、文法の基本カテゴリーを特徴づけるために定義される、認知的な存在である。たとえば、動詞「選ぶ」は、選ぶ主体と選ばれるものとの関係をプロファイルする。認知文法の関係という概念については、3.1 節で詳細に述べた。

ところで、関係表現は、デフォルトの解釈を誘引する場合がある。たとえば、着るといえ、人が服を着るという解釈が、デフォルトの解釈のひとつである。逆にいえば、人と服は、着るとい語によって、関係をしばしばプロファイルされる。言い換えると、人と服とは、着ることの文脈で、強く結ばれる。本研究では、ある関係表現が、デフォルト的にプロファイルする二つの要素の相関を、**近接性(contiguity)**とよぶ²⁵。プロファイルされるとは、

²³換喩類の区分には大きく三つの立場があり、一に、換喩類はすべて異なる修辞とする立場、二に、転喩は換喩の下位修辞であるが、提喩は別種とする立場、三に、転喩と提喩はともに換喩の下位修辞とする立場である。

²⁴Blank (1999) は、静的なフレームと動的なフレームの区別によって、認知意味論的分類の一般化を試みている。換喩の理解は、身体的経験の問題と分かち難いと考えられ、経験にもとづく分類の精密化は本研究の分類法と並列的に行われるべき課題と思われる。

²⁵経験の近接性は、個人による揺れが大きい。デフォルト的要素の近接性は、相対的に個人による揺れが小

典型的には、実際の言語表現として、連辞に顕在化されることである。つまり、近接性をもつ二つの要素は、しばしば連辞関係として、言語表現に顕在化される。一般に、換喩的表現は、近接性をもつ二つの要素の一方を、背景化するものといえる。背景化された要素は、換喩的作用の趣意となり、連辞のコンテキストとなるか、連合化される。図 4.31 は、連辞／連合関係と近接性のイメージ図である。

4.6.1 節では換喩、4.6.2 節では提喩、4.6.3 節では転喩の認知プロセスの性質を、具体例とともに分析していく。4.6.4 節では、修辞のネットワークを示し、修辞性の特色について述べる。

4.6.1 換喩

換喩 (metonymy) とは、あるものを、それに関係した別のものによってあらわす転義的比喩である。換喩表現の理解は、媒体と趣意との近接性を理解することにもとづく。漱石を読む、たとえば、媒体は漱石であり、趣意は漱石の本となる。漱石と本とのあいだにある、 $[N_1 \text{ の } N_2]$ という近接性を理解することが、この換喩表現の修辞理解につながる。

換喩は、媒体と趣意の関係に関する、認知的な際立ちの点から、次の二つが区別される。ひとつは、媒体が関係表現のランドマークとなるもので、特徴的換喩とよぶ。もうひとつは、媒体が関係表現のトラジェクターとなるもので、部分的換喩とよぶ。

特徴的換喩

換喩は、一般に、媒体と趣意は、 $[N_1 \text{ の } N_2]$ という関係をもつ。特徴的換喩は、 N_1 が媒体となる換喩である。

(1) 君釣りに行きませんかと 赤シャツ がおれに聞いた。

(夏目漱石「坊っちゃん」: 46)

(1) では、「赤シャツ」はふつう身につける衣類であり、「聞いた」の行為主体としての意味は、通常もたない。この場合「赤シャツ」は、赤シャツの男として、意味をずらして解釈することで、この種の修辞表現が理解される。ここで、赤シャツと男は、 $[N_1 \text{ の } N_2]$ という関係として理解される。赤シャツの人という換喩的理解は、一見すると、一意的である。しかし、厳密には、この解釈は多様である。たとえば、ある動詞から、デフォルト的に想起される、項間の近接性にもとづいて、趣意を理解することも可能である。この点からは、赤シャツと男を結びつけているものは、 $[N_1 \text{ が } N_2 \text{ を着る}]$ という動詞の項関係である、ともいえる。さらにいえば、動詞の解釈も一意的なものではない。 $[N_1 \text{ が } N_2 \text{ を身につける}]$ 、 $[N_1 \text{ が } N_2 \text{ をトレードマークにする}]$ といった動詞で、赤シャツと男を関係づけることも可能である。赤シャツの男という説明は、この解釈のゆらぎの指標のひとつにすぎない。

(2) 紺足袋 は静かに歩いて来た。

さい。本節での近接性の定義は、近接性の範囲を便宜的に限定しているものといえる。

(夏目漱石「虞美人草」:160)

(2)では、[紺足袋の女]という関係によって、趣意を理解することができる。ここで、(1)と共通するのは、[N₁のN₂]のうち、N₁が媒体となり、N₂が趣意となっていることである。ここで、N₁は修飾部であり、趣意であるN₂の被修飾部にたいし、修飾関係をもっている。これまで挙げた例では、N₁は衣類である。N₁だけが明示されることで、服装の特徴が際立つ表現となっている。

これまで挙げた例では、媒体が衣類であったが、換喩の媒体は、さまざまなものが可能である。

(3) 花の影の明かなるを誇る、橋の袂の葎簀茶屋に、高島田²⁶が休んでゐる。

(夏目漱石「虞美人草」:69)

(4) かくて互いに少時^{しばらく}待つ中、船の準備も整えりとの宿の言葉に皆我先にと争うて、

(幸田露伴「風流微塵蔵」:37)

(5) ところが、不思議な^{いんねん}因縁で、チベット語はたしかに臭いのであった。というのは、先生は大変放屁^{ほうひ}をなさる癖^{くせ}があった。

(坂口安吾「勉強記」:113)

(3)では、髪型が媒体となり、[高島田の女]として理解される。(4)では、立場・所属が媒体となり[宿の人]の言葉として、(5)では、科目名が媒体となり[チベット語の講義室]として理解される。

図4.32は、特徴的換喩のスキーマMTNY-featである。一番左のプロセス的關係において、媒体となる名辞(たとえば「赤シャツ」)がその動詞(たとえば「聞いた」)に関する意味的逸脱を条件として、修辭的焦点となる。これによって、媒体がプロセス的關係をもつ趣意への換喩的作用を受ける。媒体と趣意は[N₁のN₂]によって、それぞれランドマークとトラジェクターに位置づけられる(たとえば、[赤シャツの男])。文全体としては、赤シャツの男が聞いた、というように、男が「聞いた」の主語となる文脈で、意図が理解される。このことから、右下のプロセス的關係(「聞いた」)が、趣意をトラジェクターとするコンテキストでプロフィールされている。

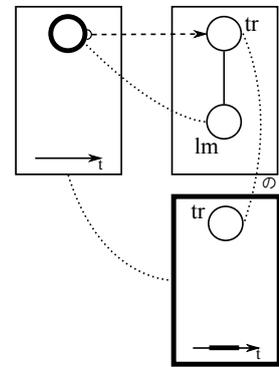


図 4.32: 特徴的換喩 (MTNY-feat)

部分的換喩

部分的換喩は、[N₁のN₂]のN₂が媒体となる、換喩である。代表的な例として、身体部分の表現で、全体をあらわすものが挙げられる。

²⁶女の髪のかき方の一。島田髻の根を高くあげて結ったもの。

(6) 文鳥の足は向うのとまり木の真中あたりに具合よく落ちた²⁷。

(夏目漱石「文鳥」: 84)

(7) 薄暗い障子の影に、肉の落ちた孤堂先生の顔が髯^{もろとも}諸共に現われた。

(夏目漱石「虞美人草」: 199)

(6)では、「足」だけが「落ちた」ということはないので、これは文鳥のからだ全体をあらわしていると解釈できる。足とからだとの関係は、部分-全体の関係である。ここでは、換喩の趣意は、「文鳥」と明示されているが、「文鳥」は名詞句内の修飾部として、相対的に背景化されており、名詞句「文鳥の足」の主要部は足である。このことから、「落ちた」という動詞とのあいだに、意味的不整合性がみられる。このことが修辞の条件となって、(6)は、換喩として理解される。ここでは、 $[N_1 \text{ の } N_2]$ という連辞のパターンは、暗黙の前提として修辞理解を支えるものとしてではなく、 N_1 と N_2 のあいだに、明示的に提喩的なコンテキストをあたえるものとして働いており、この種の文脈が換喩的作用を形成する。(7)でも、媒体と趣意はともに明示されているが、「孤堂先生の顔」の主要部は顔である。通常の間脈では述語「現われた」の主辞が「顔」とはならないから、これにより、「顔」から「孤堂先生」への換喩的作用が誘引される。

身体部分ではなく、物の一部分が媒体となるものもある。

(8) 君白い帆が見える。そら、あの島の青い山を背にして-丸で動かんぜ。

(夏目漱石「虞美人草」: 20)

(8)では、文字通りには「帆」だけを注視しているとも取れるが、「見える」対象としては、ふつう船全体をあらわす。(6)(7)では、媒体と趣意は物理的に連結しており、概念的にも相補的である。一方(8)では、媒体と趣意は物理的には連結しているが、概念的には比較的独立である。

これまでに挙げた提喩は、部分が媒体となり、全体が趣意となるものであった。これにたいし、全体が媒体となり、部分が趣意となるものもある。たとえば、みかんを剥く、といえ、みかんの皮を剥くのであって、みかんそのものを剥くのではない。この種の提喩は、日本語の日常的な表現に広範に見られる(山梨 2000: 87-90)。しかし、このような表現の理解には、ほとんど修辞性を感じられず、少なくとも、転義の感覚はほぼないといってよいことから、全体から部分への提喩は、修辞表現としてはとりあつかわない。

部分的換喩の修辞理解のスキーマを、図 4.33 にしめす。特徴的換喩と、構造は類似している。唯一の相違は、 $[N_1 \text{ の } N_2]$ における、媒体と趣意との tr/lm 関係が、逆転しているところ

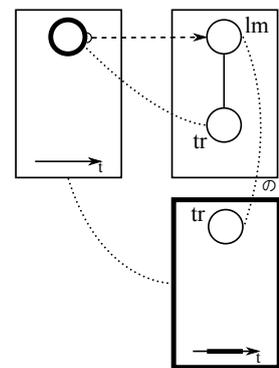


図 4.33: 部分的換喩 (MTNY-part)

²⁷山梨 (1988: 105) が、提喩の例文として挙げた。

である。特徴的換喩では、[N₁のN₂]における修飾部が、換喩的作用の媒体となっていたのにたいし、部分的換喩では、被修飾部が媒体となる。つまり、解釈のコンテクストとなる名詞句[N₁のN₂]のランドマーク、トラジェクターのどちらが、媒体となるかによって、特徴的換喩と部分的換喩が区別される。

4.6.2 提喩

提喩 (synecdoche) とは、類で種を、あるいは種で類をあらわす修辞である²⁸。提喩の修辞過程でも、媒体と趣意の近接性を理解するプロセスを経る。提喩の近接性、つまり類と種の近接性は、コピュラ的な関係表現 [N₁はN₂である] にもとづく。換喩と並行的に、この関係表現のトラジェクター、ランドマークのどちらが媒体となるかによって、次の二つが区別される。ひとつは、媒体がコピュラ関係のランドマークとなるもので、類の提喩とよぶ。もうひとつは、媒体がコピュラ関係のトラジェクターとなるもので、種の提喩とよぶ。

類の提喩

[N₁はN₂である]のN₂が媒体となる提喩を、類の提喩とよぶ。一般に、関係表現 [N₁はN₂である]では、N₁がトラジェクターとなり、N₂がランドマークとなる。よって、類の提喩は、近接性を与える関係表現のランドマークが媒体となる、提喩といえる。コピュラによる近接性は、連辞関係を背景化し、N₁とN₂の連合関係を前景化する。

- (9) ただ、お寒うござります、お寒うござります、悪いものが降りましてお寒うござりますると言うて

(幸田露伴「風流微塵蔵」：47)

- (10) いよいよ学校へ出た。初めて教壇^{きょうじょう}へ這入って高い所へ乗った時は、何だか変だった。

(夏目漱石「坊っちゃん」：26)

- (11) その夏から秋にかけて、私は二人の女から感情を要求された。

(川端康成「明日の約束」：240)

(9)では、「悪いもの」とは、雪である。雪と悪いものとの関係は、[雪は悪いものである]という暗黙のコピュラであり、雪のもつ性質の全体のなかで、特定の性質だけを言語化したものといえる。(10)でも同じように、[教壇は高い所である]、という暗黙のコピュラによって、媒体と趣意の近接性が動機づけられている。「高い所」は教壇を象徴的にあらわすものとなっており、物理的な高さ、社会的地位の高さなどが、結果として強調される。(9)では、女から「要求され」る感情とは、典型的に恋愛感情であり、[恋愛感情は感情である]というカテゴリー判断のコピュラが、修辞理解の動機づけとなる。

²⁸提喩は、部分-全体の関係、あるいは類-種の関係にもとづくものとする定義も一般的である。本研究では、関係表現に関する分類が整合性をもつ便宜上、部分-全体関係にもとづくものは、換喩と分類した。

図 4.34 は、類の提喩のスキーマ **SYNEC-kind** である。構造は特徴的換喩のスキーマ **MTNY-feat** と類似しており、相違点は、媒体と趣意の関係がコピュラ的 (copulative) であることだけである。左上のプロセス的关系 (たとえば「降りまして」) においてプロファイルされる要素 (たとえば「悪いもの」) は換喩的作用を受ける。その結果、コピュラ的关系のトラジェクター (たとえば [雪]) が趣意となる。

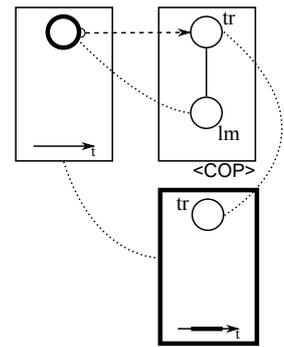


図 4.34: 類の提喩 (SYNEC-kind)

類の提喩では、ものごとの特定の性質だけを言語化することで、趣意があらわされる。この種の提喩を理解するためには、明示された部分的性質の表現から、趣意が推定できなくてはならない。このことは、媒体となる性質をカテゴリーとして見た時の、趣意のプロトタイプ性 (SYNEC-kind) と関係する。山は比叡山、花は桜という類の提喩は、語彙のレベルにおける、カテゴリーとプロトタイプの関係であるといえる。「悪いもの」は雪というのは、語彙のレベルでは慣習化しているとはいえないが、降って寒いという述辞のつくるコンテキストが、連想を限定し、プロトタイプ性を高める。つまり、コピュラ的提喩を理解するためには、語彙のレベル、あるいはコンテキストの上で、趣意のプロトタイプ性が十分高まる必要がある。

種の提喩

種の提喩は、 $[N_1 \text{ は } N_2 \text{ である}]$ の N_1 が媒体となる提喩である。

(12) 「働らくのも^い可いが、働らくなら、生活以上の働でなくっちゃ名誉にならない。あらゆる神聖な労力は、みんな^パ麺^ンを離れている」

(夏目漱石「それから」: 78)

(13) もし^{ポテト}馬^{ダイヤモンド}鈴^ン薯^ンが^ン金^ン剛^ン石^ンより大切になったら、人間はもう駄目であると、代助は平生から考えていた。

(夏目漱石「それから」: 167)

(12)(13) では、それぞれ [麺^ンは食べものである]、[馬^ン鈴^ン薯^ンは食べものである]、[金^ン剛^ン石^ンは美しいものである] という、暗黙のコピュラ関係によって、趣意が理解される。この種の提喩を理解するためには、媒体が、趣意となるカテゴリーの、プロトタイプであることに気づく必要がある。(12) では、「麺^ン」が食べもののプロトタイプであることは、語彙のレベルで慣習化している。これにたいし、(13) では、「馬^ン鈴^ン薯^ン」が食べもののプロトタイプであることは、「金^ン剛^ン石^ン」との対比の文脈によってはじめて明確になる。

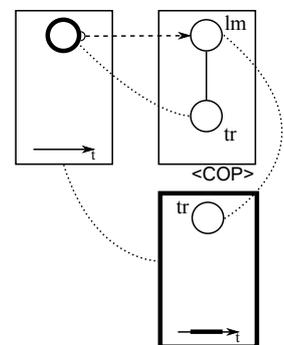


図 4.35: 種の提喩 (SYNEC-spec)

提喩はプロトタイプ性、あるいは特徴の焦点化に関わる。類の提喩では、媒体が趣意のもつプロトタイプの特徴であることを理解するこ

とが、修辞理解のコンテキストとなり、種の提喩では、媒体が趣意のカテゴリーのプロトタイプとみなされることが必要である。

図4.35は、種の提喩のスキーマ**SYNEC-spec**である。構造は部分的換喩のスキーマ**MTNY-part**と類似しており、相違点は、媒体と趣意の関係表現が、コピュラの(copulative)であることだけである。左上のプロセス的關係(たとえば「離れている」)においてプロファイルされる要素(たとえば「麵麩」)は、意味的不整合性を修辞の条件に、換喩的作用を受ける。趣意となるのは、コピュラ的關係のトラジェクター(たとえば「食べもの」)である。

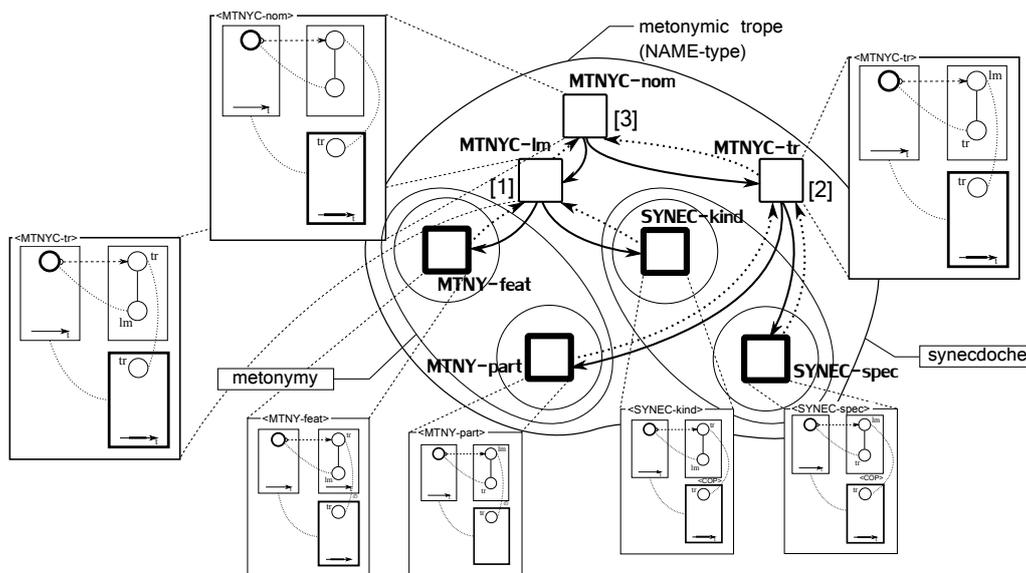


図 4.36: 換喩と提喩のネットワーク

図4.36は、換喩と提喩の修辞スキーマのネットワークである。[1] 関係表現のランドマークをプロファイルする換喩類のスキーマ**MTNYC-lm**は、特徴的換喩と類の提喩のスキーマを事例化する。[2] 関係表現のトラジェクターをプロファイルする換喩類のスキーマ**MTNYC-tr**は、部分的換喩と種の提喩のスキーマを事例化する。[3] ここでとりあげた換喩的表現に共通するのは、媒体と趣意が名詞であることである。このことから、これらの修辞を名詞的換喩類とよぶことができる。このスキーマが**MTNYC-nom**である。これにたいし、次節の転喩は、節が媒体となる、換喩的表現である。

4.6.3 転喩

転喩 (metalepsis) とは、原因で結果を、また結果で原因をあらわす、修辞である。ものごとの一部分だけを表現するという点では、換喩と共通しており、修辞学ではふつう、転喩は換喩の下位修辞とされる。原因-結果の関係は、認知プロセスの点からは、広く推論の前件-後件 (antecedent-consequence) の関係といえる。ここから、前件の転喩と後件の転喩を区別することができる。

前件の転喻

前件の転喻は、デフォルト的な解釈における推論の、前件によって、後件をあらわす転喻である。

- (14) 「さあ、頭もだが、どうだろう、物になるだろうか」と自分は白い男に聞いた。白い男は矢張り何にも答へずに、ちゃきちゃきと^な鋏^{はさみ}を鳴らし始めた。

(夏目漱石「夢十夜」: 122)

- (15) そこで主人はためらわずに、電話のダイヤルを廻したわけだった。

(井上ひさし「モッキンポット師の後始末」: 84)

- (16) その頃は日課として小説を書いている^{じぶん}時分であった。飯と飯の間は大抵机に向かって筆を握っていた。

(夏目漱石「文鳥」: 86)

(14) では、「ちゃきちゃきと鋏を鳴らし始めた」ことは、髪を切り始めたことをあらわす。鋏を鳴らすことは、髪を切るイベントにおける、部分的なイベントであり、必要条件である。したがって、[ちゃきちゃきと鋏を鳴らし始めたならば髪を切り始めた]という推論はふつう成り立つ。この推論の前件だけが明示されることによって、自明の後件が趣意となっている。(15) では、「電話のダイヤルを廻した」ことは電話をかけたことをあらわす。(16) でも同様に、「筆を握っていた」ことは小説を書いていたことをあらわす。この場合は、前文に趣意が明示されているので、慣習化した表現であることに加えて、コンテキストによって転喻の解釈が誘引される。

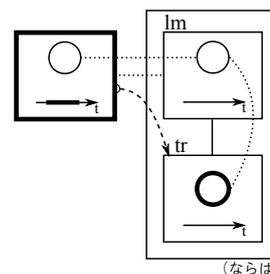


図 4.37: 前件の転喻 (METLP-ante)

図 4.37 は、前件の転喻のスキーマ **METLP-ante** である。換喻、提喻との、もっとも大きな違いは、媒体がプロセス的關係、つまり節であることである。転喻の媒体と趣意は、ともにイベントの一部である。媒体となる前件命題と、趣意となる後件命題が、仮定条件「ならば」によって、解釈上連結される。この条件表現が、転喻の近接性をあたえる関係表現となる。転喻では、両イベントの主語となる参加者は共通している。たとえば、「電話のダイヤルを廻した」の主語と、電話をかけた主語とは共通である。このことは、プロセス的關係の要素が、対応関係をもつことで示される。

転喻は、間接発話行為とも関係があることが指摘されている (山梨 2004, Gibbs 1994)。

後件の転喻

後件の転喻は、デフォルト的な解釈における推論の、後件によって、前件をあらわす転喻である。

(17) 今度は手紙を書かない方が却^{かへ}つて不安になつて、何の意味もないのに、只この感じを駆逐する為に封筒の糊を湿す^{しめ}事があつた。

(夏目漱石「それから」: 16-17)

(18) 五円札が文鳥と籠と箱になつたのは此^この初冬の晩であつた。

(夏目漱石「文鳥」: 81)

(19) 後に同胞を捜^{さが}しに出た、山椒^{さんしょうだゆう}大夫一家の討手が、この坂の下の沼の端^{はた}で、小さい藁履^{わらぐつ}を一足拾^あつた。それは安寿^{あんじゆ}の履であつた。

(森鷗外「山椒大夫」: 288)

(17) では、「封筒の糊を湿す」のは手紙を書いたからであることが推論される。[手紙を書いたならば封筒の糊を湿す]という推論は、日常的である。言い換えると、後件が与えられたときの、前件に関する第一の仮説として、[手紙を書いた]が思い浮かぶ。(18) では、「文鳥と籠と箱になつた」というのは、五円札でこれを買ってきたことをあらわす。(19) では、「沼の端で、小さい藁履を一足拾つた」という表現は、安寿の死を暗示しはするが、(17)(18) と比較して、推論の妥当性は落ちる。この例では、ある文脈としては、趣意は[安寿は入水した]であるといえる。

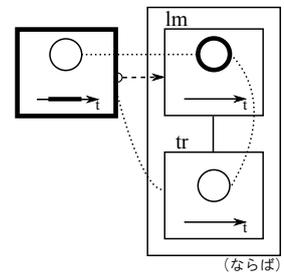


図 4.38: 後件の転喩 (METLP-conse)

図 4.38 は、後件の転喩のスキーマ **METLP-conse** である。前件の転喩では、デフォルト的推論の前件が、換喩的作用の媒体となっていたのにたいし、後件の転喩では、媒体は後件である。このタイプの換喩的作用は、結果から原因を探索するプロセスであるといえる。したがって、推論の種類としては発見的推論的であり、論理的妥当性は落ちるかわりに、発見的創造性がゆたかである。逆に言えば、文脈がうまく設定されていないかぎり、前件を一意に定めることは困難である。そのため、後件の転喩は慣習化しにくく、コンテキストに依存した印象を与えるが、その分、事態描写としては新鮮さもある。

転喩に共通するのは、媒体となる節が、一連のイベントの中で取り立てて焦点化されるということである。この原因となることとして、少なくとも次の二点が挙げられる。第一に、趣意となる節表現が、直接表現するのがはばかられる場合である。(19) のように、死の表現はしばしば転喩的である。第二に、媒体となる節表現が、イベント全体の象徴的側面である場合である。(14) では、髪を切るというかわりに、鉄の音を描写することで、髪を切るイベントにおける聴覚的側面が焦点化される。結果として、男と自分との対話の少なさ、沈黙が際立つ。

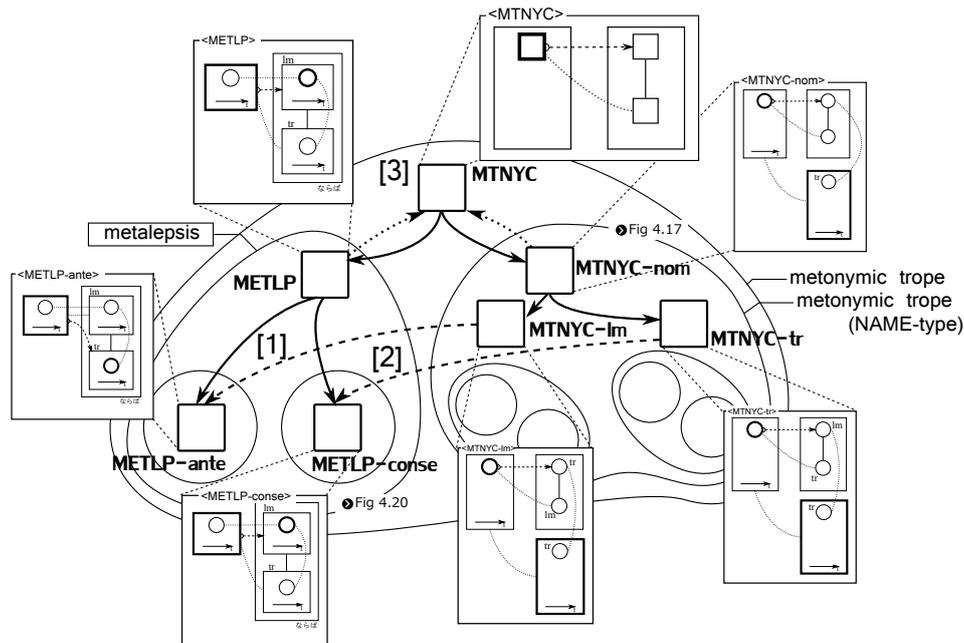


図 4.39: 換喩類のネットワーク

4.6.4 関係表現と際立ちの多層性

図 4.39 は換喩類の修辞のネットワークである。[1] 前件の転喩と後件の転喩のスキーマを、それぞれ事例化する上位スキーマとして、転喩のスキーマ **METLP** が構成されている。[2] 前件の転喩は、推論の関係表現におけるランドマークが、換喩的作用の媒体となる。この点で、ランドマークが媒体となる名辞的換喩類のスキーマ **MTNYC-lm** からの拡張とみることができる。[3] 同様に、後件の転喩は、推論の関係表現におけるトラジェクターが、換喩的作用の媒体となる。この点では、トラジェクターが媒体となる名辞的換喩類のスキーマ **MTNYC-tr** からの拡張とみることができる。[4] 換喩類のもっとも一般的なスキーマ **MTNYC** は、シンプルな構造である。このスキーマの説明は、換喩の定義と重なる。つまり、あるものを、関係する他のものであらわす。

換喩類の修辞は、ある関係表現にもとづく近接性によって特徴づけられる。関係表現がプロファイルする二つの要素は、本来不均等な際立ちをもつ。たとえば、 $[N_1 \text{ の } N_2]$ では N_2 の際立ちが高く、句レベルのトラジェクターとなる。換喩類の修辞は、際立ちのゆがみを利用した修辞表現である。言い換えると、換喩表現は、本来あるはずのないところに際立ちを与えるものとみることができる。たとえば、漱石を読んだ、といえ、漱石の本を読んだということであるが、 $[\text{漱石の本}]$ という句レベルでは、本がトラジェクターであるのにたいし、 $[\text{漱石を読む}]$ という節レベルでは、漱石がトラジェクターとなる。つまり、名詞句レベルでは相対的に際立ちの低い要素が、節レベルの解釈では高い際立ちを得る。言い換えると、句レベルの解釈と節レベルの解釈で、際立ちの分布が衝突する。衝突しあう分布が二重的に重ねあわせられることにより、修辞的な効果として、焦点の多層性が生じる。

4.7 省略の修辞

文法修辞の別に関わらず、省略をおぎなう認知プロセスは、人間の言語能力の基礎となるものといえる。省略は、合理性あるいは経済性の観点からは、一見すると、修辞的というよりも、文法の中で義務化されているもののように思われる。しかし、省略の補完にかかわる認知プロセスは、修辞理解のプロセスに広くみられるものである。たとえば、隠喩や換喩といった代表的な修辞も、省略と無関係ではない。隠喩を理解するためには、前後表現から慣習的な文脈をおぎなわなくてはならないし、換喩の理解は、そもそも省略をおぎなうプロセスと類似している。

さて、「省略」ということばは、文法的に欠落のない、完全な表現が存在する、という含みがある。省略現象の修辞理解において、真理条件的な意味内容に関しては、前提される完全な表現の意味と、補完される表現の意味とは、等価であるといえる。しかし、省略表現の意味と完全な表現の意味は、厳密には異なる。少なくとも、言わずにおかれた部分を補完するプロセスを経て得られた意味は、補完の認知プロセスが介在する以上、何らかのニュアンスの差異が存在する。修辞的な効果までを視野に入れた、修辞現象としての省略の分析では、省略表現と完全な表現とは、等価であるとはいえない。どのような要素を補完するのかという点については、厳密には解釈主体ごとに異なり、理解される意味にはゆらぎが存在する。省略表現を媒体として、解釈主体によって補完される内容を、省略の趣意とよぶ。本節では、省略の媒体と趣意の緊張関係にもとづく修辞理解の観点から、省略現象を分析していく。

本節では、4.7.1節で省略を、4.7.2節で黙説をとりあげる。この二つの修辞は、ともに広い意味で省略現象に含まれる。修辞としての狭義の省略は、省略の媒体と趣意の意味内容が、基本的に同じとなるものである。以後特に断らないかぎり、狭義の省略を単に省略とよぶ。黙説は、省略の媒体となる省略表現の意味内容と、趣意となる意味内容とが、含意等の点で、等価とはいえないものである。4.7.3節では、省略の修辞のネットワークを示し、修辞性の特徴を述べる。

4.7.1 省略

省略 (ellipsis)²⁹ とは、暗黙に理解される部分を言わずにおく、修辞である。

Halliday and Hasan (1976: 142–225) は、主に英語の対話における省略現象を詳細に分析している。ハリデーらは、省略現象を次の三つに分類する。

- (i) 名詞句の省略 (nominal ellipsis)
- (ii) 動詞句の省略 (verbal ellipsis)
- (iii) 節の省略 (clausal ellipsis)

²⁹本節では、省略の中でも、簡約語法をあつかう。簡約語法 (brachylogy) とは、文脈から推定して復元できる省略である。したがって、語彙の内部における、形態論にかかわる省略はここではとりあげない。

図 4.40 は、英語の節の例 *the cat won't catch mice in winter* とここで用いられる用語との対応関係である。(i) 名詞句の省略は、名詞句 (nominal group) 内で名詞が省略されるものである。(ii) 動詞句の省略は、動詞句 (verbal group) 内における省略である。これは次の二つに大別される。第一は、動詞句の動詞が省略されるものである。第二は、動詞句の動詞以外の要素が省略されるものである。(iii) 節の省略は、節内における省略である。これは次の二つに大別される。第一は、節の述語を含む命題的 (propositional) 要素が省略されるものである。第二は、節の主語を含む法的 (modal) 要素が省略されるものである。

the cat	won't	catch	mice	in winter
Modal		Propositional		
Subject	Predicator	Complement	Adjunct	
nominal group	verbal group	nominal group	prepositional group	

図 4.40: Halliday and Hasan (1976: 194)

次の日本語の省略の例では、ハリデーらの分類が、以下に述べるように対応すると考えられる。

- (1) 本何冊買った?—四冊 買った。
- (2) a. これ誰が掃除するの?—彼が たぶん。
b. どうやって行くつもり?—歩く よ。

(1) は、名詞句の省略の例である。省略された名詞 [本] を補って、四冊の本を買ったことが分かる。(2a) は、動詞句の省略のうち、動詞が省略されるものである。省略された動詞 [掃除する] を補って、たぶん掃除するということが分かる。(2b) は、動詞句の省略のうち、動詞以外が省略されるものである。省略された [つもり] を補って、歩いていくつもりということが分かる。(2a) は、節の省略のうち、命題的要素が省略される例でもある。省略の媒体となるのは節の法的要素であり、省略の趣意は、たとえば [それは後で掃除する] という命題的要素とも考えられる。また、(2b) は、節の省略のうち、法的要素が省略される例でもある。省略の媒体となるのは節の命題的要素であり、省略の趣意は、たとえば [僕は—つもりだ] という法的要素とも考えられる。このように、「動詞句の省略は、動詞句内に加えて、節の他の要素の省略をしばしばともなう」(Halliday and Hasan 1976: 194) ことが多く、節の省略に影響するといえる。

本節では、省略の中でも、ハリデーらのいう節の省略にあたる省略現象をとりあげる。節の省略は、省略の媒体によって、次の二つが区別される。第一は、名詞が省略の媒体となるもので、名詞的省略とよぶ。第二は、動詞が省略媒体となるもので、動詞的省略とよぶ。

名詞的省略

名詞的省略は、表現された名詞句から、表現されていない動詞句をおぎなう、省略である。次の例では、主語となる名詞句が省略の媒体となる。

- (3) 「あの外ほかにまだ年寄としよりの奥様がいるのか」
 「去年おな御亡なくなりました」
 「旦那だんなさんは」
 「おります。旦那だんなさんの娘むすめさんで御座ござんす」

(川端康成「雪国」：58)

(6)では、第一の質問で「奥様がいるのか」と尋ねた文脈を受けて、第二の質問では、トピック標識の「は」をともなう名詞句「旦那だんなさんは」のみが言語化され、動詞句[いるのか]は省略されているとみられる。

次の例では、対象や手段をあらわす名詞句が、省略の媒体となっている。

- (4) よくそれを思い出す。言葉をではない。身にしみぬ舞台のせりふのような、木村の声をである。人の振りを見ぬ癖の美少年の冷たい顔をである。

(川端康成「虹」：387)

- (5) 「中風³⁰ですわ。」
 「中風だって、口で。」
 「その口もきけなかったの。まだ踊は、動く方の左手で直せるけれど、三味線は耳がうるさくなるばかり。」

(川端康成「雪国」：58)

(4)では、第一文で「思い出す」という動詞を言語化した後は、この文脈を受けて動詞句が省略されている。それぞれ「言葉」「声」「顔」が省略の媒体となって、[思い出す]という動詞がおぎなわれるとみることができる。(5)では、最後の台詞から、三味線の指導に関するものであることが分かる。「口で」は手段のみをあらわしており、動詞が省略されている³¹。話し手は、中風による麻痺のことだけが念頭にあり、言語障害は考慮していないことが、前後文脈から分かる。ここでは[話せる][(口を)きける]といった動詞句を解釈上補完することで、口をきくことならできらるだろう、といった意味が理解される。

(5)から明確に分かるように、省略の趣意は、解釈主体によってゆれがある。たとえば、[口で教えらるるだろう]とか[口で弾き方を直せばいい]といったような趣意をおぎなうことも文脈上可能となる。省略表現は、一見すると、省略の媒体となる、不完全表現だけが問題となるように思われる。しかし、省略をおぎなう認知プロセスを詳細に観察していくと、おぎなわれる趣意はどのような文脈を前景化するかによって、多様性をもつことが分かる。

この種の省略表現は、命題的な意味内容に関しては、省略の媒体と趣意の意味内容は、基本的に同じといえる。しかし、省略表現は、量に関して平常表現よりも縮小している。このこ

³⁰脳出血や脳梗塞により、麻痺や言語機能障害をきたした状態。

³¹この例から、名詞的省略は、ハリデーらのいう命題的要素の省略とは異なることが分かる。ここでは、法的要素ではなく、命題的要素の補部である「口」が媒体となっている。

とに起因する修辭的な効果の点では、省略表現の媒体と趣意の意味は、厳密には異なる。たとえば(4)では、「思い出す」という動詞が省略されて語句が減少することにより、省略の媒体となるヲ格の名詞句が近接する。

これにより、たとえば「言葉」と「声」と「顔」のように、名詞句が対比されるといえる。この種の修辭的效果は、動詞のあらわすイベントが背景化されることによって、名詞句のあらわすものが前景化されることに起因すると考えられる。

図4.41は、名詞的省略の修辭スキーマ **ELLIP-nom** である。下段の、ものとプロセス関係をむすぶにおける換喩的作用は、名詞句（たとえば「旦那さん」）から動詞句（「いるのか」）をおぎなうプロセスをあらわす。換喩的作用の趣意となるプロセス関係は、文脈上プロファイルされているもの（たとえば「年寄の奥様がいるのか」という表現）と同じ動詞句にもとづくものであり、これが対応線によってあらわされる。趣意となる要素が文脈に明示され、その要素との対応関係が認知されることで、省略をおぎなう認知プロセスが誘引されると考えられる。

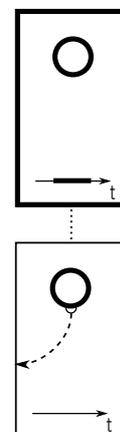


図 4.41: 名詞的省略 (**ELLIP-nom**)

これまでの例は、複数の文が省略をおぎなうコンテキストとなる省略である。これにたいし、単一の文内での省略もある。くびきはその一つである。くびき (zeugma)³² とは、一つの語句が、等位接続された二つ以上の語句と統語関係をもつ、省略である。複数の語句をまとめる一つの語句を、くびき語という。

- (6) 権威をもつと、人は、愛や、やさしさや、正しいことがなにかを、忘れてしまうんです。

(井上ひさし「ブンとフン」: 140)

- (7) 言葉は光る。プリズムの影よ。

花火や、蛍、とんぼの眼玉、ひィとつひィとつ光る。

(北原白秋「言葉」: 333)

(6)では、「や」で等位接続された「愛」「やさしさ」「正しいこと」の述語は、ひとつの動詞句「忘れてしまう」であると解釈される。直近の名詞句である「正しいこと」以外は、動詞句が省略されているともみることが可能である。狭義のくびきは、修辭というよりは、むしろ文法的に義務化されており、ここでは全ての動詞句を明示すると不自然となる。慣習性の観点からは、くびきは、慣習化された省略現象ともいえる。(7)でも同様に、「光る」がくびき語となって、名詞句「花火」「蛍」「とんぼの眼玉」が省略的となっていると考えられる。

くびきでも、動詞句の省略による名詞句の対比がみられる。中でも、対比にともなって、ある名詞句が焦点化される修辭的效果をとまなう場合もある。たとえば(7)では、「花火」「蛍」

³²zeugma という用語は、少なくとも、本節でとりあげる狭義のくびきの他、破格くびき (zeugma solectistic)、比喩くびき (attelage)、異義兼用 (syllepsis) をあらわす用法があり、多義的である。本研究では、狭義のくびきを zeugma として、他三種の用語には括弧で示した別の語をあてている。

が光るものであるというのは、一般的であるが、これらが「とんぼの眼玉」と等位接続されることで、この三つの名詞句が同等の対比関係となる。これによって「とんぼの眼玉」のもつ性質のうち、[光るもの]という性質が焦点化されているとみることも可能である。このように、くびきに関して、特有の修辭的効果が生じるものがみられる点で、単なる文法規則に止まらない修辭的な省略現象であるといえる。

動詞的省略

動詞的省略は、表現された動詞句によって、表現されていない名詞句をおぎなう省略である。

(8) みんな 掛けないか。立ってると草^{くたびれ}臥るぜ。

(夏目漱石「虞美人草」：306)

(9) 「二人をうちへ引き取って、見てあげたら、どうなの。」
「そう簡単な話じゃありませんよ。」

(川端康成「舞姫」：79)

(8)では、「立ってる」ときに掛けるものといえば[椅子]であり、これを補って、椅子に掛けないか、という趣意であることが理解される。(9)では、「引き取って」見るものといえば[面倒]であり、これを補って、面倒を見てあげたらどうなの、という趣意が理解される。

動詞的省略では、動詞句によって規定されるイベントの参加者が省略されている。言い換えると、動詞的省略では、イベントの骨格となるフレームだけが与えられるため、イベントが具体性を失ってぼかされると考えられる。次の例では、ぼかしの修辭的効果が顕著である。

(10) 彼女たちから偶像のように言われても、私は彼女たちのその言葉によって自分の価値を感じることも出来なかったのだから、こんな女と深くなることは私の精神的な禍^{わざわ}いを約束しているように思われた。

(川端康成「明日の約束」：241)

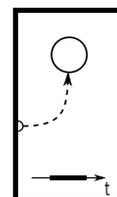


図 4.42: 動詞的省略 (ELLIP-pred)

(10)では、「女」と「深くなる」といえば、[仲が深くなる]ことであり、ガ格をとる名詞句[仲が]が、省略の趣意としておぎなわれるといえる。[仲]というイベントのトラジェクターを明示しないことで、欠落の無い節と比較して、省略表現のあらゆるイベントが抽象的になり、女と仲が深くなるという具体的な状況を想起しにくくなると考えられる。

図4.42は、動詞的省略の修理解に関するスキーマ **ELLIP-pred** である。プロセス関係を媒体とする換喩的作用は、省略の補完をあらゆる。具体的には、プロファイルされたプロセス関係(たとえば「掛けないか」)を媒体として、省略された名詞句(たとえば[椅子])との連辞関係を顕在化させる認知プロセスであるといえる。

名詞的省略と異なりの、趣意は文脈上で明示されていない。言い換えると、名詞的省略では、言語化された文脈が修辞理解のコンテクストになるのに対して、動詞的省略では、言語化されていない文脈、つまり解釈主体のもつ意味論・語用論的知識が主要なコンテクストとなる。動詞的省略の修辞理解は、伝達主体と解釈主体の共有する状況や慣習的知識によって可能となっていると考えられる。

さて、動詞的省略についても、くびきが存在する。

- (11) この男がどういう訳か、よく主人の所へ遊びに来る。来ると自分を恋^{おも}っている女がありそうな、なさそうな、世の中が面白そうな、詰^{つま}らなそうな、凄^{つや}いような艶^{つや}っぽいような文句ばかり並べては帰る。

(夏目漱石「吾輩は猫である」:28)

(11) では、「女」をくびき語として、「ありそうな」「なさそうな」が省略的となっている。また「世の中」をくびき語として、「面白そうな」「詰^{つま}らなそうな」は省略的となっている。この例では、意味的に対立する二つの述語がくびきのに連結されている。これに起因する修辞的効果として、意味内容がぼかされ、「男」の言うことが、はっきりせず要領を得ないという印象が生じる。

節はイベントを規定する。その骨格的構造を与えるのは、動詞句である。動詞句のあらわすフレームに、名詞句のあらわす参加者が位置づけられてはじめて、あるイベントが具体的に表現される。名詞的省略と動詞的省略は、イベントの具体性に関してで対照的な修辞的効果をもつ。名詞的省略では、動詞句が省略されるため、名詞句であらわされるものだけが焦点化される。これによって、ものともものが明確に対比される。一方、動詞的省略では、名詞句が省略されるため、動詞句であらわれるイベントの骨格だけが規定される。これによって、参加者不在のイベントの概要だけがあたえられ、イベントの具体性が失われて、ぼかしの修辞的効果が生じる。

4.7.2 黙説

黙説 (aposiopesis) とは、言葉を濁して文を完結させない修辞である。黙説では、中断によって何らかの含意を生じる³³。ここでは、その中でも、前節であげた省略の形式にしたがう黙説をとりあげる。

- (12) 「(…) 三味線はほんの少しうろ覚えですもの。忘れたらもう浚^{さら}ってくれる人もなし、音符が頼りですわ。」
「唄は？」
「いや、唄は。…」

³³佐藤他 (2006) は、黙説の下位修辞として、重要なことを遅らせて期待を高める未決 (suspension)、前後文脈から命題内容が理解される冒頭省略 (contre-interprétation[仏])、言わないということで注意をひく暗示黙過 (paralipsis) を挙げている。本節ではこれらとは区別して、基本的な黙説のタイプである、省略による黙説をとりあげる。

(12) では、文脈上、「唄」は得意でないという主旨は理解される。しかし、かなりまずいのか、聞かせるほどではないのかといった、不得意の詳細は明らかでない。この点で、文脈に明示された動詞をおぎなう名詞的省略とは異なるといえる。ここでは[得意ではない]という述語をおぎなうて[唄は得意ではない]が趣意となるとみることも可能であるが、さらに[それについては聞かないでください]という含意が生じるとみることも可能である。「…」のような省略記号は、文字媒体の黙説表現でしばしば用いられるものである。

次の例は、ポライトネスに関わる。

- (13) 「(…)それよりか、今日は兄さんは何^どうしました」と聞いた。
「兄さんは今一寸」と後^{うしろむき}向^まの儘^{まま}答^{こた}えて、御米^{およね}は矢張^{やは}り戸棚の中を探している。

(夏目漱石「門」: 10)

(13) では、文脈から「兄さん」は、少なくとも現在は不在であることが理解される。しかし、出かけているのか、病気なのか、会いたくないのかといった、不在の理由などの詳細は明らかではない。ここでは、述部が省略されていることで、不在の詳細に関して含みがある。「一寸」という表現は、しばしば黙説的表現に用いられる。それはちょっと…、ちょっと今は…などの表現は、応対の会話などで特に用いられる。

次の例では、慣用表現の一部を表現することによって、慣用表現の意味内容を暗示的に示唆する。

- (14) 「失礼ですが、旦那^{だんな}は、やっぱり東京ですか」
「東京と見えるかい」
「見えるかいて、一目見りゃあ、第一^{だいち}言葉でわかりまさあ」

(夏目漱石「草枕」: 61)

(14) では、後続の文脈から動詞をおぎなうて、[一目見りゃあわかります]の意味とみることができるが、さらに、[それはいうまでもない]という意味が含意として生じているとみる解釈も可能である。次の例では、慣用表現を黙説的に省略すること自体が慣習化されているものといえ、間接発話行為 (indirect speech act) にも似た修辭的効果を生じている。

- (15) その石から足と尻尾が生えて、とことこ北の方へ駆け出して行ってしまいました。いやもう、その早い^{はやい}の早くない^{はやくない}のって……。

(井上ひさし「腹鼓記」: 19)

(15) では、[早い^{はやい}の早くない^{はやくない}のって、いうまでもなく早い]という趣意とみることができるが、これをすべて言語化するのは冗長である。ここではむしろ、省略の媒体となっている表現は[当然早い]という含意を慣習的に生じる、慣用表現となっているとみられる。

黙説では、省略の媒体と趣意とは含意等の点で意味が異なるが、省略の趣意といえるものは存在する。次の例では、形式的には省略表現とみなすことができるが、省略の元となる欠落の無い表現は存在しない。

- (16) 「それから、まだ外^{ほか}に何かするのだろう」
 「それから、色々……」
 「色々って、どんな事を」
 「知りません」

(夏目漱石「草枕」: 52)

(16) では、形式的には [色々なことをします] ということが省略の趣意となると考えられる。しかし、後続文脈で、どんなことをするかは知らないと言っていることから分かるように、下線部の話し手は [色々なことをします] という内容を主張したいわけではなく、むしろ下線部の表現は、知らないという含意を生じるための黙説表現とみることも可能である。この点からは、「知りません」というのは含意の顕在化とみることも可能である。

図 4.43 は、省略形式の黙説の修辞理解に関するスキーマ **APOSIO** である。プロフィールされた要素 (たとえば「唄は」) から関係 CONST ([唄は得意ではない]) へののびる換喩的作用は、形式的に省略をおこなうプロセスをあらわす。CONST は構文的環境をあらわす。換喩的作用の趣意からののびる隠喩的作用は、含意を認知するプロセス (たとえば [唄は得意ではない] ということから、[それについては聞かないください] という含意がみとめられる) をあらわす。

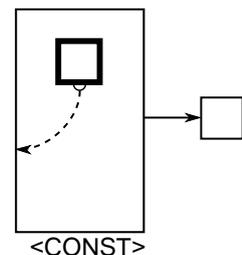


図 4.43: 黙説 (APOSIO)

文として完結していないという点からは、省略的黙説は、省略の補完とみることができる。一方で、含意という点からは、省略的表現を手がかりとした、含意の理解ともみることができる。佐藤信夫は「すぐれた黙説表現は、表現の量を減少させることによって、意味の産出という仕事を半分読者に分担させる。」(佐藤 1981: 38) という。黙説表現の意味として含意を前景化するならば、黙説表現は、言わないこと自体が意味をあらわす媒体となり、欠落が記号となって意味をもっているとみることができる。

4.7.3 欠落の修辞性

図 4.44 は、省略類の修辞ネットワークである。[1] **ELLIP-part** はある構造の部分的要素から、全体的構造がおこなわれるタイプの省略のスキーマである。これを介して、黙説 **APOSIO** は、名詞的省略 **ELLIP-nom** からの拡張とみることも可能である。黙説のいいさし、あるいは中断は、部分的であるという点で、名詞的省略と類似するプロセスを経る。[2] **ELLIP** は一般の省略のスキーマである。構造は単純であり、ある言語化された要素を媒体として、趣意となる潜在的な要素を顕在化させるプロセスである。このスキーマは、換喩類のスキーマ

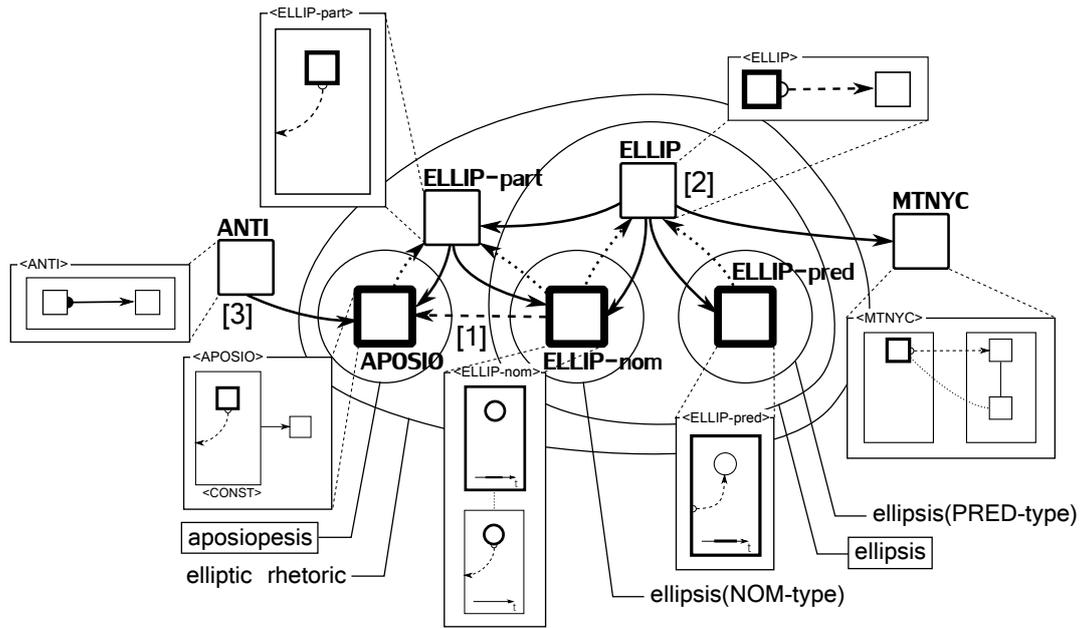


図 4.44: 省略類の修辞のネットワーク

MTNYC と事例化の関係にある。この点からは、換喩類の修辞は、近接関係という範囲の中で、省略された要素をおぎなうプロセスとみることもできる。この省略の一般的スキーマによって、狭義の省略と黙説を含む、省略類の修辞というカテゴリーが考えられる。[3] 黙説 **APOSIO** は対比の一般スキーマ **ANTI** と事例化の関係にある。言い換えるならば、黙説で生じる含意と、省略の趣意とは、言外の意味として潜在的に対比の関係にあるとみることも可能である。

省略現象では、大きく二つの修辞的効果が区別される。第一は、省略が意味の対比を生じ、理解を明確にするという修辞的効果であり、第二は、省略が意味のぼかしを生じ、理解があいまいとなる修辞的効果である。本節でとりあげた修辞を順にみていくと、まず省略の二つの型は対照的といえる。名詞的省略は第一の型である。名詞的省略では、意図する意味内容をあらかず名詞句を単独で言語化することによって、意図が完結に顕在化される。次に、動詞的省略は第二の型である。具体的意味をもつ名詞句を省略し、意味内容の骨格だけをあたえる動詞句のみを言語化することによって、どのようなイベントをあらわすかについて自由度が生じ、結果として文意があいまいとなる。一方、黙説では、省略するということが、含意の標識となる。黙説は、意図する含意を省略的間接的に表現するものではあるが、省略自体が含意の標識となるという点では、含意の存在を明示しているとみることも可能であり、その点では、第一の型と思われる。

冒頭でも触れたように、「省略」ということばは、省略されない完全な表現がある、という含みがある。しかし、修辞に関わる具体的な省略現象を詳細に観察していくと、一見すると省略されない表現とほとんど意味の変わらないものから、別の意味を生じるものまで、さまざまであることがわかる。この補完される意味の多様性からは、省略現象は、意味の欠落であるというよりはむしろ、統語形式の欠落によって規定されているもののように思われる。省

略の補完は、節の構造や慣用表現の形式を手がかりとしておこなわれるのであり、意味論的に過不足のない表現であるかどうかは、二次的と考えられる。逆に言えば、省略表現の形式から、省略をおぎなう認知プロセスは多様であり、その反映として補完される意味は異なる。省略は単に意味的な完全性の欠落という問題ではなく、むしろ欠落の構造自体によって、省略の修辞過程が特徴づけられていると考えられる。省略の修辞過程は、省略表現を部分的な手がかりとして、多様な意味を探索する換喩的过程によって特徴づけられているといえる。

4.8 文法範疇の修辞

修辞現象には、意味に関する逸脱は多くみられる。これにたいし、名詞・動詞といった品詞や性・数・格といった文法範疇は、言語表現のあらゆる内容の骨格を規定するものとして、一見すると、逸脱の少ない言語現象とみられる。しかし、この品詞や文法範疇に関する逸脱を利用した修辞表現は、思った以上に広く観察され、修辞的效果に富むものも多い。品詞や文法範疇は、統語論・形態論的な制約の中で厳密に制限されているわけではなく、修辞的なコンテキストの中では、柔軟に逸脱を許容するものである。また、この種の文法的逸脱の修辞的理解に際しては、多彩な修辞的效果が生じ得る。

本節では、この種の文法的逸脱表現の中でも、語句の文法カテゴリーの逸脱にかかわるものを中心にとりあげる。これにたいし、4.9節では、二つの語句の統語関係にかかわる文法的逸脱現象について分析していく。本節では、4.8.1節で転換、4.8.2節で意味構文、4.8.3節で破格くびきをとりあげる。転換は、ある語の品詞や文法範疇が、平常とは異なるカテゴリーの機能を帯びるものである。また、意味構文は、主にコンテクスト的な要因によって、ある語の文法範疇や統語範疇に逸脱が生じるものである。破格くびきでは、二つの節の無理な結合によって、文法範疇や意味範疇に逸脱がみられる。4.8.4節では、修辞のネットワークを示し、修辞性の特色について述べる。

4.8.1 転換

転換 (enallage)³⁴ は、文法範疇が平常の機能を果たしていない表現である。文法範疇は、名詞の文法範疇と動詞の文法範疇が大きく区別される。たとえばラテン語においては、名詞の文法範疇として、性・数・格があり、動詞の文法範疇として、人称・数・時制・法・態がある。本節では、佐藤他 (2006) に従い、品詞も広く文法範疇とよぶ。文法範疇の区別されるだけ、転換現象が考えられるわけであるが、本節でとりあげるのは、その中でも、名詞の格と品詞に関する転換である。それぞれ品詞転換、格転換とよばれる。

格転換

格転換 (antiptosis) とは、ある格助詞を別の格助詞の代わりに用いる、転換である³⁵

(1) そんなことが分からないの？私達がね、みんな 木村さん を好きだからよ、きっと。

(川端康成「虹」: 350)

³⁴enallage が、格転換と品詞転換を除いたものを指す場合もあるが、本研究では、転換一般をあらゆる用語としてあつかう。

³⁵欧米の修辞学の定義では、格転換とは格の転用であるが、日本語では、これに対応するものとして、格助詞が相当する (佐藤他 2006: 124)。また、「格」という用語は多義的であるが、大きく二つが区別される。第一は、意味役割 (semantic role) や深層格 (deep case) に代表される深層レベルの格という用法であり、第二は、形態・屈折などを反映する表層レベルの格という用法である。本研究では、特にことわらないかぎり、後者を格とよぶ。

(2) 主人が鏡に向かうと。プレイ・ボオイはいつもマニキュア・テェブルへ飛び乗った。その上のクツシヨンに^{すわ}って小首をかしげながら、夫人の化粧を見とれていた。

(川端康成「水晶幻想」：189)

(1) では、「好きだ」の目的語となる「木村さん」は、慣用的にはガ格であらわれるところへ、ヲ格であらわれている点で、逸脱的である。ここで、この助詞の用法が逸脱的であるかは、厳密には、歴史的考証を必要とするものである。しかし、修辞表現の解釈の観点からは、現代用法に照らして(1)に多少の逸脱が見られるということが出来る。その点(2)では、(1)と比較して、より強く文法範疇の逸脱がみとめられる。「見とれていた」の目的語となる「夫人の化粧」は、たいていニ格であらわれるが、ここではヲ格となっている。

ここでは、格助詞「を」は「が」や「に」の単なる代用というわけではなく、「を」自体のイメージも同時に喚起される。(1)(2)では、ヲ格への転換により、格助詞「を」のつく名詞に関して行為対象のイメージが喚起されていると考えられる。

ヲ格以外への転換もみられる。

(3) また一人の友だちは、二十代の恋人のせいで、夫にたいしても急に若返ったが、若い男に遠ざかると、夫にも^{ひや}冷やかになってしまっ、かえって疑われたから、またよりをもどして、夫にそそぐ愛を、よその泉からくんで来ている。

(川端康成「舞姫」：74)

(3) では、「遠ざかる」という動詞にたいしては、たいていカラ格あるいはヲ格をとるのにたいし、ここでは二格がもちいられている。これによって格助詞「に」のつく名詞「若い男」に関し、到達点のイメージが喚起されて、「若い男」への接近が暗示されるといえる。

図 4.47 は、格転換の修辞スキーマ **ENLAGE-antip** である。動詞の規定するイベントにおいて、その参加者をあらわす名詞句（たとえば「木村さん」）につく格（「を」）は、動詞（「好きだ」）の慣習的用法に関して文法範疇の逸脱がみとめられる。C₁ とラベルされた要素は、格助詞 C₁（たとえば「を」）をともなう名詞（「木村さん」）のプロファイルするものをあらわす。統語的逸脱性を修辞の条件として、趣意となる格助詞をともなう名詞句（たとえば[木村さんが]）への隠喩的作用がはたらく。この隠喩的作用は、表層の格形式の逸脱性を潜在化させるプロセスをあらわす。隠喩的作用の趣意は、同時に、動詞のデフォルト的な格でもある。この点からは、動詞のなす文脈が、慣習的にとる格助詞を顕在化させているものともいえ、換喩的作用は、この種の顕在化のプロセスをあらわす。

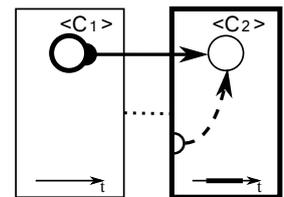


図 4.45: 格転換 (ENLAGE-antip)

格転換は、そのスキーマの構造に明示されているとおり、換喩的な側面と隠喩的な側面とをもつ。このことは、格助詞が名詞句と動詞の双方から影響を受けて限定されることと対応する³⁶。換喩的な側面では、格転換の趣意は動詞によって要求される。名詞句につく格助詞

³⁶日本語の格のゆらぎに関する、動詞と名詞句の相互影響については、仁田 (2009/1993) も参照。

は、動詞がデフォルト的に要求するのであり、動詞は、イベントと参加者のデフォルトの関係の規定していく。デフォルト的な格は、動詞から名詞句への換喩的作用により、顕在化される。一方で、言語化されている格は相対的に潜在化される。これが隠喩的な側面であり、結果として、格が代置されるといえる。しかし、格転換にみられる隠喩的作用は、単に格の代置ではない。言語化されて媒体となる格助詞のイメージと、趣意となる格助詞のデフォルト的意味役割のイメージは、相互作用的に重ね合わせられる。たとえば、ヲ格を媒体とする二格への隠喩的作用により、ヲ格のもつ行為対象のイメージが重ね合わせられる³⁷。

転換現象は、文法範疇に関する逸脱である。したがって、文法範疇が存在しなければ、転換現象は認知されない。たとえば、日本語は数に関する形態的特徴がなく、豆といっても、一個の豆なのか複数の豆なのかは、単語からは分からない。一方で、英語はこれを、bean、beansといつて、単数・複数を複数の形態素sによって区別する。このように、文法範疇が言語によって相対的であるのと同じく、転換現象は、各言語によって相対的である。英語の数転換の現象を、単に日本語に訳しただけでは、その修辞性は消失する。より一般には、修辞現象は、各言語の文法の性質によって、相対的な部分が存在すると考えられる。特に、統語的逸脱を修辞の条件とする修辞現象は、格言語の文法の特性によって規定されるものであり、その相対性がより顕著となる。この点からは、転換現象などの文法範疇にかかわる修辞は、その修辞性の対照比較によって、言語の文法の差異を明らかにする手がかりともなると考えられる。

品詞転換

品詞転換 (antimeria) とは、ある品詞の語を他の品詞へと転用する、転換である。

次の例では、名詞が形容詞的機能をもつ語句へと転換している。

(4) 「あんた、悪魔だろう。もっと、この、いかにも 悪魔悪魔した 武器はないのかね」

(井上ひさし「ブンとファン」: 120)

(5) ほかにいくらでも、いかにも 小説小説した 終わり方があったのだが、もっとも小説作法から外れていると思われるこの終わり方を選んだのだった。

(井上ひさし「ブンとファン」: 201)

(4) では、「悪魔」という名詞はあるが、「悪魔悪魔した」という修飾表現は、すくなくとも慣習的ではない。悪魔という名詞は、反復され、「した」という表現を付加されてはいるが、表現そのものが変化しているわけではない。その意味では、名詞の本来果たす機能が失われて形容詞的な機能へ転換しているとみることができる。より厳密にいうならば、名詞を材料として、新奇な複合修飾表現を形成しているといえ、[悪魔らしい] というような意味となって

³⁷ 格転換の現象は、コンテキストによって、ある格に、通常ではもちえない極端な認知的な視点を与えているとみることでもできる。この観点からは、たとえば、(3) では、深層レベルで典型的には<目標格>となる二格が、ここでは<起点格>としての機能を担っているとみなすこともできる。深層レベルに関する、格解釈の認知的ゆらぎについては、山梨 (1993)・山梨 (1995: 153-158) を参照。

いる。(5)でも同様に、反復と「した」の付加によって、[小説として典型的な]というような意味となっている。

形容詞的機能への転換は、反復をしばしばともなう。[XXした]という形式の修飾表現は、ごつごつした、てかてかした、といったオノマトペに多く見られる。日常言語においてオノマトペは、新奇的な表現が多く観察される。形容詞への品詞転換は、オノマトペの創造的表現の形式のスキーマを介した拡張とみることも可能である。その一方で、反復の単位となる表現が、明らかに名詞である点では、オノマトペとは相違がある。名詞という品詞の認識が残っていることが、この種の表現を転換現象とみる要因となっていると考えられる。

名詞から動詞への転換もみられる。

(6) その次には鬼瓦位な大硯を担ぎ込んだ。これは端溪です、端溪ですと二遍も三遍も端溪がるから、面白半分に端溪³⁸た何だいと聞いたら、すぐ講釈を始め出した。

(夏目漱石「坊っちゃん」: 131)

(6)では、「端溪」という名詞に「がる」を付加することによって、「端溪がる」という動詞を一時的に、端溪端溪と繰り返す、という意味で用いている。形容詞への転換とは異なり、反復はみられないが、何らかの表現を付加して品詞を転換している点では共通している。ここでは、「がる」の付加が動詞化に寄与している。不思議がる、窮屈がる、のように[Xがる]という形式のスキーマは、形容詞・形容動詞の語幹を動詞化するという構文的意味がみられる。この点からは、付加表現の構文的意味が、品詞転換を可能にしているとみることができる。

図 4.46 は、品詞転換のスキーマ **ENLAGE-antim** である。隠喩的作用でつながれた二つの関係のうち、媒体となる関係では部分の構成的解釈が優先され(たとえば名詞「端溪」+付加語「がる」)、趣意の関係では全体を一つとしてみるゲシュタルト的解釈がとられる(動詞「端溪がる」)。左の関係では、プロフィールされるのは、ひとつは転換の元となる語(たとえば名詞カテゴリーに属する「端溪」)であり、もうひとつは付加表現(たとえば「がる」)である。CTG₁とラベルされた要素は、たとえば名詞「端溪」である。この二要素が結合して形

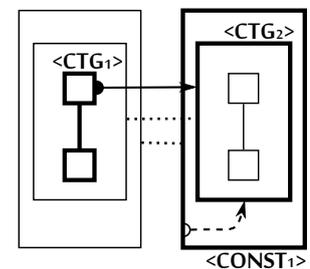


図 4.46: 品詞転換 (ENLAGE-antim)

成される要素は、図地反転的に、一語として読み換えられる。CTG₂とラベルされた関係は、たとえば動詞「端溪がる」である。隠喩的作用はCTG₁をとおしてCTG₂を対比的に理解するプロセスをあらわす。さらに、趣意となる要素の品詞は、より大きなコンテキストCONST₁からの換喩的作用によって限定される。たとえば「悪魔悪魔した武器」といえば、[XしたN]という構文における[Xした]は慣習的に形容詞となるということから、「悪魔悪魔した」は換喩的に形容詞とみなされる。CONST₁からの換喩的作用は、構文的環境がデフォルト的にとる品詞CTG₂を顕在化させるプロセスをあらわす。

³⁸古来珍重される、端溪石で作った硯。

品詞転換は、基本的には語句に関する転換現象であるが、節に関する転換もみられる。次の例では、節が名詞へと転換している。

- (7) それからうちへ帰ってくると、宿の亭主が御茶を入れましようといってやって来る。御茶を入れるというから御馳走ごちそうをするのかと思うと、おれの茶を遠慮なく入れて自分が飲むのだ。この様子では留守中も勝手に御茶を入れましようを一人で履行しているかも知れない。

(夏目漱石「坊っちゃん」：29)

(7)では、「御茶を入れましよう」という文がそのままのかたちで「履行して」の目的語の機能を果たしている。このような名詞化が可能となるコンテキストとしては、少なくとも次の二点が挙げられる。第一に、同表現が反復されることである。反復表現は、そのコンテキストにおいては、一時的に単位性をおびる。これによって一語としての解釈が優勢となる。ここでは、「御茶を入れましよう」は、他人の茶を入れて自分で飲むことをあらわす名詞として、認知されている。第二に、名詞をとりやすい動詞が選ばれていることがある。[履行する]という動詞は、たいてい漢語の名詞を目的語としてとり、このことが名詞化に影響をおよぼしていると考えられる。このように、転換のおこなわれる文法範疇間の文法機能の差異が大きいほど、より緻密なコンテキストが必要となる傾向があるといえる。

4.8.2 意味構文

意味構文 (synesis) とは、文法範疇に関しては逸脱となるが、意味的に整合性のある表現をとる修辞である。次の例は、格に関する意味構文である。

- (8) 波子が目をあいた。
「もういいわ。ありがとう。」

(川端康成「舞姫」：59)

(8)では、たいてい「あいた」は自動詞であり、ヲ格をとれないという点では格に関する統語的逸脱性が高い。「波子」をガ格とする文脈の中では、波子がトラジェクターとなる他動詞的な解釈となる。その一方で、「目」の動きに注意を向けることで、目をイベントの中で焦点化する文脈の中では、目をトラジェクターとする、[目があいた]に対応する自動詞的な解釈も混在し得る。

(8)では、二つの節が混在しているものともみられる。前半は[波子が目をあけた]、後半は[目があいた]とみるならば、前半ではトラジェクターは「波子」であり、後半ではトラジェクターは「目」である。結果として、「波子」からその身体部分である「目」へと焦点がシフトしたとみることができ、一文の中で、話し手の注意の変化があらわされているという点では、意味的に整合性があるといえる。

- (9) (….)自分がどんなにされていても、まだまだ楽しいような、そんな幸福はほんとうにあるかしらと、私はうつ向きながら歩いていた。

(川端康成「浅草日記」：244)

(9)では、動詞句「歩いていた」は、ふつう命題を補部にとることはできないので、「と」によって補部をとっている下線部の動詞句は、統語的に逸脱しているといえる。文の前半では、思う、考えるといった、命題を補部としてとることのできるイベントの叙述、つまり登場人物である「私」の視点での、考えごとの描写が想定されている。その一方で、「うつ向きながら歩いていた」という部分では、登場人物の歩く姿を、より客観的な視点から描写しているとみることができる。この点からは、描写の視点の切り替えとして、コンテキストとしては整合性のある表現となっている。

- (10) 「(…)別れた方がいいと教えてくれたのは、^{おどり}踊の稽古ではなくって、洗濯だなんて」と笑いながら雨傘へ柿の葉の落ちる音に振り返ると、生垣の上に彼が立っていた。

(川端康成「落葉」：270)

(10)では、「振り返る」という動詞は二格をとりにくいという点で、統語的逸脱性のある表現である。ここでは、柿の葉の落ちる音に[驚いて振り返る]といったような意味をコンテキストから読み取ることができるという点では、整合性がある。結果として、音がしてからすぐに振り返ったという行動の素早さが、言語表現の短さとして、類像的に表現されているとみることが可能である。

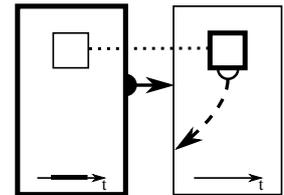


図 4.47: 意味構文 (SYNES)

図 4.47 は、格転換の修辞スキーマ **SYNES** である。左のプロセス関係 (たとえば「あいた」) は、参与者の要素の形式 (たとえば「目を」) に適合するように、読み換えられる。隠喩的作用は、動詞の逸脱を潜在化させ、文脈に沿う意味として理解するプロセスをあらわす。さらに、参与者の統語形式は換喩的に、趣意となる動詞を要求する。換喩的作用は、格助詞や引用の「と」をてがかりとして、これをデフォルト的にとる動詞を、連辞関係として顕在化するプロセスをあらわす。

意味構文は、視点に関する転換ともいえる。たとえば、(8)では、「目」について、これを対象とみる視点 [あけた] と、主体とみる視点「あいた」とのあいだの転換とみることが可能である。これは、自他交替を含む広い意味での態の転換といえることができる。このように、格転換と図地反転の関係にあることから分かるように、意味構文は、転換現象と関わりをもつ修辞である。視点は文法範疇ではないという点で、厳密な意味での転換現象ではないが、広い意味では転換と関連する修辞である。

4.8.3 破格くびき

破格くびき (zeugma solecistic) ³⁹ とは、ある一語が等位接続された二語にかかるとき、そのうち一方に、意味的、統語的な逸脱がみられるという修辞である⁴⁰。二語にかかるとくびき語という。くびき語が動詞句のとき、これを動詞的破格くびきとよび、くびき語が名詞句のときには、名詞的破格くびきとよぶ⁴¹。

動詞的破格くびき

動詞的破格くびきとは、動詞がくびき語となって、二語にかかるとき、そのうち一語については逸脱となる、破格くびきである。

- (11) 「いつまでねまきのままでいるつもりだ。服に着替えろ。手伝ってほしいことがある」
「はい」おれはあわててねまきを脱ぎ、ズボンとセーターを着た⁴²。

(筒井康隆「晋金太郎」: 275)

- (12) 「お椀の船に箸の^{かい}権でお馴染みの一寸法師、頓知^{とんち}により三条の宰相の姫君を誘拐し、
鬼の遺棄した如意宝打出の^{こづち}小槌から、身長と財宝を打ち出す。

(大岡昇平「一寸法師^{ごじつだん}後日譚」: 532)

(11) では、「着た」という動詞は、「セーター」の文脈では整合的であるが、「ズボン」を着るといふと、意味的不整合性が感じられる。したがって、「ズボンとセーター」として等位接続詞「と」で結ばれた二語のうち、くびき語となる動詞がそのうち一方にしか適合していないことになる。典型的には、ズボンは履くという動詞と共起する。ここでは、ズボンを履く、と、セーターを着る、という二つのイベントが複合しており、動詞は「セーター」に合わせて着るが選ばれているものとみることができる。二つのプロセスのうち、一方が省略され、もう一方に逸脱が生じていることで、「あわてて」ズボンとセーターを身につける様子が、類比的に表わされているとみることが可能である。

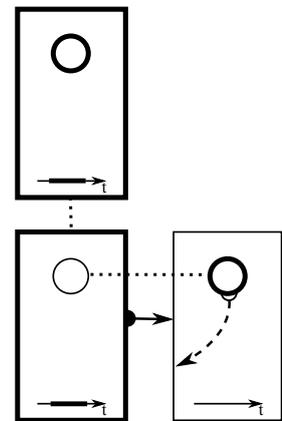


図 4.48: 動詞的破格くびき (ZGMA-sole-pred)

図 4.48 は、動詞的破格くびきの修辞理解に関するスキーマ **ZGMA-sole-pred** である。左の二つ並んだプロセス関係は、くびき語となる動詞 (たとえば「着た」) をあらわす。それぞれの名詞 (「ズボン」と「セー

³⁹zeugma は、くびき、破格くびき、異義兼用、比喩くびきのいずれについても用いられる場合がある多義語である (佐藤他 2006: 21-27)。共通点は、二語を一語でまとめるということである。とりわけ、くびきと破格くびきを明示的に区別する用語法は、一般的にはみられないようである。ここでは、便宜的にくびきを zeugma、破格くびきを zeugma solecistic とし、両者を区別しておく。

⁴⁰対話における破格くびきについては、Halliday and Hasan (1976) を参照。

⁴¹くびき語が動詞のときのみ限定する用語法もあるが、ここでは広義にくびき語が名詞あるいは動詞となる破格くびきをあつかう。

⁴²佐藤他 (2006: 137) が破格くびきの例として挙げている。

ター) について、叙述の機能を果たすので、両方のプロセス関係がプロファイルされている。下段のプロセス関係は、成分構造との意味的不整合性を修辞の条件として、隠喩的作用を受け、コンテキストと適合する趣意（たとえば[履く]）へと至る。隠喩的作用は、動詞の逸脱性を潜在化し、文脈に合う意味として理解するプロセスをあらわす。趣意となるプロセス関係は、成分構造となるもの（たとえば「ズボン」）が換喩的に要求するものである。

名詞的破格くびき

名詞的破格くびきとは、名詞がくびき語となって、二語にかかるとき、そのうち一語については逸脱となる破格くびきである。

- (13) それも現金で物が買って食べられる時は、わたくしの^{くめん}^い工面の好い時で、大抵は借りたものを返して、また跡を借りたのでございます。

(森鷗外「高瀬舟」：355)

(13) では、ガ格のつく名詞句「物が」は、「食べられる」については統語的に整合的であるが、「買って」は行為対象をあらわす名詞句についてはたいていヲ格をとり、ガ格をとることはできないので、逸脱がみとめられる。したがって、接続助詞「て」で連結された二つの動詞[買う]と[食べられる]のうち、「物が」は一方にしか適合していない表現である。

図 4.49 は、名詞的破格くびきのスキーマ **ZGMA-sole-nom** である。左に二つ並んだプロセス関係は、ある名詞句（たとえば「物」）がくびき語となって並列される、二つの動詞句である。くびき語は、動詞の規定するイベントにおける参与者としての機能を、両方のプロセスの関係において同等にはたすので、ともにプロファイルされ、これが対応線でむすばれている。下段のプロセス関係（たとえば「買って」）では、成分構造と統語的な不整合性が認知される。これを修辞の条件として、成分構造となるものが隠喩的に格を修正される。隠喩的作用は、格助詞の逸脱性を潜在化し、文脈に合う文法機能として理解するプロセスをあらわす。隠喩的作用の趣意となる名詞につく格助詞（たとえば[を]）をコンテキストとして、下段のプロセス関係がプロファイルされる。

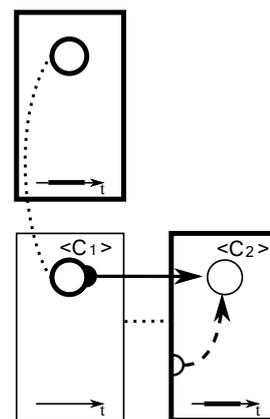


図 4.49: 名詞的破格くびき (ZGMA-sole-nom)

4.8.4 文法的逸脱と類像性

図 4.50 は、転換・意味構文・破格くびきの修辞のネットワークである。[1] **ENALGE** は、転換の一般的スキーマである。転換は、あるコンテキストにおける文法範疇に関する逸脱を修辞の条件とする、二つの文法範疇に関する隠喩的作用によって特徴づけられる。[2] たいてい、文の中心的な構造を規定するのは動詞であり、補部の統語形式は、動詞に合わせて選択される。

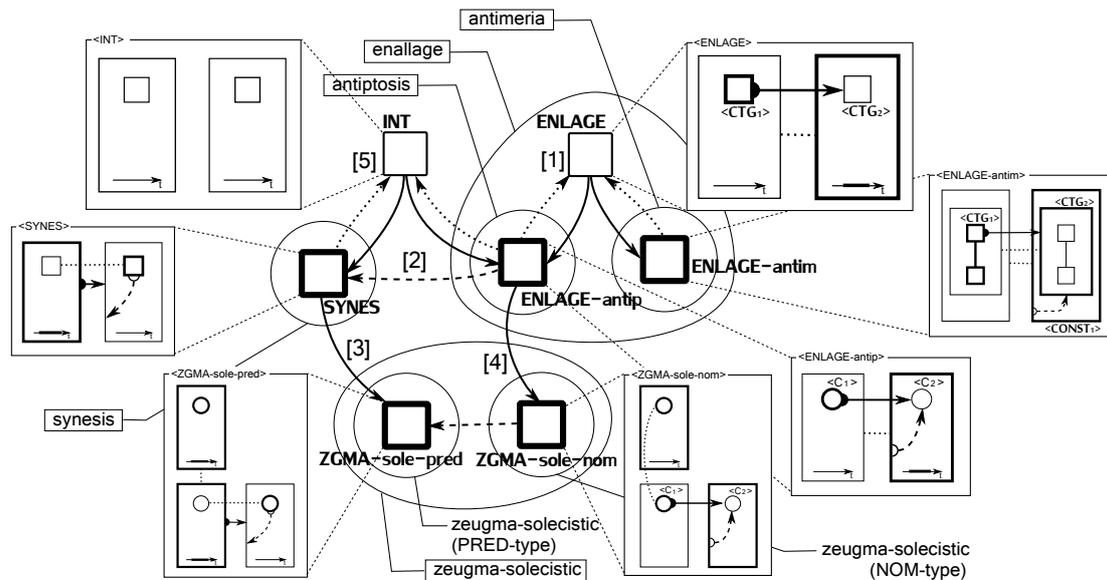


図 4.50: 転換・意味構文・破格くびきのネットワーク

意味構文 **SYNES** では、その立場が反転し、名詞句や補部の統語形式に合わせて、解釈上、動詞が修辞作用によって修正を受けている。これにたいし、格転換のスキーマ **ENLAGE-antip** では、動詞の要求する統語形式に合わせて、名詞句が修辞作用によって修正される。この点では、基礎的な概念構造に関しては、格転換のスキーマ **ENLAGE-antip** と意味構文のスキーマ **SYNES** は、図地反転の関係にある。[3] **ZGMA-sole-pred** は、意味構文のスキーマ **SYNES** からの事例化の関係にある。この点からは、動詞的破格くびきは、より複雑なコンテキストを背景とする、意味構文とみることも可能である。[4] **ZGMA-sole-nom** の構造は、格転換のスキーマ **ENLAGE-antip** の構造を含んでいるので、これに事例化される関係をもつ。この点からは、名詞的破格くびきは、より複雑なコンテキストを背景とする格転換とみることもできる。[5] **INT** は、複合的な事態認知のスキーマである。基本的に、一つの節は一つのイベントを規定する。しかし、本節であつかった修辞表現の多くは、一つの節が二つのイベントに関わる。この種の並列的な事態認知は、認知主体の動的な解釈プロセスと関連していると考えられる。並列的な二つのイベントにおいて、どのように修辞作用がはたらくかによって、さまざまな修辞的效果が生じることが分かる。

本節でとりあげた転換、意味構文、破格くびきは、いずれも意味的・統語的に何らかの文法的逸脱がみられる。しかし、この種の修辞が効果的となる以上は、単に逸脱というだけではない。格転換では、名詞句のあらわすものが、事態において担う役割に対する特別な視点が、格助詞を逸脱的に用いることによって明示され、品詞転換では、ある語のもつ特別な意味を、他の品詞のもつ統語的機能として用いるために、逸脱的な統語形式をとる。意味構文では、視点が転換する様子が、統語的な逸脱として表現され、破格くびきでは、事態認知の視点が混乱するさまが、統語的・意味的な複合的逸脱としてあらわされる。このように、いずれにおいても、文法的逸脱そのものから、何らかの修辞的效果が生じているように思われる。たとえば、破格くびきでは、構文の混乱が視点の混乱を類像的にあらわし、意味構文で

は、統語的逸脱が視点の転換を類像的にあらわすとみることが可能となっている。

従来、言語表現の類像性は、オノマトペや、語の反復などを中心に議論されてきた。しかし、本節でとりあげた修辞現象を観察していくことにより、統語論の領域や構文の意味のレベルにおいても、類像的な修辞的效果が存在し得ることが分かる。もしそうであれば、テキストの意味は、意味論や語用論の分野だけで閉じたものではなく、構文のとり方、文法範疇の選択の仕方、部分的にテキストの意味を担っている可能性もある。修辞現象の観察によって、従来のいわゆる文法現象だけに限定された言語分析からは予想されない、生きた文体、生きたコミュニケーションの意味が、徐々に明らかとなる可能性は高い。

4.9 統語構造の修辞

本節では、統語形式の逸脱に関する修辞現象を分析する。統語的逸脱がみられる修辞の中でも、代換、限定語反転、転移修飾、交差呼応の四つをとりあげる。この四つのレトリックは全て統語関係の逸脱に関わるものであり、修辞学で広義の代換とよばれてきたものである。ここではこれらをまとめて代換類とよぶ。

統語構造に関わる修辞である代換類のレトリックは、言語学でも主に統語論において部分的にとりあげられてきた。代換類の修辞に関する統語論的な分析では、構文の交替可能性などの観点が重視されてきた。統語位置の逸脱に関して、真理条件的な意味の等価性が主要な問題となっており、修辞的な効果を含めた、修辞理解に関わる意味の分析は、本格的にはなされていないといえる。統語形式の逸脱は、平常とは異なる認知プロセスを誘引し、結果として、意味も平常表現とは異なると考えられる。本節では、修辞過程の観点から、代換類の修辞を分析していく。

代換類の修辞は、統語位置の交替あるいは転移に関係する。「交替」あるいは「転移」という用語は、統語位置の標準が存在することを暗黙に前提した呼び方である。しかし、代換類の修辞理解は、単に交替や転移を標準の位置に戻すということだけではなく、統語位置に関する逸脱表現と平常表現との相互作用性が問題となる。

代換類の修辞は、修辞的焦点となる交替や転移がどのような統語関係に関するものかによって、四種類の下位修辞が区別される。4.9.1節の狭義の代換は、節内の二つの名詞句の交替、4.9.2節の限定語反転は、名詞句内の修飾語と被修飾語の交替、4.9.4節の転移修飾は、節内の二つの名詞句間での修飾語の転移、4.9.3節の交差呼応は、二つの節間での名詞句の交替をいう。4.9.5節ではその相互関係と修辞性の特色について考察する。

4.9.1 代換

代換 (hypallage) とは、真理条件的な意味内容は変化せず、平常とる格⁴³を交替する、代換類の修辞である。日本語では、格助詞の交替が、代換にあたりといえる。格は、文意の骨格的構造を与えるものとして、一見すると、逸脱を許さない、安定した言語現象とみられる。たとえば、私が花に水をやった、というところを、花が私に水をやったといえ、通じなくなる。この例では、ガ格と二格を交替すると、文意がとれなくなる。しかし、代換現象では、常識的にとる格が交替可能となる。たとえば、電車がホームから離れる、というところを、ホームが電車から離れる、といった場合、修辞性は高くなるものの、文意は理解可能である。この例では、ガ格とカラ格が交替しても、文意が失われていない。

もっとも狭い意味での代換は、名詞句の格にかかわる構文交替現象として分析されてきた。

⁴³ 「格」ということばは多義的である。大きく二分して、表層レベルについていう場合と、深層レベルについていう場合が区別される。本節では、特にことわらない限り、表層レベルの格、すなわち形態・屈折等を反映する表層格 (surface case) を、単に格とよぶ。格にかかわる修辞については、4.8.1節の格転換も参照。

この種の代換は、いわゆる壁塗り代換⁴⁴と呼ばれて、分析がなされてきた。壁塗り代換では、ニ格とデ格に関わる一部の格交替のみが対象となっている。これにたいし、佐藤(1987: 51-79)などのいう、修辞現象としての代換は、格に関する統語的逸脱をより広く含む。本節でも、佐藤にしたがい、広い意味での代換現象を分析対象として、考察をおこなう。

- (1) 鏡の中にある内供の顔は、鏡の外にある内供の顔を見て、満足さうに目をしばたいた。⁴⁵

(芥川龍之介「鼻」: 164)

(1)では、慣習的には、述語「見て」の行為主体となるのは「鏡の外にある内供の顔」であり、行為対象は「鏡の中にある内供の顔」である。この点では、行為対象をあらわす格助詞「を」が行為主体についている点で、平常の文法からは逸脱しているといえる。ここでは、「鏡の中にある内供の顔」と「鏡の外にある内供の顔」とのあいだで、トピック標識の助詞「は」と格助詞「を」が、代換しているとみることができる⁴⁶。

- (2) 然し台湾東部の山々はそうでなく、麓^{ふもと}や中腹と共に、頂^{いただき}までがじかに人に迫ってくる。寧ろ頂^{むし}が真先に人に迫ってくる。

(豊島与志雄「台湾の姿態」: 341)

(2)では、「迫ってくる」という動詞句は、たとえば敵が迫ってくる、津波が迫ってくるといったように、慣習的には、移動主体がガ格となる。ここでは、到達地点である「頂」がガ格となっている点で、平常の文法からは逸脱がみられる。さらに、慣習的には、到達地点が二格となる点で、「頂」と「人」とのあいだで、二格とガ格が交替しているとみなすことも可能である⁴⁷。しかし、ここでは、ガ格と二格を入れ替えた[寧ろ人が真先に頂に迫ってくる]という表現は、「寧ろ頂が真先に人に迫ってくる」という表現とは、意味内容が異なる。人が山に向かって移動する、という物理的移動の観点では、二つの表現は等価といえるが、交替した表現では、人の侵攻をイメージできるが、元の表現(2)では、むしろ山の迫力のイメージが浮かぶという点で、修辞的な効果を含めて考えると差異がみられるといえる。

代換表現は、真理条件的な意味に関しては、逸脱表現と平常表現は等価であるといえる。しかし、伝達主体がどこに注意を向けているか、という観点からは厳密には等価とは言えず、「状態の変化が表現者の注意によって、表現者の内心において増幅されること」が、代換現象の基本的性質であると考えられる(定延 1990a: 50)。

- (3) よし、今度はあの的を弾に当ててやるぞ。

⁴⁴壁塗り代換(spray paint hypallage)は、たとえば、壁にペンキを塗る、と、壁をペンキで塗る、が交替可能というもので、二格とヲ格、ヲ格とデ格の二つの格交替とみられる。壁塗り代換と関連現象については、奥津(1981)、川野(1996)などを参照。

⁴⁵佐藤他(2006: 103)が代換の例文として挙げている。

⁴⁶またこの例は、「顔」が主語となっている点で、部分的換喩と組み合わせられているといえる。部分的換喩については、4.6.1節を参照。

⁴⁷この種の代換の認知プロセスは、事態解釈の図地反転のプロセスとみられることもできる。認知主体の移動と主観的知覚については、山梨(2000: 68-70)も参照。

- (4) コンピュータは、あらかじめコードにつないでおかないと、スイッチを入れても動きません。
- (5) 兎をわなから外してやったが弱っていたので逃げなかった。

(定延 1990a: 46-47; 下線は小松原)

(3)では、たいていの文脈では「弾」が移動しやすく、行為対象としてヲ格をとりやすい。しかし、この種の文脈では「的」に注意がおかれることで、代換可能となっている。(4)(5)でも同様に、平常では「コード」「わな」の移動に伝達主体の焦点がおかれるが、ここでは「コンピュータ」「兎」が文脈上焦点となっており、代換表現として理解可能となっている。

このように、代換表現と平常表現は、名詞句におかれる際立ち、あるいは注意の点で差異がある。その一方で、代換表現と平常表現とのあいだには、対称性⁴⁸が存在する。代換を可能とするための制約として、動詞のプロファイルするプロセスが、二つの視点について対称的であることが考えられる。(1)では、人が鏡を見る時、鏡の映す虚像の視点をとるならば、その虚像が行為主体である人を見るともいえる。このとき、人が像を見るプロセスと、像が人を見るプロセスとは、鏡を境界として対称的である。(2)でも同様に、人が山頂に迫るとき、山頂の視点からは、山頂が擬人的に人に迫るともいえる。このように、代換が可能となるためには、動詞の規定するプロセスにおける参与者間の相互作用に、ある種の対称性、あるいは鏡像性が備わっている必要がある⁴⁹。

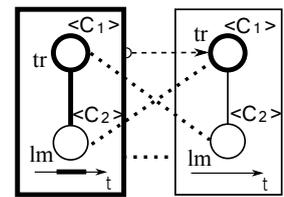


図 4.51: 代換 (HYPL)

図4.51は、(1)(2)のタイプの代換表現に関する修辞理解のスキーマHYPLである。左のプロセス関係(たとえば「迫ってくる」)に規定されるイベントの参与者となる、格助詞C₁とC₂のつく名詞句(たとえばC₁を「が」、C₂を「に」として規定される「頂が」「人に」)の格関係は、平常から逸脱している。これを修辞の条件として、動詞の平常の格関係を理解する修辞作用がはたらく。この修辞作用は、動詞(「迫ってくる」)を媒体として、名詞句(「人」)が慣習的にとりやすい格助詞C₁([が])をおぎなう認知プロセスである。これは、動詞に関する慣習的な連辞関係を補完し、顕在化する点で、換喩的な修辞作用である。HYPLでは、左のプロセス関係を媒体とする、右のプロセス関係のトラジェクター(たとえば[人が])への換喩的作用により、この認知プロセスが表現されている。趣意となる要素は、字義通りにはプロセス関係のランドマークであった要素であることから、結果的に、ランドマークとトラジェクターが交替するとみることができる。対応線の交差は、格の交替に対応する。

佐藤信夫は、代換表現は、心的な視点のずれを直接反映するものであるという。「視線の向きが標準意味コードの推選形式からずれていたら、どうなるか。その認識をそのまますなお

⁴⁸代換における対称性については、定延(1990a)・定延(1990b)も参照。また、「対称性」という用語は、格助詞を交換しても、文の論理的意味関係に変化がないという意味の用語として用いられる場合もあるが、本節での「対称性」は、基本的に定延の論じる「文の対称性」と矛盾しない。文の対称性とは-をいう。

⁴⁹壁塗り代換に関しては、ペンキが壁に塗られるとき、壁はペンキで塗られるという対称性が、代換を可能にしていると考えられる。壁塗り代換と、動詞の制約については奥津(1981)も参照。

に表現してみると、結果的には、レベルP⁵⁰における逸脱形式、《あやどられた》表現ができあがりはしないか。代換とはそういうずれの《あや》のひとつなのだ。」(佐藤 1987: 65-66) 視点という観点からは、代換はこれまでに分析されてきたよりも、広範な言語現象をとらえる手がかりとなる。次のような例は、動詞の態が変化している点で厳密には代換とはいえないが、視点表現の問題としては代換と関連する修辞現象である。

- (6) いやにくっきりとした初夏の日差しが、頭上にはりだした樹木の枝の影を路地の地面にまだらに散らせていた。

(村上春樹「ねじまき鳥クロニクル」: 30)

(6) では、使役の行為主体である「日差し」がガ格となり、動詞は「散らせていた」と使役のかたちになっている。意志をもたない「日差し」が、使役の行為主体となっている点で、視点のとり方が擬人的であり、平常からは特異的といえる。[枝の影が地面に散っていた]という視点が相対的に標準的であると考えられ、ガ格の配置に関して逸脱しているといえる。このように、特殊な視点配置と代換現象との間には、格関係のずれという点で関連がみられる。

4.9.2 限定語反転

限定語反転(sicilia amissa[羅])とは、二つの語句の常識的な限定-被限定の関係を逆転させる、代換類の修辞である。

- (7) この静けさが何であるかを闇を通して見ようとした。踊子の今夜が汚れるのであろうかと悩ましかった⁵¹。

(川端康成「伊豆の踊子」: 303)

- (8) 山山の初夏を見て来た自分の眼のせいかと、島村は疑ったほどだった。

(川端康成「雪国」: 19)

(7) では、動詞「汚れる」のガ格をとる項となりやすいのは、慣習的には、具体的な実体をもつ「踊子」であるという点で、限定-被限定の関係が反転しているといえる。ここでは、「踊子」は「今夜」の修飾部となっており、主要部は「今夜」となっている点で、統語位置に関する逸脱がみられる。[今夜の踊子が汚れる]は「踊子の今夜が汚れる」よりも相対的に統語的逸脱性が低いといえる。(8) では、動詞「見る」の典型的な用法では、ヲ格は具体物となり、ここでは抽象概念である「初夏」よりも具体物である「山山」の方がヲ格をとりやすいといえる点で、限定-被限定の関係が反転しているといえる。ここでは、「山山」は名詞句の修飾部として相対的に背景化されており、主要部は「初夏」となっている点で、修飾関係に関して逸

⁵⁰ここでは、人間の視点をレベルQ、見られる現実をレベルRとよび、言語表現の型を便宜的にレベルPとよんで区別している。「視点」という用語は、久野(1978)のいう共感に関わる用法があるが、ここでは佐藤のいう広義の用法に従う。

⁵¹佐藤他(2006: 111)が、限定語反転の例として挙げている。

脱的である。[初夏の山山を見て来た]は「山山の初夏を見て来た」というよりも、相対的に修辭性は低いといえる。

限定語反転は、限定-被限定関係の反転であり、一見すると、名詞句内部における修飾関係の反転のみが問題になるように見える。しかし、限定語反転では、名詞句と動詞句の関係も問題となる。たとえば(8)では、「山山」を見る時には、同時に山の木々の様子等にあらわれる「初夏」の雰囲気も比喩的に「見る」ことになるという意味では、修飾語と被修飾語は、どちらも動詞の目的語となり得るものである。これにたいし、山山の初夏に登るといえば、相対的に修辭性は高く、理解はむずかしい。このように、限定語反転の理解には、動詞が具体的なものから抽象的なものまで幅広い名詞を項としてとることができるという点も、影響していると考えられる。上述の例では、山山に登る時には、その初夏をも登るといえるのだ、といったやや強引な比喩的文脈を設定した場合には、理解可能となる⁵²。

限定語反転は、動詞がデフォルト的に要求する項をおぎなう認知プロセスがはたらくという点では、代換と共通する。言い換えると、解釈上、慣習化された連辞関係を換喩的に補完することで、字義通りの意味が修正される点では、代換と共通しているといえる。その一方で、相違点もある。代換では、広く視点の転換にかかわる修辭性が問題となるのにたいし、限定語反転では、イベントに関する参加者の際立ちの分布にかかわる修辭性が問題となる。たとえば(7)では、主語標識である格助詞「が」が「踊子」ではなく「今夜」につくことによって、「踊子」そのものよりも、「今夜」の踊子という、時間的限定を受けた踊子のイメージが強調される。このような、媒体となるものが焦点化されることに関する修辭性は、換喩類のレトリック、特に、4.6.2節で述べた類の提喩とも類似する性質である。

図 4.52 は限定語反転のスキーマである。「-の-」とラベルされた関係は、修辭的焦点となる名詞句における修飾関係 [A の B] をあらわす。修飾関係が限定語反転であるかどうかは、基本的に動詞句との整合性によって規定される。動詞句（たとえば「見て来た」）が慣習的にとりやすい項（「山山」）が、名詞句の主要部ではなく修飾部となっていた場合には、限定語反転の解釈が誘引される。動詞を媒体とし、名詞句を趣意とする換喩的作用は、動詞がデフォルトにとる項を、修飾部から主要部へ顕在化させるプロセスをあらわす。結果的に、換喩的作用の趣意のドメインにおいては、元の修飾関係（「山山の初夏」）のトラジェクターとランドマークが反転したかたち（[初夏の山山]）となり、対応線の交差はこのことをあらわす。

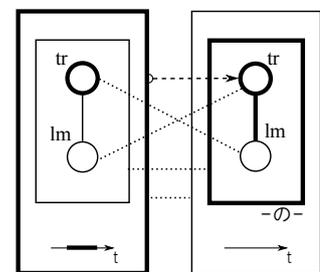


図 4.52: 限定語反転 (SA)

限定語反転では、もともと修飾部であった語が、換喩的作用によって主要部となる解釈が誘引される。言い換えると、媒体のドメインでは背景化されていた要素が、換喩的作用によって、趣意のドメインに前景化される。同時に、主要部であった要素は修飾部へと落ちること

⁵²名詞句内での限定語反転を可能にしやすい動詞には、参加者となる名詞句のプロファイル/アクティヴ・ゾーンの不一致 (active zone-profile discrepancy) の幅が大きいという性質があると思われる。たとえば、登るの目的語としての山山では、アクティヴ・ゾーンは山山の地面、道などであるが、見るの目的語としての山山では、アクティヴ・ゾーンは山山の木々、花、鳥、初夏など、多くの関連事物となる。

となり、媒体のドメインで前景化されていた要素は、結果的に趣意のドメインでは背景化される。つまり、名詞句レベルの際立ちの分布が反転しているといえる。しかし、限定語反転の理解は、単に修飾関係が修正されるだけではなく、逸脱的な修飾関係と平常の修飾関係との相互作用性が、修辭的な効果として生じる。これによって、限定語反転表現の際立ちの分布は、媒体のドメインと趣意のドメインとのあいだで多層的となる。本節でとりあげた例では基本的に、趣意のドメインでは具体物が際立っているが、媒体のドメインでは抽象物が際立つタイプのものである⁵³

4.9.3 交差呼応

交差呼応 (chassé-croisé[仏]) は、二つの節のあいだで、同じ統語的位置にある要素を入れ替える、代換類の修辭である。

- (9) 細かい手の器用なさばきは耳に覚えていず、ただ音の感情が分かる 程度の島村は、駒子にはちょうどよい聞き手なのであろう。

(川端康成「雪国」: 60)

- (10) 鐘消えて花の香は撞く タベかな⁵⁴

(芭蕉)

(9) では、統語的には「耳に覚えて」の目的語は「手の器用なさばき」であるが、耳に覚えているとすれば、それは聴覚に関することであるという点からは、意味的な行為対象は後続する「音の感情」であるといえる。また逆に、「手の器用なさばき」は「分かる」の意味的な行為対象であるといえる。これらを合わせると、前半の節と後半の節で、主語位置にある名詞句を入れ替えているとみることができる点で、交差呼応をなしているといえる。(10) では、「撞く」といえば、「鐘」がその対象となるのがデフォルト的である。さらに「花の香」は「消え」といえることから、前半の節と後半の節で、「鐘」と「花の香」が交替しているとみることができる。

図 4.53 は、(9)(10) のタイプの交差呼応に関する修辭理解のスキーマ **CC** である。限定語反転では、二つの動詞句（たとえば「耳に覚えて」と「分かる」）に規定される二つのプロセス関係の関係が問題となる。それぞれの動詞句は、デフォルト的な項をおぎなって、顕在化する。限定語反転では、おぎなう項は隣接する節の名詞句（たとえば「耳に覚えて」にたいして「音の感情」をおぎなう）となるため、結果的に、隣の動詞句の項を当該の動詞句の項として横取りするかたちとなる。この隣接節の項を当該節の項として顕在化するプロセスが、プロセス関係からものへと伸びる二つの換喩的作用があらわしている。対応線の交差は、項の交替に対応する。

⁵³ 日本語の限定語反転では、文法の制約上、主要部が、具体物に代わって抽象物となるタイプのもものが多く見られる。一般には、主要部が、抽象物に代わって具体物となるタイプのものも存在する。

⁵⁴ 佐藤他 (2006: 106) が、交差呼応の例として挙げている。

交差呼応は、書き言葉ではあまり見られないが、話し言葉で言い間違いとして起こることは、ままある。その点からすると、知覚の混同、あるいは表現の混同を素直に表現したものともいえる。この種の修辞表現が効果的となる場合、たとえば(9)では、ポジティブな意味での知覚混同が表現される。つまり、楽器の音は聴覚的であるとはいえ、音は演奏者の手さばきから生じるものである。その意味では、洗練された聴衆にとっては、手さばきが直接音と対応するともいえる。この場合、手さばきはまさに「耳に覚え」るものであって、単に目で見えるものではない。(9)では、「島村」が熟練したレベルには達していない、という事実が性格に描写された修辞表現とみることも可能である。

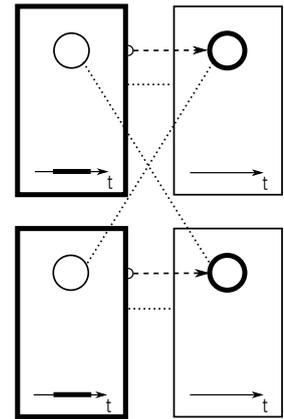


図 4.53: 交差呼応 (CC)

上に挙げた例では、二つの節のあいだでの、語句の交替が問題となっている。このうち、一つの節だけを取り上げた場合、それはしばしば共感覚的比喩 (synesthesia) となっている。たとえば、手さばきは耳に覚えていない、といえ、視覚と聴覚の共感覚的比喩である。共感覚的比喩では、たとえば、黄色い声援というように、媒体となる知覚（ここでは視覚）のみが明示され、趣意となる知覚（ここでは聴覚）は明示されないという点で、隠喩的である。これにたいし、交差呼応では、趣意、媒体となる知覚表現は、ともに明示されている。この点では、交差呼応は、直喩的な共感覚的比喩とみることもできる。

4.9.4 転移修飾

転移修飾 (transferred epithet) とは、修飾表現がその主要部ではなく、その前後の表現と修飾関係を成立させる、修辞である。Hall (1973)・山梨 (1991: 51-53)・金澤 (2008) など、修飾構造の研究に関連して、言語学でも比較的注目されてきた修辞現象といえる⁵⁵。

- (11) 和服に外套の駅長は寒い立話を切り上げたいらしく、もう後姿を見せながら
「それじゃまあ大事にいらっしゃい。」

(川端康成「雪国」: 60)

(11) では、統語構造としては、形容詞「寒い」は名詞句の主要部である「立話」を修飾している。しかし、「寒い」は典型的には感覚をあらわす形容詞であるという点からは、意味的な修飾関係としては、行為主体である「駅長」を修飾しているといえる。統語構造と意味構造のずれという観点からは、修飾部「寒い」は統語的な被修飾部「駅長」から意味的な被修飾部「立話」へと転移しているとみなすことも可能である。

転移修飾では、修飾語と主要部、その前後の表現との修飾関係だけが問題となるばかりでなく、共起する動詞とも関連している。(11) では、「切り上げる」という動詞は、慣習的には、

⁵⁵ 転移修飾の認知言語学的分析については、さらに山梨 (1995: 79-80)・篠原 (2002: 279-282)・木原 (2009)・神澤 (2011) も参照。

人が行為主体、話が行為対象となる文脈で使用される。このことから、参与者の際立ちの点で、「駅長」はトラジェクターとして際立っており、「寒い」が感覚形容詞であって被修飾部として人を要求することと相まって、転移修飾の解釈を誘引すると考えられる。

次の例では、意味的な被修飾部は、コンテキストから補完されている。

(12) ふと気がつく、さっきの金縁の眼鏡の男が真近の木立の陰から、じっと私達を眺めている。悲しい霧だ。

(川端康成「浅草日記」：240)

(12) では、「悲しい」というのは感情をあらわす形容詞であり、典型的には人を修飾する。(11) では、動詞のなすコンテキストが、転移修飾の解釈を後押ししているのにたいし、(12) では、修飾表現の提供するコンテキストだけから、明示されていない行為主体が、意味的な被修飾部と解釈される。(11) では、[Nが悲しい霧を見ている]といったコンテキストをおぎなうことによって、転移修飾的に解釈することが可能となる。

転移修飾の修辭的焦点となる修飾表現が修飾する被修飾部が、主要部からどこへ転移するかは、一見すると、恣意的である。しかし、主要部と意味的な被修飾部とのあいだには、何らかの近接性が存在する⁵⁶。この点からは、転移修飾は換喩と関連する修辭といえる。近接性と換喩については、4.6節で詳説した。(11) では、[NP₁がNP₂を切り上げる]という節によって規定されるイベントにおいて、「駅長」はNP₁として、「立話」はNP₂として位置付けられる。言い換えると、「切り上げ」という動詞によって、「駅長」と「立話」は、ともにあるイベントの参与者となることに動機づけられて、近接性をもつといえる。転移修飾における被修飾部の転移は、同じイベントに特徴づけられる参与者、すなわち近接する参与者間に限られるといえる。

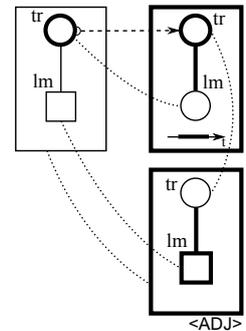


図 4.54: 転移修飾 (TE)

図 4.54 は、典型的な転移修飾の修辭理解を可能とするスキーマ **TE** である。換喩的作用でむすばれた二つのものは、統語的な被修飾部となる名詞と、意味的な被修飾部となる名詞である。換喩的作用の媒体となるのは、統語的な修飾関係（たとえば「寒い立話」）におけるトラジェクターに対応する名詞（「立話」）である。転移修飾の形容詞（「寒い」）はしばしば被修飾部として人間を要求するものであり、この意味的不整合性を修辭の条件として、換喩的作用がはたらく。換喩的作用の趣意となるのは、動詞（「切り上げる」）の規定するイベントにおけるトラジェクターをあらわす名詞（「駅長」）である。この換喩的作用を介して、動詞の規定するプロセス関係のトラジェクターと修飾関係が生じる。右下の ADJ とラベルされた修飾関係は、形容詞（「寒い」）が行為主体（「駅長」）を修飾する関係をあらわす。

転移修飾現象は、金澤 (2008: 30–31) のいうように、「段階的に意味的な拡がりを持つ」といえる。修飾表現と主要部との統語・意味関係は、すべての転移修飾で一様であるというわけ

⁵⁶近接性（隣接性）と転移修飾については、大森 (1997)・山梨 (2009: 90–92)・貞光 (1999) も参照。特に貞光は、参照点能力の観点から、転移修飾の認知図式を記述している。本節で記述した図式は、貞光のものと基本的には矛盾しない。

ではない。たとえば、石だたみの道、長い道、暗い道、淋しい道、孤独な道、悲しい道、と挙げていけば、前半から後半にいくにしたがって、徐々に修辭性を増す(佐藤 1987: 74-75)。次の例では、転移修飾とみなすこともできるが、上述の例と比較して、修辭性は相対的に低いといえる。

(13) 何でも花曇りの^{ひる}午すぎで、川すぢ一带、どこを見ても、煮え切らない、退屈な景色だった。

(芥川龍之介「世之助の話」: 113)

(14) 私は全身に異様な戦慄を感じて、三度この憂鬱な油画を覗いて見た。

(芥川龍之介「沼」: 240)

(13) では、「退屈な」というのは人間がいだく感情であるとみれば、行為主体を修飾する転移修飾とみなすことができるが、「景色」自体が平凡で起伏に乏しく、退屈であるとみるならば、字義通りの表現である。(14)でも同様に、「憂鬱な」というのは感情ともみることができるが、「油画」の色彩、タッチ等に憂鬱さが含まれていて、万人に憂鬱な印象を与えるものとみれば、字義通りに、主要部を修飾するとも考えられる。さらに、淋しい山村を訪れる、退屈な芝居を見る、といえ、修辭性はほぼないといえる。ここでは、問題となる感情が起こる原因は、物にあるとみなされる。つまり、山村が淋しいのであり、芝居が退屈であるといえる。

その一方で、形容詞ごとに転移修飾の修辭性が定まっているわけではないことにも注意が必要である。たとえば、しばしば転移修飾の典型例となる「悲しい」などであっても、悲しい映画を見る、といえ、修辭の感覚はほぼないといえる。ここで、目的語を変更して、悲しい朝日を見る、といえ、転移修飾的となる。視点との関係でいえば、映画や絵画を見るというときには、行為対象が前景化され、行為主体は相対的に背景化される。いわば、物に視点があるといえる。一方で、朝日を見るというときには、朝日は毎日同じように昇るのであり、叙述の観点からは背景化され、見る行為主体が前景化される、つまり主体に視点があるといえる。一般に、主体に視座をおいたとき、感情形容詞による物の叙述は、転移修飾的になると考えられる。また、どのような名詞句が参与者となるかによって、視点の基準が異なり、これによって転移修飾の修辭性が規定されていると考えられる。

4.9.5 統語的配置と視点の転換

図 4.55 は、代換類の修辭のネットワークである。[1] **ALT** は統語的交替 (syntactic alternation) のスキーマである。代換 **HYPL** は動詞に関する格関係の交替であり、限定語反転 **SA** は修飾-被修飾関係の交替であるといえる。共通するのは、節の規定するイベントの中の参与者が、相互に文法的機能を交替するということである。[2] **V-CON** は動詞文脈の代換類のスキーマである。統語的交替は、ある節内での交替であるが、交差呼応 **CC** は、二つの節の間での交替である。共通点は、ある動詞のつくる文脈の中で、逸脱的な参与者をデフォルト的な参与者

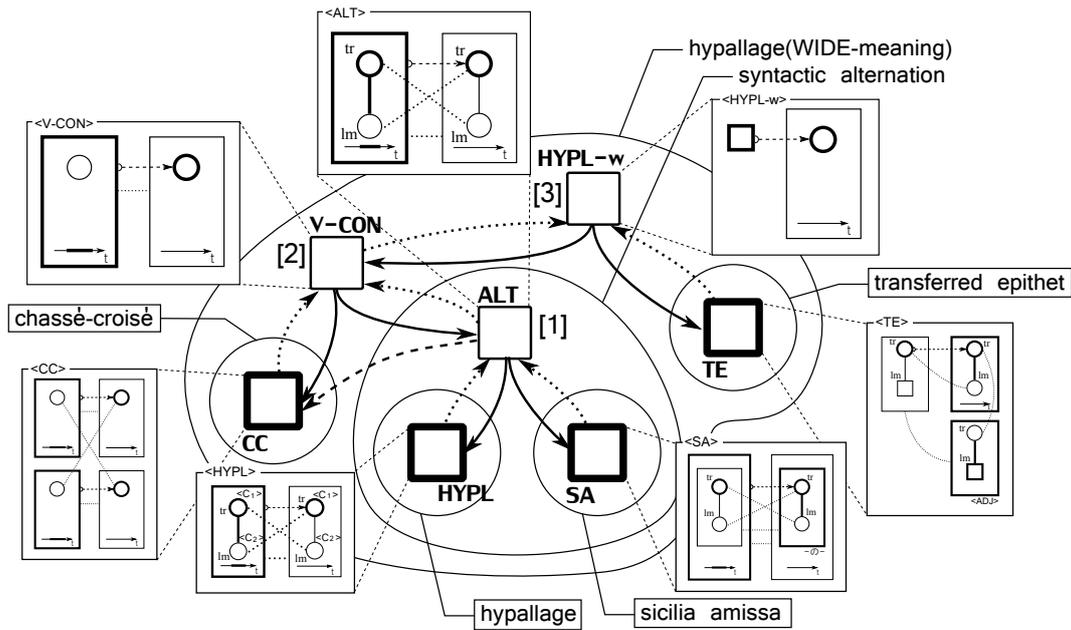


図 4.55: 代換類のネットワーク

で代置するという認知プロセスを経ることである。この点からは、交差呼応 **CC** は統語的交替 **ALT** と拡張の関係にあるといえる。[3] 代換類の中でも、修辞スキーマの観点からは、転移修飾は異色に思われる。代換、限定語反転、交差呼応では、対応線が交差していることから分かるように、何らかの要素の統語的交替を含むのにたいし、転移修飾の構造は、基本的に換喩を継承している。この点からは、転移修飾は換喩類のレトリックと密接な関係をもつといえる。

代換類の修辞過程には、図地反転や焦点シフトの認知プロセスがみられる。代換では、格に関する二つの名詞句の際立ちが反転することによって、視点が転換する。交替する二つの名詞句は、行為主体（たとえば「人」）と行為のセッティング（たとえば「頂」）をそれぞれあらわすものであり、事態認知の観点からは、主体とセッティングに関する図地反転のプロセスとみることができる。限定語反転では、修飾関係に関する二つの語句の際立ちが反転することによって、視点が転換する。交替する二つの語句は、ある物（たとえば「山山」）とその部分的性質（たとえば「初夏」）をそれぞれあらわすものであり、物と部分的性質に関する図地反転のプロセスとみることができる。また、交差呼応では、二つの知覚表現のあいだで語句が交替することで、聴覚から視覚、視覚から聴覚といったように、五感に関する焦点シフトのプロセスがみられる。転移修飾では、修飾語に関する二つの被修飾語候補の際立ちに関して焦点シフトのプロセスがみられる。このように、代換類の修辞現象では、統語関係の逸脱が主要な問題とされてきたが、修辞過程の観点からは、単に統語構造の問題としてだけでなく、焦点シフトや図地反転の認知プロセスを介した、視点と際立ちの転換をとまなうと考えられる。

4.10 修辞の地図

本章の記述によって得られた、修辞のネットワークは、全面的に用いた例文に依存することを強調したい。本節で提示する修辞の地図は、本論文で提示した百数十の例文と、提示しなかったが考察の対象とした四百程度の例文の観察、記述から構成されるものである。したがって、修辞のスキーマの構造とネットワークは、あくまで具体的な言語事例から帰納的に得られたものである。結果、スキーマの構造やネットワークは、一般的な修辞表現に演繹的に適用できる性質のものではない。修辞現象は思った以上に多様であり、本研究はその一部を分析したに過ぎない。本節で与える修辞のネットワークは、一般的な修辞研究の規範となるべきものではなく、精緻化され、拡張されるべき手がかりとなるべきものである。

図4.56は、前節までに得られた修辞のネットワークを総合したものである。このように、一貫した理論的枠組みによって、修辞の全体像が与えるものは、これまで無かったように思う。以下で、各修辞の大域的な相互関係の一部について述べる。より詳細なスキーマの相互関係については、各節末に付与したネットワークを参照のこと。

まず目につくのは、見立ての修辞の一般的スキーマ **MTPRC** からのびる多くの事例化の矢印である。言葉遊び (wordplay) と誇張 (hyperbole)、転換 (enallage) は、基本的に隠喩的な見立てと関連する。**MTPRC** を事例化するのは、対比の一般的スキーマ **ANTI** である。このことから示唆されるのは、多くの修辞は対比的認識が中核となっていることである。二項の連合的対比はかなり基本的な認知プロセスであり、多くの修辞過程にみられるものである。これにたいし、換喩類の一般的スキーマ **MTNYC** からもいくつかの事例化の矢印がのびている。**MTNYC** を事例化するのは、省略の一般的スキーマ **ELLIP** である。潜在的なコンテキストを顕在化させる働きは、対比に劣らず遍在する認知プロセスであるといえる。省略の補完という認知プロセスは、広義の代換 (hypallage(WIDE-meaning)) をはじめとして、修辞過程の統語面を基礎づけるものである。対比は修辞性の中核をなす一方で、省略はあらゆる修辞のコンテキストに関わっている。この種の修辞の特色は、連辞関係と連合関係という対照に要約される。非常にスキーマ性の高いレベルにおいて、省略の修辞、関係の修辞、統語構造の修辞と題した節でとりあげられた修辞は換喩的であり、二極性の修辞、見立ての修辞、言葉遊びの修辞、程度性の修辞、文法範疇の修辞と題した節の修辞は隠喩的である、とまとめることができる。

第5章 修辞の創発

修辞のすぐれた文章では、新奇な比喩でもうまく文脈に馴染んでいて、奇抜さのわりに、楽に理解できる。それどころか、目に浮かぶような、新鮮で生き生きとした感じを描写できるのは、新しい比喩である。一方で、使い古された比喩は嫌われる。君の瞳は宝石だという隠喩は、修辞研究以外ではなかなかみられない。しかし、慣習化された比喩は言語知識の源泉となっており、ひとたび比喩性をとりもどすと、意外な衝撃をあたえることもある。

本章では、二つの対照的な言語現象をとりあげる。第一は、複雑で印象的な比喩表現であり、第二は、慣習化され知識化された比喩表現である。これらは、生きた比喩と死んだ比喩として、対極にあるものとされてきた。生きた比喩は詩にみられ、死んだ比喩は日常にみられる。しかし、これらのどちらかだけが集中的に用いられることは稀である。生きた比喩は日常言語の上に存在するのであり、日常会話にも生き生きした比喩はしばしばみられる。慣習化という軸の上で漸次的に推移する二極という側面は、言語学の意味論に偏った見方であり、修辞の認知過程という観点からは、これらは二つの異なる認知機構にもとづく、特有の修辞過程とみることができる。

5.1節では、生きた比喩が可能となるためには、どのような認知的基盤が必要となるかについて述べる。5.2節では、ほとんど死んでしまった比喩が修辞として効果的となる場合について述べる。

5.1 修辞の形成

一般に、生きた比喩は文脈に依存している。男は狼だという隠喩の例や、赤シャツが話しかけてきたという換喩の例だけを観察していると、隠喩や換喩はあたかも語のレベルにおける修辞であるかのように思える。確かに、慣習化された比喩は語のレベルに局在するといってもよい。しかし、多様な例文を観察していくと、生きた隠喩や換喩の理解は、前後文脈が決定的な役割を果たしている場合が多い。創造的な比喩表現を理解するためには、適切な文脈が必要となる。本節では、印象的で新奇的な比喩表現が、どのような文脈を認知することで理解可能となるかについて考察する。5.1.1節では、主に換喩類の修辞をとりあげ、5.1.2節では、主に見立ての修辞をとりあげる。5.1.3節では、さまざまな修辞が相互に影響してひとつの修辞過程を複合的に構成しているものについて、いくつかの例をあげる。

5.1.1 換喩の形成

換喩は多義語である¹が、本節では、提喩や転喩を含む、広い意味での換喩をとりあげて、その修辞理解が可能となる文脈を観察していく。

次の二例を比較すると、同じ媒体の提喩が、異なる趣意をあらわす場合があることが分かる。

(1) 空に白いものが舞ってきた。

(2) 頭に白いものが混じってきた。

(1)の文脈、つまり「空」から「舞って」くる「白いもの」といえば、これを雪をあらわすのが慣習的である。(2)の文脈、つまり「頭」に「混じって」くるもの「白いもの」といえば、慣習的には、これは白髪をあらわす。つまり、文脈によって「白いもの」が、さまざまなものをあらわしていることが分かる。(1)(2)は、文脈自体が慣習化された提喩である。これにたいし、次のような文脈ではどうか。

(3) 門口を出しなに、ほの白いものが眼について振り返ると、桐の三味線箱だった。

(川端康成「雪国」：47)

(3)では、「ほの白いもの」は三味線箱をあらわすしかし、ほの白いものは「三味線箱だった」と明示している点で、修辞表現というよりは、単に照応といえる。次の例では、この文脈を用いて、提喩が形成されている。

(4) 暗い部屋の中に、桐の三味線箱がほの白く浮かんでいた。島村は、ほの白いものにそつと触れた。

(4)の第二文では、修辞性が感じられ、提喩とみることができる。「白いもの」という提喩のうち、慣習化したものは、たいてい雪か白髪である。三味線箱が白い、というのは、雪が白い、という事実と比較して、相対的に慣習性が低いといえる。この「白いもの」を三味線箱と理解する提喩的解釈は、第一文「暗い部屋の中に、桐の三味線箱がほの白く浮かんでいた。」のなす文脈によって可能となっている。第一文は、桐の三味線箱のもつ種々の性質のうち、白いという性質を焦点化し、典型的な特徴とみなすことを誘引する文脈となっていると考えられる。

(3)のような表現は、あるもののもつ種々の性質のうち、唯一つだけを焦点化するという提喩的な認知プロセスを誘引するものとみられる。言い換えると、この種の文脈は、(4)のような提喩表現を形成する文脈となる。

さて、近接性にもとづく修辞では、提喩の他にも、この種の形成文脈が存在する。次の例は、転喩形成の文脈である。

(5) 大夫は右の手を挙げて、おやゆび、大拇を折って見せた。そして自分もそこへ舟をもや舫った。大拇だけを折ったのは、四人あるというあいず相図である。

¹換喩の分類に関するいくつかの立場については、4.6節を参照。

(5)の文脈では、「大拇を折って見せた」ことは、人数を知らせる合図の意味となる。このように、ある近接関係を明示的に表現した場合、それが修辞理解の根拠となる文脈を形成する。一般に、近接性の修辞に必要な文脈は、ドメインをひとつに限定する文脈であるといえる。(5)では、親指の身体機能の面が隠され、ボディランゲージをなす記号機能の面がとりあげられている。ドメインがひとたび限定されると、そのドメインの主要な要素は、比喩に用いることができるようになると考えられる。

(5)のように近接関係を明示すると、修辞表現というよりは、むしろ説明の感覚が生じる。実際の生きた比喩表現では、媒体と趣意を明示するのではなく、趣意が十分容易に連想されるようなものを、明示する場合が多い。これによって、媒体と趣意との近接関係を間接的に保証する文脈が形成される。

(6) いよいよ学校へ出た。初めて教場へ這入って高い所へ乗った時は、何だか変だった。

(夏目漱石「坊っちゃん」: 26)

(7) その夏から秋にかけて、私は二人の女から感情を要求された。

(川端康成「明日の約束」: 240)

(6)では、「教場」が教壇を連想させるし、(7)では、「女」が恋愛感情を連想させる。これによって、間接的に、高い所と教壇、感情と恋愛感情のあいだの関係が焦点化されることで、提喩表現を理解することができる。言い換えると、「教場」や「女」が換喩的に文脈を形成することによって、提喩の近接関係が保証される。この種の換喩的なプロセスは、新規的な比喩表現の理解の基本的な文脈を形成すると考えられる。

次の例では、換喩形成のための文脈が綿密に積み重ねられてはじめて、換喩が可能となっている。

(8) (….)突然少女は大きいあくびをしました。

「あっ。暗闇。暗闇！」

きらきら眩しい光の世界で、少女が大きく開いた口の中に、唯一点の暗闇が生れたのです。その暗闇はじろりと私眺めました。

(川端康成「青い海黒い海」: 178)

(8)では、「少女」「あくび」「眩しい光の世界」などの語句がうまく文脈を形成することによって、「暗闇」と「少女」の近接関係が形成され、換喩の理解が可能となっている。

換喩類の修辞を形成する文脈は、解釈主体の注意を調整することによって、修辞表現の媒体をうまく焦点化しているといえる。この種の焦点化のプロセスが修辞的となるか否かについては、視点のとり方がかわる。次の会話文の例では、視点のとり方が修辞性に影響を与える。

(9) 蝶子が肩に腕を廻すと、固いものが指にさわったので、

「これなに。」

「ハアモニカだよ。」

「ハアモニカ？あきれるわね。ハアモニカをポケットに入れて舞台へ出るの？」

(川端康成「虹」：371)

「ハアモニカ」の典型的特徴はふつうは音楽に関わるものであるといえるが、(9)の文脈では、「固いもの」という表現によって、ハアモニカの聴覚的なドメインが抑制され、触覚的なドメインが活性化されている。「これなに」という質問表現から分かるのは、「固いもの」という表現は、「蝶子」にとっては修辞表現というよりは文字通りの表現であるということである。すなわち、質問の答えとなる「ハアモニカだよ。」ということばを聞くまでは、蝶子にとっては「固いもの」が「ハアモニカ」であることは未知である。しかし、読者は必ずしも蝶子の視点に立つ必要はない。「固いもの」はハアモニカであることを読んで知っている読者が、振り返って「固いもの」を読む時には、「固いもの」を媒体とし、ハアモニカを趣意とする提喩の感覚が生じる。言い換えるならば、具体的な「ハアモニカ」という名前を言わずに抽象的な性質で言い換えている、という感覚が生じる。一般に、その表現が提喩となるかどうかは、視点によって異なると考えられる。

(10) 「(…) 上の方に 細長い影 がかたまって、時々秋風にゆすれるのが眼につきます」

「何だい、その細長い影というのは」「渋柿の皮を剥いて、軒へ吊るして置いたのです」

(夏目漱石「吾輩は猫である」：452)

(10)では、「細長い影」といったのは「渋柿」を吊るした本人である。渋柿を吊るした人の視点からは、細長い影が渋柿であることは既知であり、ここでは提喩的表現として「細長い影」といつていることになる。その一方で「何だい、その細長い影というのは」と聞く人の視点からは、この関係は未知であり、むしろ文字通りの表現とみられる。

5.1.2 隠喩の形成

一般に、隠喩は、媒体のドメインと趣意のドメインの相互関係である。隠喩が可能となるためには、このドメインの対が認知される必要がある。言い換えると、隠喩形成の文脈を形成するために必要となるのは、ドメインの対を限定する文脈である。この種の隠喩形成の文脈として、たとえば比較表現がある。比較の表現によって対比される二項は、ふたつのドメインの対を限定して、隠喩を可能とする。

(11) 海は漁師にとっては、農民のもっている土地の観念に近かった。海は生活の場所であつて、稲穂や麦のかわりに、白い不定形の穂波が、青ひといろの感じやすい柔土のうえに、たえずそよいでいる 畠 であつた。

(11) では、第一文で、漁師にとっての「海」と農民にとっての「土地」が比較されている。これによって、海は土地である、という隠喩の文脈が形成される。これによって、波を「穂波」で隠喩し、水面を「柔土」で隠喩することが可能となる。

隠喩は類似性にもとづく比喩であるから、隠喩の媒体と趣意は類似性をもつ。しかし、語の意味として類似性を内在している必要はなく、文脈によって類似性が持ち込まれる場合もある。(11)においては、[NP₁はNP₂に近かった]という比較表現は、まさに二項に類似性を設定するものであり、これに続く隠喩が可能となるための基盤的認識を与えるものであるといえる。

(12) 花は満開である。

しかし、彼のデッサンでは抹殺されていた。梅は彼の風景画の前景とするには、化物としか思われぬ大きさであった。

風景画家としての彼に、この梅の木のような場合は珍しいことではなかった。目に近過ぎるものは、いつも大きい化物であった。

(川端康成「春景色」: 241)

(12) では、第二文で [NP₁はNP₂としか思われぬ] という表現によって、「梅の木」と「化物」に類似性が導入されることによって、近過ぎるところにあるものは化物である、という隠喩のドメインの対が形成される。これを用いて、第四文において、まさにそれが連辞的隠喩として表現されている。

このように、隠喩形成の文脈は、類似性導入の文脈であると考えられる。次の例では、直喩によって類似性が導入されている。

(13) 夜あけの^{うすあかり}薄明のなかの墓石は、^{いんしん}殷賑な港に^{ていはく}碇泊している多くの白い帆船のように見える。二度と風を^{はら}孕まない帆、永すぎる休息のあいだに、重く垂れたまま石に化してしまった帆である。いかりは暗い地中に二度と引きあげられぬほど深く^{ささ}刺っている。

(三島由紀夫「潮騒」: 37)

(14) 文鳥の眼は^{まっくろ}真黒である。^{まぶた}瞼の^{まわり}周囲に^{ときいろ}細い淡紅色の絹糸を縫い^つ附けた様な筋が入っている。眼をぱちつかせる度に絹糸が急に寄って一本になる。と思うと又丸くなる。

(夏目漱石「文鳥」: 84)

(13) では、第一文で、直喩によって、「墓石」が「帆船」にたとえられる。(14) でも、直喩のなす文脈によって、眼の様子が絹糸でたとえられている。ひとたび、見立ての対が形成されると、これに関わるさまざまな要素が、隠喩的に表現される

隠喩形成の文脈は、諷喩 (allegory) の理解と関わる。諷喩とは、隠喩の連続である。たとえば、話やことわざも、諷喩のかたちをとるものが多い。たとえば、猿も木から落ちる、といえ、

単に猿が木から落ちることを文字通りに述べているわけではなく、上手なものでも時には失敗する、ということを隠喩的にほのめかすものと理解される。ここでは、趣意のドメインとなるのは人間の失敗に関するものであるが、言語表現上には手がかりが全く与えられていない。したがって、諷喩を理解するためには、あらかじめ媒体と趣意のドメインの対が、知識的、文化的、あるいは状況・文脈的に限定されている必要がある。ここでは、[猿は達人である]という関係が定着してはじめて、この諷喩が理解される。(13)では、直喩の与える類似性の認知によって、強固な隠喩形成の文脈が生じ、一時的に諷喩可能となるほどに、ドメインの対が限定されているとみることも可能である。

換喩の趣意と媒体のドメインの対が、隠喩の文脈を形成する場合もある。

- (15) 鏡の裏面に彫られた鹿や栗鼠^{りす}たちは、遠い昔、波斯^{ペルシヤ}の森のなかから、永い陸路や、八重の潮路^{しおじ}をたどって、世界の半ばを旅して来て、今この島に、住みならえているのであった。

(三島由紀夫「潮騒」：6)

- (16) 踊子は料理やの二階にきちんと坐って太鼓を打っていた。その後姿が隣り屋敷のことのように見えた。太鼓の音は私の心を晴れやかに踏^{おど}らせた。

(川端康成「伊豆の踊子」：312)

(15)では、冒頭の「鏡の裏面に彫られた鹿や栗鼠たち」という換喩形成の文脈表現によって、鏡と動物のあいだの近接関係が焦点化される。ここではこの近接関係が、鏡そのものと描かれた模様の対として、隠喩に利用されている。「旅して来て」というのは、船で日本へ運ばれてきたことを意味し、「住みならえている」というのは、鏡が島に保管されていることを意味する。(16)では、「太鼓の音」と[踏る]の慣習的な近接関係が隠喩に利用されている。一見すると、太鼓の音が踊らせることは平常の表現と思われるが、ここでは目的語が「私の心」とずらされることによって、「踏らせた」は隠喩の媒体となっている。隠喩の媒体は本来多様であるが、ここでは近接関係によって踊りのドメインに限定されている。

このように、近接関係は通常換喩的な資源として利用されるが、トピックをうまく転移させることによって、隠喩的に用いることも可能となる。隠喩と換喩は、言語表現の連辞と連合を介して相互にからみあい、ひとつのまとまった修辞表現をなす場合がある。このことから示唆されるのは、それぞれの修辞は排他的なものではなく、共存可能ということである。次節では、より広い修辞に関して、この種の複合的修辞表現をとりあげる。

5.1.3 修辞の共存

修辞学の分類は非常に細かく、一見すると、網羅的に修辞現象を分析したものと思える。しかし、修辞としてカテゴリー化されているものは、安定しており、比較的多く見られる修辞現

象の中核的性質をまとめたものにすぎない。具体的な事例を多く観察していくと、修辞現象には、複数の修辞が複合的に混在し、ひとつのまとまりを作っているものも多くみられる²。

次の例では、隠喩と擬態語が混在している。

(17) 今日も風で、紅梅の紅い花びらが馬小屋へぽたぽた散り込んでいた。

(川端康成「春景色」：235)

(17) では、「ぽたぽた」という擬音語が用いられることについて、主語に液体のイメージが喚起される。これによって、「花びら」が液体に喩えられている感覚が生じる。また、「散り込」むの[込む]も、雨が降り込む等のイメージを喚起する。これらが総合されて、花びらが散って小屋へ入るさまが、液体が入り込むことにたとえられているという解釈が誘引される。

次の例では、提喩と転移修飾が混合的となっている。

(18) 寂しい三の木戸の小屋へは、折々小萩^{こはぎ}が遊びに来た。

(森鷗外「山椒大夫」：277)

(18) では、「小屋」を人の住む場所とみれば、「寂しい」は統語的には「小屋」を修飾しているけれども、意味的には[小屋に住む人]を修飾していると解釈することができ、転移修飾的である。一方で、「小萩」が遊びに来るとするのは、住人と遊ぶために来ることであるとみれば、提喩的に「小屋」は小屋に住む人をあらわして、「寂しい」は文字通りに被修飾語に係るとみることも可能である。

次の例では、直喩と異義反復が組み合わせられている。

(19) 日没時には阿波^{あわ}の北方^{きたかた}が全体、金色に輝く。目下に吉野川に注ぐ鮎^{あゆ}食川^{くいがわ}が金の蛇のように横たわり、その向うにひろがるのは、年々、百四十万両の金^{きん}を成らせる藍草畑である。

(井上ひさし「腹鼓記」：38)

(19) では、「金」色は文字通りの描写表現である。「金」の蛇は、直喩の媒体の一部をなす表現となっており、「金」を成らせるにおいては、お金の意味となっている。二回目と三回目の「金」は異義反復をなしており、直喩の媒体の一部が異義反復の媒体を兼ねているといえる。この種の修辞理解のためには、「きん」というルビも文脈として関係している。この点からは、漢字と読み仮名が共存しているために可能となる、文字媒体特有の構造を用いているともみられる。

次の例では、直喩が異義兼用と関わる。

(20) 橋の上から見ると、川は垂鉛板のように、白く日を反射して、時々、通りすぎる川蒸気がその上に眩しい横波の鍍金^{めつき}をかけている。

²複合的修辞、あるいは修辞の群といったアイデアについては、山梨(2011)、蔦野(2011)に発想を得た。

(20)では、「川は亜鉛板のように」という直喩は、「川」と「亜鉛板」に類似性を導入する。この直喩では「日を反射して」という述語は、「川」と「亜鉛板」の両方にかかっているが、どちらも文字通り日の光を反射するというほぼ同じ意味である。これにたいし、続く「かける」も「横波」と「鍍金」の両方にかかっているが、[横波をかける]と[鍍金をかける]においては、「かける」はそれぞれ異なるニュアンスで読み込まれることになる。

上述の例文は、修辞の共存関係の例のごく一部である。日常のコミュニケーションにおいても、複数の修辞がせめぎあって、修辞的效果を生じていることは多くあると思われる。生きた修辞を分析していくためには、このように、複雑な文脈の中で互いに絡み合う修辞をときほぐしていくことが必要となる。

5.2 修辞理解と身体性

修辞表現は、平常の文法からは逸脱的であり、文字通りに意味をとろうとすると破綻する。したがって、言外の意味を汲むことが、修辞理解の鍵となる。ところで、言外の意味はどこから来るかといえば、解釈主体のもつ経験の総体から来るのである。特に、隠喩や直喩といった比喩表現の修辞理解に関しては、その意味内容のきめの細かさや、修辞的效果の点で、経験による差があるように思われる。女性を百合にたとえたとしても、百合を見たことがない人と、山百合の咲く山間に住む人とでは、その修辞的な効果には差があると考えられる。本節では、経験が比喩理解あるいは比喩的認識におよぼす影響について考察する。5.2.1節では、慣習化された比喩と身体的経験の関係について述べる。5.2.2節では、比喩的認識の経験的基盤について述べる。

5.2.1 身体的経験と意味の発掘

男は狼だ、彼女の瞳は宝石だなど、クリーシェ(cliche)、つまり決まり文句となった比喩は多い。認知意味論によれば、死んだ比喩は、人間の認知の基盤となる。「狼」や「宝石」によって、男の乱暴さや女の美しさといった抽象概念が、はっきりと認識できるようになる。なぜならば、狼や宝石は、手に触れることもでき、目で見ることでもできるからである。この例に関しては、実際には、慎重に触れ、遠くから見ることになるであろうが、それは問題ではない。身体を通じた経験によって始めて、言語の意味は充実したものになる。単なる抽象概念はラベルだけが与えられて中身はすかすかであり、これに意味を充満させるものは比喩である。

机の足、銃口といえば、確かに比喩以外では言い表わしようがない。その一方で、嘘は河豚汁である、といえは発見的であり嗜好的である。冒頭に挙げたクリーシェは、前者に比べると、比喩の感覚を残しており、後者に比べると、いかにも味気ない。その意味では、中途半端に生きた比喩と死んだ比喩との間にさまよっているとはいえ、不幸である。

クリーシェは単文でおいたのでは、確かに比喩としては不格好である。しかし、クリーシェ

が、生き生きとした比喩性を取り戻すこともある。

(21) それから 彼女は花のように笑う のだった。花のように笑うという言葉が彼女にはほんとうだった。

(川端康成「伊豆の踊子」：312)

(21) では、「花のように笑う」とは美しさをあらわすクリーシェである。そこには、花と彼女とを比較して、その類似性を焦点化するようなプロセスはなく、単に美しい、可愛らしいと同義となっているともみられる。しかし、後続文で「花のように笑う」というのが繰り返され、またその比喩は「ほんとう」だと言われているから、本当に「花」のように笑っているのだという解釈が強いられることになる。そこには、「彼女」を「花」で見立てる、まぎれもなく新鮮な比喩としての発見的認識がある。比喩性の存在が明示されることで、「花」に関する具体的経験を思い返す契機が与えられる。

「花のように笑う」とは、どのような笑い方だろうか、と考えた時、その結果は人様々である。花は色々種類があつて、桜もあればチューリップもある、堇、菜の花、ガーベラ、蜜柑の花かもしれない。解釈主体がどのような「花」を思い浮かべるかによって、この比喩の理解はさまざまである。しかし、彼女は美しく笑うのだった、と行って理解が様々だ、というのとは質的に異なる。「花」に喩えられることで、[彼女は、美しく、眩しく、綺麗に笑うのだった]というのでは足りない何かが表示される。その意味は、各人の「花」の経験に帰せられる。解釈主体がそれまでに見てきて、触れてきた、嗅いできた花の経験、その総体が、この比喩の理解に関わるといえる。言い換えると、この比喩の意味は、解釈主体の身体的経験に基づいている。

このように考えると、(21)の第二文は、比喩性を取り戻すためのコンテクストとなっているといえる。このことは、次のような比喩でいうこともできる。つまり、(21)の第二文は、経験を思い返し、経験の中に埋もれた意味を発掘するためのコンテクストとなっている。

この種のコンテクストによって、隠喩的作用のもつ凝縮性がよく発揮される。一般に、新奇な比喩では、媒体と趣意の対応付けが明確ではないから、新しい比喩は驚きを与える。嘘は河豚汁である、という比喩は、驚くべき組み合わせであり、この修辞理解によって、河豚汁と嘘との類似性のマッピングが急いで行われる。これにたいし、クリーシェはもともと媒体と趣意は結びついている。君の瞳は宝石だ、といったからといって、いまさら驚くべきものは何もない。一見すると、そう見える。しかし、私は本当にそう思った、といったコンテクストが続けられると、状況は変わる。聞き手は、本当に宝石のことを思い浮かべなければならない。そして、これまでに見た美しい宝石の数々のイメージが、クリーシェによる写像によって、ほとんど直接言葉の意味となる。言葉によって経験への回帰が強いられることによって、経験は直接的に意味の充実に関与する。この種のプロセスは、修辞的な効果の中でも、最も衝撃的なもののひとつと思われる。

5.2.2 対話の比喩的基盤

比喩は、文法の慣習から逸脱した表現である。比喩の媒体として何を選択するか、つまり何で見立てを構成するかについては、伝達主体によって自由度がある。たとえば、人間を動物として見立てる比喩は、比喩表現の中でも慣習的である。男は狼だ、といえ、男の乱暴さを焦点化した比喩であり、あの女は狐だ、といえ、その女の卑劣さを焦点化した比喩となる。この種の比喩は、クリーシェとなっているから、いわば人々に共有された比喩である。

これにたいし、次のような比喩では、比喩の根拠となる類似性は、必ずしも明らかではない。

(22) いくら人間が卑怯だって、こんなに卑怯に出来るものじゃない。まるで豚だ。

(夏目漱石「坊っちゃん」: 43)

(22) では、人間を豚にたとえているわけであるが、その根拠はともに「卑怯」であることであると明示されている。これによって、解釈の観点からは、「人間」と「豚」とに「卑怯」であるという性質が類似性として備わっていることを認めることが強制される。しかし、はたして豚は卑怯であるのか。この種の動物の象徴性は文化・社会に依存して規定されているものであるが、豚が卑怯の代名詞となることは、少なくとも漱石の時代背景を考えても、かならずしも明白ではないといえる。

次の例では、年齢に関する個性が、比喩に反映される。

(23) 「あの駱駝^{らくだ}の悟りすました顔、聖人長者^{せいじんちやうじや}振って……。」
「もう少し子供らしい見方をしてくれ。」
「山羊^{やぎ}のおぢいさん。」
「あごひげだけはね。」

(川端康成「春景色」: 238)

(23) では、第一文では「駱駝」を「聖人長者」とたとえている。これにたいし、対話者が「子供」らしい見方をするように依頼すると、「山羊のおぢいさん」と比喩の媒体を変更している。第一の比喩では、比喩の根拠となる類似性は「悟りすました顔」であり、第二の比喩では、「あごひげ」であることが、文脈から理解される。第一の比喩が可能となるためには、悟りに関する知識と見解が必要となり、駱駝の顔に悟りをみるという比喩的認識が、比喩表現に反映されている。これにたいし、第二の比喩では、ひげの視覚的特徴を共通点ととらえる認識が、比喩表現に反映されている。

(23) では、比喩の伝達主体は同一人物であるけれども、この種の例からは、比喩的認識が伝達主体の経験に依存していることが示唆される。視覚的な形状に関する経験は、悟りに関する経験よりも容易になされるから、二つのものの類似性として「悟り」という概念は難しいが、「あごひげ」のかたちならば簡単である。簡単な概念を媒体として用いた比喩は、伝達主体の率直さ、素朴さを示唆する。

このように、比喩表現は、伝達主体の身体的・社会的経験を背景として形成される。文字テキストの解釈であれば、一面では、比喩表現は好きに解釈してよいといえる。しかし、対話では解釈は常に対話者によって限定される。対話とは、相手の言っていることを受け止めなくてはならないものである。対話の双方向性が維持されるためには、修辞理解も、相手の視点から解釈される必要がある。

比喩の意味は経験に依存する。したがって、相手の言う比喩を理解するということは、相手の経験を想像することである。しかしその一方で、比喩の意味は自分の経験からしか理解され得ないのも事実である。よって、対話者の比喩を聞くことは、自分の経験と相手の経験を、想像力をもって対比させることである。言い換えると、比喩表現は、対話者の経験へと思いをはせる契機となるものである。漱石が「眼をぱちつかせる度に絹糸が急に寄って一本になる。と思うと又丸くなる。」というとき、精巧な比喩としてテキストを楽しむこともできる。しかし、漱石が愛をもって文鳥を観察している経験を思うこともまた可能である。文鳥の眼のまわりの美しい模様を「絹糸」とよぶ視点は、漱石の視覚的経験を追想しているようで、対話的とも感じられる。比喩表現は、転義の過程を含むため、どのような趣意をどのような媒体であらわすのかということを理解するために、どうしても伝達主体のとした視点へと誘導される。このような比喩の性質は、対話において伝達主体と解釈主体の視点を重ね合わせる認知的基盤ともなり得るものといえる。

第6章 結語と展望

本論文では、修辞現象を認知過程の観点から記述し、その相互関係の一部を明かにした。本論文の内容は、次のように要約できる。第2章では、これまでのぼう大な比喩研究の中から数十をとりあげ、そのうちいくつかを概説した。また、これをもとにして、転義現象の一般的な認知過程の性質について述べ、修辞作用モデルとしてモデル化した。第3章では、認知文法の言語理論を概説し、スキーマの定義とネットワークモデルについて述べた。また、修辞現象を適切に規定していくために、これにくわえ、修辞作用のスキーマと、カテゴリーの地形モデルを提案した。第4章では、まず修辞作用モデルにしたがって修辞性を分類した。つづいて、隠喩、直喩、比喩くびき、異義兼用、異義反復、類音語接近、かすり、誇張、緩叙、対比、対義結合、換喩、提喩、転喩、省略、黙説、転換、意味構文、破格くびき、代換、限定語反転、交差呼応、転移修飾という23の修辞をとりあげ、百数十の具体事例とともに、その認知的なスキーマを記述し、相互関係をネットワークのかたちで明示した。第5章では、隠喩と換喩を中心に、修辞理解がなされるときの文脈の構造について考察をおこない、いくつかの応用的な修辞現象について述べた。

本研究では、転義現象を中心として、分析をおこなってきた。生きたコミュニケーションでは、転義はごく自然な現象である。リチャーズは *The Philosophy of Rhetoric* の序論において、次のように述べている。

条件の一定性をもつ言葉に関しては、言葉は学びとるべき固定的意味をもっている、という常識が通用する。しかし、そのような言葉は、思うほど多くはない。大部分の言葉は、コンテキストの変化にともない、意味が変化する。そして、変化の仕方は多種多様である。意味の変化は言葉の本分であり、意味が柔軟に変化することによってはじめて、言葉が有用なものとなる。もしコンテキストによって言葉の意味が変化しないとすると、平常の談話 (discourse) はぎくしゃくしたものになるだろう。その点では、意味の変化に感謝しこそすれ、不平をいう筋合いはない。我々は、ある面では、この転義 (shifts of sense) によく通じており、比喩 (metaphor) として理解される表現に関しては殊更である。しかし、我々の理解能力にはむらがあり、安定しないものであるから、失敗することもある。もし失敗すれば、他者と自己に不和が生じることになる。(Richards 1936: 10-11)

転義現象の理解は、言語コミュニケーションの中核であるといえる。しかし、コミュニケーションの現場における転義現象に関しては、これまで本格的に研究されてきたとは言い難い。本研究では、主に文学作品を例にとり、模範的な転義の文脈構造を分析してきた。これによっ

て、転義現象の理解が可能となるための認知的機構の一部が明らかとなったと思う。この種の転義のスキーマ的構造は、日常の修辞表現にも適用されるものである。日常のコミュニケーションでは、作家のように流暢な修辞表現が用いられることは稀であり、転義のための文脈はいびつで不完全である。本研究で提示された転義の認知機構は、不完全な転義現象をみちびくための指標となる。修辞の認知的研究は、コミュニケーションの不和を改善し、誤解を減少させるための理論に取り込まれるべきものであり、今後の発展が期待される。

引用例出典

- [1] 芥川龍之介. 1995/1915. 「ひよつとこ」『芥川龍之介全集第一巻』: 129–138. 東京: 岩波書店.
- [2] 芥川龍之介. 1995/1916. 「鼻」『芥川龍之介全集第一巻』: 158–168. 東京: 岩波書店.
- [3] 芥川龍之介. 1996/1918. 「奉教人の死」『芥川龍之介全集第三巻』: 249–264. 東京: 岩波書店.
- [4] 芥川龍之介. 1996/1920a. 「沼地」『芥川龍之介全集第四巻』: 237–240. 東京: 岩波書店.
- [5] 芥川龍之介. 1996/1920b. 「世之助の話」『芥川龍之介全集第三巻』: 110–122. 東京: 岩波書店.
- [6] 井上ひさし. 1974a. 『ブンとフン』 東京: 新潮社.
- [7] 井上ひさし. 1974b. 『モッキンポット師の後始末』 東京: 講談社.
- [8] 井上ひさし. 1985. 『腹鼓記』 東京: 新潮社.
- [9] 大岡昇平. 1994/1948. 「野火」『大岡昇平全集3』: 3–136. 東京: 筑摩書房.
- [10] 大岡昇平. 1994/1951. 「一寸法師後日譚」『大岡昇平全集3』: 531–542. 東京: 筑摩書房.
- [11] 織田作之助. 1988/1945. 「ニコ狛先生」『おかしな話』: 129–143. 東京: 筑摩書房.
- [12] 川端康成. 1969/1929. 「温泉宿」『川端康成全集第一巻』: 355–400. 東京: 新潮社.
- [13] 川端康成. 1969/1934. 「虹」『川端康成全集第三巻』: 345–396. 東京: 新潮社.
- [14] 川端康成. 1969/1950–1. 「舞姫」『川端康成全集第九巻』: 7–232. 東京: 新潮社.
- [15] 川端康成. 1970/1925. 「青い海黒い海」『川端康成全集第一巻』: 175–195. 東京: 新潮社.
- [16] 川端康成. 1970/1927. 「春景色」『川端康成全集第一巻』: 227–245. 東京: 新潮社.
- [17] 川端康成. 1970/1930. 「針と硝子と霧」『川端康成全集第二巻』: 157–178. 東京: 新潮社.
- [18] 川端康成. 1970/1931a. 「水晶幻想」『川端康成全集第二巻』: 187–218. 東京: 新潮社.
- [19] 川端康成. 1970/1931b. 「浅草日記」『川端康成全集第二巻』: 219–247. 東京: 新潮社.
- [20] 川端康成. 1970/1931c. 「落葉」『川端康成全集第二巻』: 263–284. 東京: 新潮社.
- [21] 川端康成. 1980/1925. 「明日の約束」『川端康成全集第二巻』: 227–246. 東京: 新潮社.
- [22] 川端康成. 1980/1926. 「伊豆の踊子」『川端康成全集第二巻』: 293–324. 東京: 新潮社.
- [23] 川端康成. 1980/1935. 「雪国」『川端康成全集第十巻』: 7–140. 東京: 新潮社.
- [24] 北原白秋. 1987/1922. 「言葉」『白秋全集25』: 332–334. 東京: 岩波書店.
- [25] 幸田露伴. 1950/1893. 「風流微塵蔵」『露伴全集第八巻』: 1–448. 東京: 岩波書店.
- [26] 幸田露伴. 1952/1889. 「一刹那」『露伴全集第一巻』: 1–21. 東京: 岩波書店.
- [27] 坂口安吾. 1988/1939. 「勉強記」『おかしな話』: 97–127. 東京: 筑摩書房.
- [28] 谷川俊太郎. 1993/1973a. 「うそつききつつき」『続・谷川俊太郎』: 36. 東京: 思潮社.

- [29] 谷川俊太郎. 1993/1973b. 「かつぱ」『続・谷川俊太郎』: 36. 東京: 思潮社.
- [30] 筒井康隆. 1983/1969. 「晋金太郎」『筒井康隆全集第6巻』: 272-300. 東京: 新潮社.
- [31] 豊島与志雄. 1967/1939. 「台湾の姿態」『豊島与志雄著作集第六巻』: 341-346. 東京: 未来社.
- [32] 夏目漱石. 1929/1906a. 『草枕』 東京: 岩波書店.
- [33] 夏目漱石. 1929/1906b. 『坊っちゃん』 東京: 岩波書店.
- [34] 夏目漱石. 1938/1905. 『吾輩は猫である』 東京: 岩波書店.
- [35] 夏目漱石. 1956/1907. 「虞美人草」『漱石全集第五巻』: 3-316. 東京: 岩波書店.
- [36] 夏目漱石. 1956/1909. 「それから」『漱石全集第八巻』: 3-254. 東京: 岩波書店.
- [37] 夏目漱石. 1956/1910. 「門」『漱石全集第九巻』: 1-200. 東京: 岩波書店.
- [38] 夏目漱石. 1994/1908a. 「文鳥」『漱石全集第十二巻』: 79-98. 東京: 岩波書店.
- [39] 夏目漱石. 1994/1908b. 「夢十夜」『漱石全集第十二巻』: 99-130. 東京: 岩波書店.
- [40] 西田幾多郎. 2002/1932. 「無の自覚的限定序」『西田幾多郎全集第五巻』: 3-9. 東京: 岩波書店.
- [41] 三島由紀夫. 1955. 『潮騒』 東京: 新潮社.
- [42] 村上春樹. 1997/1994. 『ねじまき鳥クロニクル-第1部泥棒かささぎ編』 東京: 新潮社.
- [43] 森鷗外. 2008/1909. 「大発見」『森鷗外』: 9-27. 東京: 筑摩書房.
- [44] 森鷗外. 2008/1915. 「山椒大夫」『森鷗外』: 247-297. 東京: 筑摩書房.
- [45] 森鷗外. 2008/1916. 「高瀬舟」『森鷗外』: 348-369. 東京: 筑摩書房.

参考文献

- [1] Aristotle. 1992/330BC-abt. 『弁論術』 東京: 岩波書店. 戸塚七郎訳.
- [2] Aristotle. 1997/330BC-abt. 「詩学」『詩学・詩論』: 7-222. 東京: 岩波書店. 松本仁助・岡道男訳.
- [3] Bain, Alexander. 1887. *English Composition and Rhetoric*. 4th edn. London: Longmans.
- [4] Barcelona, Antonio. 2000. On the Plausibility of Claiming a Metonymic Motivation for Conceptual Metaphor. in *Metaphor and Metonymy at the Crossroads: a Cognitive Perspective*. 31-58. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.
- [5] Barthes, Roland. 1971/1964. 「記号学の原理」『零度のエクリチュール』: 85-206. 東京: みすず書房. 渡辺淳・沢村昂一訳.
- [6] Barthes, Roland. 1972/1967. 『モードの体系-その言語表現による記号学的分析』 東京: みすず書房. 佐藤信夫訳.
- [7] Barthes, Roland. 1979/1970. 『旧修辞学』 東京: みすず書房. 沢崎浩平訳.
- [8] Beardsley, Monroe C. 1958. *Aesthetics*. New York: Harcourt, Brace and Company.
- [9] Black, Max. 1962/1954. Metaphor. in *Models and Metaphors*. 25-47. New York: Cornell University Press.
- [10] Blank, Andreas. 1999. Co-presence and Succession: A Cognitive Typology of Metonymy. in Panther, Klaus-Uwe, and Günter Radden eds. *Metonymy in Language and Thought*. 169-191. Amsterdam: John Benjamins.
- [11] Chomsky, Noam. 1965. *Aspects of the Theory of Syntax*. Cambridge: The MIT press.
- [12] Cicero, Marcus T. 1999/55BC. 「弁論家について」『キケロー選集7』: 1-496. 東京: 岩波書店. 大西英文訳.
- [13] Cicero, Marcus T. 2000/54BC. 「弁論術の分析」『キケロー選集6』: 153-224. 東京: 岩波書店. 片山英男訳.
- [14] Gibbs, Raymond W. Jr. 1994. *The Poetics of Mind: Figurative Thought, Language, and Understanding*. Cambridge: Cambridge University Press.
- [15] Giora, Rachel. 1997. Understanding Figurative and Literal Language: The Graded Salience Hypothesis. *Cognitive Linguistics* 8(3) 183-206.
- [16] Giora, Rachel. 1999. On the Priority of Salient Meanings: Studies of Literal and Figurative Language. *Journal of Pragmatics* 31(7) 919-929.
- [17] Grice, H. Pall. 1975. Logic and Conversation. in Cole, P, and J. L. Morgan eds. *Syntax and Semantics 3: Speech Acts*. 41-58. New York: Academic Press.

- [18] Guiraud, Pierre. 1979/1976. 『言葉遊び』 東京: 白水社. 中村栄子訳.
- [19] Hall, Robert A. 1973. The Transferred Epithet in PG Wodehouse. *Linguistic Inquiry* 4(1) 92–94.
- [20] Halliday, M.A.K, and Ruqaiya Hasan. 1976. *Cohesion in English*. London: Longman.
- [21] Jakobson, Roman. 1960. Closing statement: Linguistics and Poetics. in *Style in Language*. 350–377. Cambridge: The MIT Press.
- [22] Jakobson, Roman. 1981/1956. Two aspects of Language and Two Types of Aphasic Disturbances. in *Fundamentals of Language*. 55–82. Berlin: Mouton, The Hague.
- [23] Kawahara, Shigeto. 2009. Probing Knowledge of Similarity Through Puns.
- [24] Kawahara, Shigeto, and Kazuko Shinohara. 2009. The Role of Psychoacoustic Similarity in Japanese Puns: A Corpus Study. *Journal of Linguistics* 45(1) 111–138.
- [25] Kövecses, Zoltán. 2000. *Metaphor and Emotion: Language, Culture, and Body in Human Feeling*. Cambridge: Cambridge University Press.
- [26] Kövecses, Zoltan, and Günter Radden. 1998. Metonymy: Developing a Cognitive Linguistic View. *Cognitive Linguistics* 9(1) 37–78.
- [27] Lacan, Jacques. 1977/1957. 「無意識における文字の審級、あるいはフロイト以後の理性」『エクリ II』: 237–287. 東京: 弘文堂.
- [28] Lakoff, George. 1987. *Women, Fire and Dangerous Things: What Categories Reveal About the Mind*. Chicago: University of Chicago Press.
- [29] Lakoff, George. 1993. The Contemporary Theory of Metaphor. in *Metaphor and Thought*. 2nd edn. 202–251. Cambridge: Cambridge University Press.
- [30] Lakoff, George, and Mark Johnson. 1980. *Metaphors We Live by*. Chicago: University of Chicago Press.
- [31] Lakoff, George, and Mark Turner. 1989. *More Than Cool Reason: A Field Guide to Poetic Metaphor*. Chicago: University of Chicago Press.
- [32] Langacker, Ronald W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar: Volume I Theoretical Prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
- [33] Langacker, Ronald W. 1991. *Foundations of Cognitive Grammar: Volume II Descriptive Application*. Stanford: Stanford University Press.
- [34] Langacker, Ronald W. 1993. Reference-point Constructions. *Cognitive Linguistics* 4(1) 1–38.
- [35] Langacker, Ronald W. 1999/1995. Raising and Transparency. in *Grammar and Conceptualization*. 317–360. New York: Mouton De Gruyter.
- [36] Langacker, Ronald W. 2006. On the Continuous Debate about Discreteness. *Cognitive Linguistics* 17(1) 107–151.
- [37] Langacker, Ronald W. 2009a. Metonymic Grammar. in Panther, Klaus-Uwe, Linda L. Thornburg, and Antonio Barcelona eds. *Metonymy and Metaphor in Grammar*. 45–71.

- Amsterdam: John Benjamins.
- [38] Langacker, Ronald W. 2009b. Metonymy in Grammar. in *Investigations in Cognitive Grammar*. 40–59. New York: Mouton de Gruyter.
- [39] Leech, Geoffrey N. 1969. *A linguistic guide to English poetry*. London: Longman.
- [40] Leech, Geoffrey N. 1983. *Principles of pragmatics*. London: Longman.
- [41] Levin, Samuel R. 1979. Standard Approach to Metaphor and Proposal for Literary Metaphor. in Ortony, Andrew (ed.) *Metaphor and Thought*. 124–135. Cambridge: Cambridge University Press.
- [42] le groupe μ . 1981/1970. 『一般修辞学』 東京: 大修館書店. 佐々木健一・樋口桂子訳.
- [43] Plato. 1967/370BC-abt. 『パイドロス』 東京: 岩波書店. 藤沢令夫訳.
- [44] Plato. 1967/390BC-abt. 『ゴルギアス』 東京: 岩波書店. 加来彰俊訳.
- [45] Quintilianus, Marcus F. 2005/95-abt. 『弁論家の教育1』 京都: 京都大学学術出版会. 森谷宇一・戸高和弘・渡辺浩司・伊達立晶訳.
- [46] Quintilianus, Marcus F. 2009/95-abt. 『弁論家の教育2』 京都: 京都大学学術出版会. 森谷宇一・戸高和弘・渡辺浩司・伊達立晶訳.
- [47] Radden, Günter. 2000. How Metonymic Are Metaphors. in *Metaphor and Metonymy at the Crossroads*. 93–108. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.
- [48] Richards, Ivor A. 1936. *The Philosophy of Rhetoric*. New York and London: Oxford University Press.
- [49] Ricoeur, Paul. 1998/1975. 『生きた隠喩』 Paris: Seuil. 久米博訳.
- [50] Ruwet, Nicolas. 1986/1975. 「提喩と換喩」佐々木健一（編）『創造のレトリック』: 187–233. 東京: 勁草書房. 青山昌文訳.
- [51] Taylor, John R. 1989. *Linguistic Categorization: Prototypes in Linguistic Theory*. Oxford: Clarendon Press.
- [52] Trnka, Bohumil. 1982/1936. General Laws of Phonemic Combinations. in Fried, Vilém (ed.) *Selected Papers in Structural Linguistics*. 113–118.
- [53] Ullmann, Stephen. 1957. *The Principles of Semantics*. Michigan: Jackson.
- [54] 尼ヶ崎彬. 1988. 『日本のレトリック–演技する言葉』 東京: 筑摩書房.
- [55] 有井松雄. 1989. 「Oxymoron と Tautology」『大阪音楽大学研究紀要』 **28**: 134-150.
- [56] 五十嵐力. 1909. 『新文章講話』 東京: 早稲田大学出版部.
- [57] 大森文子. 1994. 「オキシモロンについての一考察」『言語文化研究』 **20**: 65-85.
- [58] 大森文子. 1997. 「転移修飾語と換喩的認知」<言語と文化の対話>刊行会（編）『言語と文化の対話』: 309–320. 東京: 英宝社.
- [59] 奥津敬一郎. 1981. 「移動変化動詞文–いわゆる spray paint hypallage について–」『国語学』 **127**: 21–33.
- [60] 加島祥造. 1961. 「詩的誇張喩について」『信州大学教育学部研究論集 人文・社会』 **12**: 138–149.

- [61] 金澤俊吾. 2008. 「転移修飾表現とその修飾関係の多様性について」『英語青年』 **153**(10): 614-616.
- [62] 川野靖子. 1996. 「位置変化動詞と状態変化動詞の接点-いわゆる「壁塗り代換」を中心に-」『筑波日本語研究』 **2**(1): 28-40.
- [63] 神澤克徳. 2011. 「日本語の転移修飾への認知的アプローチ」 京都大学 人間・環境学研究所 修士論文.
- [64] 菊池大麓. 1879. 『修辞及華文』 東京: 丸善.
- [65] 木原恵美子. 2009. 「転移修飾表現の修飾構造とその動機付け」『認知言語学論考』 **9**: 177-209.
- [66] 久野暉. 1978. 『談話の文法』 東京: 大修館書店.
- [67] 定延利之. 1990a. 「移動を表す日本語動詞述語文の格形表示と、名詞句指示物間の動静関係」『言語研究』 **98**: 46-65.
- [68] 定延利之. 1990b. 「文の [対称性] と名詞句の相互交換」『言語学研究』 **9**: 1-57.
- [69] 貞光宮城. 1999. 「転移修飾語に関する一考察」 *KLS* **19**: 65-74.
- [70] 佐藤信夫. 1978. 『レトリック感覚』 東京: 講談社.
- [71] 佐藤信夫. 1981. 『レトリック認識』 東京: 講談社.
- [72] 佐藤信夫. 1986. 『言述のすがた-«わざとらしさ»の修辞学』 東京: 青土社.
- [73] 佐藤信夫. 1987. 『レトリックの消息』 東京: 白水社.
- [74] 佐藤信夫. 1996. 『レトリックの意味論-意味の弾性』 東京: 講談社.
- [75] 佐藤信夫・佐々木健一・松尾大. 2006. 『レトリック事典』 東京: 大修館書店.
- [76] 篠原俊吾. 2002. 「「悲しさ」「さびしさ」はどこにあるのか」西村義樹 (編)『認知言語学 I: 事象構造』: 261-284. 東京: 東京大学出版会.
- [77] 島村瀧太郎. 1902. 『新美辞学』 東京: 早稲田大学出版部.
- [78] 瀬戸賢一. 1997. 『認識のレトリック』 東京: 海鳴社.
- [79] 高田早苗. 1889. 『美辞学』 仙台: 金港堂.
- [80] 谷口一美. 2003. 『認知意味論の新展開-メタファーとメトニミー』 東京: 研究社.
- [81] 坪内逍遙. 1927/1893. 『美辞論稿』 東京: 春陽堂.
- [82] 鳶野記子. 2011. 「文学作品におけるレトリックの分析-夏目漱石の表現を例として-」 京都大学 文学部 卒業論文.
- [83] 外山滋比古. 1968/1961. 『修辞的残像』 東京: みすず書房.
- [84] 外山滋比古. 1976/1965. 「矛盾についての覚え書」『省略の文学』: 96-102. 東京: 中央公論社.
- [85] 夏目漱石. 2007/1905. 『文学論〈下〉』 東京: 岩波書店.
- [86] 鍋島弘治朗. 2002. 「メタファーと意味の構造的性」 **2**: 25-109.
- [87] 西村義樹. 2002. 「換喩と文法現象」西村義樹 (編)『認知言語学 I: 事象構造』: 285-311. 東京: 東京大学出版会.
- [88] 西村義樹. 2004. 「換喩の言語学」成蹊大学文学部学会 (編)『レトリック連環』 東京:

- 風間書房.
- [89] 仁田義雄. 2009/1993. 「格のゆらぎ」『日本語の文法カテゴリをめぐって』: 89-97. 東京: ひつじ書房.
- [90] 波多野完治. 1973. 『現代レトリック』 東京: 大日本図書.
- [91] 速水博司. 1995. 『レトリックの歴史—近代日本』 東京: 有朋堂.
- [92] 原子朗. 1994. 『修辞学の史的研究』 東京: 早稲田大学出版部.
- [93] 平井昭徳. 2001. 「誇張法の輪郭: 誇張法使用の目的を中心に」『島大言語文化』 **11**: 47-68.
- [94] 丸谷才一. 1977. 「文体とレトリック」『文章読本』: 181-231. 東京: 中央公論社.
- [95] 森雄一. 2002a. 「オクシモロン管見」『成蹊國文』 **35**: 114-126.
- [96] 森雄一. 2002b. 「明示的提喩・換喩形式をめぐって」『認知言語学論考』 **2**: 1-24.
- [97] 安井稔. 1978. 『言外の意味』 東京: 研究社出版.
- [98] 山中桂一. 1998. 『日本語のかたち—対照言語学からのアプローチ』 東京: 東京大学出版会.
- [99] 山梨正明. 1982. 「比喩の理解」佐伯胖 (編)『推論と理解』: 199-213. 東京: 東京大学出版会.
- [100] 山梨正明. 1988. 『比喩と理解』 東京: 東京大学出版会.
- [101] 山梨正明. 1991. 「修飾のレトリックと文法—連体修飾の問題を中心に—」『表現研究』 **54**: 43-57.
- [102] 山梨正明. 1992. 『推論と照応』 東京: くろしお出版.
- [103] 山梨正明. 1993. 「格の複合スキーマモデル—格解釈のゆらぎと認知のメカニズム」仁田義雄 (編)『日本語の格をめぐって』: 39-65. 東京: くろしお出版.
- [104] 山梨正明. 1995. 『認知文法論』 東京: ひつじ書房.
- [105] 山梨正明. 2000. 『認知言語学原理』 東京: くろしお出版.
- [106] 山梨正明. 2004. 『ことばの認知空間』 東京: 開拓社.
- [107] 山梨正明. 2007. 「メタファーと認知のダイナミクス—知のメカニズムの修辞的基盤」楠見孝 (編)『メタファー研究の最前線』: 3-29. 東京: ひつじ書房.
- [108] 山梨正明. 2009. 「認知語用論から見た文法・論理・レトリック」『語用論研究』 **11**: 61-97.
- [109] 山梨正明. 2011. 「イメージ文法—意味発生の創造的基盤」『日本認知言語学会論文集』 **11**: 1-26.

修辭名索引

異義兼用	60, 106	隱喻的誇張	74
異義反復	141	過小誇張	80
異質連立	60	緩叙的誇張	77
意味構文	117, 121	直喻的誇張	75
隱喻	25, 53, 63, 72, 73, 84, 103, 141	無理誇張	76
擬人表現	55	言葉遊び	63
共感覺的比喻	129	異義兼用	61, 63, 141
動詞的隱喻	55	異義反復	65, 68
名詞的隱喻	55	かすり	69
連辭的隱喻	54	洒落	69
押韻	72	類音語接近	26, 67
脚韻	72	省略	103
頭韻	72	簡約語法	103
格言	86	動詞的省略	107
掛詞	63	名詞的省略	104
緩叙	69, 73, 78	代換類	123
過小誇張的緩叙	80	限定語反轉	126
對義否定的緩叙	78	交差呼応	128
二重否定的緩叙	80	代換	123
換喻	26, 89, 94, 103, 130	轉移修飾	27, 129, 141
特徵的換喻	94, 97	對義結合	87
部分的換喻	95, 124	對比的對義結合	87
換喻類	90, 93	提喻的對義結合	89
換喻	137	對比	83, 106
提喻	136, 141	對句的對比	85, 88
轉喻	136	名詞的對比	83, 88
名詞的換喻類	99	直喻	56, 64, 73, 84, 141
擬態語	141	節的直喻	56
逆說	87	多義解消の直喻	58
くびき	60, 106	動詞的直喻	56
誇張	60, 73		

描写の直喩	57
名詞的直喩	56
対句	85
提喩	89, 97
種の提喩	98
類の提喩	97, 127
転換	113
格転換	113, 121, 123
品詞転換	115
転喩	99
後件の転喩	100
前件の転喩	99
同音反復	71
同型節反復	85
トートロジー	87
破格くびき	60, 106, 119
動詞的破格くびき	119
名詞的破格くびき	120
比喩くびき	60, 106
諷喩	56, 139
並行	85
黙説	108
暗示黙過	108
冒頭省略	108
未決	108